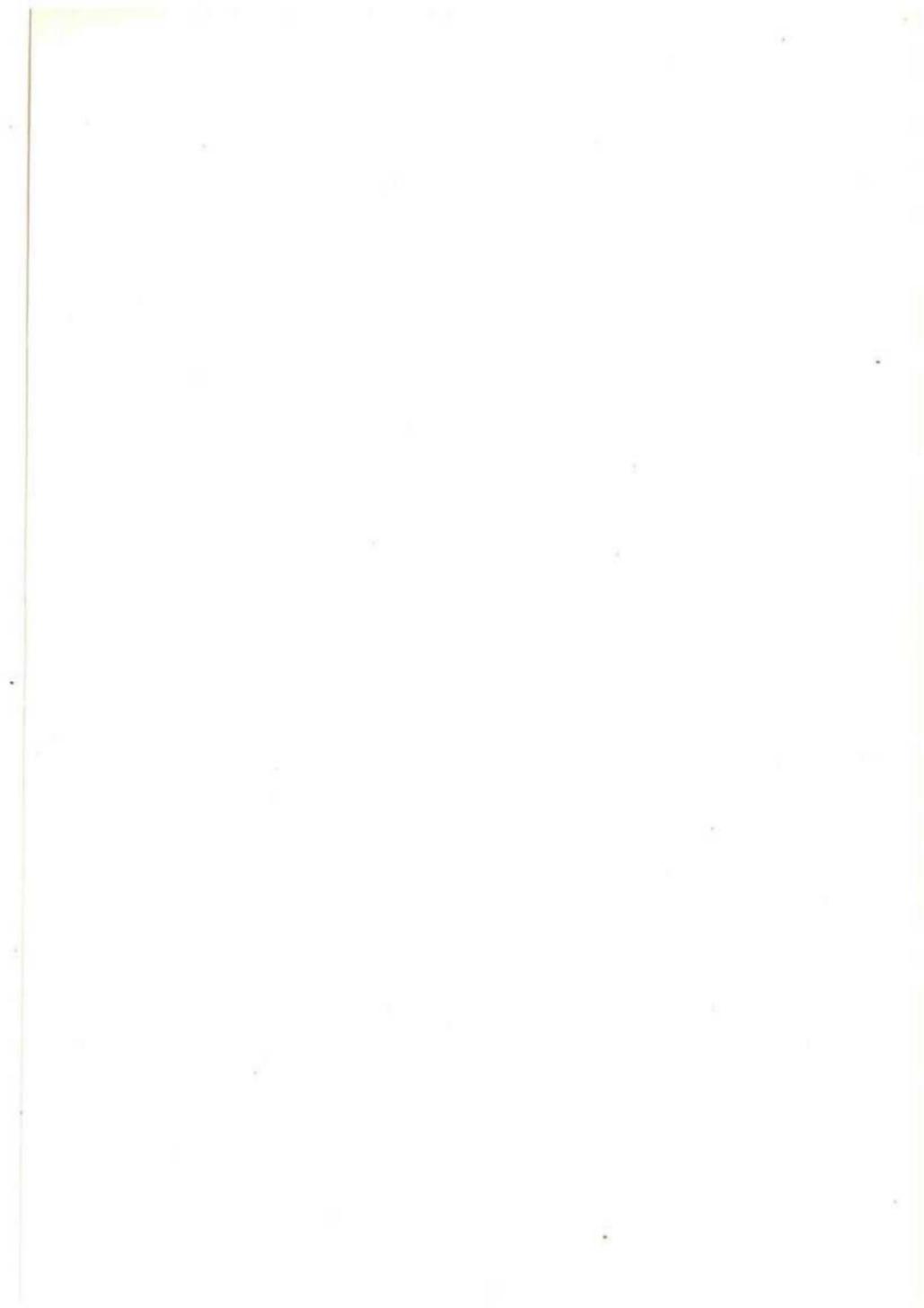


静岡県掛川市

向山遺跡発掘調査の記録

1994年3月

掛川市教育委員会
株式会社 川島デベロップ
静岡人類史研究所



静岡県掛川市

向山遺跡発掘調査の記録

1994年3月

掛川市教育委員会
株式会社 川島デベロップ
静岡人類史研究所

序

静岡県掛川市教育委員会
教育長 大西 珠 枝

掛川市域は自然に恵まれた、往古より人が住み着き歴史が重ねられてきた地域であり、いたるところにその生活の歩みが記された遺跡が残されています。私たちの今日の繁栄は、先人たちのたゆまぬ努力と労苦の上に築かれていることを思うと、はるか昔にこの地に生き、その足跡を留めた先人たちに畏敬の念を抱かずにいられません。

昭和25年に文化財保護法が施行されて以来、多くの方々の努力により国民の文化財に対する理解が深まり、その保存・活用がはかられているのは喜ばしいことです。特に遺跡や遺物は人類共有の大切な宝として、子孫に継承すべきもので、私たちはそれらの文化財を責任をもって愛護する義務を負っているといえます。

しかし、現代に生きる私たちの生活のために、遺跡が姿を変えたり、消滅したりすることが多いのも事実です。その場合には、事前に発掘調査を実施し、記録保存というかたちで掛川市の古代史解明やこれからの文化財行政などに役立つようにしています。

このたび、工場用地造成に先立ち、用地内に所在する埋蔵文化財である向山遺跡について、静岡県教育委員会の指導を得て、掛川市教育委員会が調査主体者となり、静岡人類史研究所が発掘調査を担当して遺跡調査が実施されました。

調査の結果、弥生時代後期の方形周溝墓や近世の茶毘墓・土壇墓などを検出し、地方史解明の貴重な史料を得ることができました。これらは今後の埋蔵文化財への理解、郷土史の史料となることはもとより、生涯学習宣言都市掛川市の潤いのあるまちづくりに用されるよう切に願っています。

最後にこの調査報告書作成に際し、静岡県教育委員会、事業主、地元の皆様はじめ関係の皆様には当初より深いご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本報告書は掛川市岡津字向山に計画されている工場用地造成予定地内に存在する向山遺跡の発掘調査記録である。
2. 本調査は株式会社川島デベロップの委託により、掛川市教育委員会が調査主体者となり、静岡人類史研究所が調査を担当して実施したものである。
3. 調査にあたっては、静岡県教育委員会文化課および掛川市教育委員会の指導のもとに「向山遺跡発掘調査連絡会」を設置し、連絡会において発掘方法・工程等の協議を行いながら調査を進行した。

「向山遺跡発掘調査連絡会」の構成は以下の通りである。

・調査主体者	掛川市教育委員会教育長	大西 珠枝
・調査指導機関	静岡県教育委員会文化課主席指導主事 静岡県教育委員会文化課指導主事	佐藤 達雄 五島 康司
・調査事務局	掛川市教育委員会社会教育課課長 掛川市教育委員会社会教育課文化係長 掛川市教育委員会社会教育課主任	榛葉 稔 沢村 久雄 松本 一男
・調査担当者	静岡人類史研究所所長 静岡人類史研究所調査部長	森 威史 片平 剛
・開発計画者	株式会社川島デベロップ代表取締役	氏原 功

4. 発掘調査は、平成5年6月3日より平成5年9月15日まで実施した。また、遺物の整理と報告書の原稿作成は、平成5年9月16日より平成6年1月17日まで実施した。
5. 遺物の実測およびトレースは小金澤保雄・大倉妙子・杉山里英子・北原比奎子が、図表の作成は片平剛・小金澤保雄が行った。写真撮影は仲澤正人が行い、空中写真の撮影は株式会社東日に委託した。
6. 原稿の執筆は、松本一男（掛川市教育委員会、第1章）、仲澤正人（第2章）、小金澤保雄（第3章、第4章第3節-3～5、第4節、附表）、片平剛（第4章第1節、第2節、第3節-1・2）、森威史（第5章）が担当し、編集は森威史が行った。
7. 本調査における図面・写真・遺物・コンピュータのデータはすべて掛川市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査および遺物整理の参加者

・調査員

森 威史(静岡人類史研究所所長) 片平 剛(静岡人類史研究所調査部長)
 小金澤保雄(静岡人類史研究所主任研究員) 仲澤正人(静岡人類史研究所学芸員)

・発掘調査作業員

宮崎昭太郎 伊東みさえ 伊藤正夫 岩本登五郎 山崎祐代 村松幸雄 安田小作
 堀内藤一 杉山弘 久保港市 野沢けい 鈴木良彦 中村万平

・遺物整理

小金澤保雄 大倉妙子 杉山里英子

9. 本書における遺構・遺物の表示は以下の通りである。

① 遺構挿図の縮尺

各遺構の縮尺はバースケールで示した。

② 遺構挿図の方位

特に示さない限り図の上が北(磁北)を示す。

③ スクリーントーンおよびシンボルマーク

i. スクリーントーン



攪乱層



地山層(黄褐色砂礫層)



土器の施軸部分

ii. シンボルマーク

シンボルマークに付した数字は遺物番号である。

- | | |
|-------|-------------|
| ○ 土器 | △ 人骨片 |
| ○ 銭貨 | ● 礫(棺座石を含む) |
| ◇ 鉄製品 | □ 竹製品 |
| × 石製品 | |

④ 遺物挿図の縮尺

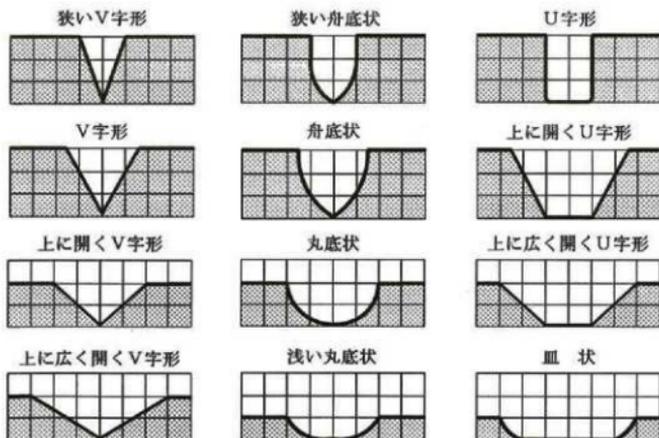
土器・鉄製品・石製品の実測図の縮尺はバースケールで表示した。銭貨の拓影は実物大である。

⑤ 写真図版の縮尺

土器・鉄製品・石製品・銭貨・人骨片の縮尺は任意である。

⑥ 断面図の水糸レベルは海拔高を示し、単位はメートルである。

⑦ 遺構の断面形状(長径または長軸に対する断面)の表現は下の図に基づくものである。



目次

序	掛川市教育委員会教育長 大西 珠枝	
例言		
目次		
第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	
第1節	遺跡の立地	3
第2節	歴史的環境	7
第Ⅲ章	発掘調査の概要	
第1節	調査方法	9
第2節	発掘調査の経過	11
第3節	遺跡の層序	15
第Ⅳ章	発掘調査の結果	
第1節	遺構の概要	17
第2節	溝状遺構	
1.	方形周溝墓と遺物	19
2.	溝状遺構と遺物	30
第3節	穴状遺構	
1.	柱穴状遺構と遺物	65
2.	土坑と遺物	88
3.	土壇墓と遺物	159
4.	茶毘墓と遺物	195
5.	火葬墓と遺物	225
第4節	表土層からの出土遺物	227
第Ⅴ章	調査の成果と課題	232
付表1	土器観察表	238
付表2	鉄釘計測表	244

写真図版

挿図目次

図Ⅱ-1-1	向山遺跡の位置図	2
図Ⅱ-1-2	向山遺跡周辺の地形区分図	2
図Ⅱ-1-3	向山遺跡周辺の地質区分図	4
図Ⅱ-2-1	向山遺跡周辺の遺跡分布図	6
図Ⅲ-1-1	調査対象地域の地形とグリッド設定図	8
図Ⅲ-2-1	発掘調査の経過図(1)	10
図Ⅲ-2-2	発掘調査の経過図(2)	12
図Ⅲ-3-1	調査区北側の層序模式図	14
図Ⅳ-1-1	遺構分布図	16
図Ⅳ-2-1	方形周溝墓の分布図	18
図Ⅳ-2-2	第1号方形周溝墓の平面および断面図	20
図Ⅳ-2-3	第2号方形周溝墓の平面および断面図	22
図Ⅳ-2-4	西溝(第33号溝)から出土した土器片の拓影	23
図Ⅳ-2-5	主体部の平面および断面図	24
図Ⅳ-2-6	主体部の覆土内から出土した土器片の拓影	25
図Ⅳ-2-7	封土内の遺物分布図	26
図Ⅳ-2-8	封土から出土した土器片の拓影	27
図Ⅳ-2-9	第3号方形周溝墓の平面および断面図	28
図Ⅳ-2-10	南溝(第25号溝)の遺物出土状況図	28
図Ⅳ-2-11	南溝から出土した弥生土器	29
図Ⅳ-2-12	溝状遺構の分布図	30
図Ⅳ-2-13	第1号溝の平面および断面図	31
図Ⅳ-2-14	第2号溝の平面および断面図	32
図Ⅳ-2-15	第3号溝の平面および断面図	33
図Ⅳ-2-16	第4号溝の平面および断面図	34
図Ⅳ-2-17	第5号溝の平面および断面図	34
図Ⅳ-2-18	第6号溝の平面および断面図	36
図Ⅳ-2-19	第7号溝の平面および断面図	36
図Ⅳ-2-20	第8号溝の平面および断面図	38
図Ⅳ-2-21	第10号溝の平面および断面図	38
図Ⅳ-2-22	第11号溝の平面および断面図	40
図Ⅳ-2-23	第12号溝の平面および断面図	40
図Ⅳ-2-24	第13号溝の平面および断面図	42
図Ⅳ-2-25	第14号溝の平面および断面図	42
図Ⅳ-2-26	第15号溝の平面および断面図	44
図Ⅳ-2-27	第18・19号溝の平面および断面図	45
図Ⅳ-2-28	第20号溝の平面および断面図	46
図Ⅳ-2-29	第21号溝の平面および断面図	46
図Ⅳ-2-30	第22号溝の平面および断面図	48
図Ⅳ-2-31	第22号溝から出土した錢貨	48
図Ⅳ-2-32	第23号溝の平面および断面図	49
図Ⅳ-2-33	第28号溝の平面および断面図	50
図Ⅳ-2-34	第29号溝の平面および断面図	51
図Ⅳ-2-35	第31号溝の平面および断面図	52
図Ⅳ-2-36	第32号溝の平面および断面図	52
図Ⅳ-2-37	第34号溝の平面および断面図	54
図Ⅳ-2-38	第35号溝の平面および断面図	54
図Ⅳ-2-39	第34号溝から出土した弥生土器	55
図Ⅳ-2-40	第36号溝の平面および断面図	56

図Ⅳ-2-41	第37号溝の平面および断面図	56
図Ⅳ-2-42	第38号溝の平面および断面図	58
図Ⅳ-2-43	第39号溝の平面および断面図	58
図Ⅳ-2-44	第39号溝から出土した土師器片	59
図Ⅳ-2-45	第40号溝の平面および断面図	60
図Ⅳ-2-46	第41号溝の平面および断面図	60
図Ⅳ-2-47	第42号溝の平面および断面図	62
図Ⅳ-2-48	第43号溝の平面および断面図	62
図Ⅳ-3-1	柱穴状遺構の分布図	64
図Ⅳ-3-2	第1～8号柱穴(獨立柱建物跡)の平面および断面図	66
図Ⅳ-3-3	第9・10号柱穴状遺構の平面および断面図	68
図Ⅳ-3-4	第11・12号柱穴状遺構の平面および断面図	69
図Ⅳ-3-5	第13号柱穴状遺構の平面および断面図	70
図Ⅳ-3-6	第14号柱穴状遺構の平面および断面図	70
図Ⅳ-3-7	第15・16号柱穴状遺構の平面および断面図	71
図Ⅳ-3-8	第17号柱穴状遺構の平面および断面図	72
図Ⅳ-3-9	第18号柱穴状遺構の平面および断面図	72
図Ⅳ-3-10	第19・20号柱穴状遺構の平面および断面図	73
図Ⅳ-3-11	第21・22号柱穴状遺構の平面および断面図	74
図Ⅳ-3-12	第23号柱穴状遺構の平面および断面図	75
図Ⅳ-3-13	第24号柱穴状遺構の平面および断面図	75
図Ⅳ-3-14	第25・26号柱穴状遺構の平面および断面図	76
図Ⅳ-3-15	第27号柱穴状遺構の平面および断面図	76
図Ⅳ-3-16	第28・29・30号柱穴状遺構の平面および断面図	78
図Ⅳ-3-17	第29号柱穴状遺構からの出土した土師器片	79
図Ⅳ-3-18	第31・32号柱穴状遺構の平面および断面図	80
図Ⅳ-3-19	第33号柱穴状遺構の平面および断面図	80
図Ⅳ-3-20	第32号柱穴状遺構から出土した土師器片	81
図Ⅳ-3-21	第34・35号柱穴状遺構の平面および断面図	82
図Ⅳ-3-22	第36・37号柱穴状遺構の平面および断面図	82
図Ⅳ-3-23	第34号柱穴状遺構から出土した陶質土器	83
図Ⅳ-3-24	第38号柱穴状遺構の平面および断面図	84
図Ⅳ-3-25	第39号柱穴状遺構の平面および断面図	84
図Ⅳ-3-26	第40号柱穴状遺構の平面および断面図	85
図Ⅳ-3-27	第41号柱穴状遺構の平面および断面図	85
図Ⅳ-3-28	第42号柱穴状遺構の平面および断面図	86
図Ⅳ-3-29	第43号柱穴状遺構の平面および断面図	86
図Ⅳ-3-30	第44号柱穴状遺構の平面および断面図	87
図Ⅳ-3-31	第45・46号柱穴状遺構の平面および断面図	87
図Ⅳ-3-32	土坑の分布図	88
図Ⅳ-3-33	第1号土坑の平面および断面図	89
図Ⅳ-3-34	第2号土坑の平面および断面図	90
図Ⅳ-3-35	第3号土坑の平面および断面図	90
図Ⅳ-3-36	第4号土坑の平面および断面図	92
図Ⅳ-3-37	第5号土坑の平面および断面図	92
図Ⅳ-3-38	第6号土坑の平面および断面図	94
図Ⅳ-3-39	第7号土坑の平面および断面図	94
図Ⅳ-3-40	第8号土坑の平面および断面図	96
図Ⅳ-3-41	第9号土坑の平面および断面図	96
図Ⅳ-3-42	第10号土坑の平面および断面図	98
図Ⅳ-3-43	第11号土坑の平面および断面図	98
図Ⅳ-3-44	第12号土坑の平面および断面図	100

図IV-3-45	第13号土坑の平面および断面図	100
図IV-3-46	第14号土坑の平面および断面図	102
図IV-3-47	第15号土坑の平面および断面図	102
図IV-3-48	第16号土坑の平面および断面図	104
図IV-3-49	第17号土坑の平面および断面図	104
図IV-3-50	第18号土坑の平面および断面図	106
図IV-3-51	第19号土坑の平面および断面図	106
図IV-3-52	第20号土坑の平面および断面図	108
図IV-3-53	第21号土坑の平面および断面図	108
図IV-3-54	第22号土坑の平面および断面図	110
図IV-3-55	第23号土坑の平面および断面図	110
図IV-4-56	第24号土坑の平面および断面図	112
図IV-3-57	第25号土坑の平面および断面図	112
図IV-3-58	第26号土坑の平面および断面図	114
図IV-3-59	第27号土坑の平面および断面図	114
図IV-3-60	第28号土坑の平面および断面図	116
図IV-3-61	第29号土坑の平面および断面図	116
図IV-3-62	第30号土坑の平面および断面図	118
図IV-3-63	第31号土坑の平面および断面図	118
図IV-3-64	第32号土坑の平面および断面図	120
図IV-3-65	第33号土坑の平面および断面図	120
図IV-3-66	第34号土坑の平面および断面図	122
図IV-3-67	第35号土坑の平面および断面図	122
図IV-3-68	第36号土坑の平面および断面図	124
図IV-3-69	第37号土坑の平面および断面図	124
図IV-3-70	第37号土坑から出土した陶器	125
図IV-3-71	第38号土坑の平面および断面図	126
図IV-3-72	第39号土坑の平面および断面図	126
図IV-3-73	第40号土坑の平面および断面図	128
図IV-3-74	第41号土坑の平面および断面図	128
図IV-3-75	第41号土坑から出土した石製品の破片	129
図IV-3-76	第42号土坑の平面および断面図	130
図IV-3-77	第43号土坑の平面および断面図	130
図IV-3-78	第44号土坑の平面および断面図	130
図IV-3-79	第45号土坑の平面および断面図	132
図IV-3-80	第46号土坑の平面および断面図	132
図IV-3-81	第46号土坑の遺物の出土状況図	132
図IV-3-82	第46号土坑から出土した土師器の口縁部	133
図IV-3-83	第47号土坑の平面および断面図	134
図IV-3-84	第48号土坑の平面および断面図	134
図IV-3-85	第49号土坑の平面および断面図	134
図IV-3-86	第50号土坑の平面および断面図	136
図IV-3-87	第51号土坑の平面および断面図	136
図IV-3-88	第52号土坑の平面および断面図	138
図IV-3-89	第53号土坑の平面および断面図	138
図IV-3-90	第54号土坑の平面および断面図	140
図IV-3-91	第55号土坑の平面および断面図	140
図IV-3-92	第56号土坑の平面および断面図	142
図IV-3-93	第57号土坑の平面および断面図	142
図IV-3-94	第57号土坑から出土した陶質土器の蓋部	143
図IV-3-95	第58・59号土坑の平面および断面図	144
図IV-3-96	第60号土坑の平面および断面図	144

図IV-3-97	第61号土坑の平面および断面図	146
図IV-3-98	第62号土坑の平面および断面図	146
図IV-3-99	第62号土坑から出土した土師器の口縁部	147
図IV-3-100	第63号土坑の平面および断面図	148
図IV-3-101	第64号土坑の平面および断面図	148
図IV-3-102	第65号土坑の平面および断面図	150
図IV-3-103	第66号土坑の平面および断面図	150
図IV-3-104	第67号土坑の平面および断面図	152
図IV-3-105	第68号土坑の平面および断面図	152
図IV-3-106	第69号土坑の平面および断面図	154
図IV-3-107	第70号土坑の平面および断面図	154
図IV-3-108	第71号土坑の平面および断面図	156
図IV-3-109	第72号土坑の平面および断面図	156
図IV-3-110	第72号土坑の遺物出土状況図	156
図IV-3-111	第71号土坑から出土した遺物	157
図IV-3-112	第72号土坑から出土した遺物	157
図IV-3-113	土壌墓の分布図	158
図IV-3-114	第1号土壌墓の平面および断面図	160
図IV-3-115	第1号土壌墓の遺物分布図	160
図IV-3-116	第1号土壌墓の遺物出土状況図	161
図IV-3-117	第1号土壌墓から出土した遺物	162
図IV-3-118	第2号土壌墓の平面および断面図	164
図IV-3-119	第2号土壌墓の遺物分布図	164
図IV-3-120	第2号土壌墓の遺物出土状況図	166
図IV-3-121	第2号土壌墓から出土した遺物	166
図IV-3-122	第3号土壌墓の平面および断面図	168
図IV-3-123	第3号土壌墓から出土した遺物	168
図IV-3-124	第4号土壌墓の平面および断面図	170
図IV-3-125	第4号土壌墓の遺物分布図	170
図IV-3-126	第4号土壌墓から出土した遺物	171
図IV-3-127	第5号土壌墓の平面および断面図	172
図IV-3-128	第5号土壌墓の遺物分布図	172
図IV-3-129	第5号土壌墓の遺物出土状況図	174
図IV-3-130	第5号土壌墓から出土した遺物	174
図IV-3-131	第6号土壌墓の平面および断面図	176
図IV-3-132	第6号土壌墓の遺物分布図	176
図IV-3-133	第6号土壌墓の遺物出土状況図	177
図IV-3-134	第7号土壌墓の平面および断面図	178
図IV-3-135	第7号土壌墓の遺物分布図	178
図IV-3-136	第7号土壌墓から出土した遺物	180
図IV-3-137	第8号土壌墓の平面および断面図	182
図IV-3-138	第8号土壌墓の遺物出土状況図	182
図IV-3-139	第8号土壌墓から出土した遺物	183
図IV-3-140	第9号土壌墓の平面および断面図	184
図IV-3-141	第9号土壌墓から出土した遺物	185
図IV-3-142	第10号土壌墓の平面および断面図	186
図IV-3-143	第11号土壌墓の平面および断面図	187
図IV-3-144	第11号土壌墓から出土した遺物	187
図IV-3-145	第12号土壌墓の平面および断面図	188
図IV-3-146	第12号土壌墓の遺物出土状況図	188
図IV-3-147	第12号土壌墓から出土した遺物	189
図IV-3-148	第13号土壌墓の平面および断面図	190

図Ⅳ-3-149	第13号土壇墓の遺物分布図	190
図Ⅳ-3-150	第13号土壇墓の遺物出土状況図	191
図Ⅳ-3-151	第13号土壇墓から出土した遺物	192
図Ⅳ-3-152	茶毘墓・火葬墓の分布図	194
図Ⅳ-3-153	第1号茶毘墓の平面および断面図	196
図Ⅳ-3-154	第2号茶毘墓の平面および断面図	197
図Ⅳ-3-155	第2号茶毘墓の遺物出土状況図	198
図Ⅳ-3-156	第2号茶毘墓から出土した遺物	198
図Ⅳ-3-157	第3号茶毘墓の平面および断面図	199
図Ⅳ-3-158	第3号茶毘墓から出土した遺物	199
図Ⅳ-3-159	第4号茶毘墓の平面および断面図	200
図Ⅳ-3-160	第4号茶毘墓の遺物分布図	200
図Ⅳ-3-161	第4号茶毘墓の遺物出土状況図	201
図Ⅳ-3-162	第4号茶毘墓から出土した遺物	202
図Ⅳ-3-163	第5号茶毘墓の平面および断面図	203
図Ⅳ-3-164	第5号茶毘墓から出土した遺物	203
図Ⅳ-3-165	第6号茶毘墓の平面および断面図	204
図Ⅳ-3-166	第6号茶毘墓の遺物分布図	204
図Ⅳ-3-167	第6号茶毘墓の遺物出土状況図	205
図Ⅳ-3-168	第6号茶毘墓から出土した遺物(1)	206
図Ⅳ-3-169	第6号茶毘墓から出土した遺物(2)	208
図Ⅳ-3-170	第7号茶毘墓の平面および断面図	210
図Ⅳ-3-171	第7号茶毘墓の遺物分布図	210
図Ⅳ-3-172	第7号茶毘墓底部の竈の出土状況図	212
図Ⅳ-3-173	第7号茶毘墓の遺物出土状況図	212
図Ⅳ-3-174	第7号茶毘墓から出土した遺物	213
図Ⅳ-3-175	第8号茶毘墓の平面および断面図	214
図Ⅳ-3-176	第8号茶毘墓の遺物分布図	214
図Ⅳ-3-177	第8号茶毘墓から出土した遺物	215
図Ⅳ-3-178	第9号茶毘墓の平面および断面図	216
図Ⅳ-3-179	第9号茶毘墓の遺物出土状況図	216
図Ⅳ-3-180	第9号茶毘墓から出土した遺物	217
図Ⅳ-3-181	第10号茶毘墓の平面および断面図	218
図Ⅳ-3-182	第11号茶毘墓の平面および断面図	219
図Ⅳ-3-183	第11号茶毘墓から出土した遺物	219
図Ⅳ-3-184	第12号茶毘墓の平面および断面図	220
図Ⅳ-3-185	第12号茶毘墓の遺物分布図	220
図Ⅳ-3-186	第12号茶毘墓の遺物出土状況図	221
図Ⅳ-3-187	第12号茶毘墓から出土した遺物	222
図Ⅳ-3-188	第1号火葬墓の平面および断面図	224
図Ⅳ-3-189	第1号火葬墓の遺物出土状況図	224
図Ⅳ-3-190	第1号火葬墓から出土した遺物	225
図Ⅳ-4-1	表土層から出土した遺物(1)	226
図Ⅳ-4-2	表土層から出土した遺物(2)	228
図Ⅳ-4-3	表土層から出土した遺物(3)	230

表目次

表V-2-1 土墳墓一覧表	234
表V-2-2 茶毘墓一覧表	236

写真図版目次

1. 遺跡全景(南方上空から)	
2. 第8号溝完掘状況(東から)	3. 第16号溝完掘状況(西から)
4. 第36号溝完掘状況(西から)	5. 第27号土坑完掘状況(東から)
6. 第35号土坑完掘状況(西から)	7. 第36・37号土坑完掘状況(南西から)
8. 第1号方形周溝墓完掘状況(西から)	9. 第2号方形周溝墓完掘状況(南から)
10. 第2号方形周溝墓主体部完掘状況(西から)	11. 第3号方形周溝墓完掘状況(南から)
12. 第3号方形周溝墓遺物出土状況(南溝)	13. 第1号掘立柱建物跡完掘状況(南から)
14. 第2号土墳墓完掘状況(北から)	15. 第2号土墳墓遺物出土状況
16. 第4号土墳墓完掘状況(南から)	17. 第4号土墳墓遺物出土状況
18. 第5号土墳墓完掘状況(南から)	19. 第5号土墳墓遺物出土状況
20. 第6号土墳墓完掘状況(東から)	21. 第6号土墳墓遺物出土状況
22. 第7号土墳墓完掘状況(西から)	23. 第7号土墳墓遺物出土状況
24. 第8号土墳墓完掘状況(東から)	25. 第9号土墳墓完掘状況(東から)
26. 第12号土墳墓完掘状況(東から)	27. 第12号土墳墓遺物出土状況
28. 第13号土墳墓完掘状況(南から)	29. 第13号土墳墓遺物出土状況
30. 第2号茶毘墓完掘状況(東から)	31. 第4号茶毘墓完掘状況(北から)
32. 第6号茶毘墓完掘状況(南から)	33. 第6号茶毘墓遺物出土状況
34. 第7号茶毘墓完掘状況(南から)	35. 第7号茶毘墓遺物出土状況
36. 第9号茶毘墓完掘状況(南から)	37. 第9号茶毘墓遺物出土状況
38. 第12号茶毘墓完掘状況(南から)	39. 第12号茶毘墓遺物出土状況
40. 第1号火葬墓完掘状況(東から)	41. 第1号火葬墓遺物出土状況
42. 第3号方形周溝墓出土遺物	43. 第35号溝出土遺物
44. 第37号土坑出土遺物	45. 第41号土坑出土遺物
46. 第1号土墳墓出土遺物(1)	47. 第1号土墳墓出土遺物(2)
48. 第2号土墳墓出土遺物	49. 第3号土墳墓出土遺物
50. 第4号土墳墓出土遺物	51. 第5号土墳墓出土遺物
52. 第6号土墳墓出土遺物	53. 第7号土墳墓出土遺物
54. 第8号土墳墓出土遺物	55. 第9号土墳墓出土遺物
56. 第12号土墳墓出土遺物	57. 第3号茶毘墓出土遺物
58. 第4号茶毘墓出土遺物	59. 第6号茶毘墓出土遺物
60. 第7号茶毘墓出土遺物	61. 第12号茶毘墓出土遺物
62. 第1号火葬墓出土遺物	63. 表土層出土遺物(1)
64. 表土層出土遺物(2)	

第1章 発掘調査に至る経緯

向山遺跡が所在する岡津原は、掛川市西域を南北に流れる原野谷川の東側に位置する河岸段丘をもつ丘陵で、市街地から車でおよそ10分程の距離にある。岡津原からは、市の西域に広がる平野部を一望でき、見るからに遺跡立地に適した地形景観を示している。

ここに所在する遺跡は、縄文時代早期・中期の土器散布地、弥生時代中期・後期～古墳時代前期の集落跡、古墳時代中期の古墳、古墳時代後期の横穴群などがあり、これらは重複して発見されることが多い。この多くの遺跡の中でも「画文帯階段式土器」を出土した「岡津奥の原古墳」は特に有名である。

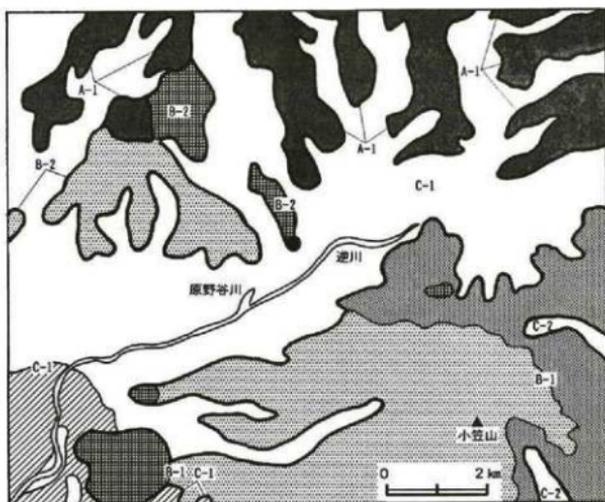
これまでに行われた周辺地での発掘調査には、昭和41年から昭和42年にかけて実施した東名高速道路建設に伴う「岡津横穴群」、「西岡津古墳」、「向山古墳1号墳」、「向山古墳2号墳」等がある。岡津原一帯は農業振興地域に指定されていることから、それ以後特に大きな開発行為もなく、同時にそれに伴う発掘調査もなかった。

平成4年6月になって、今回調査の対象となった地点を申請地として、工場棟の建設敷地造成を目的とした掛川市土地利用事前協議申出書が提出された。申請地に「向山遺跡」が所在することから、掛川市教育委員会と土地利用申請者株式会社川島デベロップ（掛川市）との間で遺跡の取り扱いについての協議が始まった。協議では、まず「遺跡所在確認調査」を実施して遺跡の所在状況を確認し、その結果に基づいて土地利用上の遺跡の取り扱いを決めることとなった（平成4年8月3日付 掛教第403号受付「確認調査依頼書」に基づき、平成5年1月11日～13日実施）。その結果、「向山遺跡」が所在することは明らかとなり、土地利用計画において遺跡の消滅が免れない状況であることを確認した。そこで、やむなき措置として本発掘調査を実施し、「向山遺跡」を記録として保存することとなった。

本発掘調査の実施については、申請者から掛川市教育委員会に依頼があったが、即応できないことから、静岡人類史研究所に依頼し実施することとなった（「向山遺跡発掘調査に関する協定書」平成5年6月3日締結）。現地発掘調査については、調査主体の掛川市教育委員会、調査指導機関の静岡県教育委員会、調査実施機関の静岡人類史研究所、調査事務局の掛川市教育委員会、事業者の株式会社川島デベロップにより構成する「向山遺跡発掘調査連絡会」を設置し、実施した。連絡会は月1回開催し、発掘調査の進捗状況の報告、遺構・遺物の検出状況を踏まえ発掘調査方法の検討、次月における調査の進め方・予定について、事業者側からの意向・要望について等を議題として討議した。そして最終的には4回の連絡会を行い、現地作業を終えるに至った。



図 II-1-1 向山遺跡の位置図



凡 例

- | | |
|---|--|
| <p>A 赤石山地
-1 志太・春野山地</p> <p>B 遠州台地・丘陵地
-1 小笠山丘陵地
-2 袋井丘陵地</p> <p>C 遠州平地
-1 太田川平野
-2 菊川平野</p> <p>● 向山遺跡</p> | <p>■ 山麓地</p> <p>■ 大起伏丘陵地</p> <p>■ 小起伏丘陵地</p> <p>■ 砂礫台地(低地)・段丘地</p> <p>□ 扇状地性低地</p> <p>▨ 三角州性低地</p> |
|---|--|

資料：土地分類図（静岡県）、1991年

図 II-1-2 向山遺跡周辺の地形区分図

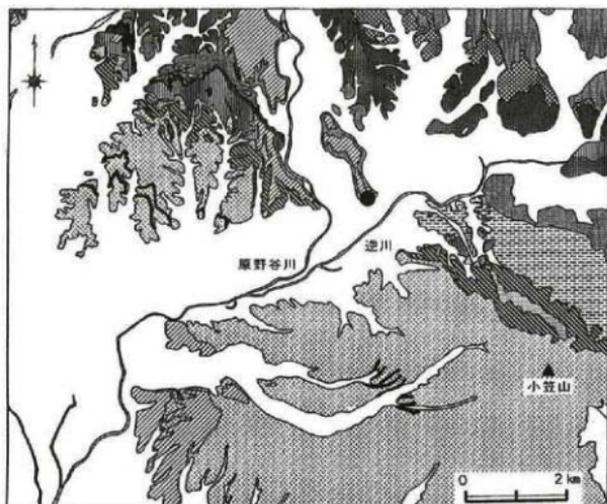
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

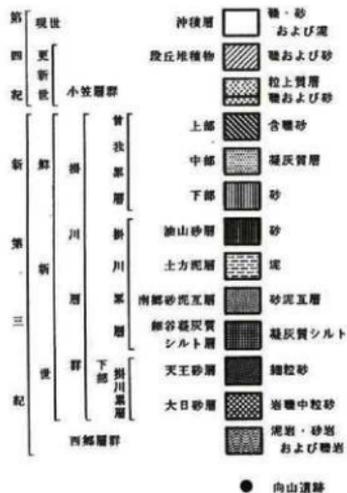
向山遺跡は掛川市の南西部に位置しており、遺跡の北側は東名高速道路が東西方向に走り、東側は垂木川が北東から南西方向に流下している。

向山遺跡の周辺の地形は図Ⅱ-1-2に示す通り、北側は起伏量（地表の起伏の程度を示す。単位面積内の最高点と最低点の高度差）が100m以下の山麓地である志太・春野山地と起伏量100m以下の袋井丘陵地が分布している。遺跡の南側には小笠山（山頂の標高約264m）があり、山頂を通る地質の境界線（北西-南東方向）から東部は起伏量200~100mの大起伏丘陵地で、西部は起伏量が100m以下の小起伏丘陵地である小笠山丘陵地が広がっている。

これらの地域は開折が進み、扇状地性の低地や三角州性の低地によって埋められている。また、逆川、原野谷川などによって形成された扇状地性の低地（太田川平野ともいわれている）が広範囲に分布している。



凡例



資料：日本地質図大系 中部地方、1991年

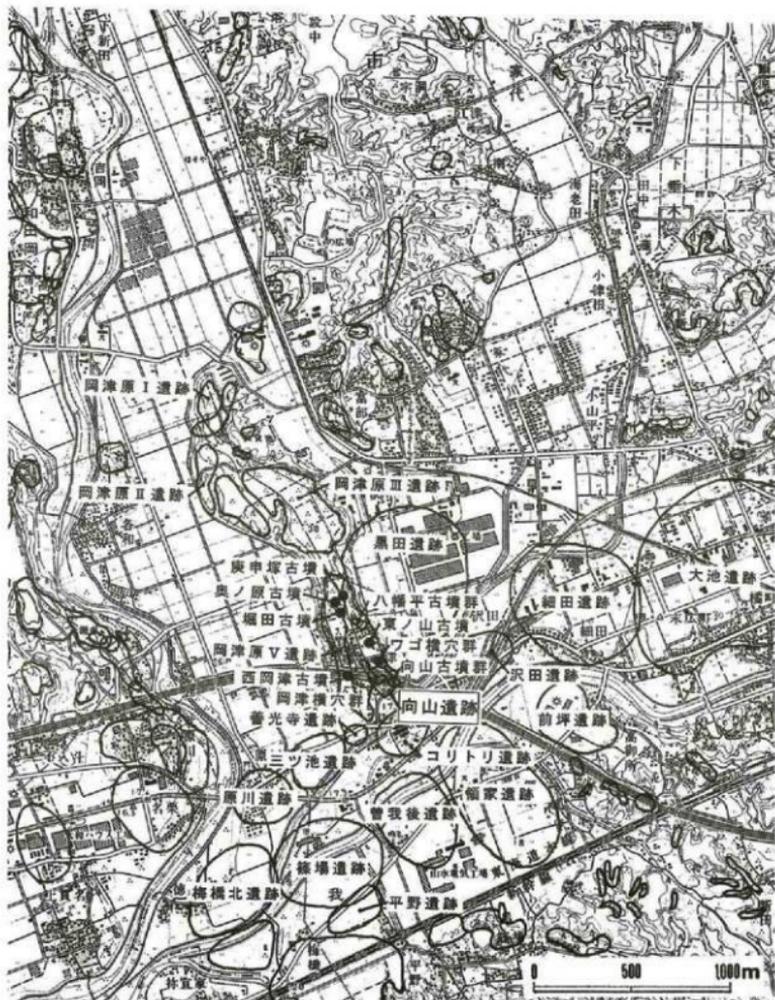
図Ⅱ-1-3 向山遺跡周辺の地質区分図

向山遺跡の周辺の地質は図Ⅱ-1-3に示す通り、北側は新第三紀の掛川層群と西郷層群、第四紀更新世の小笠層群などが分布する。向山遺跡は扇状地に分布する沖積層（礫・砂および泥）によって囲まれる第四紀更新世の段丘堆積物からなっている。段丘堆積物は砂（上層部）と礫（下層部）で占められる。礫種は砂岩で、その径は5～200mmを占めている。

一方、南側には掛川層群の掛川累層（土方泥層と南郷砂泥互層）と曾我累層および小笠層群が広く分布しているが、小笠山の山頂を北西-南東方向に通る地質境界線で大きく区分される。

北西-南東線の西部には礫層を主とする小笠層群がみられ、東部には掛川累層と小笠山を支える基盤の部分である曾我累層が見られる。新第三紀鮮新世の曾我累層は礫、砂層を主とし、泥層をはさむ地層であるため、この地層の違いは丘陵の地形に反映され、侵食されやすい西部の小笠層群が小起伏丘陵地となり、侵食されにくい東部の掛川累層・曾我累層が大起伏丘陵地となっている。

向山遺跡は扇状地性の低地に囲まれた砂礫段丘地（袋井丘陵地という）の南端に位置している。



図Ⅱ-2-1 向山遺跡周辺の遺跡分布図

第2節 歴史的環境

向山遺跡は袋井丘陵地の中の岡津丘陵と呼ばれる低地性の段丘地上に位置する。その周辺は原野谷川、逆川、家代川、垂木川などに沿った扇状地性低地である。この丘陵地や低地には古墳時代の遺跡が多く、特に古墳や横穴が群集している(図Ⅱ-2-1)。

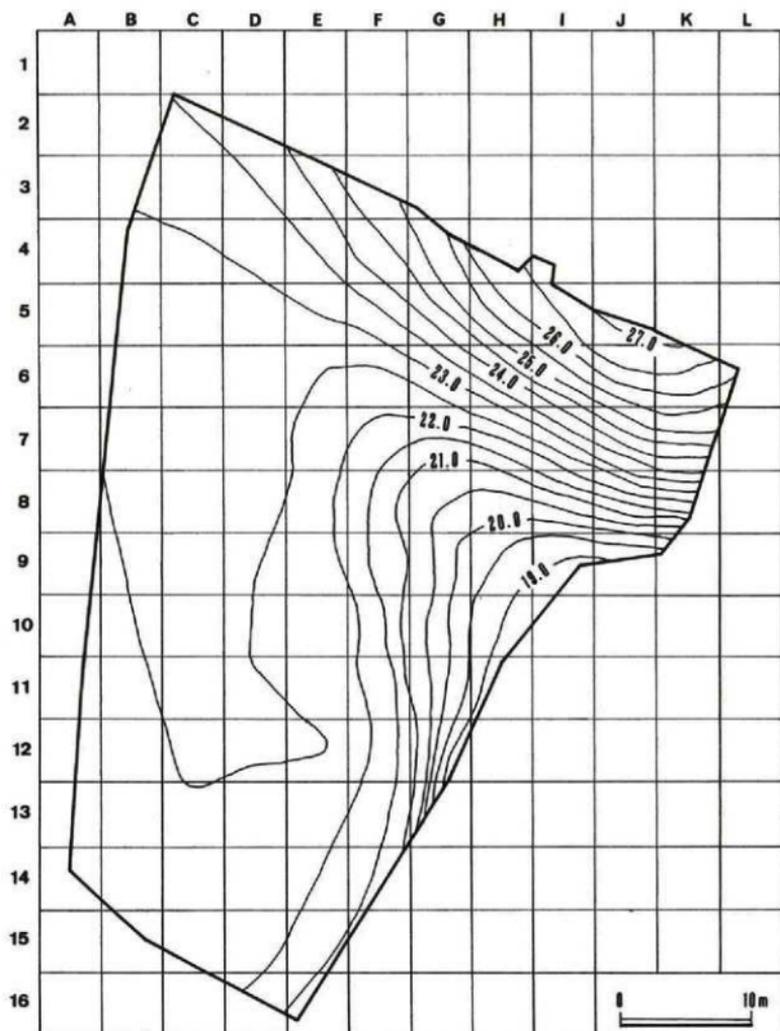
縄文時代から弥生・古墳時代の複合遺跡として、岡津原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、黒田遺跡があげられる。これらの遺跡の内容については明確にされていないが、岡津原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は向山遺跡の西～北西方向の丘陵地に立地しており、縄文土器や弥生土器、土師器や須恵器などが出土している。黒田遺跡は岡津丘陵の東側に接する扇状地性低地に立地し、この遺跡からも縄文土器・弥生土器・土師器が出土している。

弥生時代の遺跡としては原川遺跡がある。原川遺跡は原野谷川が形成した自然堤防上に立地するもので、その初現は弥生時代初頭とされており、それ以後幾度かの断絶を経ながら近世までに至る複合遺跡である。確認された集落址は、中遠地方における最初の農耕集落と考えられている。また、多様な土器棺墓も発見され、当時の墓制を解明するに新たな資料となっている。同遺跡からは古墳時代の堅穴住居跡も確認されており、大集落の可能性がある。中～近世に関しても、旧東海道が存在から交易、その他の面において重要な位置を占めていたことがうかがえる。このほか、弥生時代の遺跡として藪場遺跡が、弥生時代～古墳時代の遺跡として沢田遺跡・細田遺跡・前坪遺跡が、弥生時代～古代にかけての遺跡として大池遺跡・曾我後遺跡・領家遺跡・平野遺跡が、弥生時代～平安時代の遺跡として梅橋北遺跡があげられる。これらの遺跡はいずれも垂木川と逆川に沿った神積平野部に立地している。

古墳時代になると岡津丘陵上には中・後期の遺物が散布する岡津原Ⅴ遺跡が分布し、それに重なる様に北側から庚申塚古墳(円墳)・奥ノ原古墳(円墳)・堀田古墳(円墳)・西岡津古墳が点在し、その東側に八幡平古墳群(円墳5基)・東ノ山古墳(円墳)・岡津横穴群(A群:8基、B群:16基)・ワゴ横穴群(5基)・向山古墳群(円墳4基)と、丘陵上はほとんど古墳と横穴によって占められている。

向山遺跡に隣接する岡津横穴群からは土師器、須恵器、鉄刀、刀子などが出土しており、向山古墳群の2号墳からは鉄剣・銅鏡・合子が確認されている。また、岡津丘陵下の南側の神積平野部には古墳時代から古代にかけての遺物が散布する三ツ池遺跡・善光寺遺跡・コリトリ遺跡が分布している。

以上のように、向山遺跡の周辺は縄文時代から平安時代に至る複合遺跡がみられ、断片的ではあるがこの地における人々の営みが継続していたことを物語っている。



図Ⅲ-1-1 調査対象地域の地形とグリッド設定図

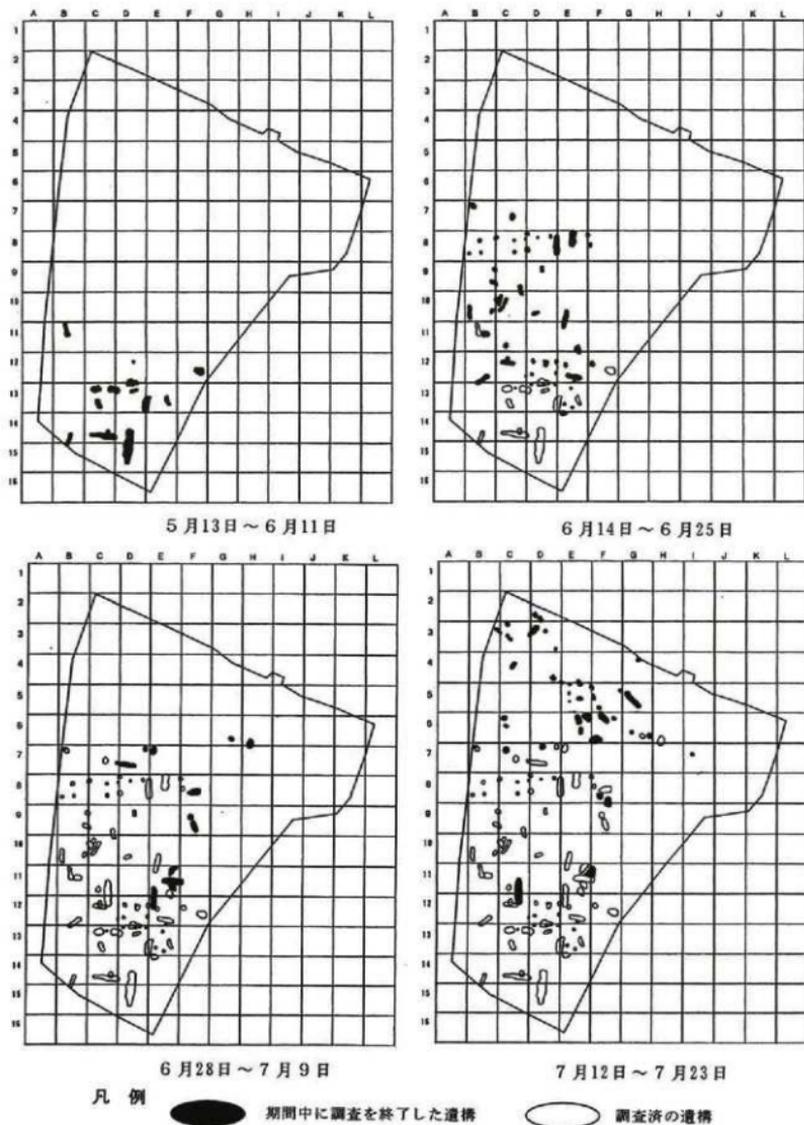
第III章 発掘調査の概要

第1節 調査方法

事前の試掘調査において、丘陵上に本遺跡が立地し、包含層が存在しないことが確認されていることから、遺構の確認面である黄褐色砂礫層を覆う表土層を重機によって除去した後、調査区全体に5m×5mのグリッドを設定し、東西方向にA～L、南北方向に1～17の番号を付し、地形測量を行なった。

次に、作業員により遺構の確認面の全面精査を行い、遺構の分布の概略を把握した後、個々の遺構について確認・精査を行った。

確認・精査された遺構および遺物は、実測図を作成し、写真撮影を行った。なお、遺構および遺物の記録にはパーソナルコンピュータと光波測距儀を利用したトータルステーション・システム（遺跡図形処理システムソフト）を導入した。

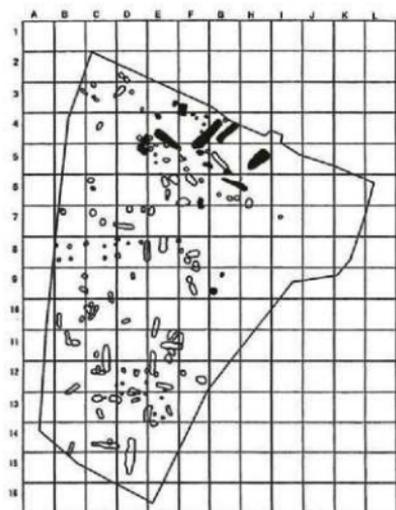


図Ⅲ-2-1 発掘調査の経過図(1)

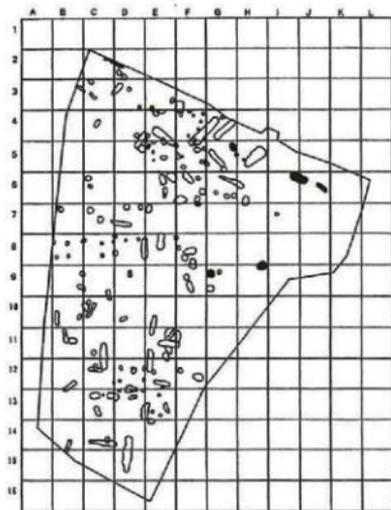
第2節 発掘調査の経過

向山遺跡の現地調査(準備および発掘調査)は平成5年5月13日より同年9月17日まで実施した。以下にその経過を略記する。

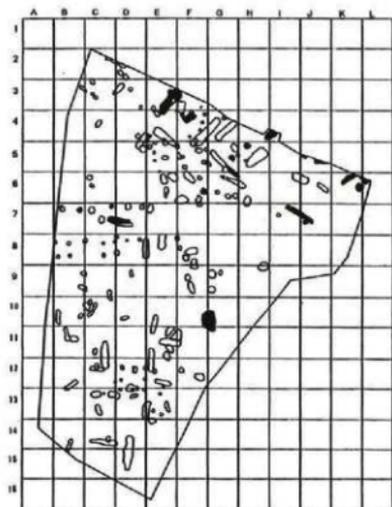
- 5月13日(木) 重機2台による表土層の除去作業を行う。また、発掘調査の開始にともない、事務所を開設する。
- 5月14日(金) 重機による表土層の除去作業をほぼ終了する。数十基の遺構が確認される。
- 5月17日(月) 調査区のグリッドを設定し、ベンチ・マーク(標高23.175m)を設定する。同時に作業員を動員し、表土層を除去した面の精査を開始する。
- 5月21日(金) 表土層を除去した面の精査を終了し、地形測量を行う。
- 5月24日(月) 精査により判明した遺構の概要を知るために、個々の遺構にマーキングをし、分布状況を記録した。この結果、約250個所の遺構と思われるものが確認される。
- 5月31日(月) 個々の遺構の精査を開始する。
- 6月3日(木) 第1回発掘調査連絡会が現場事務所で行われ、発掘調査の体制や今後の予定などについての話し合いが持たれる。
- 6月11日(金) 第1・2・3・4号土坑、第1号茶毘墓、第1・2・3・4・5・36・37号溝の精査を終了する。
- 6月18日(金) 第5・8・9・10・11・12・13・14・15・17号土坑、第6・7・8・9・10・11・12・38号溝、第2号茶毘墓、第1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12号ピットの精査を終了する。
第1～8号ピットは配置関係から掘立柱建物の柱穴と確認されたため、掘立柱建物跡とする。
- 6月25日(金) 第6・7・16・18・19・20・21号土坑、第13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・24・36・37号ピット、第3・4・5号茶毘墓、第13・14・15号溝の精査を終了する。
- 7月2日(金) 第22号土坑、第16・17・18・19号溝の精査を終了する。
第9・16・17号溝の配置などから、この溝状遺構を第1号方形周溝墓とする。
- 7月9日(金) 第20・22号溝、第23・24・25・26号土坑、第1・3・11号土壇墓の精査を終了する。また、第2回発掘調査連絡会が現場事務所で行われ、これまでの調査経過と成果の報告および今後の予定についての話し合いが持たれる。
- 7月16日(金) 第21・39号溝、第6・7・9号茶毘墓、第2号土壇墓、第27号土坑、第39号ピットの精査を終了する。
- 7月23日(金) 第25号溝より土器が一括して出土する。この溝は第2号方形周溝墓の南溝と思われる。第28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45号土坑、第23・25・40号溝、第25・26・27・38・40・43・44号ピット、第8号茶毘墓、第1号火葬墓(蔵骨器を2点並べて埋葬したもの)、第4・12号土壇墓の精査を終了する。



7月26日～8月6日



8月9日～8月27日



8月30日～9月2日

凡例



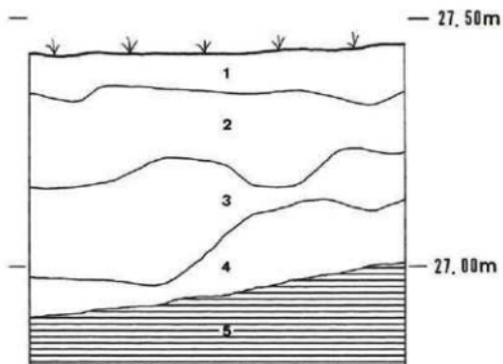
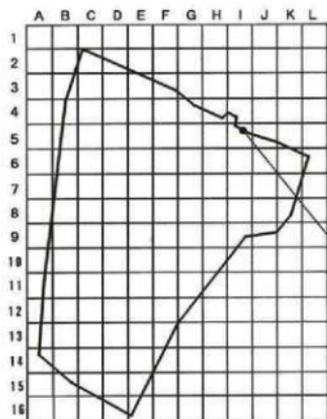
期間中に調査を終了した遺構



調査済の遺構

図Ⅲ-2-2 発掘調査の経過図(2)

- 7月30日(金) 第46・50・72号土坑、第28・29・30・31・32・33・41号ピット、第10号茶毘墓、第24・26・27・28・29・31号溝、第5号土壇墓の精査を終了する。調査区の北側に位置する溝状遺構の配置などから、第24・27・33号溝を第2号方形周溝墓とする。主体部は周溝墓のほぼ中心付近に認められる。
- 8月3日(火) 第3回発掘調査連絡会が行われ、これまでの経過と成果ならびに今後の予定についての話し合いが持たれる。
- 8月6日(金) 第48・49・52・53・54・55号土坑、第7・8・13号土壇墓、第30・32号溝、第23・42号ピットの精査を終了する。
第2周溝墓の東側に隣接する溝状遺構の配置などから、第25・26・30号溝を第3号方形周溝墓とする。主体部は確認されない。
- 8月9日(月) 第2号方形周溝墓の主体部の精査を開始する。
- 8月13日(金) 第51・56・57・58・59号土坑、第45・46号ピット、第11・12号茶毘墓、第9号土壇墓の精査を終了する。
- 8月20日(金) 第1号方形周溝墓の配置、エレベーションなどの記録を行う。第6号土壇墓、第61・62・70号土坑の精査を終了する。
- 8月27日(金) 主体部が確認された第2号方形周溝墓の精査を終了する。また、第33・34・41・42号溝、第63・65・67・68・69号土坑の精査も終了する。
調査区北側の地層断面を記録すると同時に、調査区の北側に伸びる遺構の確認を行う。この際に、北壁面から土器が出土したが、東名高速道路の敷地のため、これより北側の精査は行わないこととする。
- 8月30日(月) 第66号土坑の精査を終了する。
- 8月31日(火) 第47・64・71号土坑、第35・43号溝、第10号土壇墓の精査を終了する。
第4回連絡会が行われ、これまでの経過と成果の報告、ならびに調査終了の具体的スケジュールについて話し合いが持たれる。
- 9月1日(水) 第34・35号ピットの精査を終了する。
(株)東日によりラジコンヘリコプターを使用して遺跡全体の航空写真撮影が行われる。
- 9月2日(木) 第60号土坑の記録、ならびに第2号方形周溝墓封土の精査を終了する。
- 9月6日(月) 第2号周溝墓の主体部の覆土、第11号茶毘墓の覆土の洗浄調査を開始する。
- 9月14日(金) 第2号周溝墓の主体部の覆土、第11号茶毘墓の覆土の洗浄調査を終了する。
- 9月17日(金) 発掘調査に関する全ての作業を無事に終了し、現場事務所を閉鎖する。



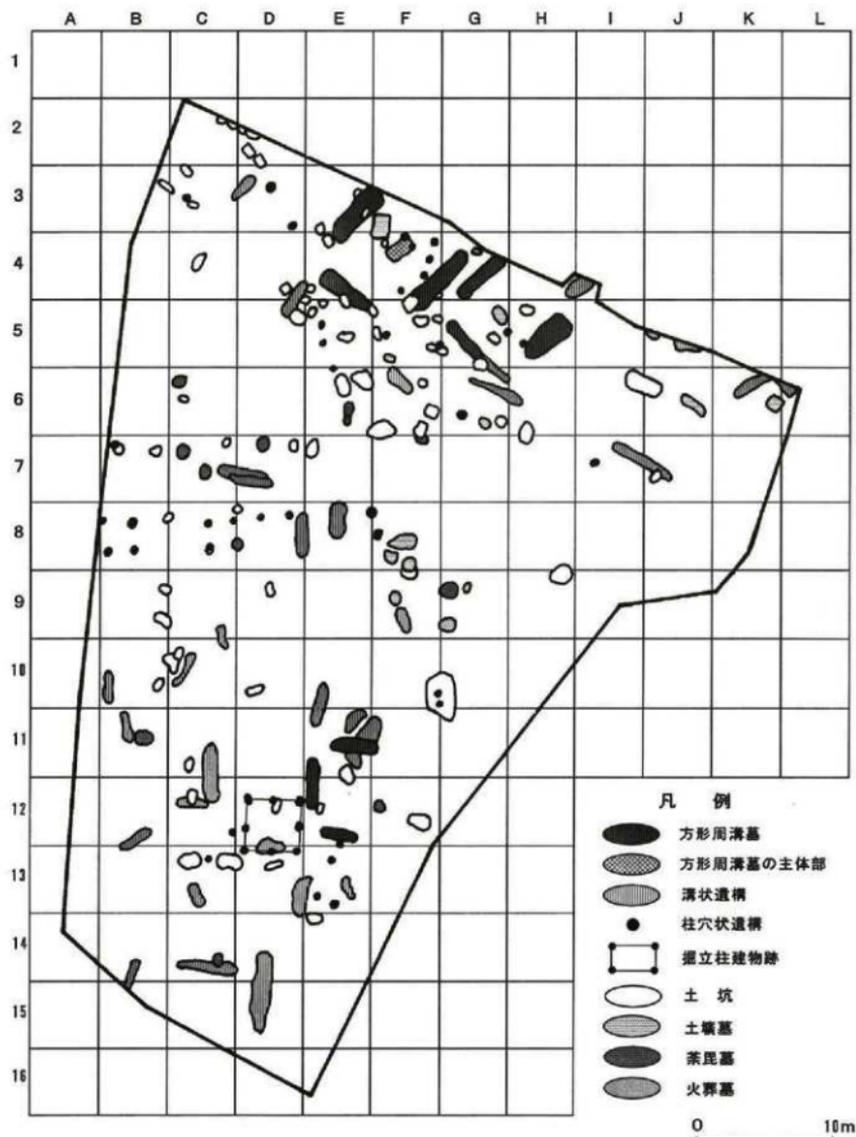
図Ⅲ-3-1 調査区北側の層序模式図

第3節 遺跡の層序

向山遺跡は砂礫からなる段丘の南端部に位置するが、茶畑などとして利用されていたため、遺跡の基盤となる地層の上部はかなり削平されており、いわゆる包含層が存在しない遺跡である。

図Ⅲ-3-1に調査区北側における層序とその位置を示した。第1層から第4層は表土層で、遺構の確認面は第5層の上面である。各層の状況は以下の通りである。

- | | |
|------------|---|
| 第1層 暗褐色土層 | 現在の耕作土で、締りも粘性も弱く、径 0.3~10cm大の礫をやや多く含んでいる。層厚は6~12cmある。 |
| 第2層 暗褐色土層 | 第1層に比べてやや明るい色を呈する。締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.3~5cm大の礫を多く含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。層厚は9~20cmある。 |
| 第3層 明茶褐色土層 | 締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.2~5cm大の礫をやや多く含んでいる。層厚は3~25cmある。 |
| 第4層 茶褐色土層 | 締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.2~5cm大の礫を多く含んでいる。層厚は4~16cmある。 |
| 第5層 黄褐色砂礫層 | この層の上面が遺構の確認面で、いわゆる遺跡の基盤層である。礫は径 0.5~20cm大の砂岩から成り、形状は楕円形や不整形円形(じゃがいも状)で亜角礫を呈している。淘汰は悪く、崩れ易い。層厚は約 160cmあり、上面部より深さ1mと1.5mのところには黒色に変色した層(層厚1~5cm)が帯状に挟まっている。 |



図IV-1-1 遺構分布図

第IV章 発掘調査の結果

第1節 遺構の概要

今回の調査では、溝状遺構が43条(方形周溝墓3基の溝9条を含む)、穴状遺構は柱穴状遺構が46基(このうち掘立柱建物跡の8基を含む)、土坑が72基、土壇墓が13基、茶毘(だび)墓が12基、火葬墓が1基の計144基・合計187基の遺構が確認されている。

1. 溝状遺構

確認された43条のうち、第9・16・17号が第1号方形周溝墓を形成し、第24・27・33号が第2号方形周溝墓を、第25・26・30号が第3号方形周溝墓を形成している。第2号方形周溝墓からは、主体部と思われる掘り込みと封土の一部が確認されたが、第1号および第3号方形周溝墓からは、主体部も封土も確認されなかった。

丘陵の平坦部に分布している溝は、長軸方向が南北を指している溝が多くみられ、北側斜面に分布している溝は、長軸方向が東西を指している溝が多くみられる傾向がある。平面形状では、隅丸長方形や楕円形が多く確認されている。

2. 穴状遺構

① 柱穴状遺構

平面形状がほぼ円形を呈する、いわゆる柱穴状(ピット)を呈する遺構で、46基が確認された。そのうち、第1～8号ピットが掘立柱建物跡を形成している。その他は直線状にならんでいるピット列が11例確認されている。

② 土坑

地山を掘り込んだ穴状遺構で、平面形状では楕円形や円形を呈するものが多く確認されているが、長軸の方向や規模などにバラツキがあり、明確な分類はできない。72基が確認されている。

③ 土壇墓

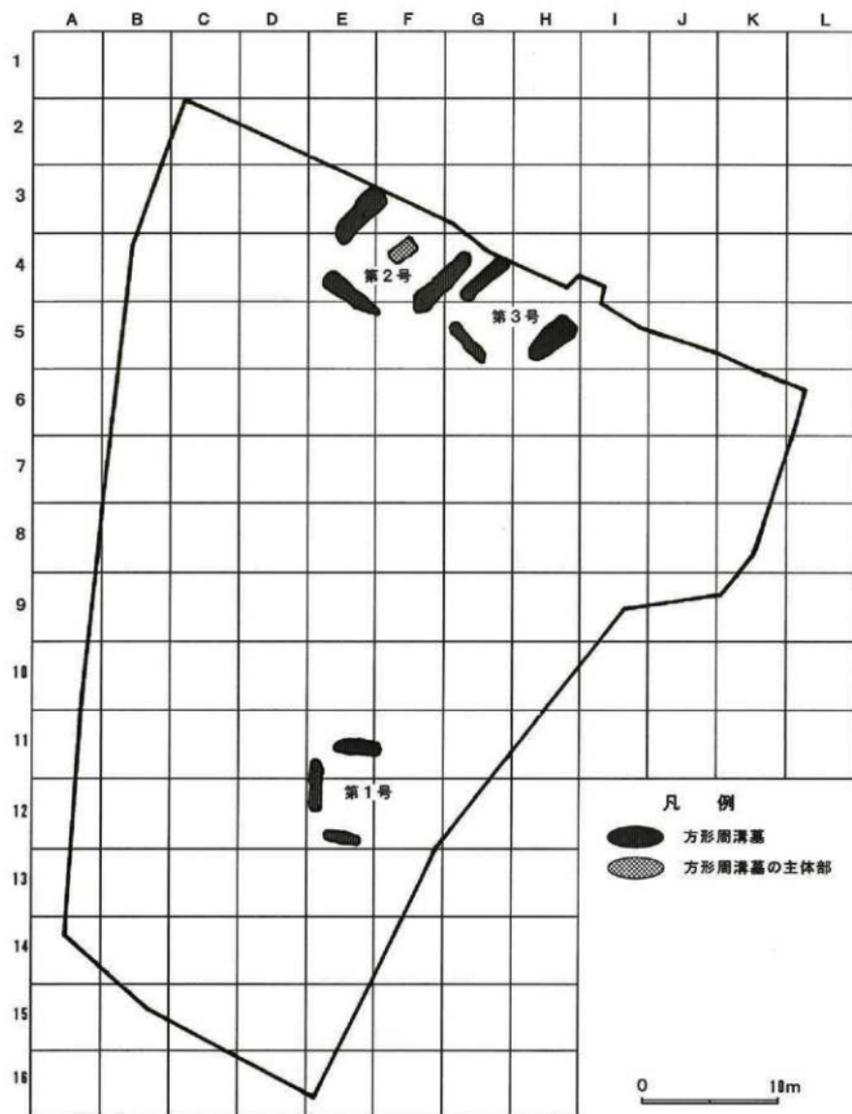
穴状遺構のうち、覆土の中に炭化物を少量含み、出土遺物として供献物のいわゆる「かわらけ」土器や銭貨などが出土するもので、人骨片が出土しないものもあるが第6号土壇墓のように供献物がなく、頭骨や大腿骨など、人骨片だけが出土しているものもある。平面形状では、楕円形が多い。13基が確認されている。

④ 茶毘墓

茶毘墓とは土坑内で遺骸を茶毘に付し、そのまま埋葬したと考えられる遺構で、覆土に炭化物や焼土が多く含まれ、その多くは層を形成している。中には土坑の壁面が焼土化したものも認められる。出土した遺物のうち、人骨片は白色の細片や粉状が多く、銭貨のなかには熱により変形したり数枚が熔着して出土するものもある。土坑の平面形状では、楕円形が多い。12基が確認されている。

⑤ 火葬墓

遺骸を火葬してから蔵骨器に納め、その蔵骨器を土坑に埋葬した遺構で、供献物は出土していない。表土層から地山層を少し掘り込んだ処から1基が確認されている。



図IV-2-1 方形周溝墓の分布図

第2節 溝状遺構

1. 方形周溝墓と遺物

調査区の南側中央部の中央に1基、北側中央部に隣接して2基の計3基が確認された。

第1号方形周溝墓は東溝が削平されて存在せず、主体部も確認されなかった。遺物は西溝から土器の細片が出土しているだけである。

第2号方形周溝墓は、北溝が調査区外に存在すると考えられる。この方形周溝墓からは、主体部と思われる土壌と封土の一部が確認された。ただし、周溝からは遺物は確認されず、主体部からも流入と思われる土器の細片が1点出土しただけである。しかし、封土からは弥生時代の土器片が数十点出土している。

第3号方形周溝墓は、主体部も封土も確認されなかったが、南溝の底から弥生時代中期後半の土器が出土している。

第1号方形周溝墓

調査区の中央よりやや南側で、E-11・12～F-11・12グリッドに位置し、北溝(第17号溝)、西溝(第16号溝)、南溝(第9号溝)が確認された。全体に開墾などで上部がかなり削平されており、東溝が確認されなかったのは、東側がさらに削平されて低くなっているためではないかと考えられる。したがって、全体がどのような形状でどの程度の規模であったかは不明であるが、南北の溝の距離が約7.5mを計り、東西の溝の距離もほぼ同様の方形周溝墓と考えられる。なお、主体部は確認されなかった。

・北溝(第17号溝)

北溝(第17号溝)は南側中央部で第20号溝を切り、東北部で第21号溝を切っている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は上に開くU字形を呈している。長さ349cm、最大幅111cm、深さは最深部が42cmあり、長軸の方向はN-85°-Wを指している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5～4cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5～8cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗褐色土で、締りも粘性も共にやや強く、径0.5～6cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されていない。

・西溝(第16号溝)

西溝(第16号溝)の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いために明確ではないが、U底状を呈している。長さ375cm、最大幅87cm、深さは最深部が17cmあり、長軸の方向はN-2°-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径1～15cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5～4cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土器の細片が覆土中から1点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

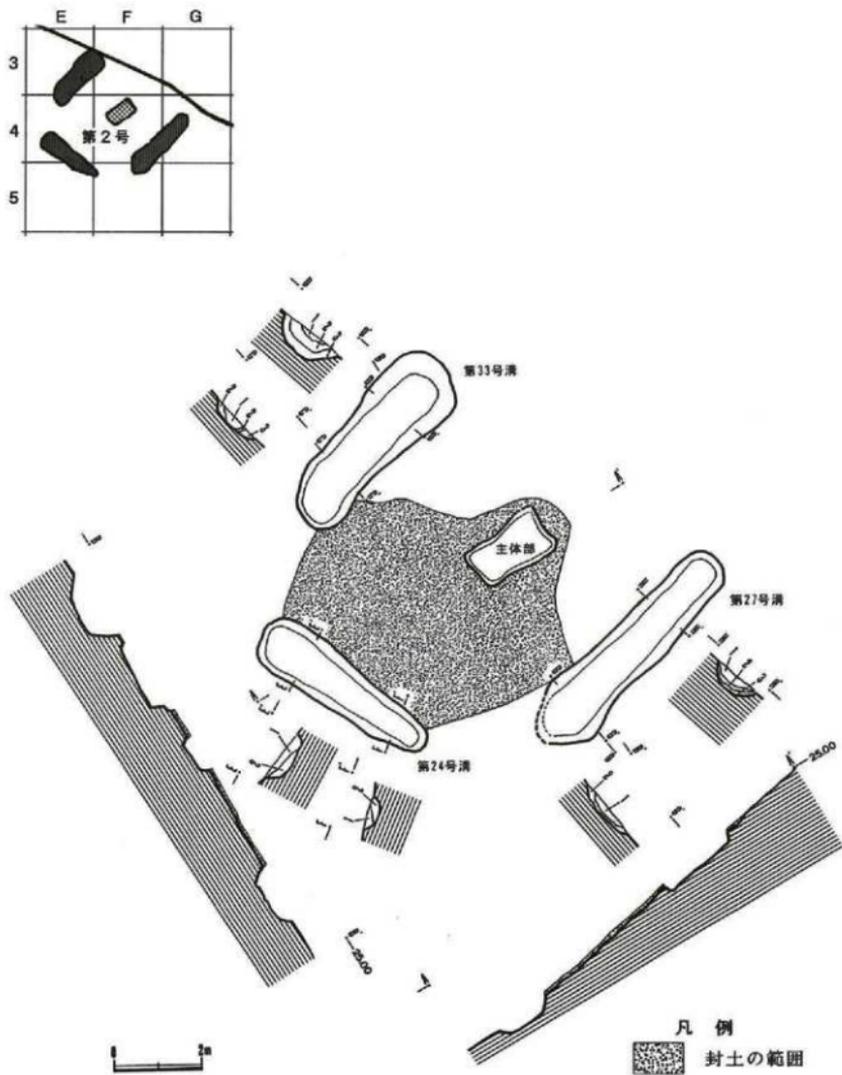
・南溝(第9号溝)

南溝(第9号溝)の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は上に開くU字形を呈している。長さ268cm、最大幅79cm、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-77°-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径1～3cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径3～5cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されていない。

各溝の基盤層は黄褐色を呈し、この層の大部分は径3～8cm大の礫や砂によって占められている。



図IV-2-3 第2号方形周溝墓の平面および断面図

第2号方形周溝墓

調査区の北部で、E-3~5、F-3~5、G-3~4グリッド内の南向きの斜面上に位置し、東側の第3号方形周溝墓に隣接している。西溝(第33号溝)、南溝(第24号溝)、東溝(第27号溝)および主体部と考えられる土壌と封土の一部が確認された。なお、北溝は調査区外に位置すると推定される。全体に開墾などで上部がかなり削平されており、全体がどのような形状で、どの程度の規模であったかは不明であるが、東西の溝の距離は約9.2mを計り、南北の溝の距離もほぼ同様と推定される。

・西溝(第33号溝)

西溝(第33号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に開くU字形を呈している。長さ478cm、最大幅176cm、深さは最深部が58cmあり、長軸の方向はN-43'-Eを指している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.3~7cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黒褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.3~20cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.3~4cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の小さな破片(遺物No.449)が1点と細片が3点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。遺物No.449の土器片には突帯が2条横走りしている。



図IV-2-4 西溝(第33号溝)から出土した土器片(遺物No.449)の拓影(縮尺:1/2)

・南溝(第24号溝)

南溝(第24号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に開くU字形を呈している。長さ454cm、最大幅130cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-55'-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.5~10cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.5~2cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

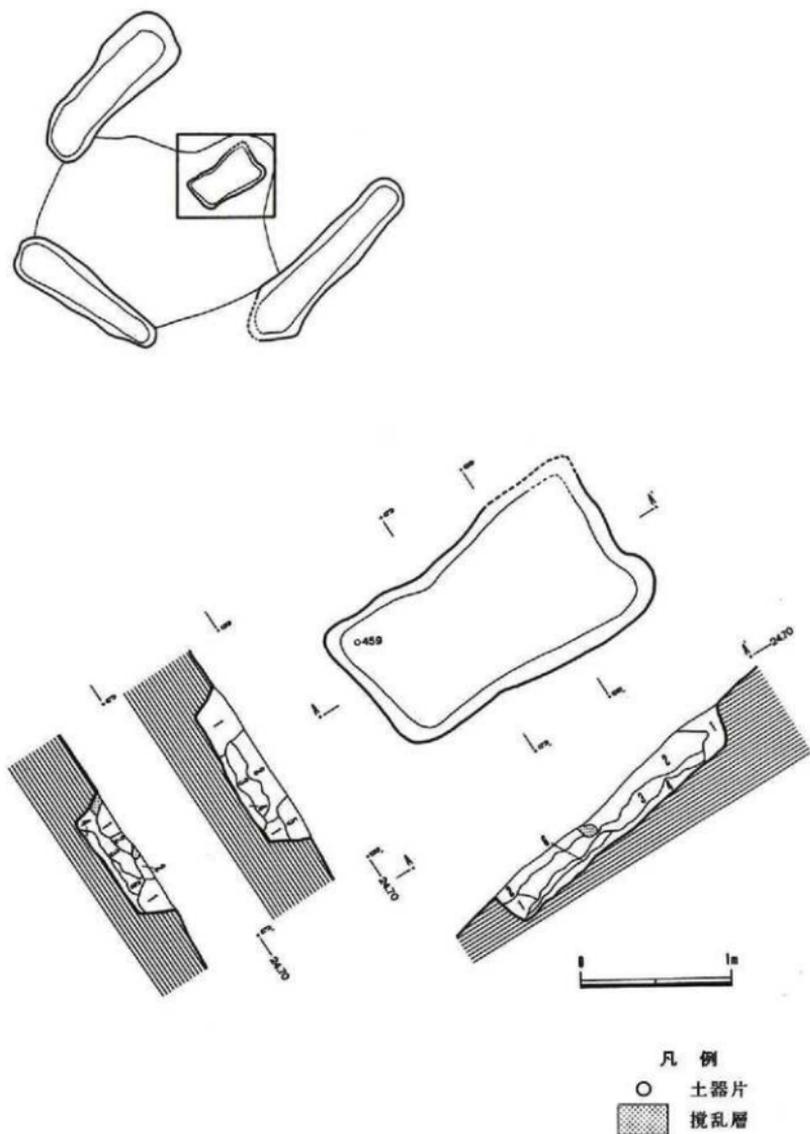
遺物は確認されなかった。

・東溝(第27号溝)

東溝(第27号溝)の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。南西部分を49号土坑により切られているため、長さは推定で580cm、最大幅154cm、深さは最深部が40cmあり、長軸の方向はN-46'-Eを指している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径1~3cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径3~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.5~5cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の細片が3点出土したが、時代を確定できるものではなかった。



図IV-2-5 主体部の平面および断面図

主体部と考えられる土壌の平面形状は隅丸長方形で、断面形状はU字形を呈している。長さ190cm、最大幅115cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-59°-Eを指している。北部を第32号ピットによって切られている。

覆土は6層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5～7cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～7cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で、第2層よりやや明るい色をしており、締りは強く粘性はやや弱い。径0.5～5cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土ブロックを多く含んでいる。第4層は黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5～5cm大の礫をやや多く含んでいる。第5層は暗褐色土で、第1層より暗い色をしており、締りはやや強く粘性はやや弱い。径0.5cm大の礫をやや多く含んでいる。第6層は褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径1cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は覆土中に流入したと思われる土器の破片(遺物No459)が1点出土しているが、主体部の年代を確定できる遺物ではない。

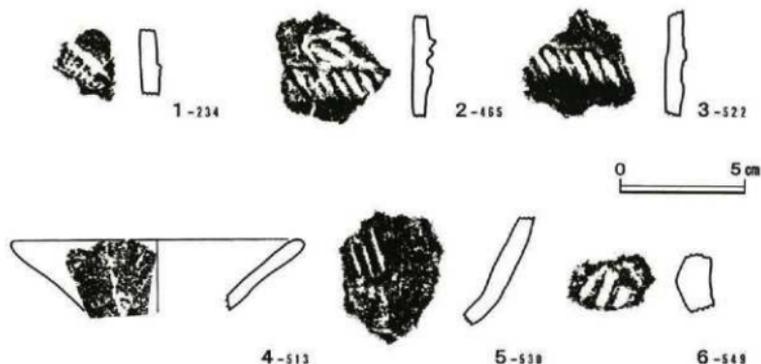


図四-2-6 主体部の覆土内から出土した
土器片(遺物No459)の拓影(縮尺:1/2)



図IV-2-7 封土内の遺物分布図

なお、主体部から南西部にかけて、厚さ20~30cmほどの封土と思われる暗褐色~暗黄褐色土の盛土が分布しており、その中から弥生時代後期の土器片（遺物No234、遺物No465、遺物No513、遺物No522、遺物No530、遺物No549）などの遺物が88点出土している。



図IV-2-8 封土から出土した土器片の拓影(縮尺:1/2)

1(遺物No234)は、連続した刺突紋と沈線紋が斜方向に施紋され、内面はハケ調整が施されている。

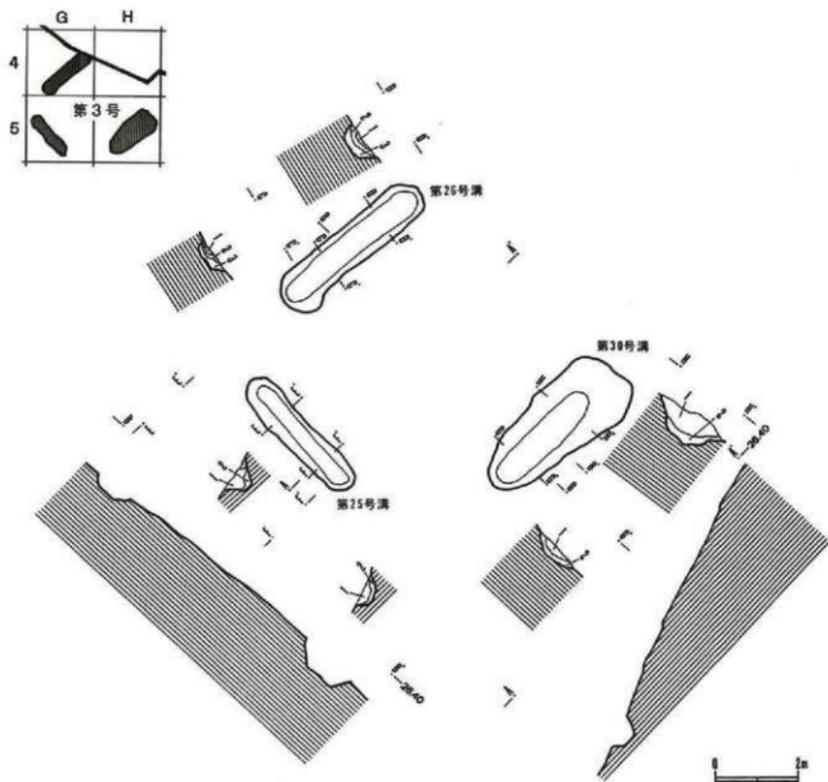
2(遺物No465)と3(遺物No522)は、連続した刺突紋が横方向に2段施紋され、内面はナデ調整が施されている。ただし3(遺物No522)のナデ調整は粗い。

4(遺物No513)は口縁部の破片で、内・外面ともにナデ調整が施されており、指頭痕がみられる。

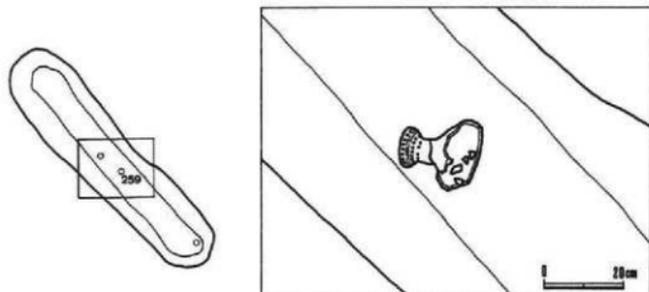
5(遺物No530)は、内・外面ともに粗いヘラ調整が施されているのが顕著にみられる。

6(遺物No549)は刺突紋が施されており、内面に稜がみられる。

これらの遺物は弥生時代後期のもものと判断される。



図IV-2-9 第3号方形周溝墓の平面および断面図



図IV-2-10 南溝(第25号溝)の遺物(遺物No.259)出土状況図

第3号方形周溝墓

調査区の北部で、G-4~5、H-4~5グリッド内の南向きの斜面上に位置し、西側の第2号方形周溝墓と隣接している。西溝(第26号溝)、南溝(第25号溝)、東溝(第30号溝)が確認されているが、北溝は調査区外に位置すると推定される。

全体に開墾等で上部がかなり削平されており、全体がどのような形状でどの程度の規模であったかは不明であるが、東西の溝の距離は約8mを計り、南北の溝もほぼ同様の距離と推定される。なお、主体部は確認されなかった。

・西溝(第26号溝)

西溝(第26号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に開くU字形を呈している。長さ424cm、最大幅110cm、深さは最深部が38cmあり、長軸の方向はN-48°-Eを指している。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~10cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径1~12cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土のブロックと炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

・南溝(第25号溝)

南溝(第25号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ350cm、最大幅80cm、深さは最深部が43cmあり、長軸の方向はN-43°-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.5~7cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~7cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は、溝の底面から弥生土器(遺物No.259)が出土している。その他、覆土中から土器の細片が2点出土したが、土器の年代を確定できるものはなかった。

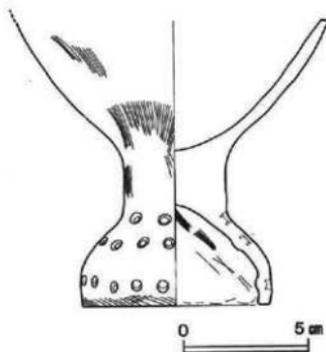
・東溝(第30号溝)

東溝(第30号溝)の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に広く開くU字形を呈している。長さ400cm、最大幅183cm、深さは最深部が83cmあり、長軸の方向はN-46°-Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で、締りも粘性も弱く、径0.3~12cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性も弱い。径0.3~15cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

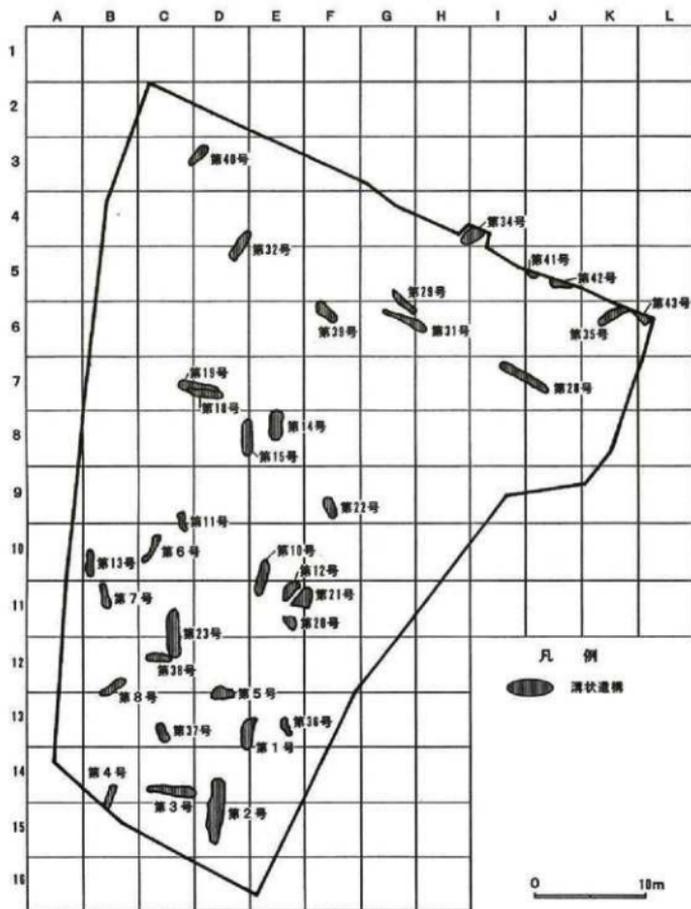
南溝から出土している土器から判断すると弥生時代中期後半の方形周溝墓と推定される。



図四-2-11 南溝から出土した
弥生土器(遺物No.259)

2. 溝状遺構と遺物

溝状遺構は調査区の南側の平坦部と北側斜面に分布しているが、平坦部に比較的多く分布している。確認された総数は43条で、平面形状は隅丸長方形・不整隅丸長方形が24条で約56%を占めており、楕円形・不整楕円形が14条で約33%である。平均的な大きさは長さ314cm、最大幅81cm、深さは最深部で25cmある。平坦部に分布している溝は長軸方向が南北を指す溝が多く、北側斜面に分布している溝は長軸方向が東西を指す溝が多い。しかし、ほとんどの溝内から遺物は出土しておらず、時代や性格を確定するのは困難である。



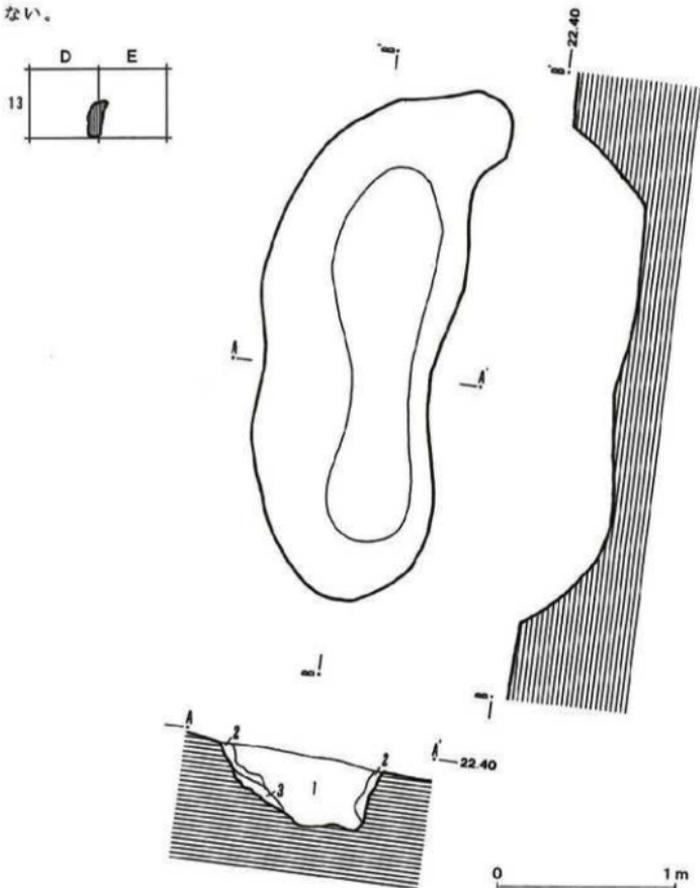
図IV-2-12 溝状遺構の分布図

第1号溝

D-13～E-13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状はU字形を呈すると思われるが西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。長さ 280cm、最大幅 108cm、深さは最深部が44cmあり、長軸の方向はN-7'-Eを指している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～3cm 大の礫・炭化物・暗黄褐色土のブロックを少量含んでいる。第2層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5～2cm 大の礫と黒色土のブロックを少量含んでいる。第3層は暗黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径 0.5～4cm 大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土(第1層)から土器の細片が1点出土しているが、時代を確定できるものではない。



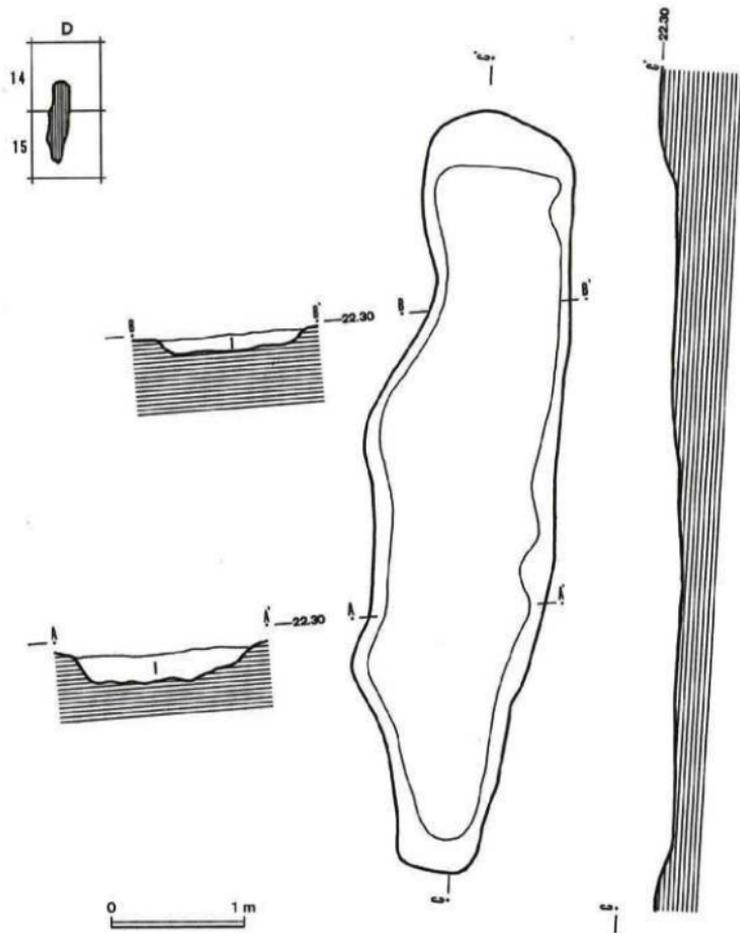
図IV-2-13 第1号溝の平面および断面図

第2号溝

D-14~15グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが上に開くU字形を呈している。長さ 586cm、最大幅 146cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はN-5°-Eを指している。

覆土は黒褐色土が1層で、締りはやや強く、粘性は強い。径1~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

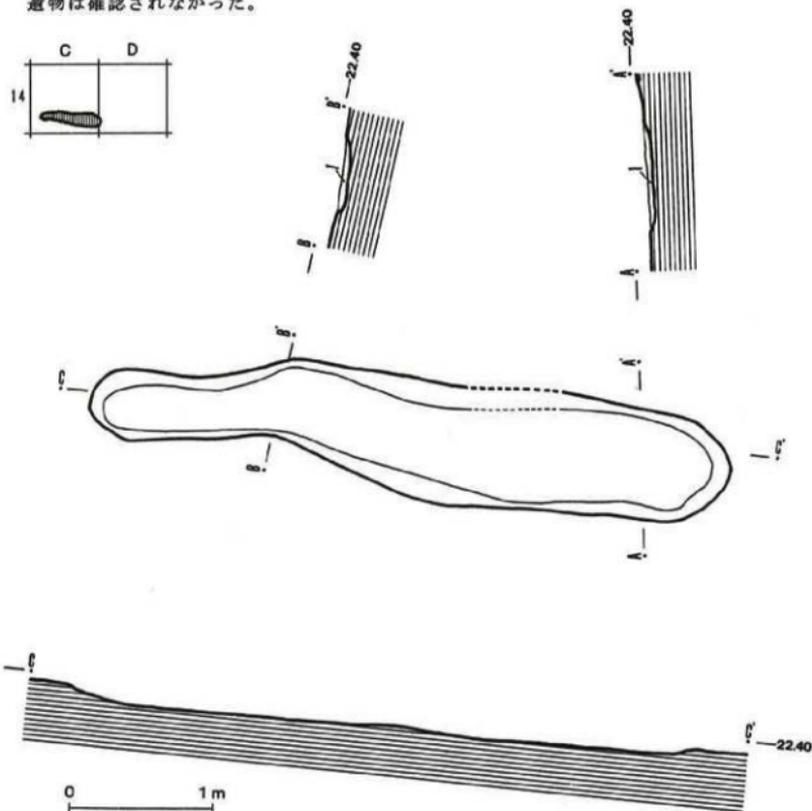


図IV-2-14 第2号溝の平面および断面図

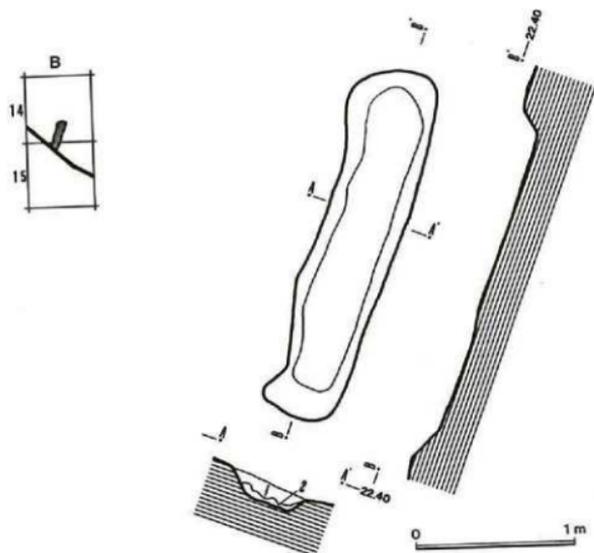
第3号溝

C-14~D-14グリッド内に位置し、溝の東北部を第1号茶屋墓に切られている。平面形状は不整楕円形で、断面形状は浅いため定かではないが上に開くU字形を呈している。長さ452cm、最大幅84cm、深さは最深部が10cmあり、長軸の方向はN-82'-Wを指している。

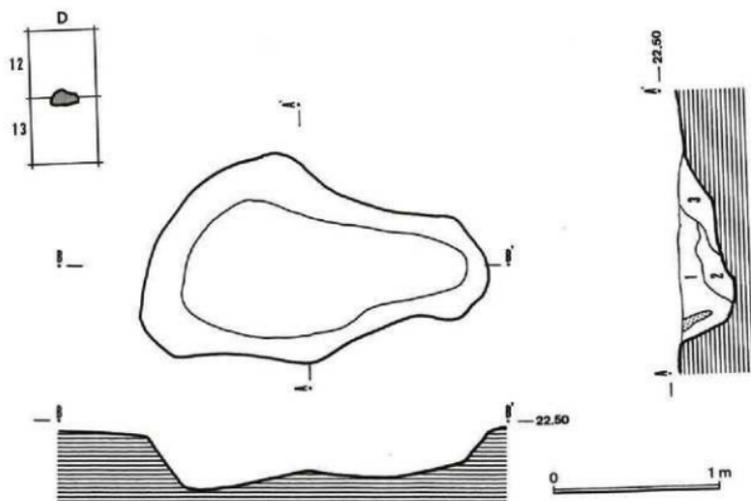
覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性もやや強く、径1~3cm大の礫を多く含んでいる。遺物は確認されなかった。



図IV-2-15 第3号溝の平面および断面図



図IV-2-16 第4号溝の平面および断面図



図IV-2-17 第5号溝の平面および断面図

第4号溝

B-14~15グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが上に開くU字形を呈している。長さ228cm、最大幅55cm、深さは最深部が15cmあり、長軸の方向はN-21'-Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径1~3cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径1~2cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

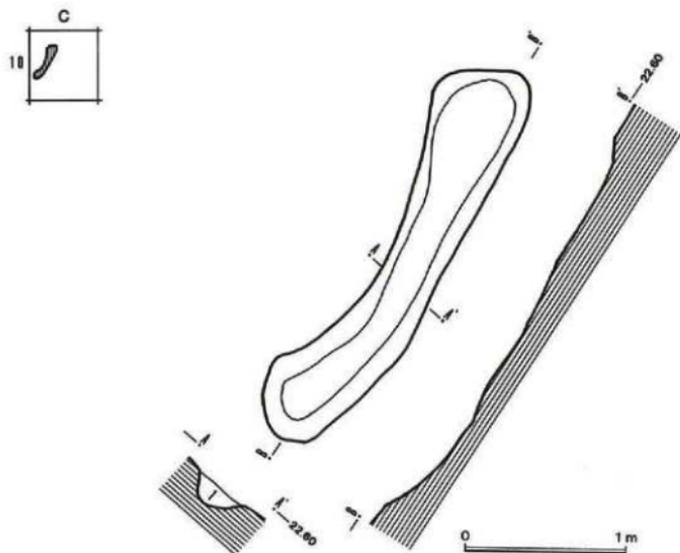
遺物は覆土(第1層)から土器の細片が2点出土しているが、時代を確定できるものではない。

第5号溝

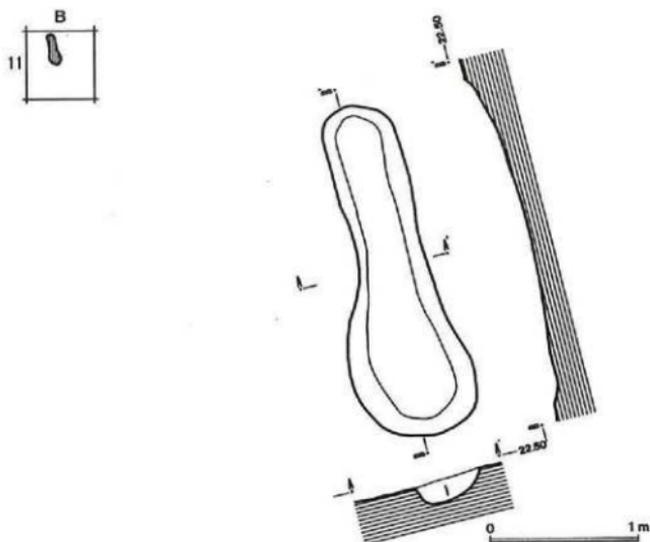
D-12~13グリッド内に位置し、溝の中央部南側で第8号ピットを切っている。平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ198cm、最大幅121cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-88'-Wを指している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~4cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~4cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-18 第6号溝の平面および断面図



図IV-2-19 第7号溝の平面および断面図

第6号溝

C-10グリッド内に位置し、平面形状は不整隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 258cm、最大幅59cm、深さは最深部が17cmあり、長軸の方向はN-27'-E を指している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径 0.5～6cm大の礫をやや多く含んでいる。

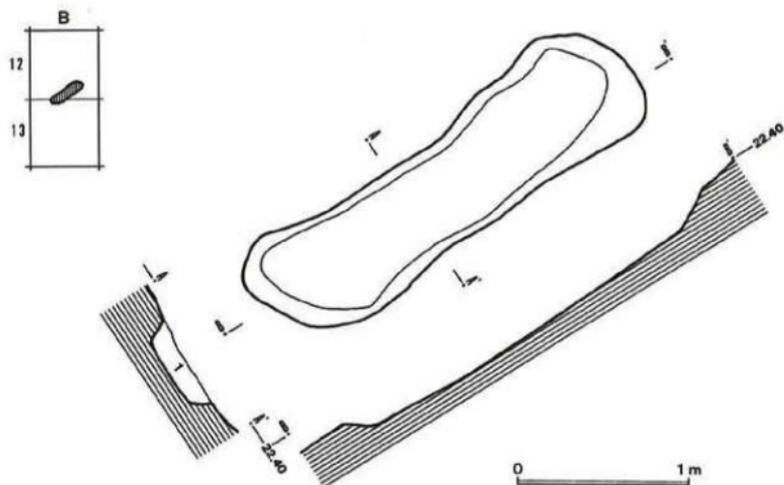
遺物は確認されなかった。

第7号溝

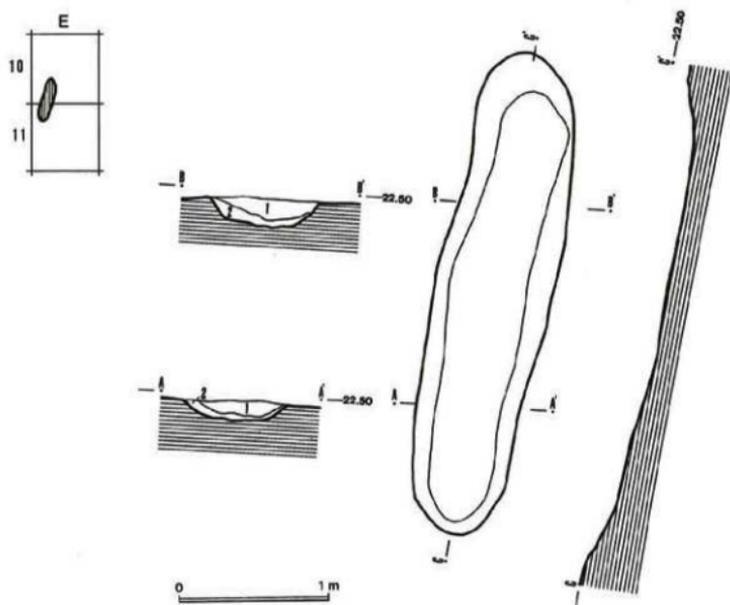
B-11グリッド内に位置し、平面形状は不整隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ 226cm、最大幅80cm、深さは最深部が15cmあり、長軸の方向はN-12'-W を指している。

覆土は暗褐色土が1層で、締りも粘性も弱く、径 2～3cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-20 第8号溝の平面および断面図



図IV-2-21 第10号溝の平面および断面図

第8号溝

B-12~13グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は上に開くU字形を呈している。長さ252cm、最大幅74cm、深さは最深部が16cmあり、長軸の方向はN-58°-Eを指している。

覆土は黒色土が1層で締りはやや弱く、粘性は強い。径0.5~10cm大の礫を含んでいる。遺物は覆土の中位から土器の細片が3点出土しているが、時代を確定できるものではない。

第9号溝

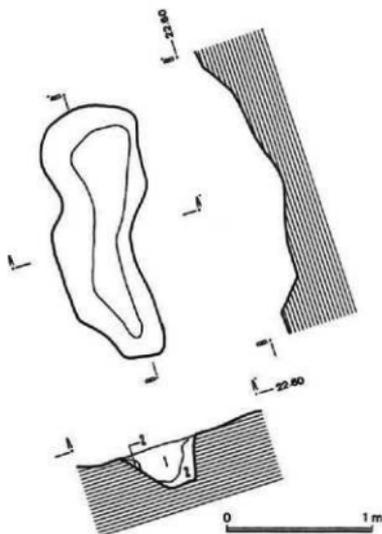
第1号方形周溝墓の南溝にあたる。

第10号溝

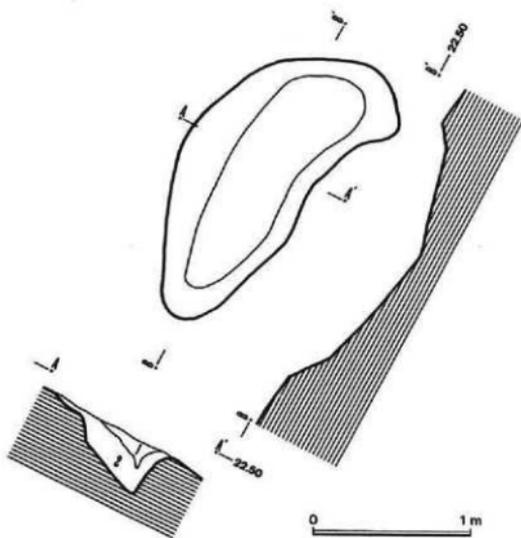
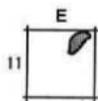
E-10~11グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に広く開くU字形を呈している。長さ325cm、最大幅78cm、深さは最深部が18cmあり、長軸の方向はN-11°-Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~6cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。第2層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径1cm大の礫と暗黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

遺物は溝の底面から土器の細片が1点出土しているが、時代を確定できるものではない。



図IV-2-22 第11号溝の平面および断面図



図IV-2-23 第12号溝の平面および断面図

第11号溝

C-9～10グリッド内に位置し、平面形状は不整隅丸長方形で、断面形状はやや上に開くU字形を呈するが、西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。長さ175cm、最大幅67cm、深さは最深部が31cmあり、長軸の方向はN-15'-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5～4cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～3cm大の礫を少量含んでいる。

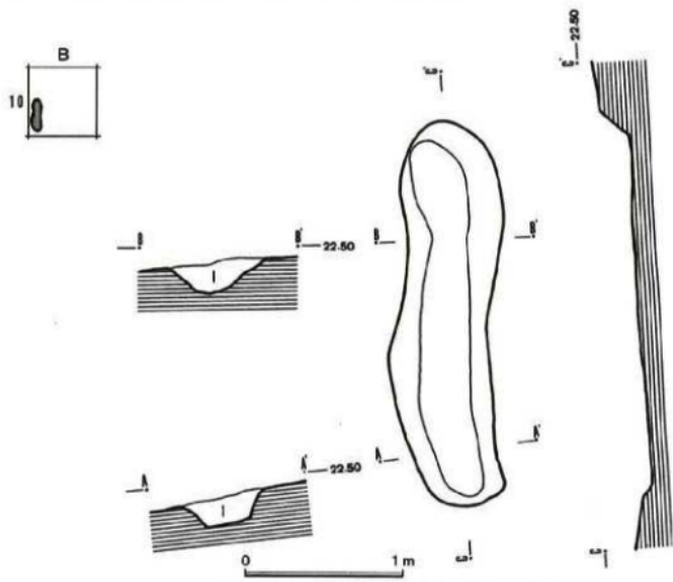
遺物は確認されなかった。

第12号溝

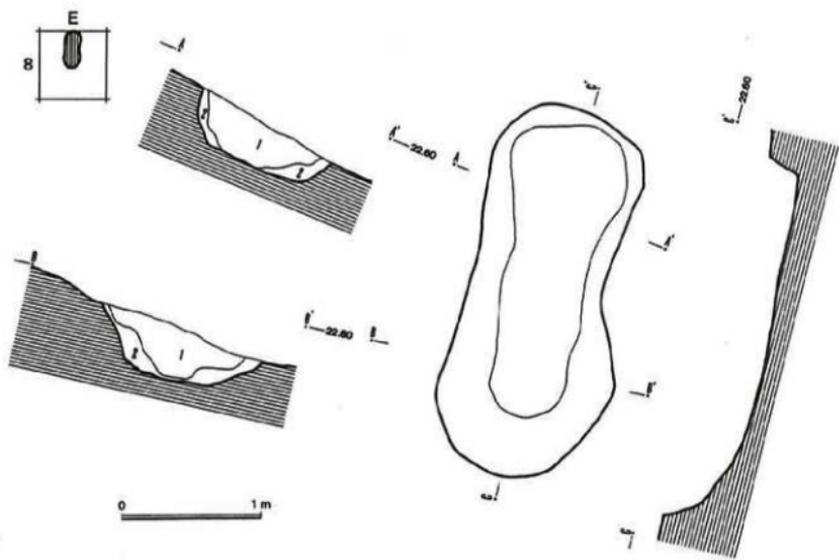
E-11グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は西北側壁面が緩やかに立ち上がるV字形を呈している。長さ189cm、最大幅75cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-32'-Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径2～3cm大の礫を多く含んでいる。第2層は黒色土で、締りも粘性もやや弱く、径4～8cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-24 第13号溝の平面および断面図



図IV-2-25 第14号溝の平面および断面図

第13号溝

B-10グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状から上に開くU字形を呈している。長さ 241cm、最大幅63cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-4'-Wを指している。

覆土は暗褐色土が1層で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.5～10cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第14号溝

E-8グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状から上に広く開くU字形を呈している。長さ 268cm、最大幅 120cm、深さは最深部が40cmあり、長軸の方向はN-2'-Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で、締りも粘性もやや強く、径5～15cm大の礫を多く含んでいる。第2層は明黒褐色土で、締りも粘性も強く、径5～10cm大の礫をやや多く含んでいる。

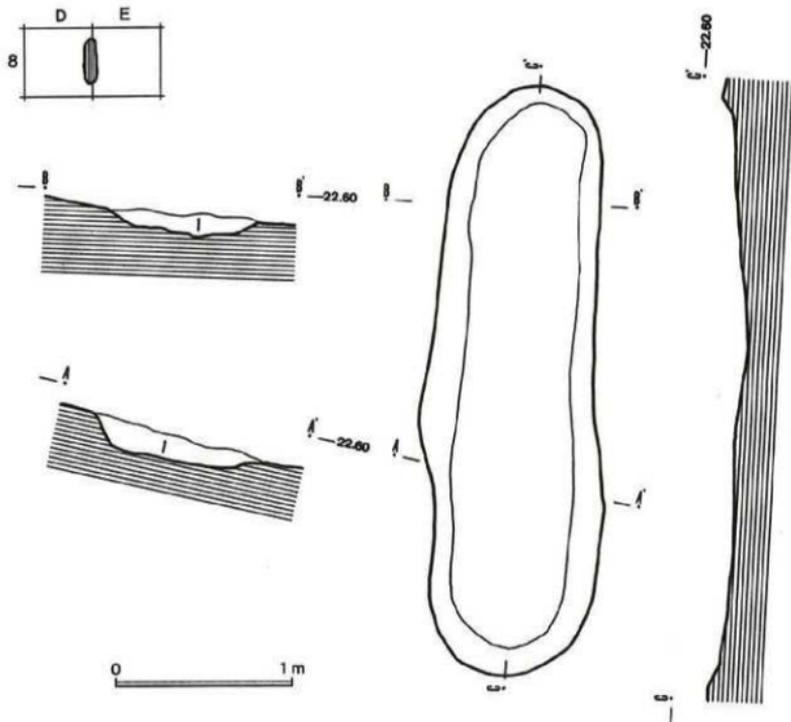
遺物は溝の底面から土器の細片が1点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第15号溝

D～E 8グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いのでかではないが、上に広く開くU字形を呈していると思われる。長さ 334cm、最大幅99cm、深さは最深部が18cmあり、長軸の方向はN-1°-Eを指している。

覆土は黒褐色土が1層で締りは弱く、粘性は強い。径 0.5～12cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-26 第15号溝の平面および断面図

第16号溝

第1号方形周溝墓の西溝にあたる。

第17号溝

第1号方形周溝墓の北溝にあたる。第20・21号溝を切っている。

第18・19号溝

C～D-7グリッド内に位置し、第19号溝の南側を第18号溝が切っている。

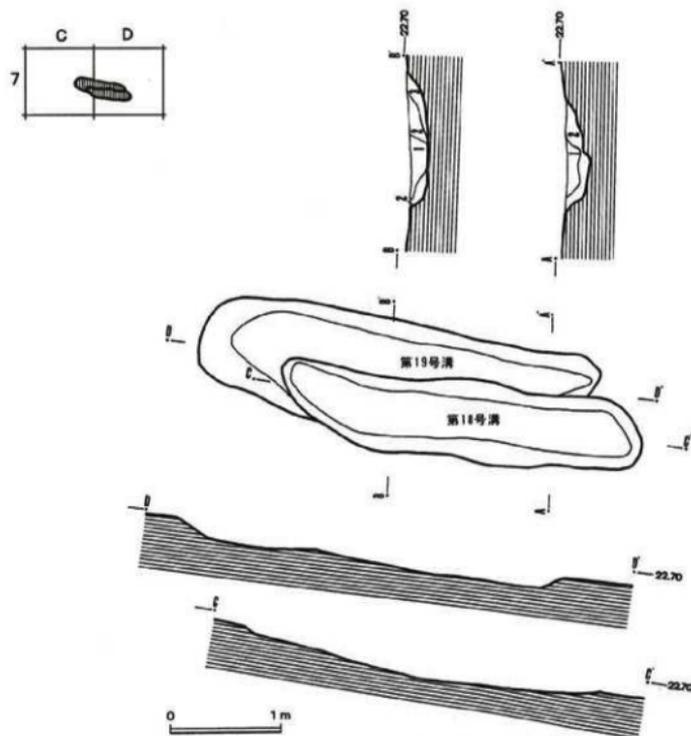
第18号溝の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが、上に広く開くU字形を呈していると思われる。長さ328cm、最大幅76cm、深さは最深部が17cmあり、長軸の方向はN-80°-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5～6cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径2～7cm大の礫をやや多く含んでいる。

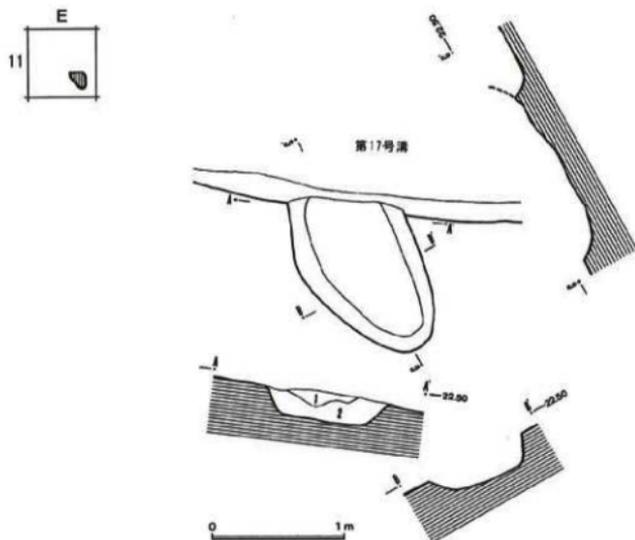
第19号溝の平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが、上に広く開くU字形を呈していると思われる。長さ365cm、最大幅101cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-82°-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は第18号溝の第2層と同じである。第2層は断面B-B'の第3層に相当する暗褐色土で、締りも粘性も強く、径1cm大の礫を少量含んでいる。

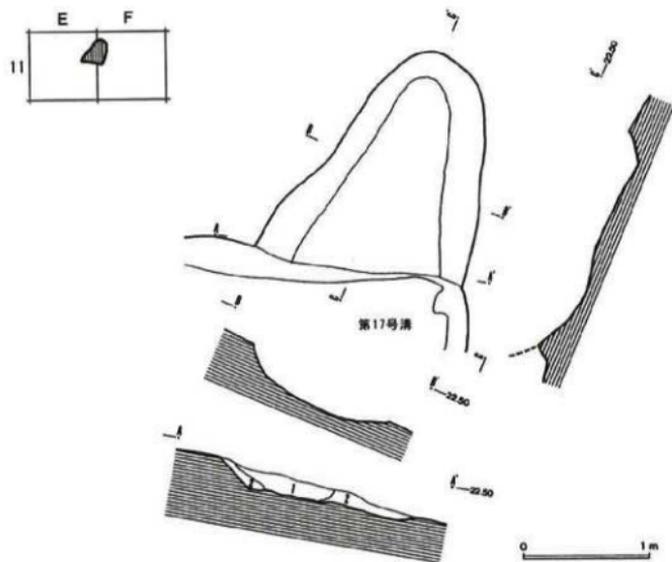
第18号溝・第19号溝とも遺物は確認されなかった。



図IV-2-27 第18・19号溝の平面および断面図



図IV-2-28 第17号溝の平面および断面図



図IV-2-29 第21号溝の平面および断面図

第20号溝

E-11グリッド内に位置し、溝の北側を第1号方形周溝墓の北溝にあたる第17号溝によって切られている。溝の平面形状は不整楕円形で、断面形状は上に広く開くU字形を呈している。長さは推定160cm、最大幅92cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はN-30'-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5~6cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性は強い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の細片が1点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第21号溝

E-11~F-11グリッド内に位置し、溝の南側を第1号方形周溝墓の北溝にあたる第17号溝によって切られている。溝の平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さは推定240cm、最大幅160cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-23'-Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5~6cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性は強い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

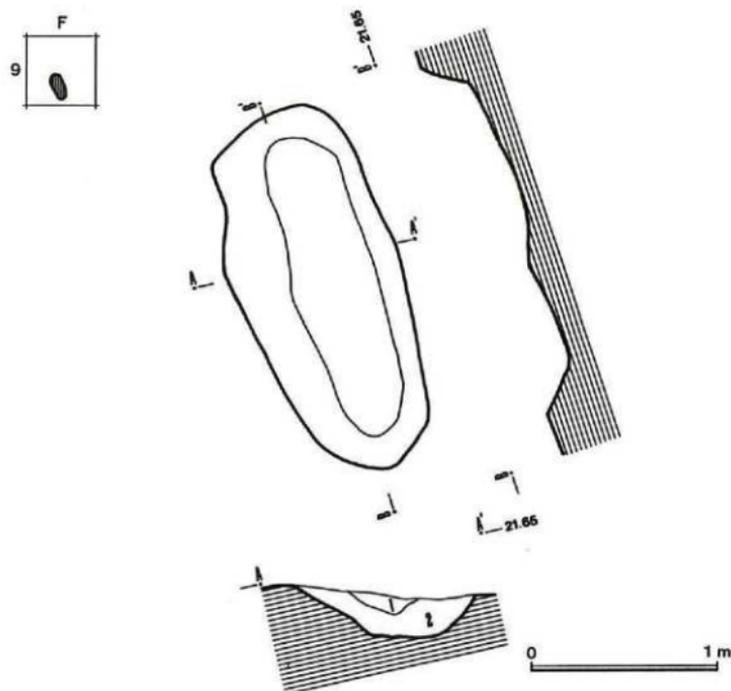
遺物は確認されなかった。

第22号溝

F-9グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ198cm、最大幅90cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-19'-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性もやや弱く、径0.3~6cm大の礫を多く含んでいる。第2層は暗茶褐色土で締りも粘性もやや弱く、径0.3~6cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は第1層から欠損した銭貨「寛永通寶」(遺物No.126)が1点出土しているが、流入したものと思われ、溝の時代を確定するものではない。



図IV-2-30 第22号溝の平面および断面図



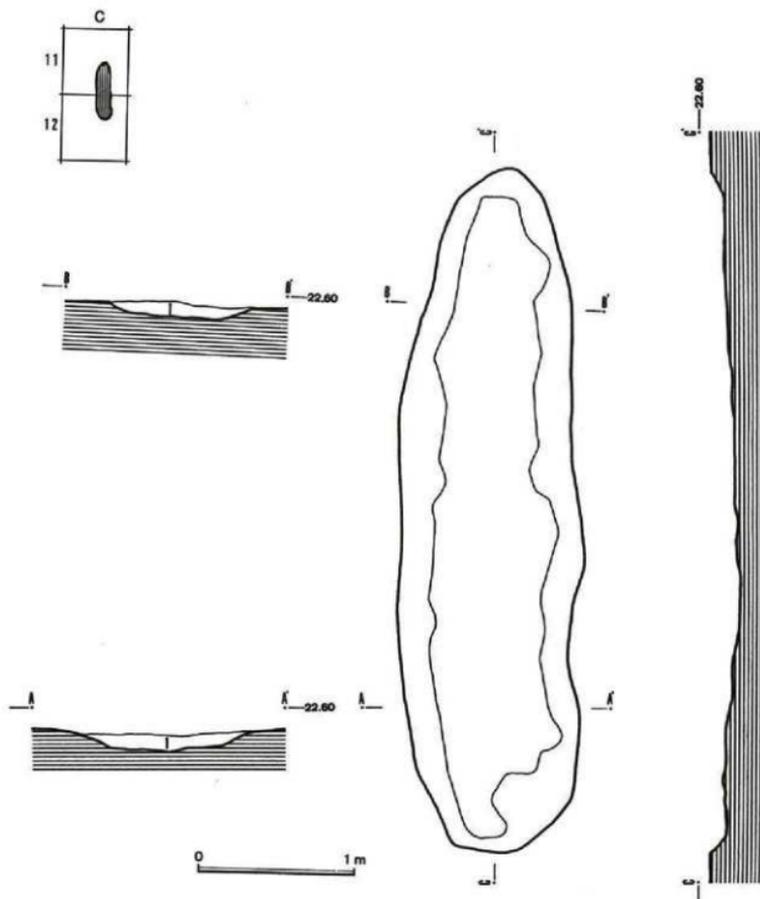
図IV-2-31 第22号溝から出土した銭貨「寛永通寶」(遺物No.126)

第23号溝

C-11~12グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが上に広く開くU字形を呈していると思われる。長さ 439cm、最大幅 118cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-Sを指している。

覆土は黒褐色土が1層で、縮りはやや弱く、粘性は強い。径 0.5~7cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-32 第23号溝の平面および断面図

第24号溝

第2号方形周溝墓の南溝にあたる。

第25号溝

第3号方形周溝墓の南溝にあたる。

第26号溝

第3号方形周溝墓の西溝にあたる。

第27号溝

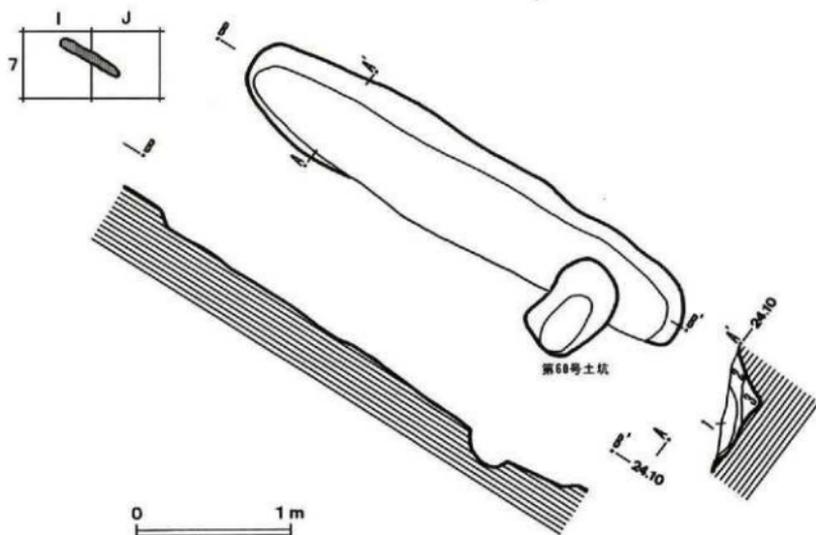
第2号方形周溝墓の東溝にあたる。

第28号溝

I-7~J-7グリッド内に位置し、傾斜面に沿っているため、南西側が削平されており、さらに南東部を第60号土坑によって切られている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は南西側が削平されているため定かではないが、上に開くU字形を呈していると思われる。長さ497cm、最大幅96cm、深さは最深部が38cmあり、長軸の方向はN-59°-Wを指している。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5~7cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5~4cm大の礫をやや多く含み、黄褐色土のブロックを含んでいる。第3層は黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



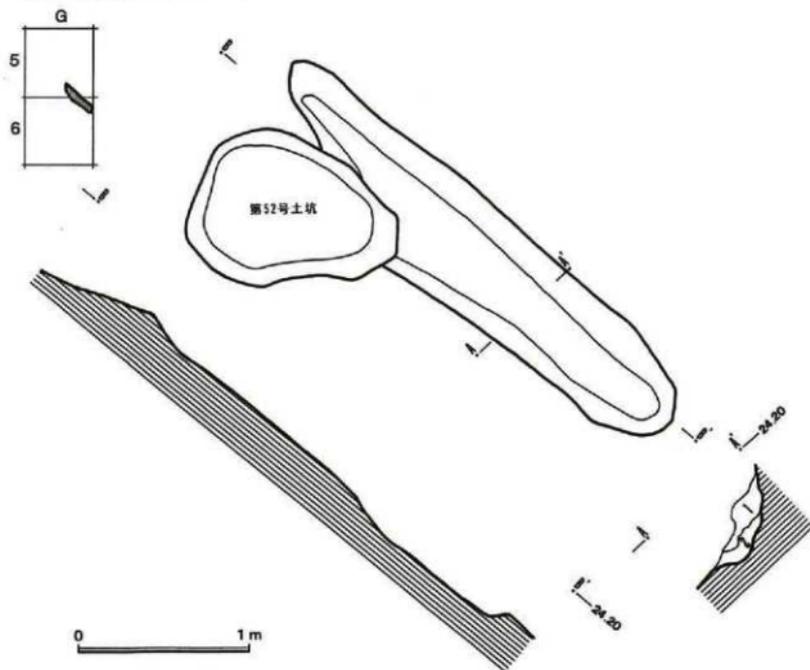
図IV-2-33 第28号溝の平面および断面図

第29号溝

G-5~6グリッド内に位置し、北西部を第52号土坑により切られている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ295cm、最大幅60cm、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-47°-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗黄褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径0.3~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黄褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.5~4cm大の礫をやや多く含んでいる。

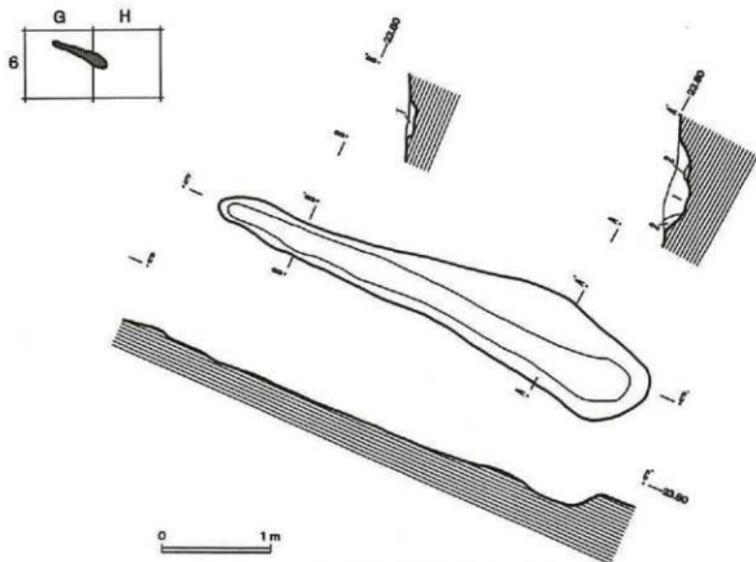
遺物は確認されなかった。



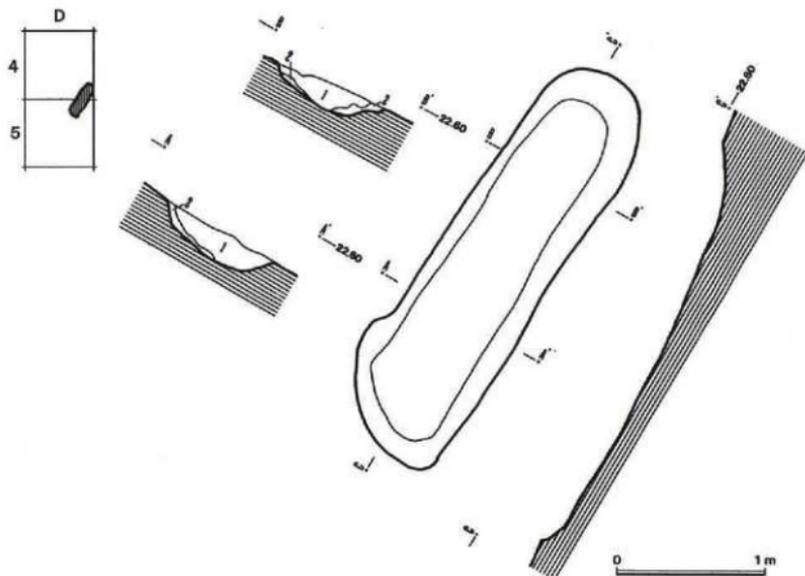
図IV-2-34 第29号溝の平面および断面図

第30号溝

第3号方形周溝墓の東溝にあたる。



図IV-2-35 第31号溝の平面および断面図



図IV-2-36 第32号溝の平面および断面図

第31号溝

G-6~H-6グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ430cm、最大幅82cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-68°-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りも粘性もやや弱く、径0.5~10cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5~3cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は覆土の第1層から土器の細片が1点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第32号溝

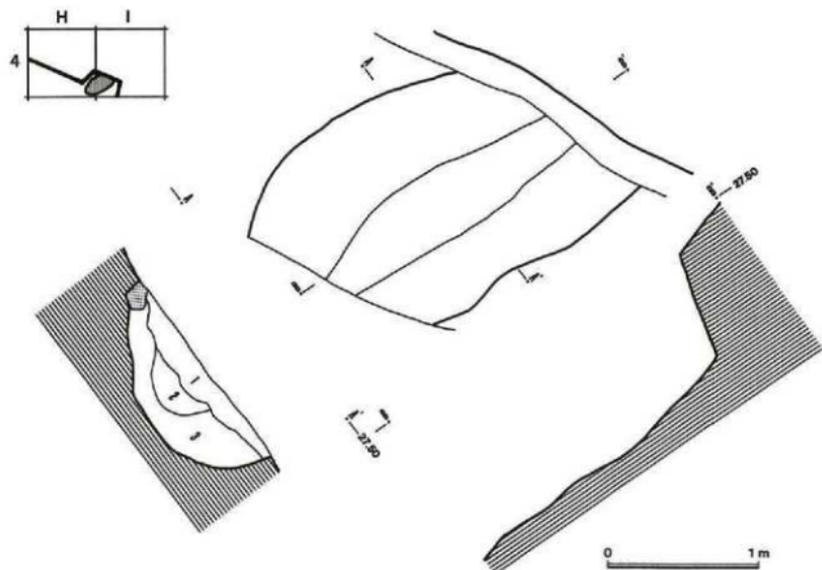
D-4~5グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ295cm、最大幅87cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-30°-Eを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径1~4cm大の礫を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

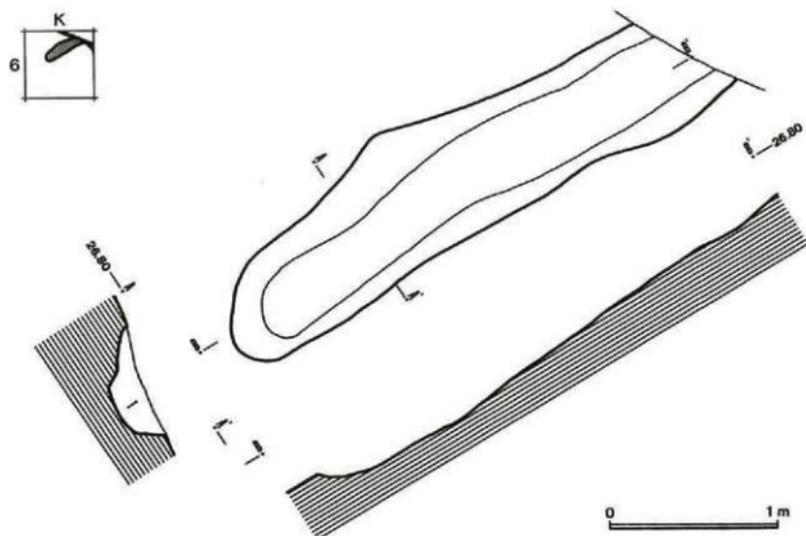
遺物は確認されなかった。

第33号溝

第2号方形周溝墓の西溝にあたる。



図IV-2-37 第34号溝の平面および断面図



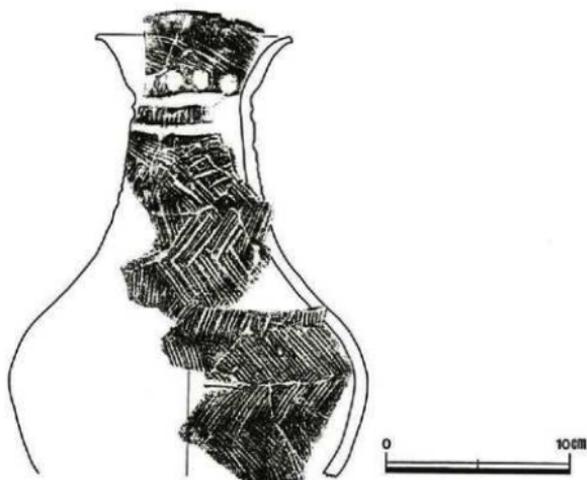
図IV-2-38 第35号溝の平面および断面図

第34号溝

H-4～I-4グリッド内に位置し、北東側は調査区外に延長し、南西側は傾斜面に沿って削平されているため平面形状は不明であるが、確認されている部分の長さは184cmあり、長軸の方向はN-55'-Eを指している。溝の断面形状は丸底状を呈し、最大幅155cm、深さは最深部が50cmある。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.5～6cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5～4cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5～7cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は第2層から弥生土器(遺物No.422)が出土している。



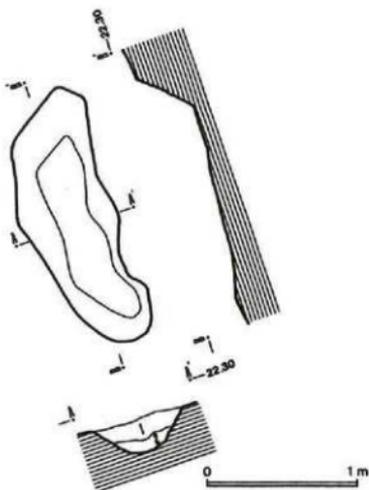
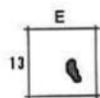
図IV-2-39 第34号溝から出土した弥生土器(遺物No.422)

第35号溝

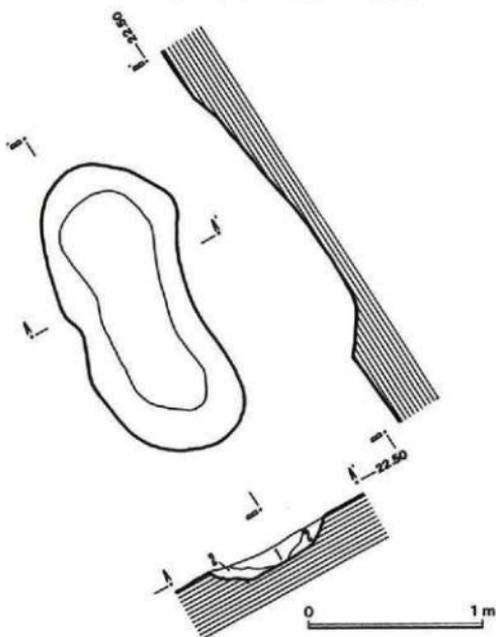
K-6グリッド内に位置し、北東側は調査区外に延びている。平面形状は隅丸長方形を呈していると思われ、確認されている部分の長さは316cmあり、長軸の方向はN-60'-Eを指している。断面形状は丸底状を呈し、最大幅80cm、深さは最深部が20cmある。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性もやや弱く、径0.3～5cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-40 第36号溝の平面および断面図



図IV-2-41 第37号溝の平面および断面図

第36号溝

E-13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ167cm、最大幅62cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はN-17'-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~7cm大の礫を多く含んでいる。第2層も第1層と同様に黒褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い、径0.5~7cm大の礫を少量と暗黄褐色のブロックをやや多く含んでいる。

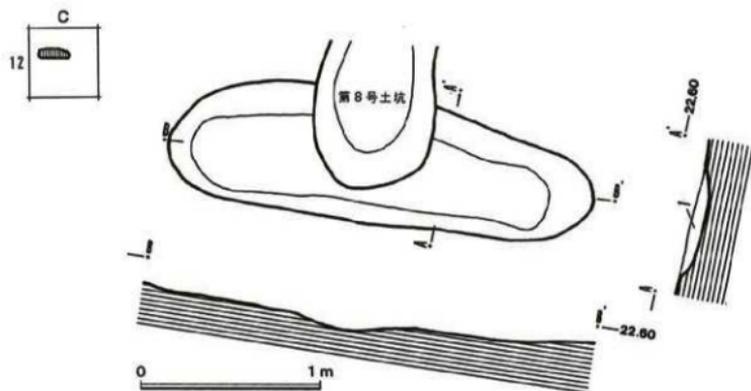
遺物は確認されなかった。

第37号溝

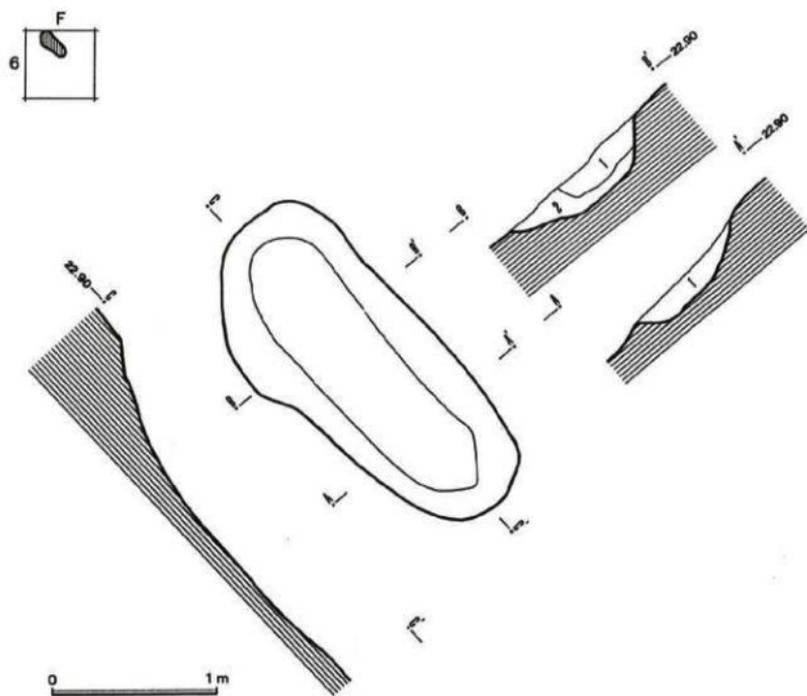
C-13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、断面形状は浅いため定かではないがU字形を呈していると思われる。長さ175cm、最大幅81cm、深さは最深部が18cmあり、長軸の方向はN-28'-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径1~4cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~7cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-42 第38号溝の平面および断面図



図IV-2-43 第39号溝の平面および断面図

第38号溝

C-12グリッド内に位置し、中央部北側を第8号土坑により切られている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ234cm、最大幅70cm、深さは最深部が11cmあり、長軸の方向はN-84'-Wを指している。

覆土は黒褐色土が1層で、締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

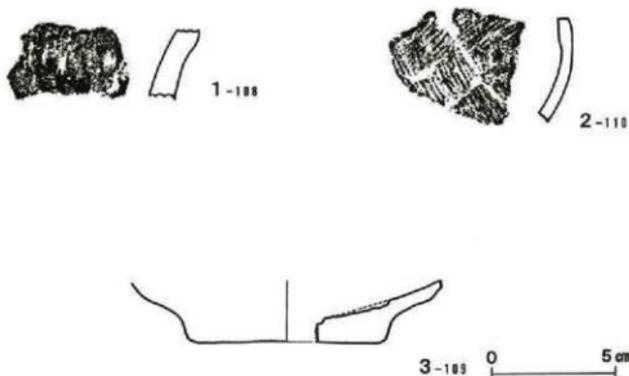
遺物は確認されなかった。

第39号溝

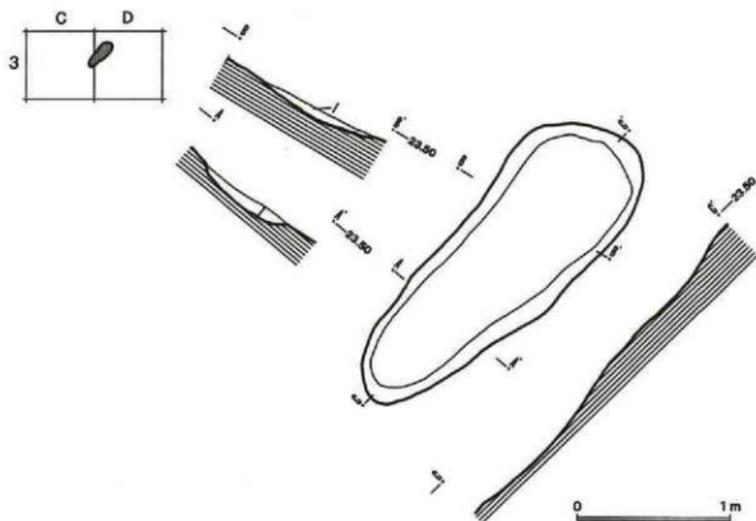
F-6グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は丸底状を呈している。長さ227cm、最大幅102cm、深さは最深部が24cmあり、長軸の方向はN-44'-Wを指している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5~8cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

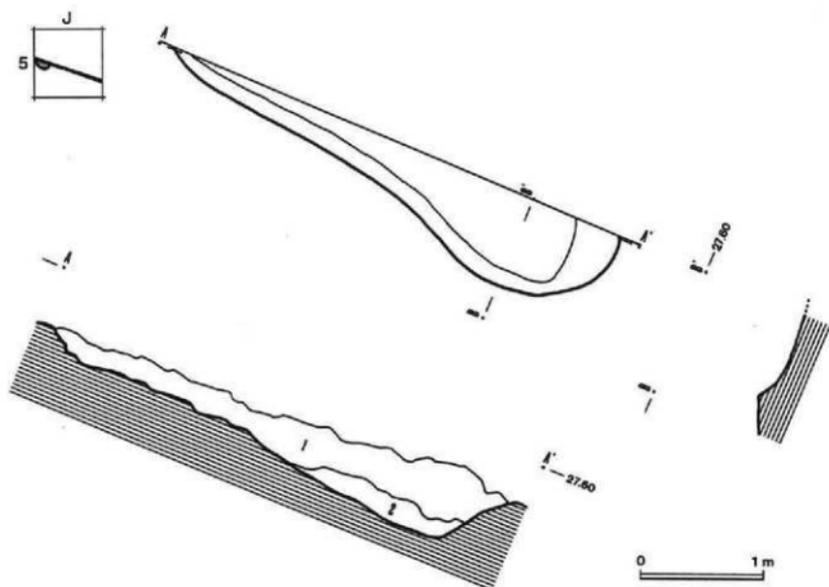
遺物は土師器の破片が第1層から3点出土している。そのうちの2点は胴部の破片(遺物No.108、遺物No.110)で、1点は底部の破片(遺物No.109)である。



図IV-2-44 第39号溝から出土した土師器片



図IV-2-45 第40号溝の平面および断面図



図IV-2-46 第41号溝の平面および断面図

第40号溝

C-3~D-3グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、断面形状は浅いので定かではないが丸底状を呈していると思われる。長さ 235cm、最大幅87cm、深さは最深部が8cmあり、長軸の方向はN-43'-Eを指している。

覆土は黒色土が1層で締りはやや強く、粘性は弱い。径 0.5~3cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

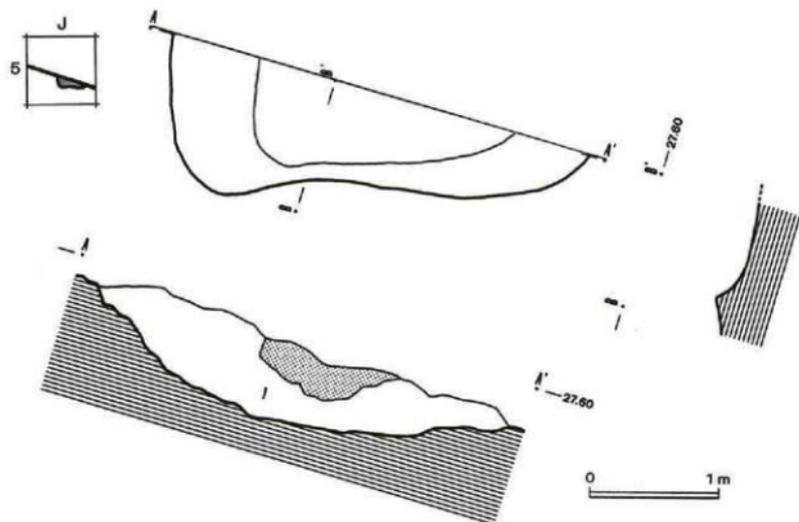
遺物は確認されなかった。

第41号溝

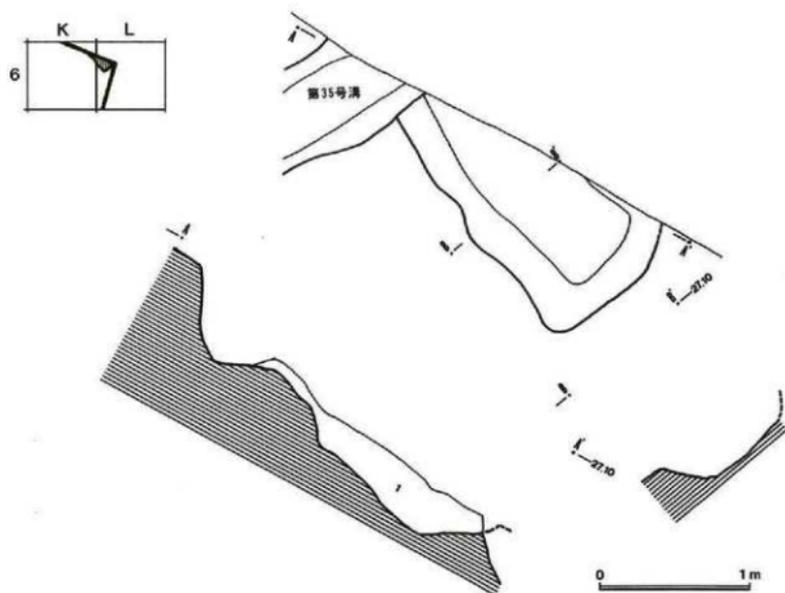
J-5グリッド内に位置し、北側は調査区外に延びているため平面形状など規模は不明であるが、確認されている深さは最深部が47cmある。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りも粘性もやや弱く、径 0.3~6cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層も黒褐色土であるが締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.3~4cm大の礫を含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-47 第42号溝の平面および断面図



図IV-2-48 第43号溝の平面および断面図

第42号溝

J-5グリッド内に位置し、北側は調査区外に延びているため平面形状など規模は不明であるが、確認されている深さは最深部が46cmある。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性もやや弱く、径0.3～6cm大の礫をやや多く含んでいる。

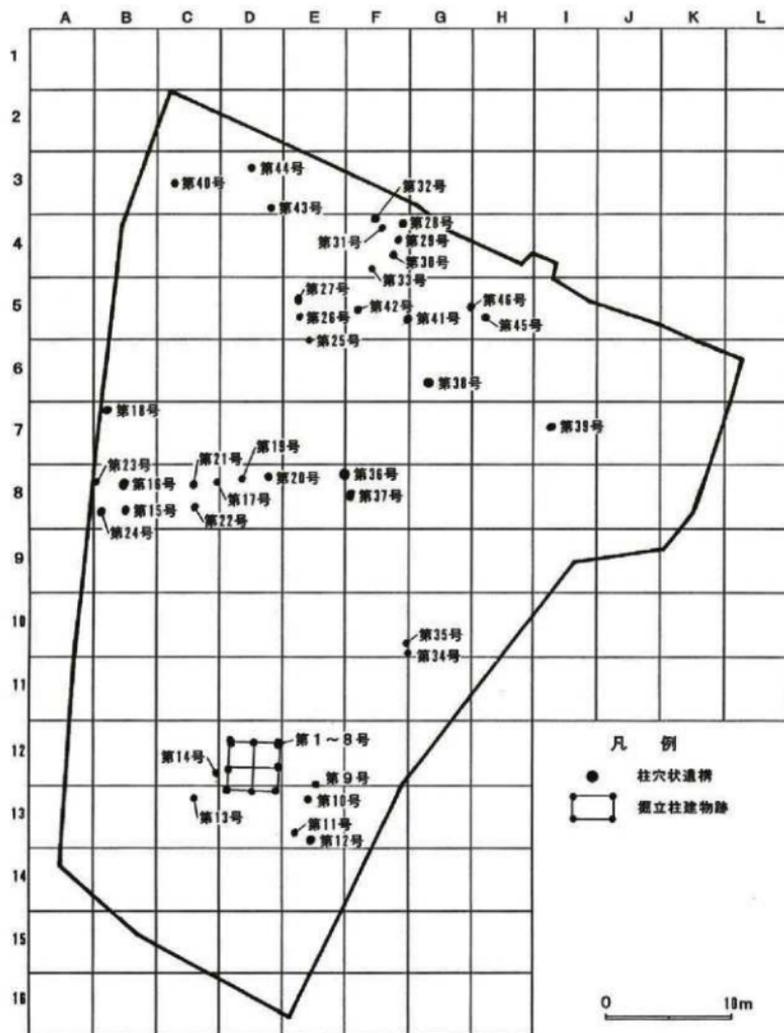
遺物は確認されなかった。

第43号溝

K-5～L-5グリッド内に位置し、西側は第35号溝に切れ、北側は調査区外に延びているため平面形状など規模は不明であるが、確認されている深さは最深部が31cmある。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性もやや弱く、径0.5～4cm大の礫を多く含んでいるが、径2cm大の礫が大半を占めている。

遺物は確認されなかった。

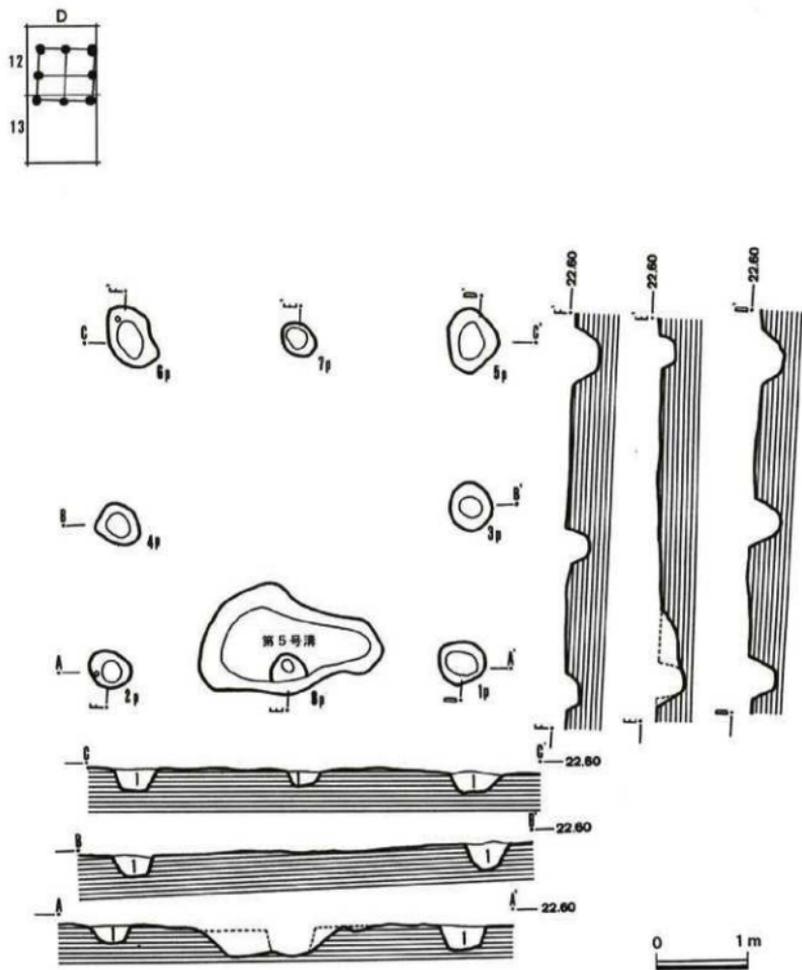


図IV-3-1 柱穴状遺構の分布図

第3節 穴状遺構

1. 柱穴状遺構と遺物

柱穴状遺構は調査区の南側平坦部と中央西側平坦部、北側斜面の中央部に分布しており、確認された46基の平均的な大きさは長径が50cm、短径は41cm、深さは21cmである。そのうち第1～8号柱穴が独立柱建物跡を形成している。その他、直線的にならんで確認されたビット列が11例ある。しかし、ほとんどの柱穴状遺構からは遺物が出土しておらず、時代や性格を確定することはできない。



図IV-3-2 第1~8号柱穴(掘立柱建物跡)の平面および断面図

第1～8号柱穴(掘立柱建物跡)

調査区の南側平坦部でD-12～13グリッド内に位置し、第1号ピットから第8号ピットの配置などによって2間×2間の建物跡が想定された。建物跡は南北360～370cm、東西380～390cmの方形のプランをなし、方位は東辺のピット列でN-2°-Eを指している。各ピットの状況から第1～6号ピットの6本が主柱と推定され、第7・8号ピットの2本が棟持柱と推定される。

第1号ピットの平面形状は不整形で、長径54cm、短径48cm、深さは最深部が26cmあり、断面形状は上にやや開くU字形を呈している。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強く、径1～2cm大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第2号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径48cm、短径40cm、深さは最深部が19cmあり、断面形状は上に広く開くU字形を呈している。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強く、径1～7cm大の礫を少量含んでいる。遺物は覆土から土器の細片が1点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

第3号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径55cm、短径46cm、深さは最深部が33cmあり、断面形状は丸底状を呈している。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第4号ピットの平面形状は不整形で、長径52cm、短径43cm、深さは最深部が26cmあり、断面形状は第2号ピットと同様に上に広く開くU字形を呈している。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強く、径1～2cm大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第5号ピットの平面形状は不整形で、長径73cm、短径54cm、深さは最深部が24cmあり、断面形状は第2号ピットと同様に上に広く開くU字形を呈している。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第6号ピットの平面形状は不整形で、長径74cm、短径48cm、深さは最深部が24cmあり、断面形状は第1号ピットと同様に上にやや開くU字形を呈している。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強い。遺物は覆土から土器の細片が1点出土したが、時代を確定できるものではない。

第7号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径41cm、短径33cm、深さは最深部が18cmあり、断面形状は第3号ピットと同様に丸底状を呈している。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第8号ピットは第5号溝によって切られており、その規模は定かではないが、平面形状はほぼ円形を呈し、長径は推定38cm、短径は推定36cm、深さは現状の最深部が6cmある。断面形状は定かではないが第3号ピットと同様に丸底状を呈するものと思われる。覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや強い。遺物は確認されなかった。

第9・10号柱穴遺構

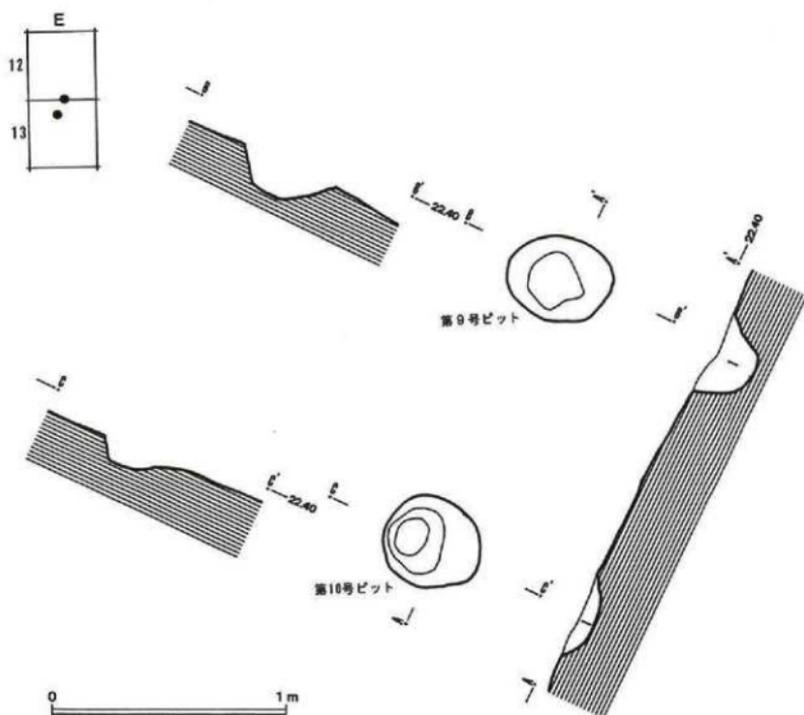
E-12~13グリッド内に位置し、ピット間の距離は125cmを計り、方位はN-29°-Eを指している。

第9号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径45cm、短径37cm、深さは最深部が17cmある。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は黒色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~8cm大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第10号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径43cm、短径39cm、深さは最深部が9cmある。断面形状は浅いため定かではないが上に広く開くU字形を呈していると思われる。

覆土は黒色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~8cm大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。



図IV-3-3 第9・10号柱穴遺構の平面および断面図

第11・12号柱穴状遺構

E-13グリッド内に位置し、ピット間の距離は156cmを計り、方位はN-67°-Wを指している。

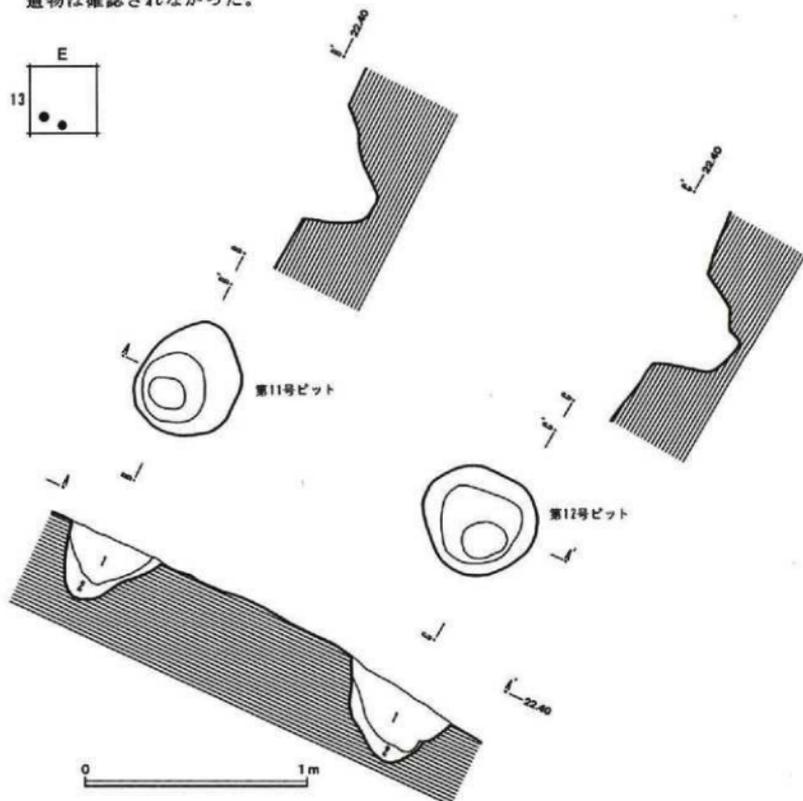
第11号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径54cm、短径45cm、深さは最深部が31cmある。断面形状は丸底のV字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5~3cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径0.5~2cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は覆土の上位から土器の細片が1点出土したが、時代を確定できるものではない。

第12号ピットの平面形状はほぼ円形を呈し、長径54cm、短径48cm、深さは最深部が33cmある。断面形状も覆土も第11号ピットと同様である。

遺物は確認されなかった。

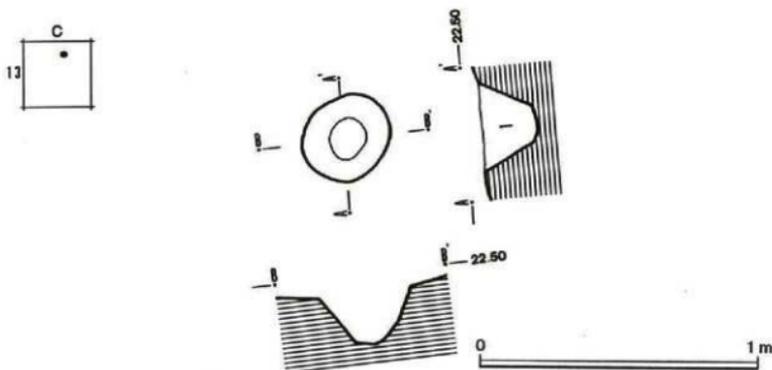


図IV-3-4 第11・12号柱穴状遺構の平面および断面図

第13号柱穴状遺構

C-13グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形を呈しており、長径33cm、短径30cm、深さは最深部が20cmある。断面形状は丸底のV字形を呈している。

覆土は明褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径3~4cm大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

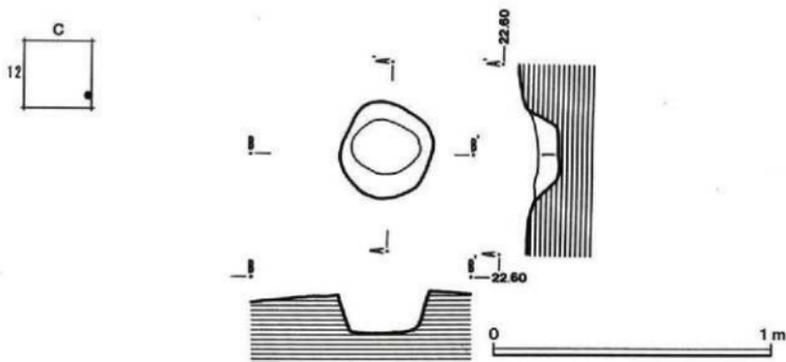


図IV-3-5 第13号柱穴状遺構の平面および断面図

第14号柱穴状遺構

C-12グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形を呈しており、長径35cm、短径33cm、深さは最深部が15cmある。断面形状はU字形を呈している。

覆土は黒褐色土が1層で締りも粘性もやや強く、径0.5~2cm大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。



図IV-3-6 第14号柱穴状遺構の平面および断面図

第15・16号柱穴状遺構

B-8グリッド内に位置し、ピット間の距離は200cmを計り、方位はN-2°-Wを指している。

第15号ピットの平面形状は楕円形を呈しており、長径60cm、短径42cm、深さは最深部が21cmある。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

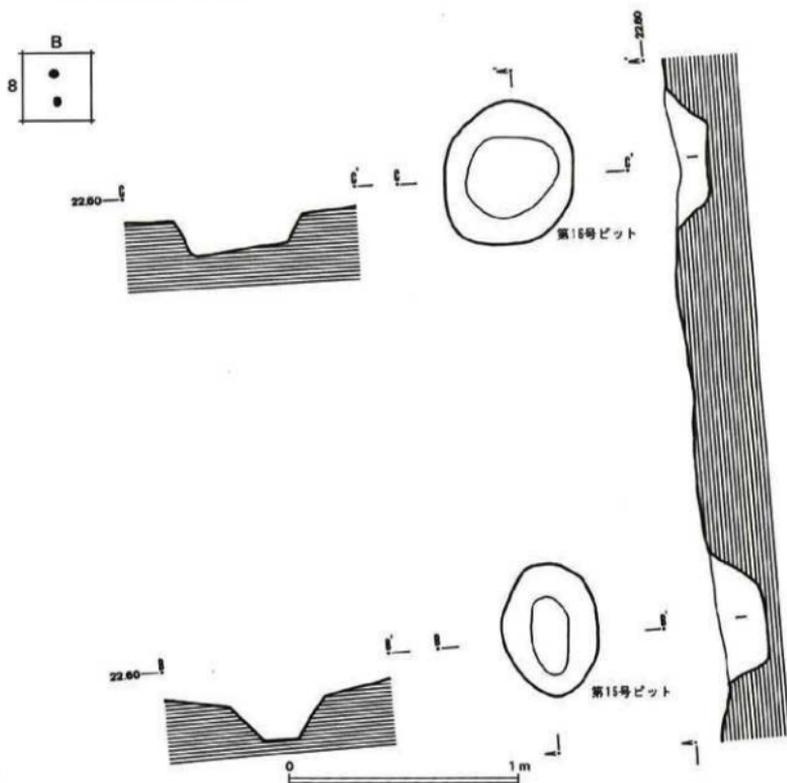
覆土は暗褐色土が1層で締りはやや強く、粘性は弱い。径2~4cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第16号ピットの平面形状はほぼ円形を呈しており、長径65cm、短径58cm、深さは最深部が16cmある。断面形状は第15号ピットと同様に、上に広く開くU字形を呈している。

覆土も第15号ピットと同様である。

遺物は確認されなかった。

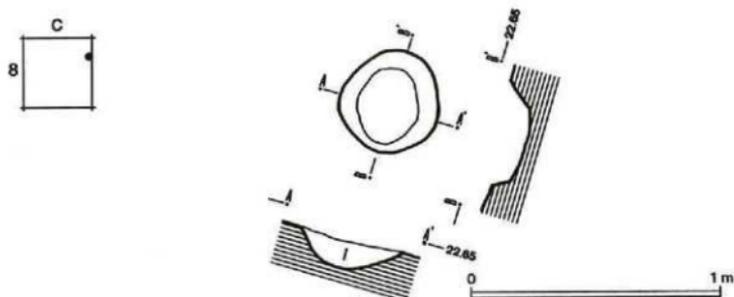


図IV-3-7 第15・16号柱穴状遺構の平面および断面図

第17号柱穴状遺構

C-8グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形を呈しており、長径43cm、短径40cm、深さは最深部が11cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が1層で締りはやや強く、粘性は弱い。径2~3cm大の礫を少量含んでいる。 遺物は確認されなかった。

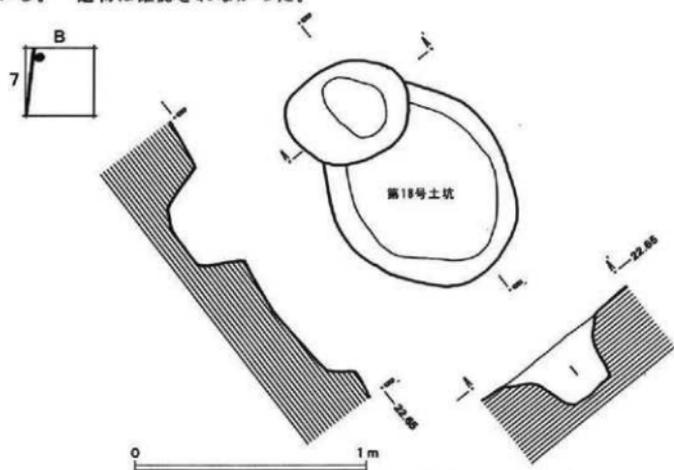


図IV-3-8 第17号柱穴状遺構の平面および断面図

第18号柱穴状遺構

B-7グリッド内に位置し、第18号土坑を切っている。平面形状はほぼ円形を呈しており、長径54cm、短径44cm、深さは最深部が22cmある。断面形状はU字形を呈し、上部が漏斗状に開いている。

覆土は暗褐色土が1層で締りはやや弱く、粘性は強い。径2~4cm大の礫を多く含んでいる。 遺物は確認されなかった。



図IV-3-9 第18号柱穴状遺構の平面および断面

第19・20号柱穴状遺構

D-8グリッド内に位置し、ピット間の距離は210cmを計り、方位はN-86°-Eを指している。

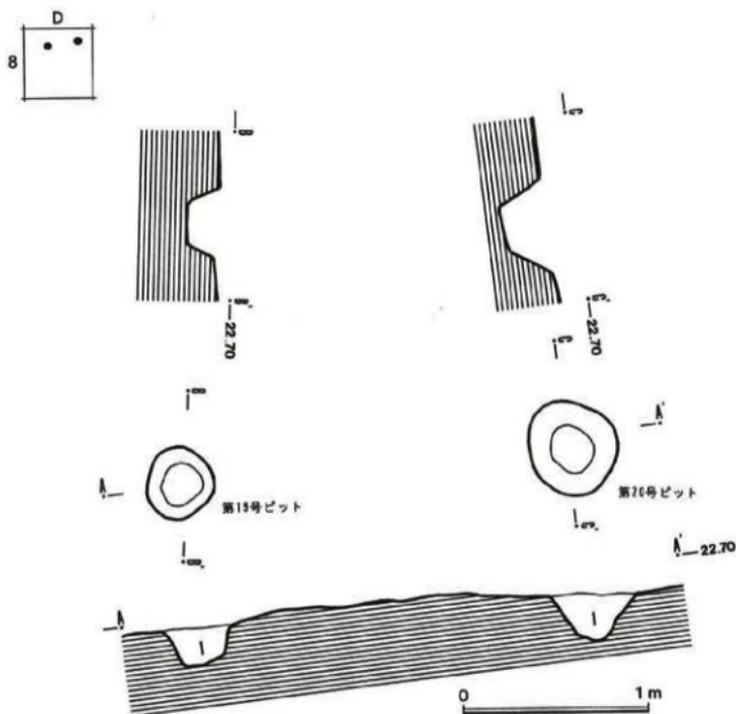
第19号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径39cm、短径35cm、深さは最深部が20cmある。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は黒褐色土が1層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径2~4cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第20号ピットの平面形状もほぼ円形で、長径52cm、短径48cm、深さは最深部が26cmある。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は第19号ピットと同様で、底面に近い覆土中から土器の細片が出土しているが、時代を確定できるものではない。



図IV-3-10 第19・20号柱穴状遺構の平面および断面図

第21・22号柱穴遺構

C-8グリッド内に位置し、ピット間の距離は188cmを計り、方位はN-1°-Eとほぼ南北を指している。なお、第22号ピットは第6号土坑を切っている。

第21号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径43cm、短径40cm、深さは最深部が25cmある。断面形状はやや丸底の上に開くU字形を呈している。

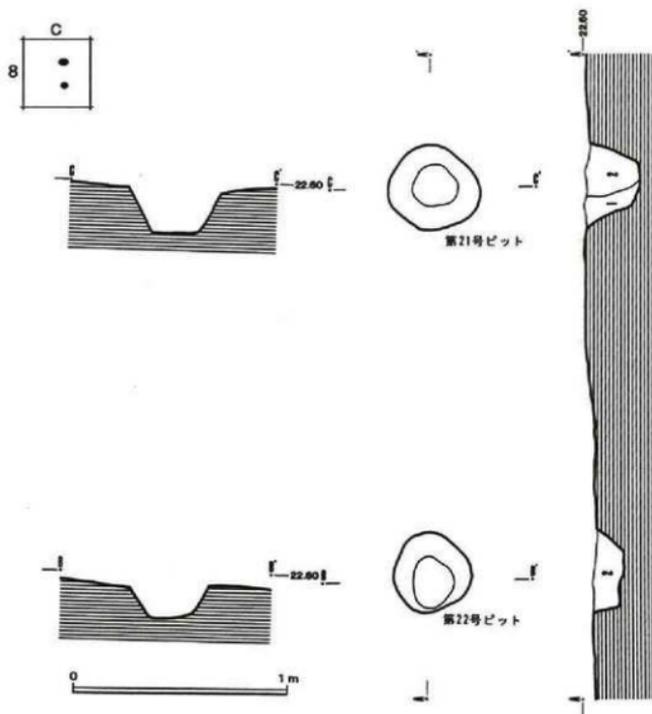
覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りも粘性も強く、径0.5~7cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第22号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径38cm、短径37cm、深さは最深部が14cmある。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

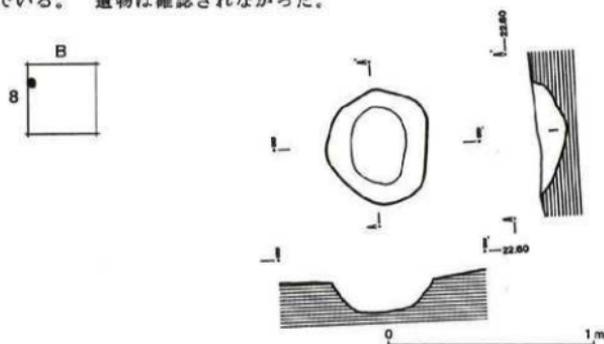


図IV-3-11 第21・22号柱穴遺構の平面および断面図

第23号柱穴状遺構

B-8グリッド内に位置し、平面形状は不整形形で、長径57cm、短径49cm、深さは最深部が15cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.5~3cm大の礫を多く含んでいる。遺物は確認されなかった。

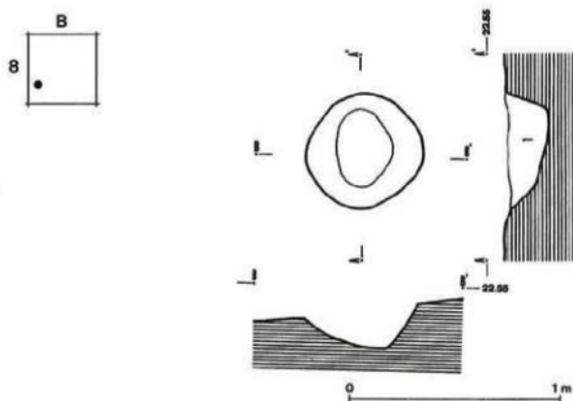


図IV-3-12 第23号柱穴状遺構の平面および断面図

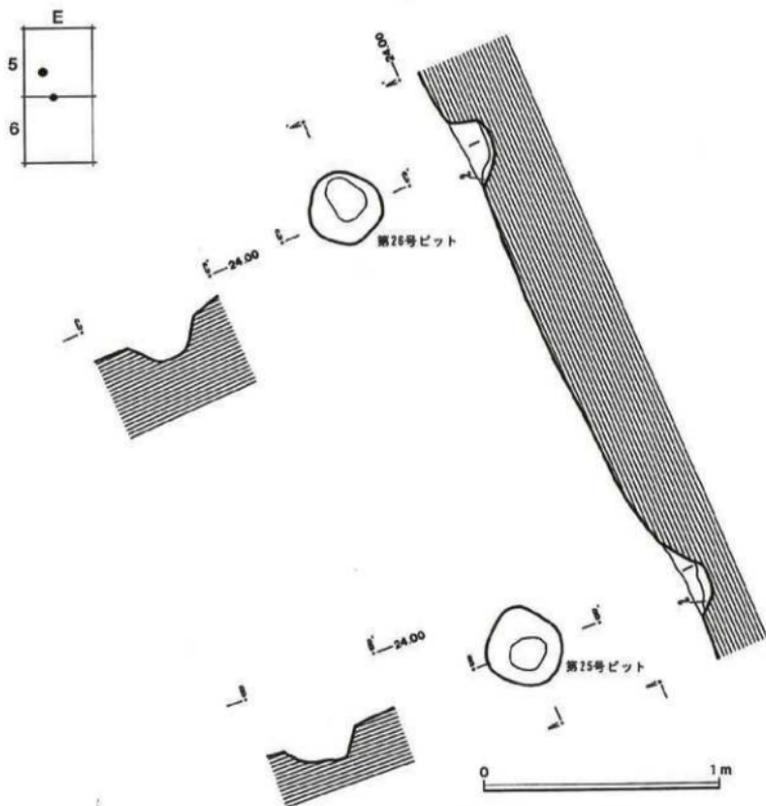
第24号柱穴状遺構

B-8グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径56cm、短径54cm、深さは最深部が19cmある。断面形状は上に開くU字形を呈しているが南西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

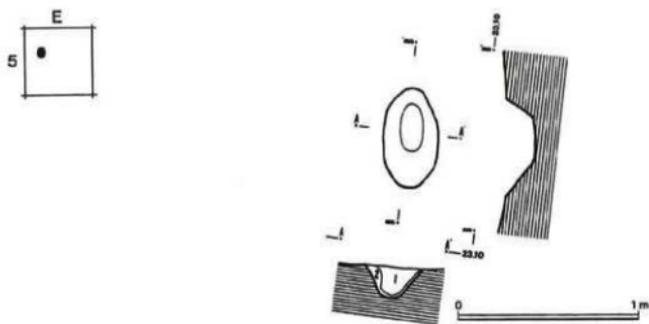
覆土は黒褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~7cm大の礫をやや多く含んでいる。遺物は確認されなかった。



図IV-3-13 第24号柱穴状遺構の平面および断面図



図IV-3-14 第25・26号柱穴状遺構の平面および断面図



図IV-3-15 第27号柱穴状遺構の平面および断面図

第25・26号柱穴状遺構

E-5～6グリッド内に位置し、ピット間の距離は208cmを計り、方位はN-23°-Wを指している。

第25号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径35cm、短径33cm、深さは最深部が12cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第26号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径32cm、短径31cm、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は第25号ピットの覆土と同様である。

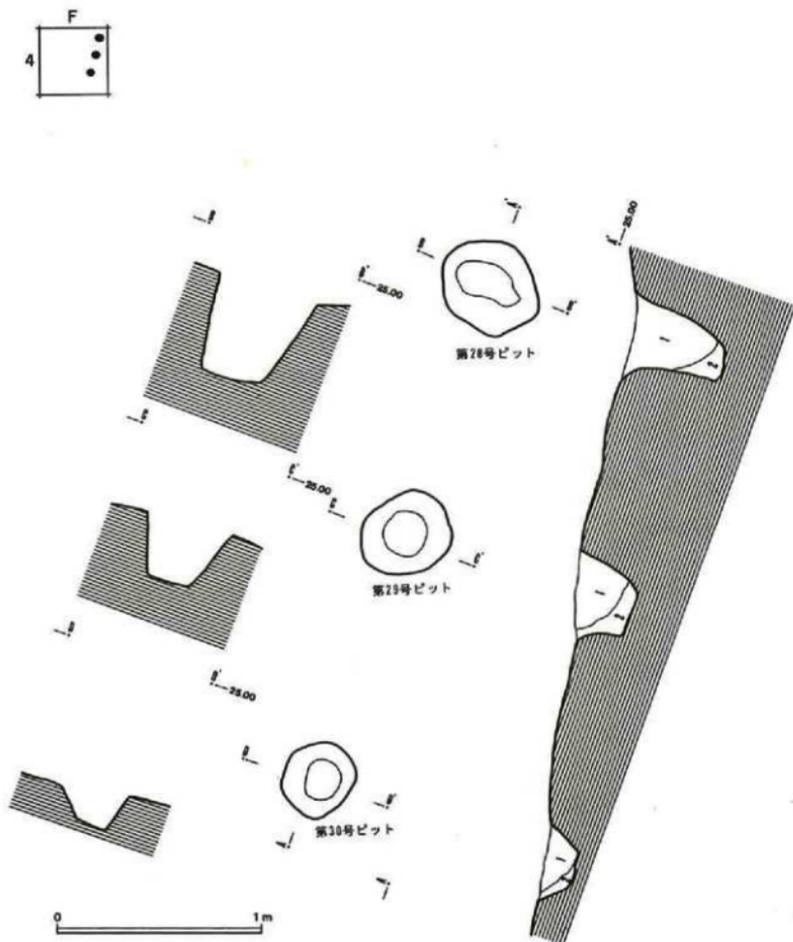
遺物は確認されなかった。

第27号柱穴状遺構

E-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径55cm、短径30cm、深さは最深部が17cmある。断面形状は丸底状のV字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径0.5～2cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～1cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-16 第28・29・30号柱穴状遺構の平面および断面図

第28・29・30号柱穴状遺構

F-4グリッド内に位置し、各ピット間の距離は130cmを計り、方位はN-17°-Eを指している。ピットの配列が斜面に従ってあるため深さが異なるが、ピットの底の標高に極端な差はない。

第28号ピットの平面形状は不整形円で、長径52cm、短径43cm、深さは最深部が47cmある。断面形状はU字形を呈している。

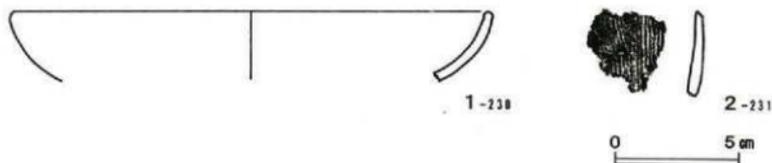
覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.5~2cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は覆土の第1層上位から土器の細片が2点出土したが、時代を確定できるものではない。

第29号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径46cm、短径38cm、深さは最深部が31cmある。断面形状はU字形を呈している。

覆土は第28号ピットと同様に2層からなっている。

遺物は覆土の第1層上位から土師器の口縁部の破片1(遺物No.230)と胴部の破片2(遺物No.231)が出土している。

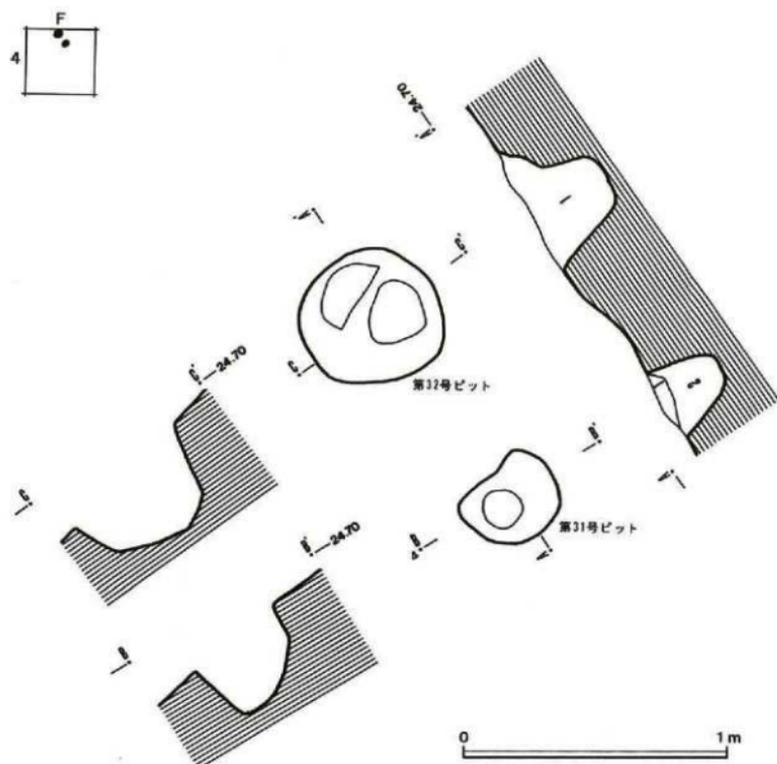


図IV-3-17 第29号柱穴状遺構からの出土した土師器片

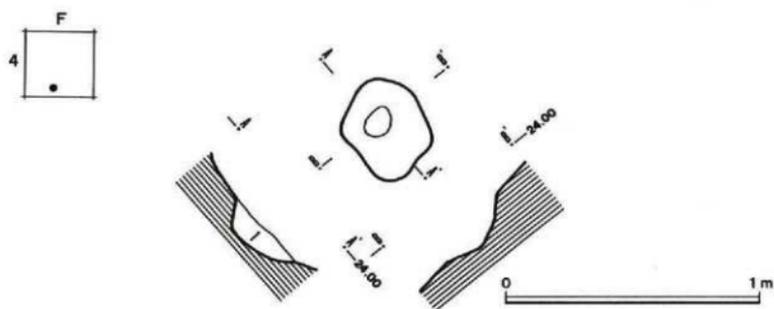
第30号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径38cm、短径35cm、深さは最深部が19cmある。断面形状はU字形を呈している。

覆土は第28号ピットと同様に2層からなっている。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-18 第31・32号柱穴状遺構の平面および断面図



図IV-3-19 第33号柱穴状遺構の平面および断面図

第31・32号柱穴状遺構

F-4グリッド内に位置し、ピット間の距離は90cmを計り、方位はN-29°-Wを指している。

第31号ピットの平面形状は不整形で、長径39cm、短径35cm、深さは最深部が28cmある。断面形状は上に開くU字形を呈している。

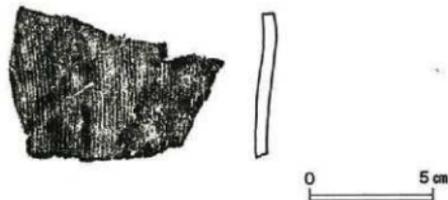
覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性やや弱い。径0.5~7cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径0.5~4cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第32号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径56cm、短径53cm、深さは最深部が32cmある。断面形状は上に開くU字形を呈し、北西側に小段がある。

覆土は暗褐色土が1層で、締りも粘性もやや強く、径0.5~7cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は覆土上位から土師器の破片(遺物No288)など5点が出土している。



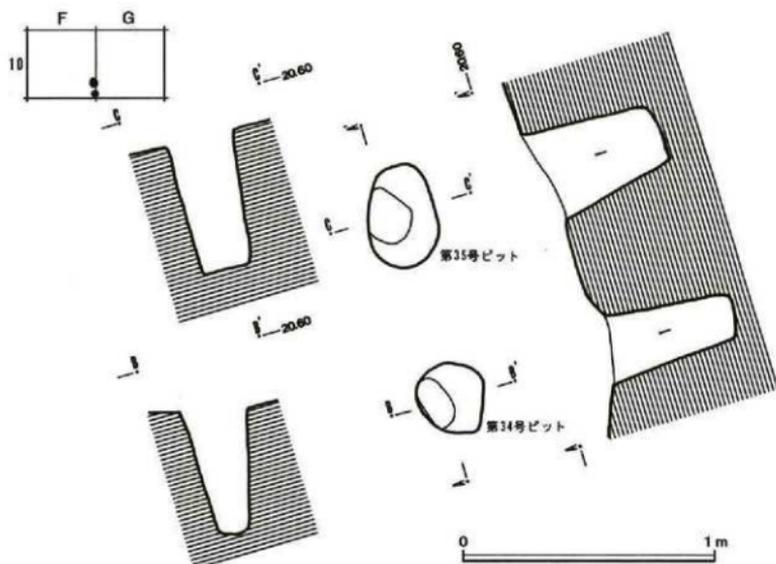
図IV-3-20 第32号柱穴状遺構から出土した土師器片(遺物No288)

第33号柱穴状遺構

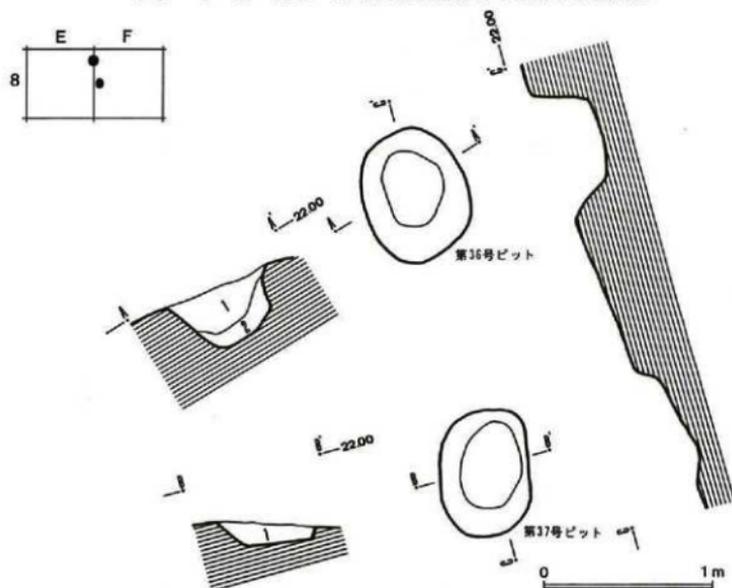
F-4グリッド内に位置し、平面形状は不整形で、長径41cm、短径34cm、深さは最深部が10cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性はやや強い。径1~3cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-21 第34・35号柱穴遺構の平面および断面図



図IV-3-22 第36・37号柱穴遺構の平面および断面図

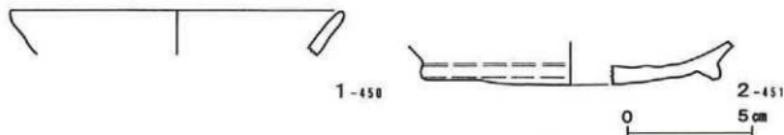
第34・35号柱穴状遺構

F-10～G-10グリッド内に位置し、ピット間の距離は76cmを計り、方位はN-14°-Eを指している。これらのピットは第66号土坑を切っている。

第34号ピットの平面形状は不整形円形で、長径31cm、短径28cm、深さは最深部が51cmと深い。断面形状はU字形を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5～3cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は覆土上位から土器片が5点出土しているが、そのうちの2点は陶質土器の口縁部(遺物No.450)と底部(遺物No.451)の破片である。



図IV-3-23 第34号柱穴状遺構から出土した陶質土器(遺物No.450、No.451)

第35号ピットの平面形状は不整形楕円形で、長径41cm、短径28cm、深さは最深部が53cmと深い。断面形状はU字形を呈している。

覆土は第34号ピットと同じ暗褐色土が1層である。

遺物は覆土上位から土器の細片が2点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

第36・37号柱穴状遺構

E-8～F-8グリッド内に位置し、ピット間の距離は170cmを計り、方位はN-16°-Wを指している。

第36号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径80cm、短径63cmで、深さは最深部が35cmある。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径2～7cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は明黒褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径5～10cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第37号ピットの平面形状は楕円形で、長径76cm、短径53cmで、深さは最深部が14cmある。断面形状は浅いため定かではないが上に広く開くU字形を呈していると思われる。

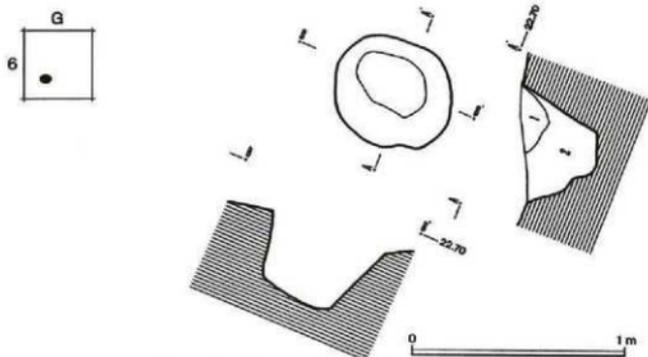
覆土は黒褐色土が1層で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径1～3cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第38号柱穴状遺構

G-6グリッド内に位置し、平面形状は不整形で、長径59cm、短径53cm、深さは最深部が38cmある。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。遺物は確認されなかった。

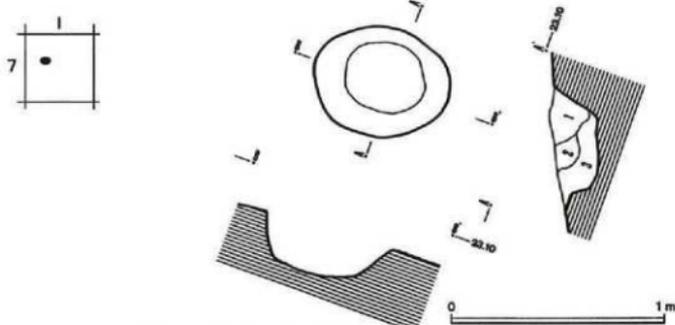


図IV-3-24 第38号柱穴状遺構の平面および断面図

第39号柱穴状遺構

I-7グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径65cm、短径51cm、深さは最深部が23cmある。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。黄褐色土の小さなブロックを少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。黄褐色土の小さなブロックを少量含んでいる。第3層は黄褐色土で締りも粘性も弱く、黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。遺物は確認されなかった。

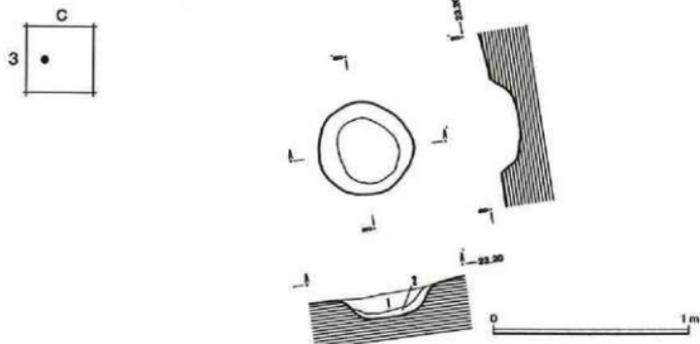


図IV-3-25 第39号柱穴状遺構の平面および断面図

第40号柱穴状遺構

C-3グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径49cm、短径48cm、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径1~4cm大の礫を少量含み、炭化物や焼土の粒を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径1cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックや炭化物を含んでいる。遺物は確認されなかった。

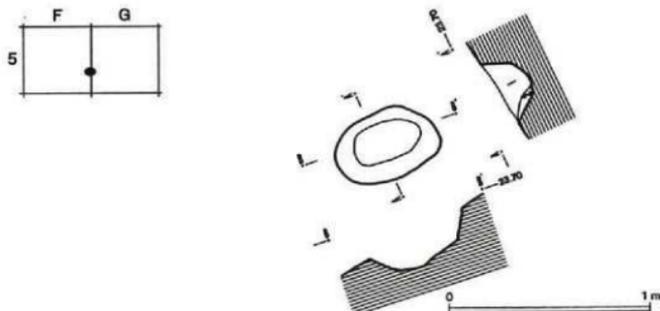


図IV-3-26 第40号柱穴状遺構の平面および断面図

第41号柱穴状遺構

F~G-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長径53cm、短径35cm、深さは最深部が16cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~2cm大の礫と黄褐色土ブロックを少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~1cm大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

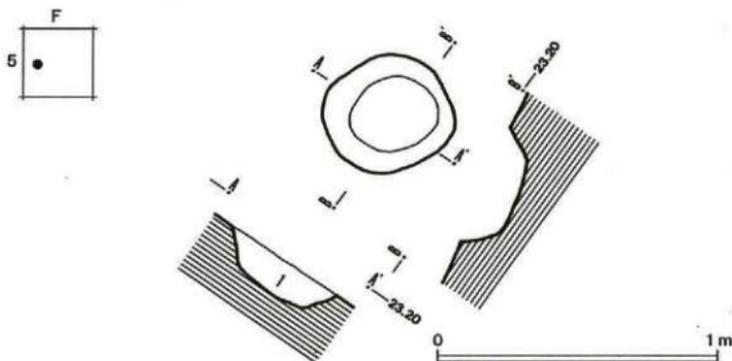


図IV-3-27 第41号柱穴状遺構の平面および断面図

第42号柱穴状遺構

F-5グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径48cm、短径43cm、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~3cm大の礫をやや多く含んでいる。遺物は確認されなかった。

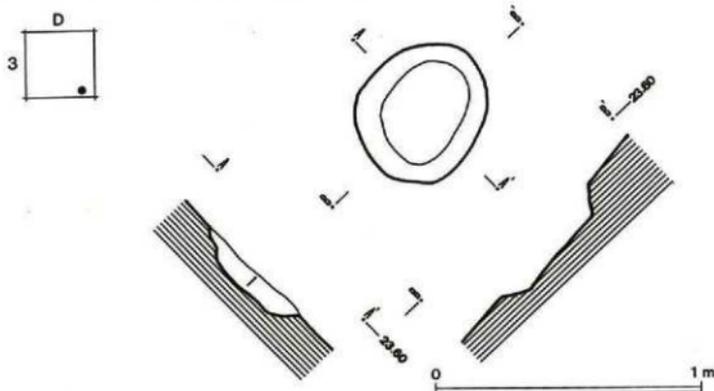


図IV-3-28 第42号柱穴状遺構の平面および断面図

第43号柱穴状遺構

D-3グリッド内に位置し、平面形状は不整形円で、長径56cm、短径47cm、深さは最深部が9cmある。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫と炭化物を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。



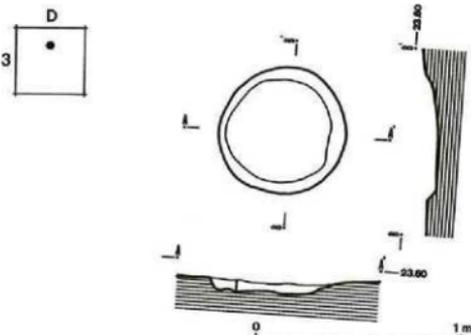
図IV-3-29 第43号柱穴状遺構の平面および断面図

第44号柱穴状遺構

D-3グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径64cm、短径60cm、深さは最深部が6cmある。断面形状は浅いため定かではないが、U字形を呈していると思われる。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫と炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-30 第44号柱穴状遺構の平面および断面図

第45・46号柱穴状遺構

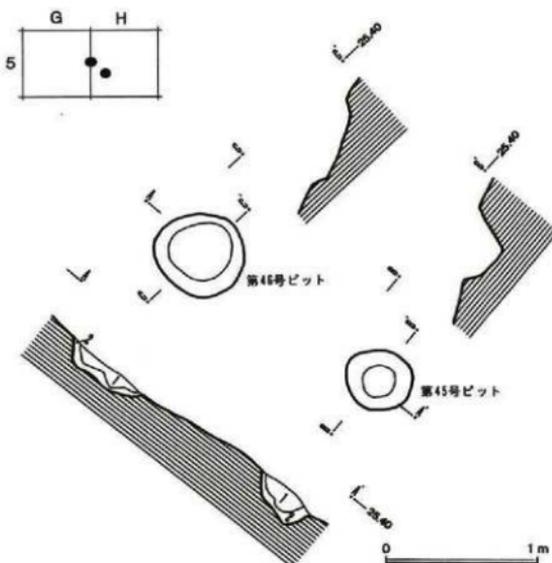
G-5~H-5グリッド内に位置し、ピット間の距離は150cmを計り、方位はN-54°-Wを指している。

第45号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径46cm、短径42cmで、深さは最深部が24cmある。断面形状は上に開くU字形を呈していると思われる。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5~4cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黄褐色土で締りも粘性もやや強い。径0.5~2cm大の礫をやや多く含み、暗褐色土のブロックを少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第46号ピットの平面形状はほぼ円形で、長径62cm、短径56cmで、深さは最深部が13cmある。断面形状は丸底状を呈している。

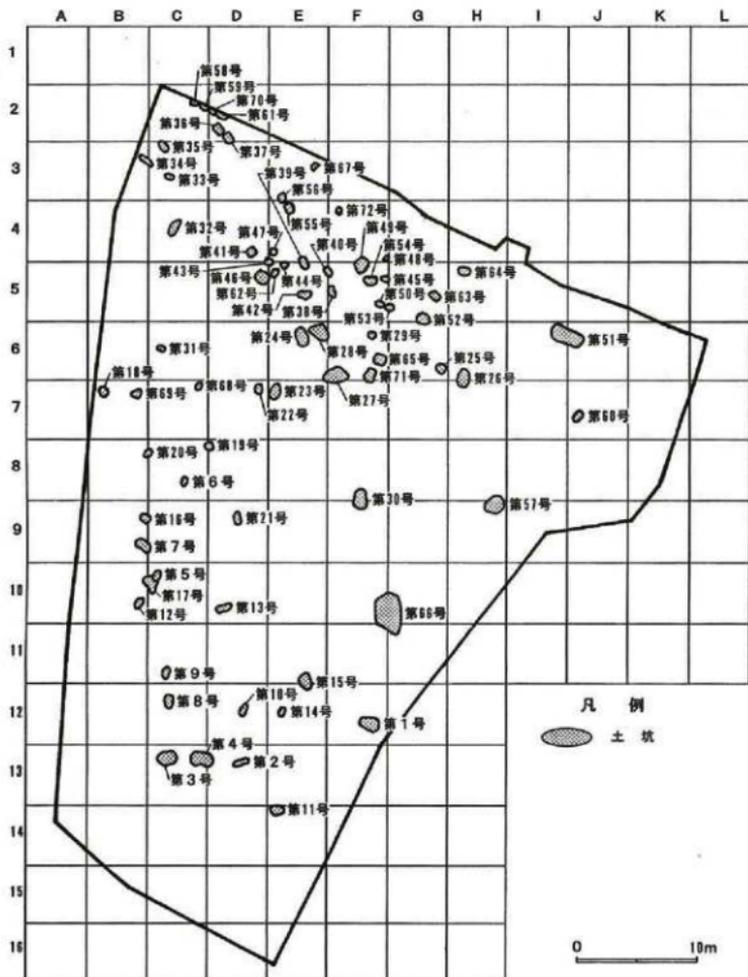
覆土は第45号ピットと同じである。遺物は確認されなかった。



図IV-3-31 第45・46号柱穴状遺構の平面および断面図

2. 土坑と遺物

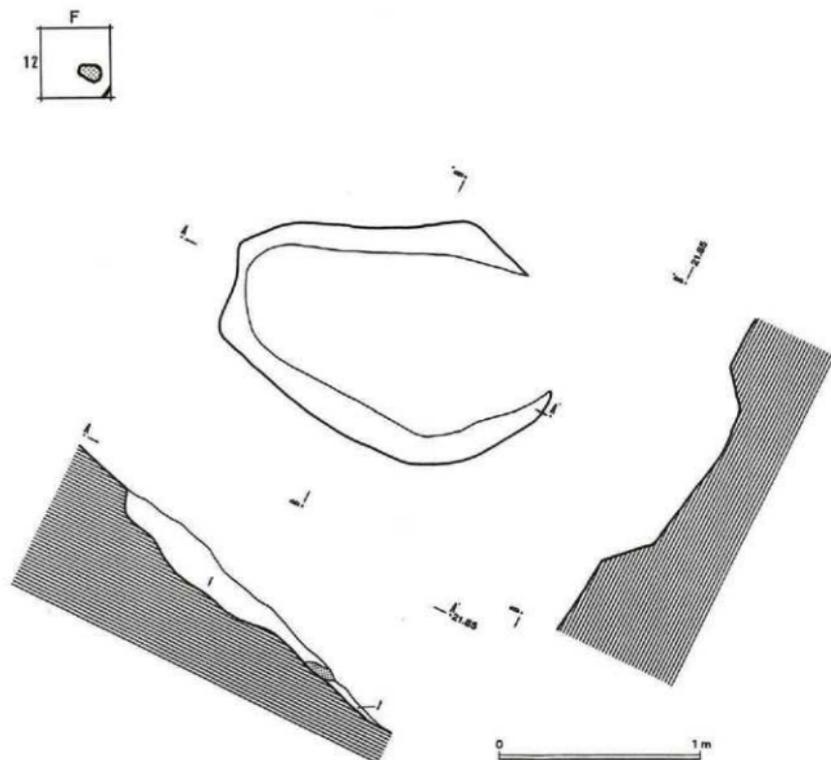
土坑は調査区内の全域に分布しており、72基が確認された。平面形状でみると、楕円形・不整楕円形が37基で約51%を占めているが、長軸の方向や規模などに統一性はみられない。円形・不整円形は15基で約21%を占めているが、規模や深さに統一性はみられない。遺物が出土した土坑は11基あるが、ほとんどが土器の細片で、土坑が掘られた時代や性格を確定できるものではなかった。



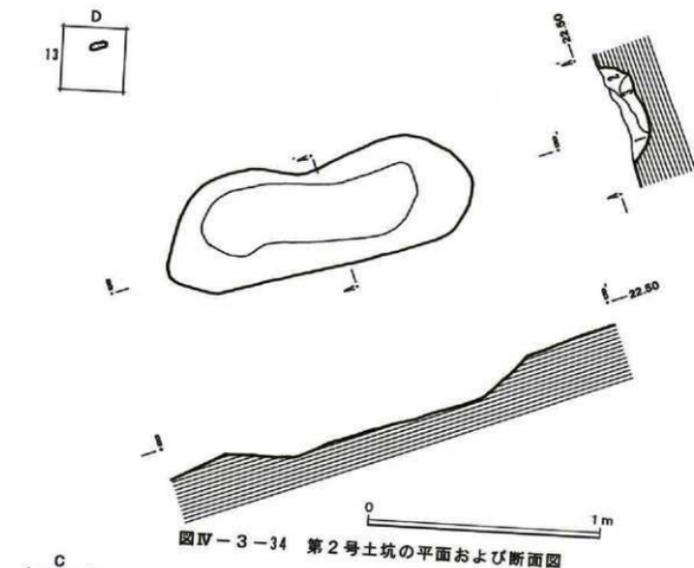
図IV-3-32 土坑の分布図

第1号土坑

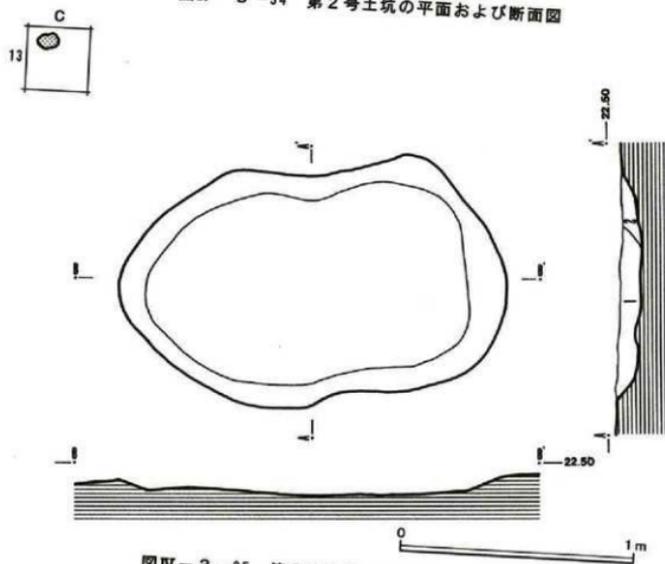
F-12グリッド内に位置し、東側は削平されている。平面形状は不整楕円形で、長径が166cm、最大幅121cm、深さは最深部が21cmあり、長軸の方向はN-70°-Wを指している。土坑の底面は東側に緩やかに傾斜し、断面形状は上が広く開いたU字形を呈すると思われる。覆土は黒色土が1層で締りは強く、粘性はない。径1~11cm大の礫を多く含んでいる。一部に攪乱層がみられる。遺物は確認されなかった。



図IV-3-33 第1号土坑の平面および断面図



図IV-3-34 第2号土坑の平面および断面図



図IV-3-35 第3号土坑の平面および断面図

第2号土坑

D-13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ134cm、最大幅48cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-20'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが丸底状を呈している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは強く、粘性はない。径0.5～2cm大の礫を含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はない。径0.5～3cm大の礫を少量含んでいる。第3層は黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径1～3cm大の礫をやや多く含んでいる。

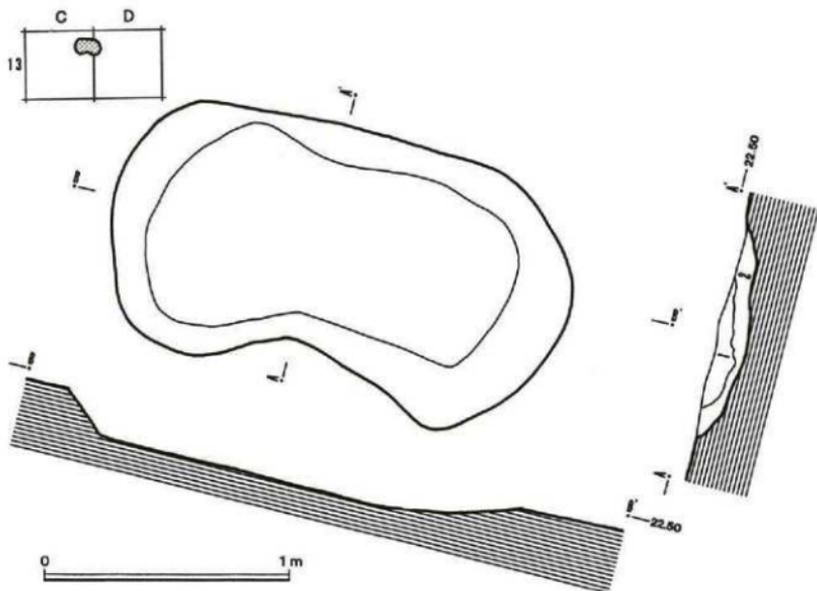
遺物は確認されなかった。

第3号土坑

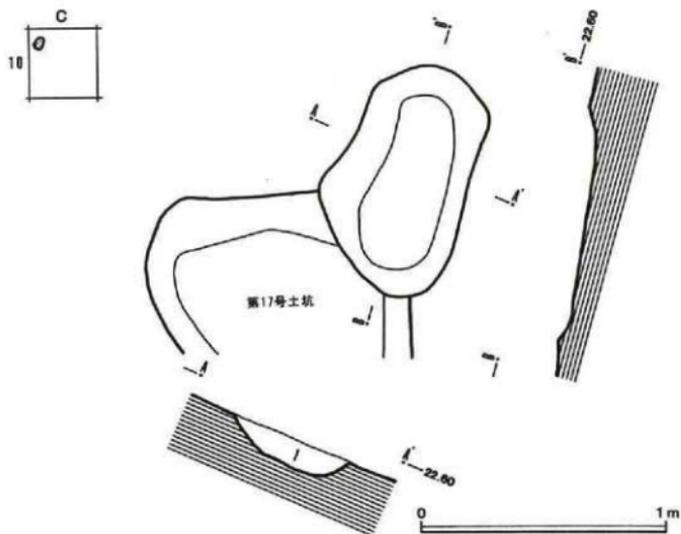
C-13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ166cm、最大幅102cm、深さは最深部が9cmと浅く、長軸の方向はN-84'-E 東西を指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はない。径0.5～1cm大の礫を多く含んでいる。第2層は黄褐色土で締りは強く、粘性はない。径0.5～7cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-36 第4号土坑の平面および断面図



図IV-3-37 第5号土坑の平面および断面図

第4号土坑

C～D-13グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ190cm、最大幅109cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-77'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径1～4cm大の礫を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5～5cm大の礫を多く含んでいる。

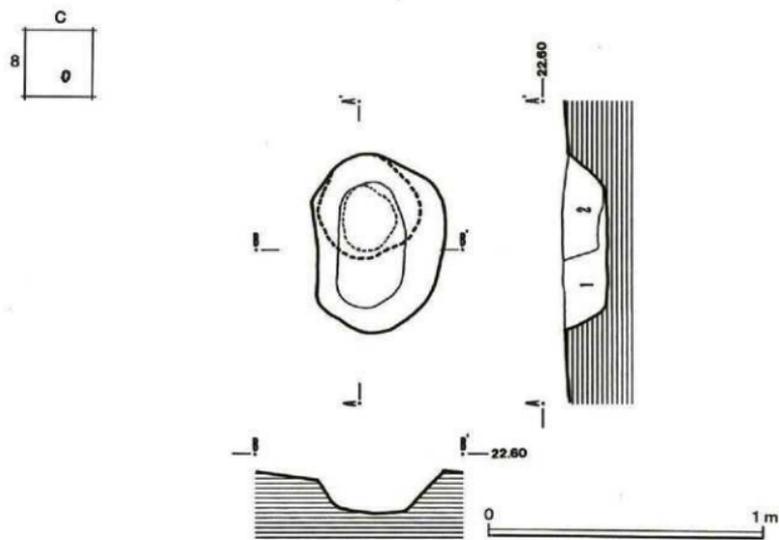
遺物は底面から土器の細片が1点出土したが、時代を推定できるものではなかった。

第5号土坑

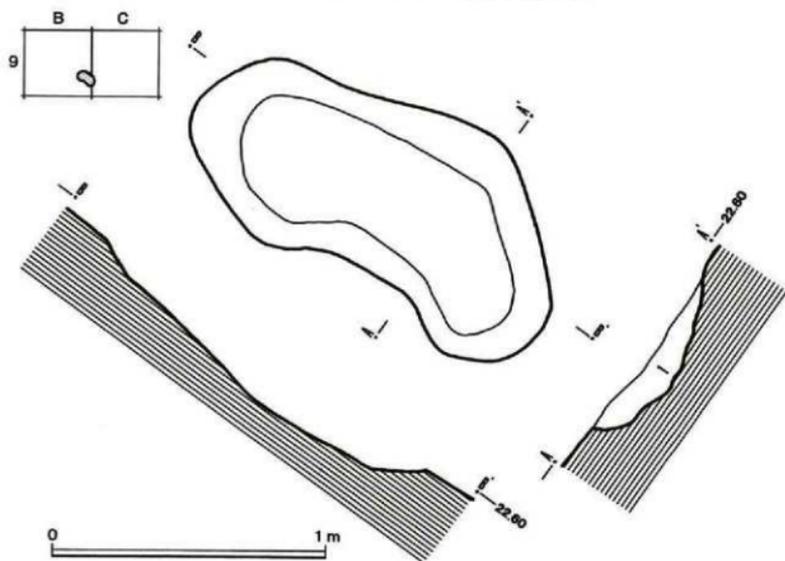
C-10グリッド内に位置し、南部分が第17号土坑の北東部を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ95cm、最大幅59cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-15'-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が1層で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5～7cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-38 第6号土坑の平面および断面図



図IV-3-39 第7号土坑の平面および断面図

第6号土坑

C-8グリッド内に位置し、北側は第22号ピットが切っている。平面形状は楕円形で、長さ67cm、最大幅49cm、深さは最深部が16cmあり、長軸の方向はN-S（南北）を指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられるが、そのうちの第2層は第22号ピットの覆土である。第6号土坑の覆土は第1層の暗褐色土で、締りは強く、粘性はない。径0.5～5cm大の礫をやや多く含んでいる。

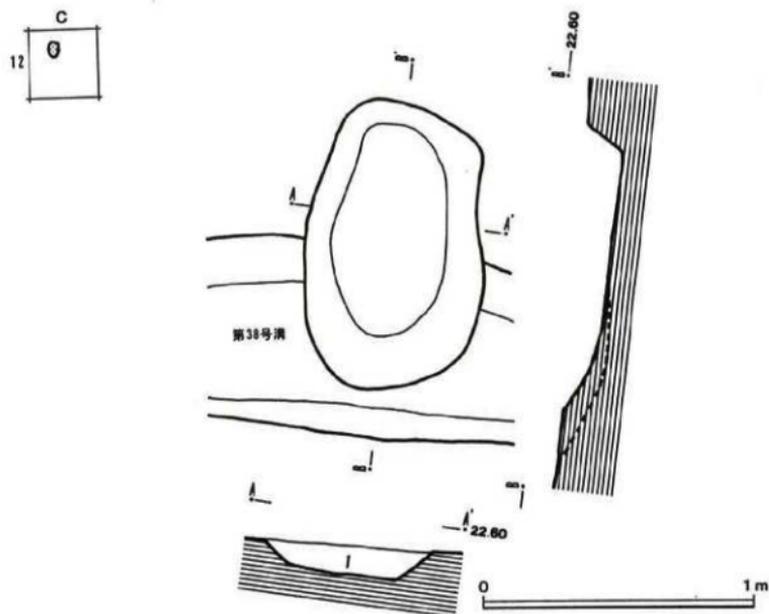
遺物は確認されなかった。

第7号土坑

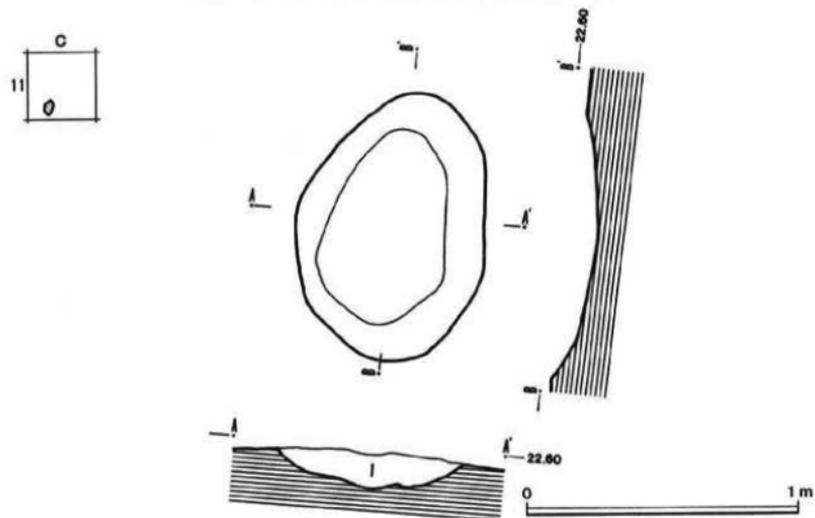
B～C-9グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ151cm、最大幅66cm、深さは最深部が16cmと浅く、長軸の方向はN-57'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で、締りは強く、粘性はやや強い。径0.5～1cm大の礫を多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-40 第8号土坑の平面および断面図



図IV-3-41 第9号土坑の平面および断面図

第8号土坑

C-12グリッド内に位置しており、第38号溝の中央部を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ107cm、最大幅67cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-Sを指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くU字形を呈している。

覆土は暗褐色土の1層からなり、締りはやや強く、粘性は強い。径0.5～6cm大の礫を多く含んでいる。

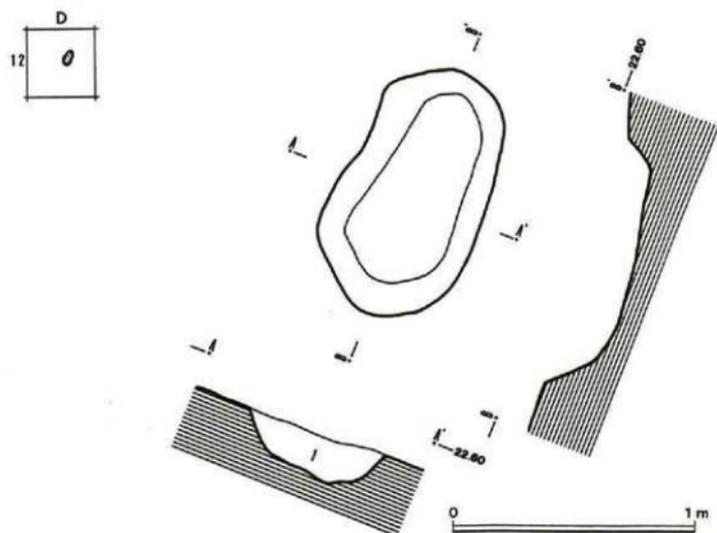
遺物は確認されなかった。

第9号土坑

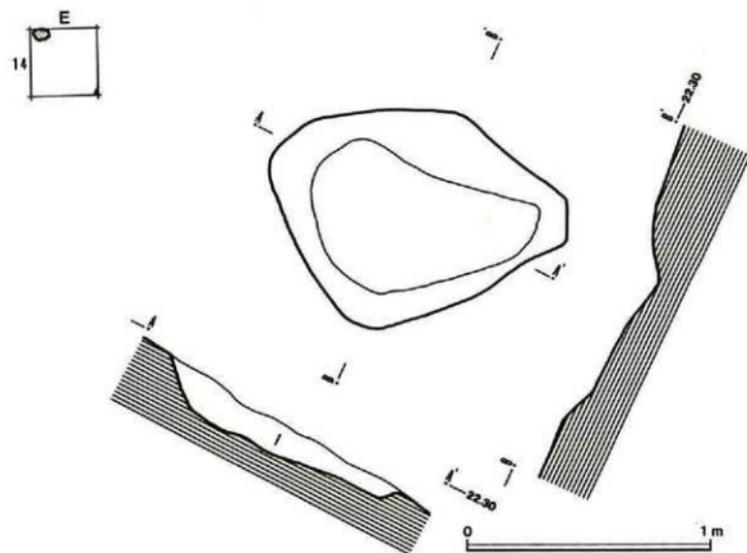
C-11グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ100cm、最大幅69cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-12'-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～5cm大の礫を多く含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-42 第10号土坑の平面および断面図



図IV-3-43 第11号土坑の平面および断面図

第10号土坑

D-12グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ106cm、最大幅63cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-21'-Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性もやや強く、径0.5～2cm大の礫を多く含んでいる。

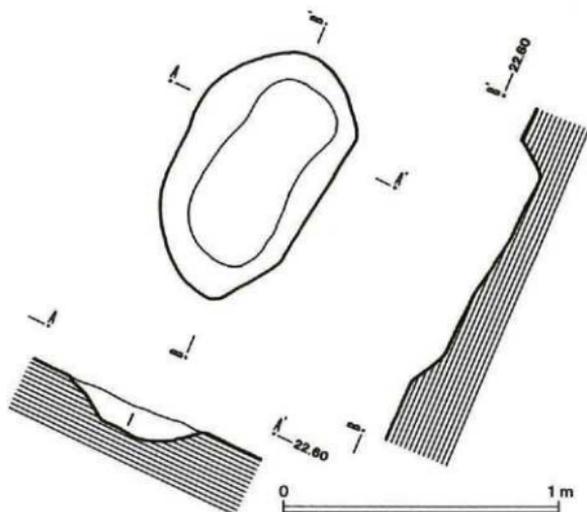
遺物は確認されなかった。

第11号土坑

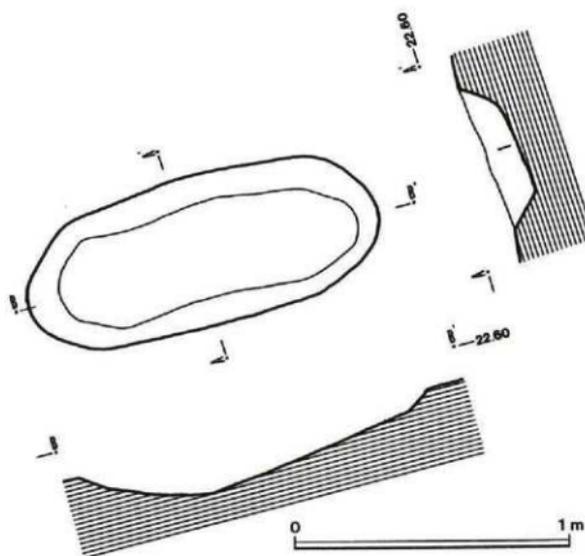
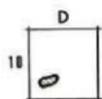
E-14グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ126cm、最大幅92cm、深さは最深部が17cmと浅く、長軸の方向はN-77'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性も弱く、径0.5～4cmの円礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-44 第12号土坑の平面および断面図



図IV-3-45 第13号土坑の平面および断面図

第12号土坑

B-10グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ97cm、最大幅56cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-24'-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～8cm大の礫を多く含み、炭化物・焼土粒を少量含んでいる。

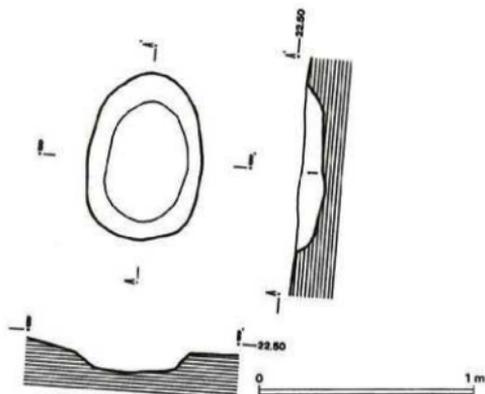
遺物は覆土の上位から土器の細片が1点出土したが、時代を推定できるものではなかった。

第13号土坑

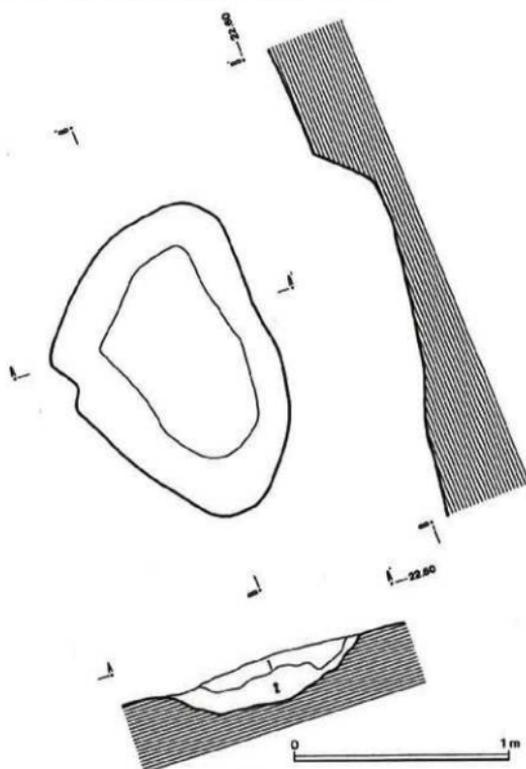
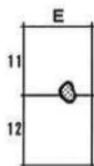
D-10グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ131cm、最大幅55cm、深さは最深部が18cmと浅く、長軸の方向はN-74'-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くU字形を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～3cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-46 第14号土坑の平面および断面図



図IV-3-47 第15号土坑の平面および断面図

第14号土坑

E-12グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ79cm、最大幅55cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-5'-Eを指している。断面形状は浅いためかではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~10cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

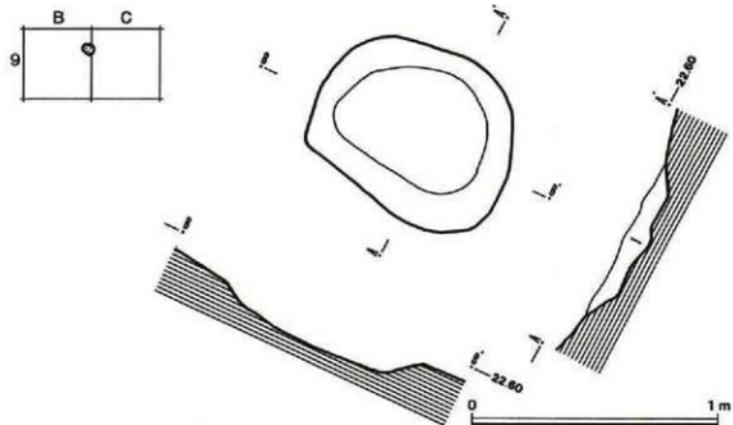
遺物は確認されなかった。

第15号土坑

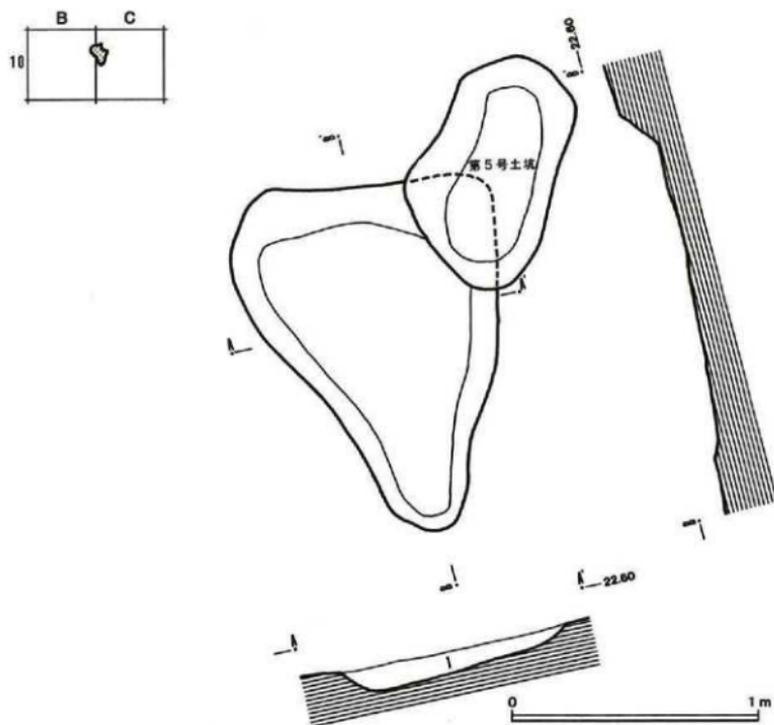
E-11~12グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ142cm、最大幅98cm、深さは最深部が23cmあり、長軸の方向はN-29'-Wを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りは強く、粘性は弱い。径1~12cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5~4cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-48 第16号土坑の平面および断面図



図IV-3-49 第17号土坑の平面および断面図

第16号土坑

B-9~C-9グリッド内に位置し、平面形状は不整形円で、長さ85cm、最大幅70cm、深さは最深部が11cmと浅く、長軸の方向はN-60'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~5cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

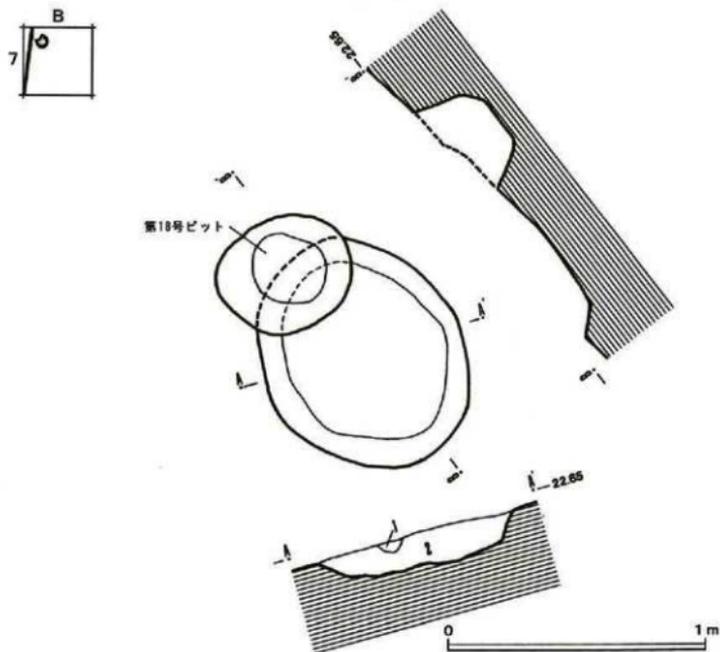
遺物は確認されなかった。

第17号土坑

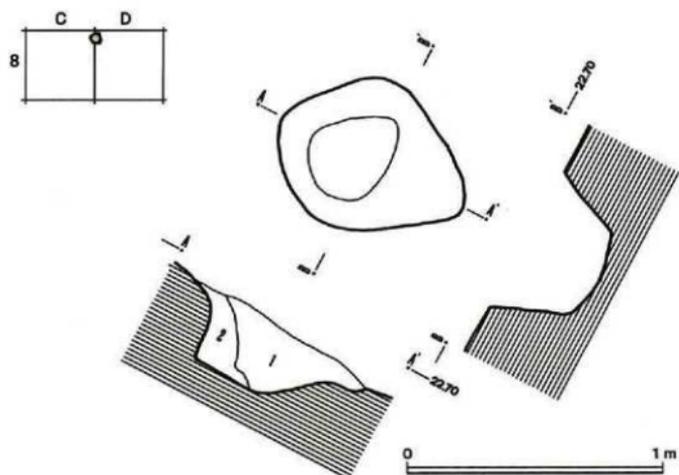
B-10~C-10グリッド内に位置し、北東部を第5号土坑に切られているが平面形状は隅丸三角形と思われる。長さ144cm、最大幅106cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-16'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-50 第18号土坑の平面および断面図



図IV-3-51 第19号土坑の平面および断面図

第18号土坑

B-7グリッド内に位置し、北西部を第18号ピットに切られているが平面形状は楕円形と思われる。長さは推定で95cm、最大幅78cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-38'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。炭化物を少量含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径2～3cm大の礫を少量含んでいる。

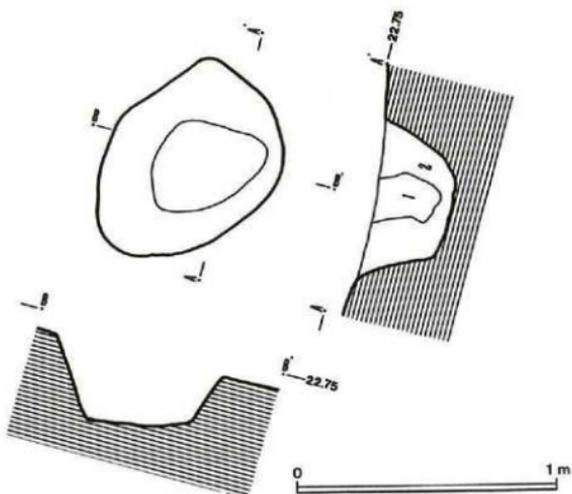
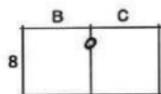
遺物は確認されなかった。

第19号土坑

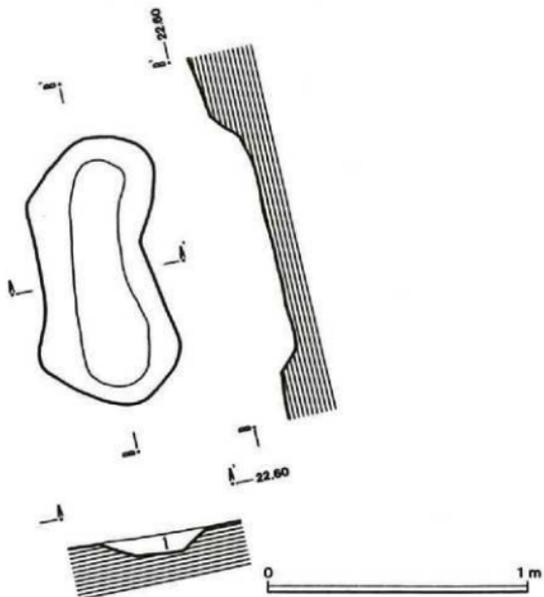
C-8～D-8グリッド内に位置し、平面形状は不整形で、長径79cm、短径62cm、深さは最深部が29cmあり、長軸の方向はN-63'-Wを指している。断面形状は上にやや開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強く、径3～8cm大の礫を多く含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。第2層は黄褐色土で締り弱く、粘性強い。径2～3cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-52 第20号土坑の平面および断面図



図IV-3-53 第21号土坑の平面および断面図

第20号土坑

B-8~C-8グリッド内に位置し、平面形状は不整形円で、長径83cm、短径61cm、深さは最深部が30cmあり、長軸の方向はN-51'-Eを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径2~3cm大の礫を少量含み、黄灰色土のブロックをやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径2~4cm大の礫を少量含んでいる。

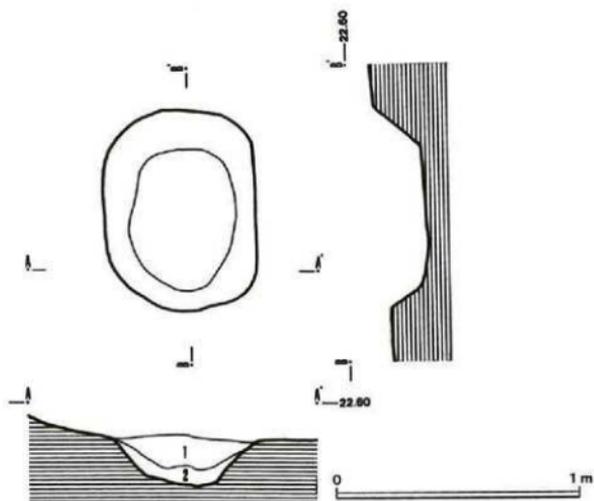
遺物は確認されなかった。

第21号土坑

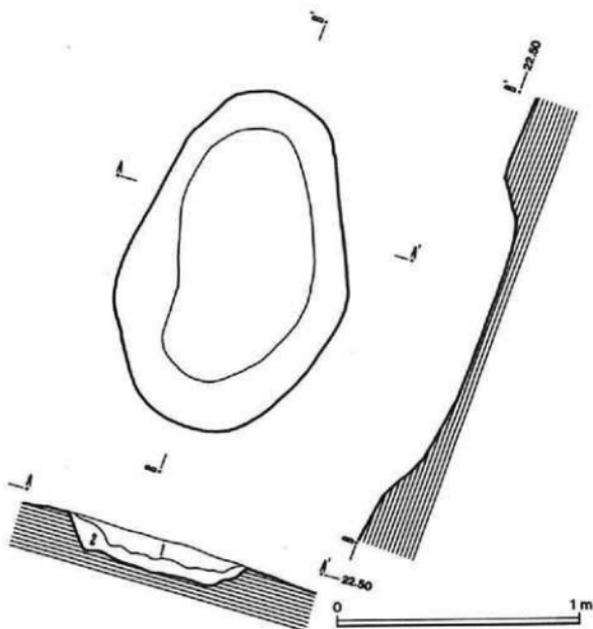
D-9グリッド内に位置し、平面形状は不整形楕円形で、長さ106cm、最大幅53cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-7'-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が1層で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~8cm大の礫を含み、炭化物を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-54 第22号土坑の平面および断面図



図IV-3-55 第23号土坑の平面および断面図

第22号土坑

D-7グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ82cm、最大幅62cm、深さは最深部が20cmあり、長軸の方向はN-2'-Wを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5～8cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径0.5～4cm大の礫をやや多く含んでいる。

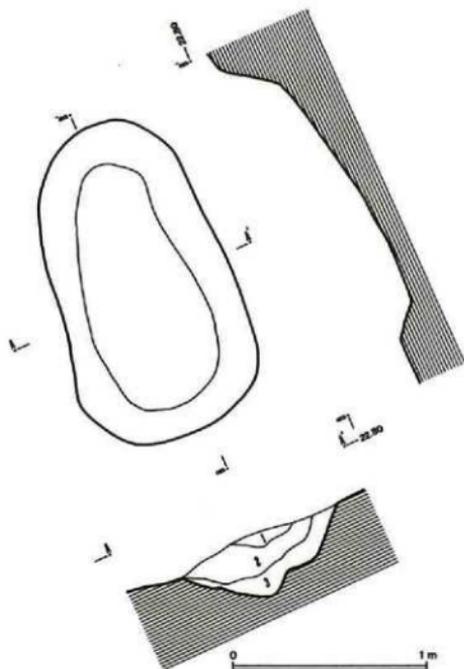
遺物は確認されなかった。

第23号土坑

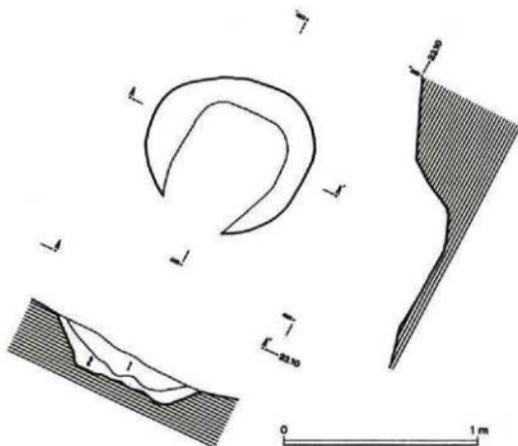
E-7グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ142cm、最大幅92cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-21'-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが、皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5～10cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径1～6cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-4-56 第24号土坑の平面および断面図



図IV-3-57 第25号土坑の平面および断面図

第24号土坑

E-6グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ164cm、最大幅97cm、深さは最深部が34cmあり、長軸の方向はN-24'-Wを指している。断面形状は丸底のV字形を呈し、東側には深さが20cm程度の小さな段がみられる。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径1～3cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は黒褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5～4cm大の礫を少量含んでいる。第3層は暗黄褐色土で締りも粘性も強く、径0.5～2cm大の礫を少量含んでいる。

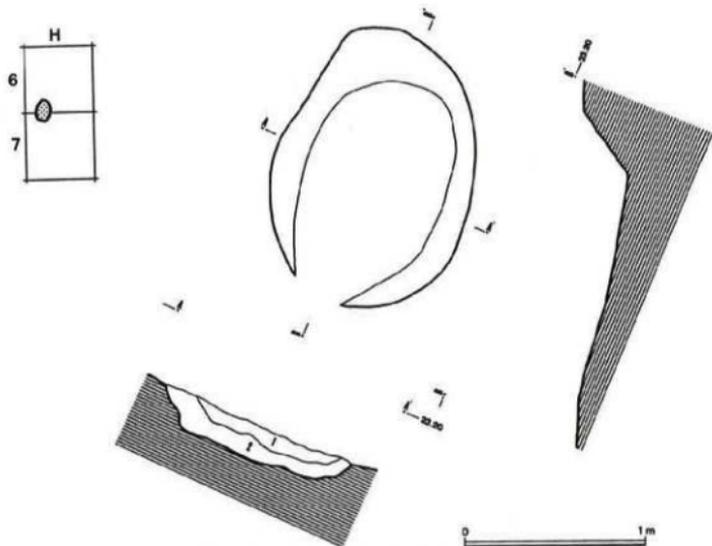
遺物は確認されなかった。

第25号土坑

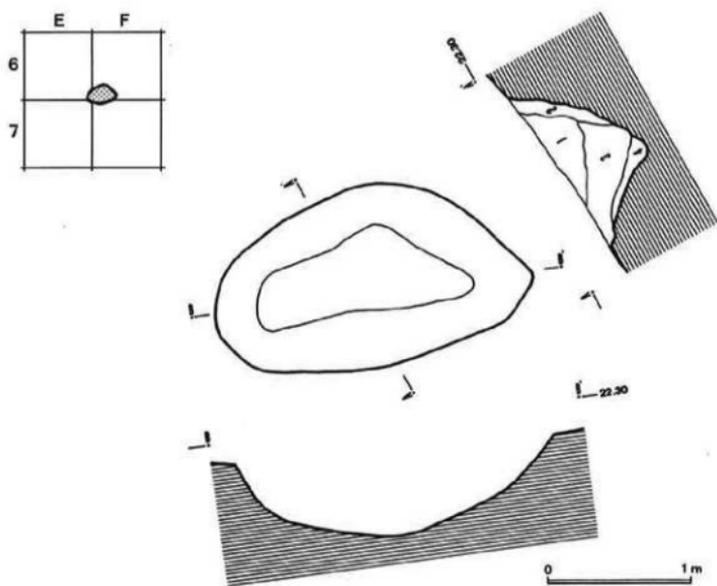
G-6グリッド内に位置し、南向きの斜面上にあるために南西部が削平されている。平面形状は円形と思われる。長径84cm、短径80cm、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-64'-Wを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.3～8cm大の礫を多く含み、黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや弱く粘性はやや強い。径0.3～6cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-58 第26号土坑の平面および断面図



図IV-3-59 第27号土坑の平面および断面図

第26号土坑

H-6~7グリッド内に位置し、南向きの斜面上にあるために南西部が削平されている。平面形状は楕円形で、長さ155cm、最大幅111cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-12'-Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.3~5cm大の礫と黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第2層は黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5~4cm大の礫をやや多く含んでいる。

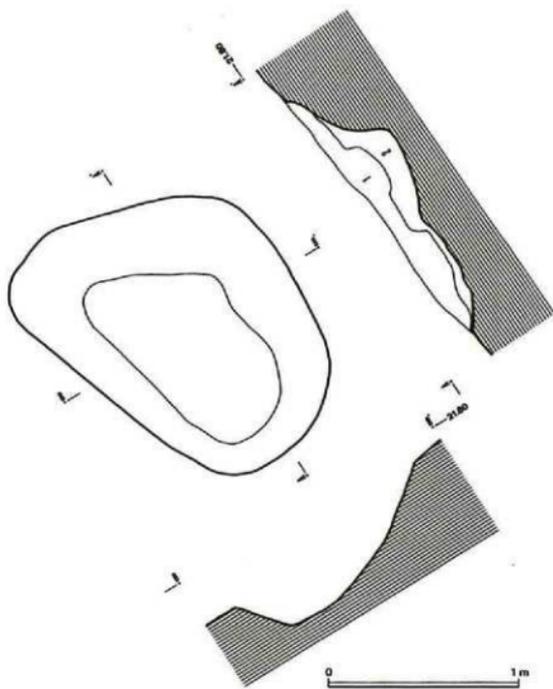
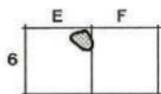
遺物は確認されなかった。

第27号土坑

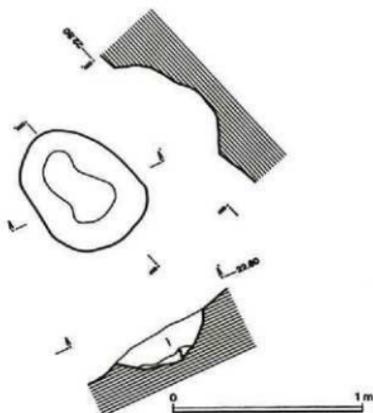
E~F-6~7グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ219cm、最大幅122cm、深さは最深部が60cmと深く、長軸の方向はN-83'-Eを指している。断面形状はV字形を呈している。

覆土は4層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性は強い。径0.5~2cm大の礫を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で締りも粘性も強く、径0.5~2cm大の礫を少量含んでいる。第3層は黒褐色土で締りも粘性も強く、径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第4層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5~3cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土坑の壁面から土師器の細片が1点出土している。



図IV-3-60 第28号土坑の平面および断面図



図IV-3-61 第29号土坑の平面および断面図

第28号土坑

E-6～F-6グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ147cm、最大幅122cm、深さは最深部が34cmあり、長軸の方向はN-52'-Wを指している。断面形状は丸底状を呈し、南側には深さが20cmの段がみられる。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は強い。径1～3cm大の礫を多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りも粘性も強く、径1～5cm大の礫をやや多く含んでいる。

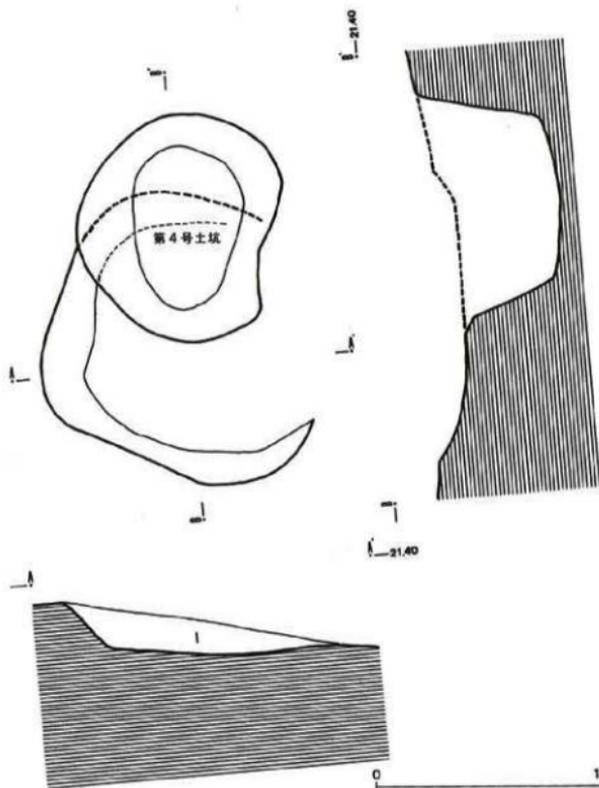
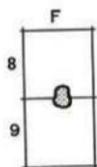
遺物は確認されなかった。

第29号土坑

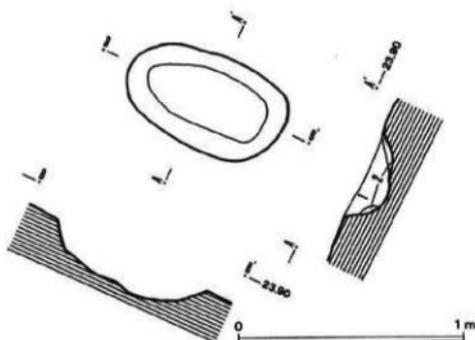
F-6グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ71cm、最大幅55cm、深さは最深部が19cmと浅く、長軸の方向はN-42'-Wを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径0.5～6cm大の礫と黄褐色土の小さなブロックをやや多く含んでいる。第2層は黄褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5～2cm大の礫を少量含み、黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-62 第30号土坑の平面および断面図



図IV-3-63 第31号土坑の平面および断面図

第30号土坑

F-8～9グリッド内に位置し、東側は削平され、北側は第4号土壇墓によって切られている。平面形状は不整形と思われ、長さは推定で140cm、幅も推定で120cm、深さは最深部が18cmと浅い。断面形状は定かではないが底面は東側に緩やかに傾斜し、皿状を呈している。

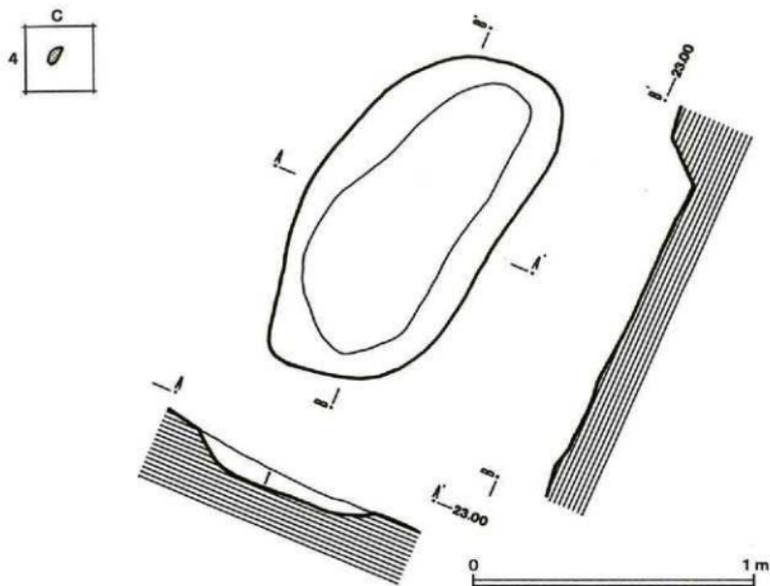
覆土は黒色土が1層で締りも粘性もやや弱く、径 0.5～2 cm 大の礫を少量含んでいる。遺物は確認されなかった。

第31号土坑

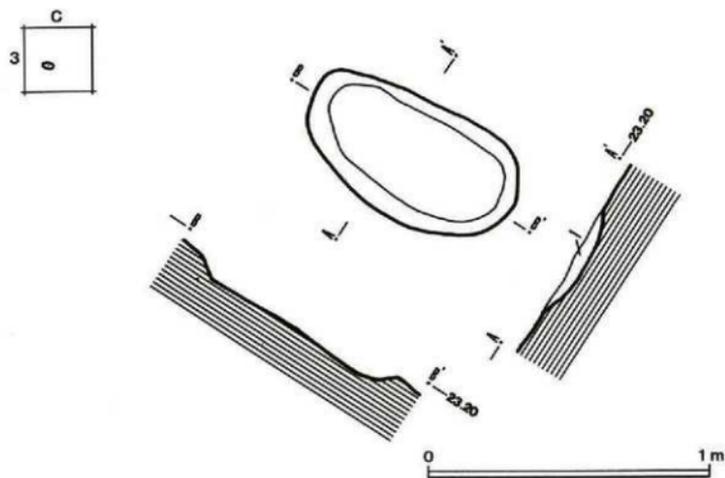
C-6グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ72cm、最大幅43cm、深さは最深部が16cmと浅く、長軸の方向はN-65°-Wを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径 0.5～2 cm 大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径 0.5～2 cm 大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-64 第32号土坑の平面および断面図



図IV-3-65 第33号土坑の平面および断面図

第32号土坑

C-4グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ135cm、最大幅69cm、深さは最深部が13cmと浅く、長軸の方向はN-27'-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～2cm大の礫を少量含んでいる。

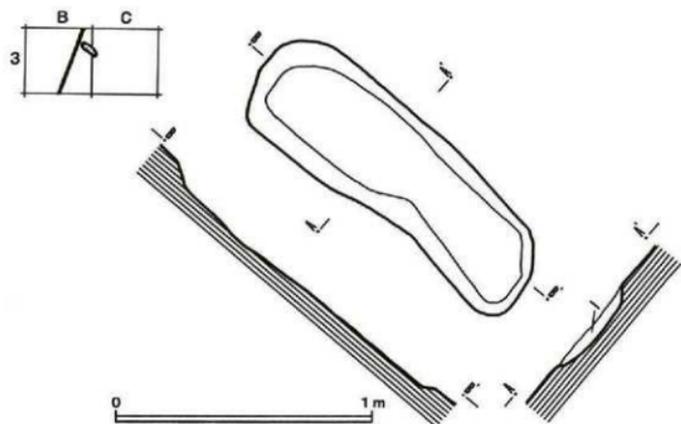
遺物は確認されなかった。

第33号土坑

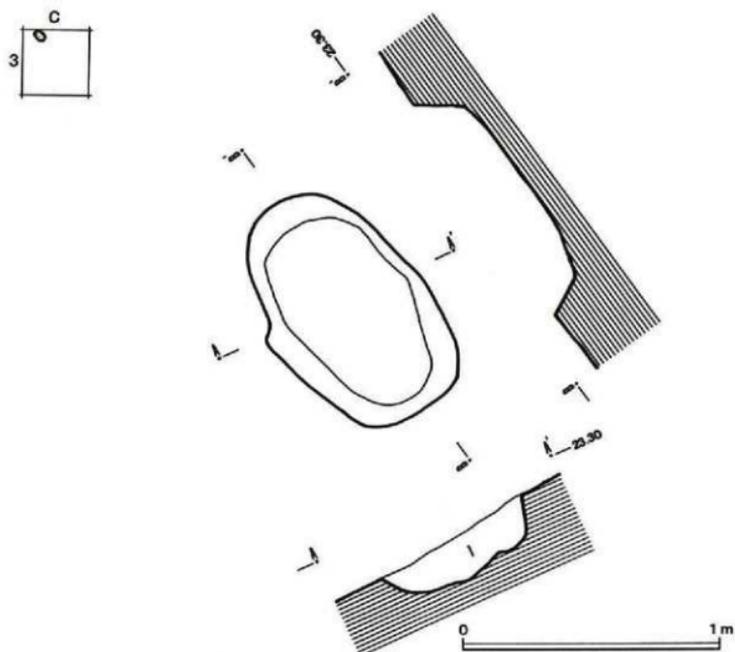
C-3グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ82cm、最大幅44cm、深さは最深部が6cmと浅く、長軸の方向はN-59'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径1cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-66 第34号土坑の平面および断面図



図IV-3-67 第35号土坑の平面および断面図

第34号土坑

B-3~C-3グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ134cm、最大幅45cm、深さは最深部が6cmと浅く、長軸の方向はN-49'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。黄褐色土のブロック・炭化物を少量含んでいる。

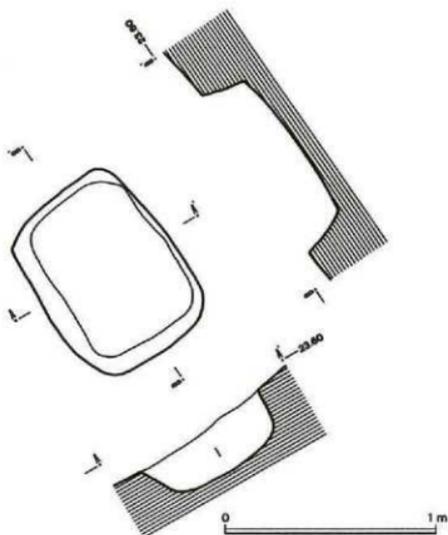
遺物は確認されなかった。

第35号土坑

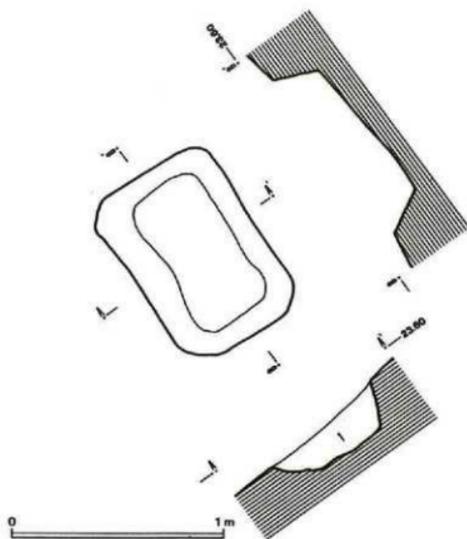
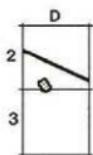
C-3グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ99cm、最大幅63cm、深さは最深部が21cmあり、長軸の方向はN-36'-Wを指している。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は黒褐色土が1層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径1~4cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-68 第36号土坑の平面および断面図



図IV-3-69 第37号土坑の平面および断面図

第36号土坑

D-2グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ91cm、最大幅69cm、深さは最深部が25cmあり、長軸の方向はN-35'-Wを指している。断面形状はU字形を呈しているが、南西側の壁面はやや緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性も弱く、黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

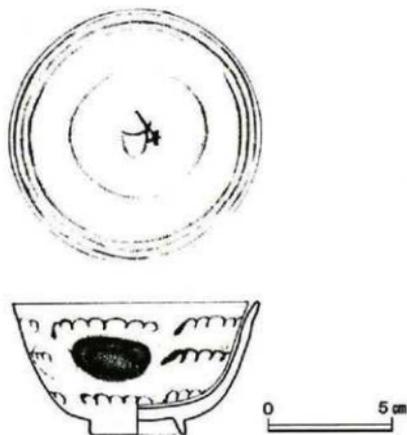
遺物は底面と覆土の下位から土器の細片が2点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

第37号土坑

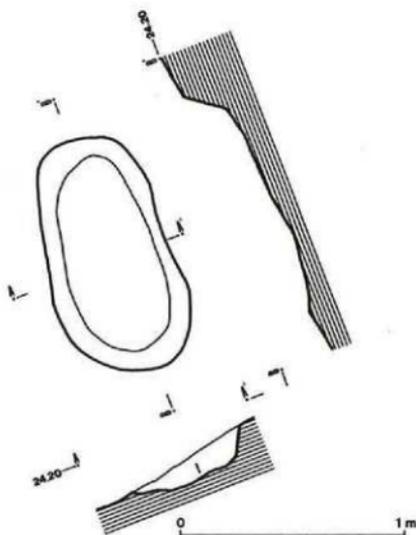
D-2~3グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ93cm、最大幅64cm、深さは最深部が23cmあり、長軸の方向はN-38'-Wを指している。断面形状は上に開くU字形を呈しているが、南西側の壁面はやや緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性も弱く、黄褐色土のブロックを少量含んでいる。

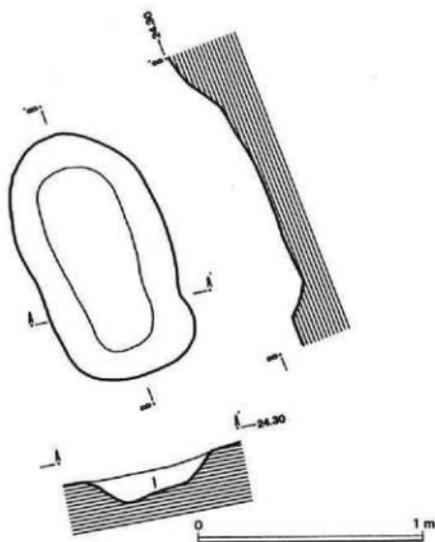
遺物は覆土の下位で南西側の壁面から陶器(遺物No219)が1点出土している。



図IV-3-70 第37号土坑から出土した陶器(遺物No219)



図IV-3-71 第38号土坑の平面および断面図



図IV-3-72 第39号土坑の平面および断面図

第38号土坑

F-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ104cm、最大幅58cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-22'-Wを指している。南西方向に削平されているため断面形状は定かではないが、上に広く開くU字形を呈していると思われる。

覆土は暗褐色土が1層で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5～8cm大の礫を含み、炭化物を少量含んでいる。

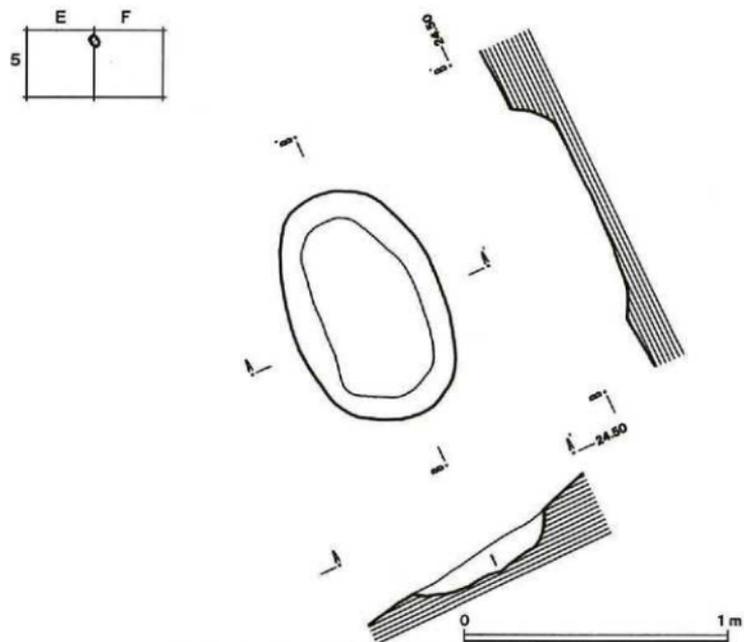
遺物は確認されなかった。

第39号土坑

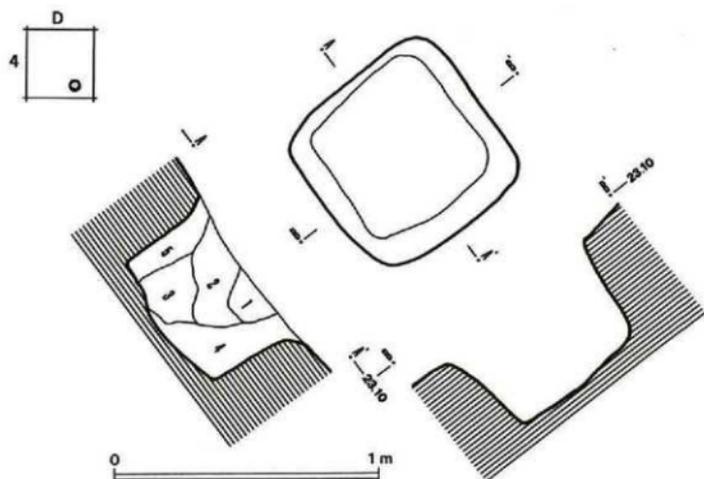
E-4～5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ113cm、最大幅64cm、深さは最深部が13cmと浅く、長軸の方向はN-20'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くU字形を呈していると思われる。

覆土は暗褐色土が1層で、締りも粘性はやや強く、径0.5～4cm大の礫を含んでいる。

遺物は底面近くから土器の細片が2点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。



図IV-3-73 第40号土坑の平面および断面図



図IV-3-74 第41号土坑の平面および断面図

第40号土坑

E-5～F-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ92cm、最大幅59cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はN-26'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は暗褐色土が1層で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5～2cm大の礫を少量含んでいる。

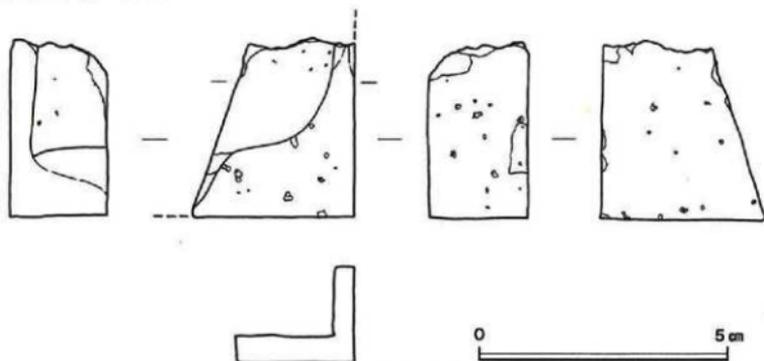
遺物は確認されなかった。

第41号土坑

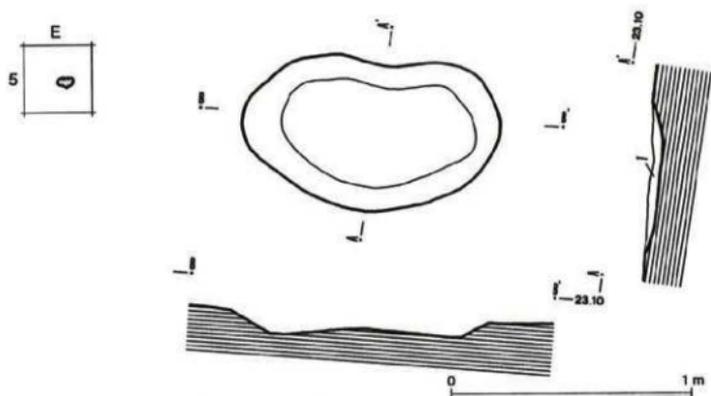
D-4グリッド内に位置し、平面形状は隅丸正方形で、長さ70cm、幅70cm、深さは最深部が40cmと深い。断面形状はU字形を呈している。

覆土は5層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。第2層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱い。黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。黄褐色土のブロックを多く含んでいる。第4層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。黄褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。第5層は黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。暗褐色土の小さなブロックを多く含んでいる。

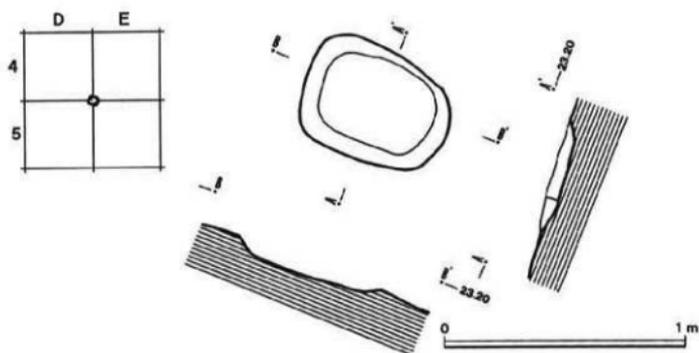
遺物は覆土中(第2層)から石製品の破片(遺物No221)が1点出土しているが、品種・用途などは不明である。



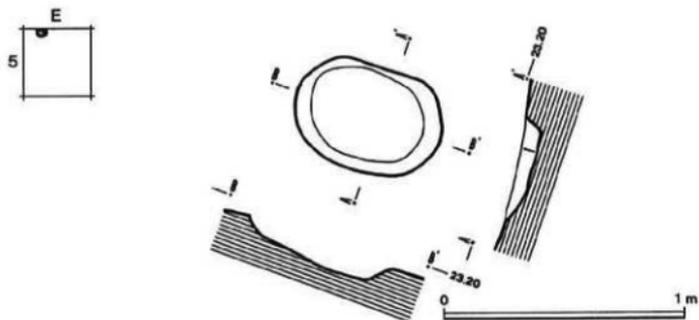
図IV-3-75 第41号土坑から出土した石製品の破片(遺物No.221)



図IV-3-76 第42号土坑の平面および断面図



図IV-3-77 第43号土坑の平面および断面図



図IV-3-78 第44号土坑の平面および断面図

第42号土坑

E-5グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ106cm、最大幅63cm、深さは最深部が9cmと浅く、長軸の方向はN-86'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性はやや弱い。径1～4cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第43号土坑

D-4～5、E-4～5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ63cm、最大幅48cm、深さは最深部が6cmと浅く、長軸の方向はN-68'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が1層で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径2cm大の礫を少量含んでいる。

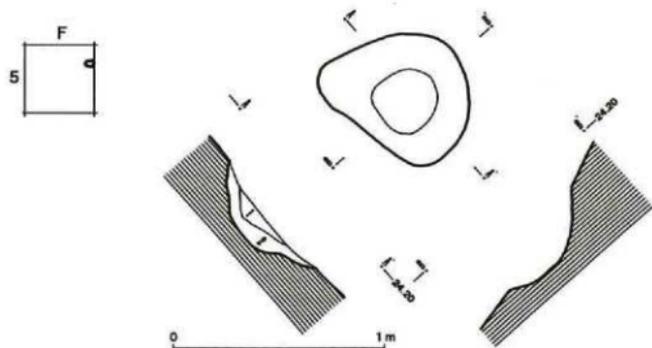
遺物は確認されなかった。

第44号土坑

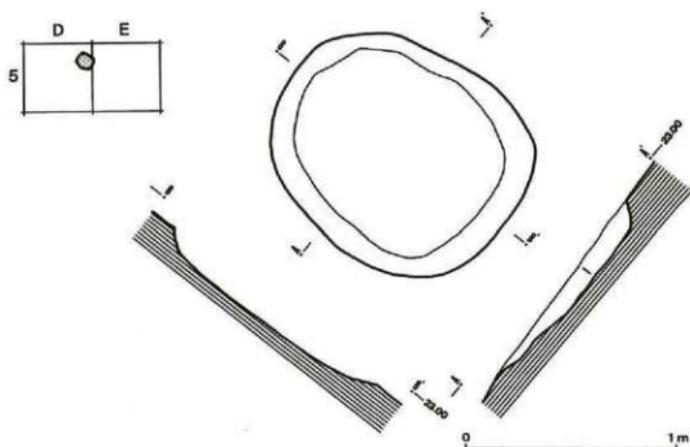
E-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ63cm、最大幅45cm、深さは最深部が10cmと浅く、長軸の方向はN-70'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒色土が1層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径1～4cm大の礫を少量含んでいる。

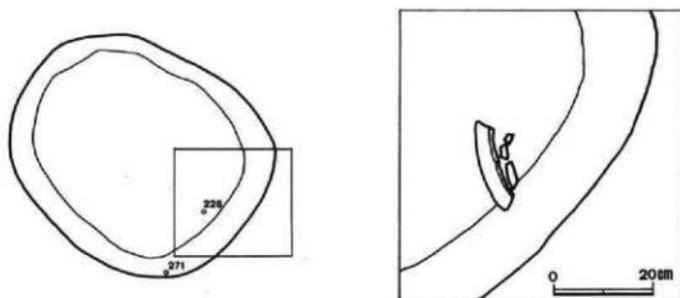
遺物は確認されなかった。



図IV-3-79 第45号土坑の平面および断面図



図IV-3-80 第46号土坑の平面および断面図



図IV-3-81 第46号土坑の遺物(遺物No.226)の出土状況図

第45号土坑

F-5グリッド内に位置し、平面形状は不整形で、長径73cm、短径60cm、深さは最深部が14cmと浅く、長軸の方向はN-78'-Wを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径0.5~5cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第46号土坑

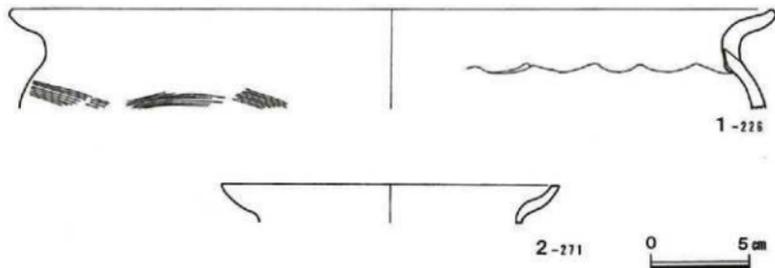
D-5~E-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ123cm、最大幅105cm、深さは最深部が10cmと浅く、長軸の方向はN-53'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、底面は皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土が1層で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5~8cm大の礫を少量含んでいる。

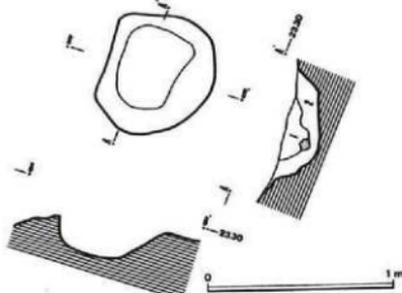
遺物は底面に近い覆土から土師器の口縁部の破片(遺物No.226、遺物No.271)が2点出土している。

1(遺物No.226)は甕型土器の口縁部から頸部にかけての破片で、推定口径が39cmある。頸部は「く」の字形に屈曲し、内面は接合により肥厚している。内・外面ともに横ナデ調整が施され、外面には黒斑状にススが付着している。

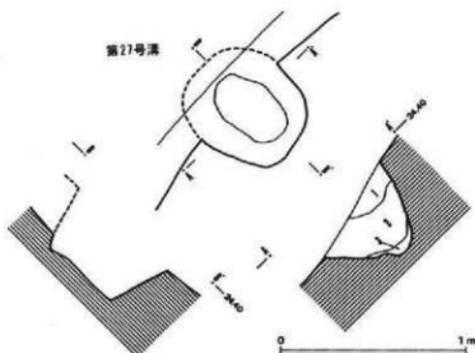
2(遺物No.271)も甕型土器の口縁部から頸部にかけての破片で、推定口径が17.2cmある。頸部は僅かに内湾しながら屈曲している。内・外面ともに刷毛目と横ナデ調整が施されている。



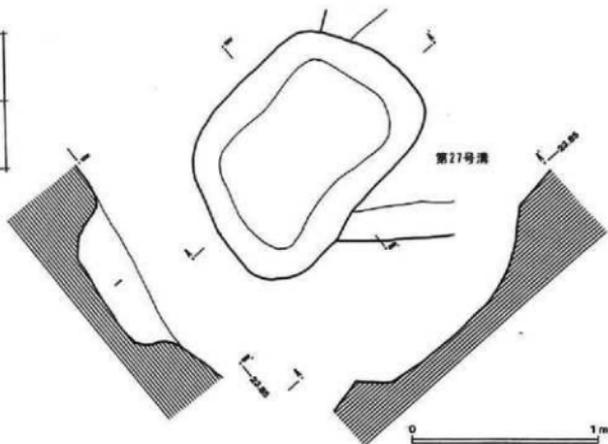
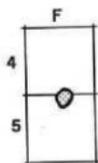
図四-3-82 第46号土坑から出土した土師器の口縁部(遺物No.226・No.271)



図IV-3-83 第47号土坑の平面および断面図



図IV-3-84 第48号土坑の平面および断面図



図IV-3-85 第49号土坑の平面および断面図

第47号土坑

E-4グリッド内に位置し、平面形状は不整形で、長径68cm、短径58cmで、深さは最深部が19cmあり、長軸の方向はN-25'-Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径1cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径1～4cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第48号土坑

F-4グリッド内に位置し、北西部を第27号溝によって切られているが平面形状は楕円形と思われる。長さは推定で70cm、最大幅57cm、深さは最深部が37cmあり、長軸の方向はN-46'-Wを指している。断面形状はV字形を呈している。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性もやや弱く、径0.5～2cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～7cm大の礫を少量含んでいる。第3層は黄褐色土で締りも粘性も弱く、径0.5～1cm大の礫を少量含んでいる。

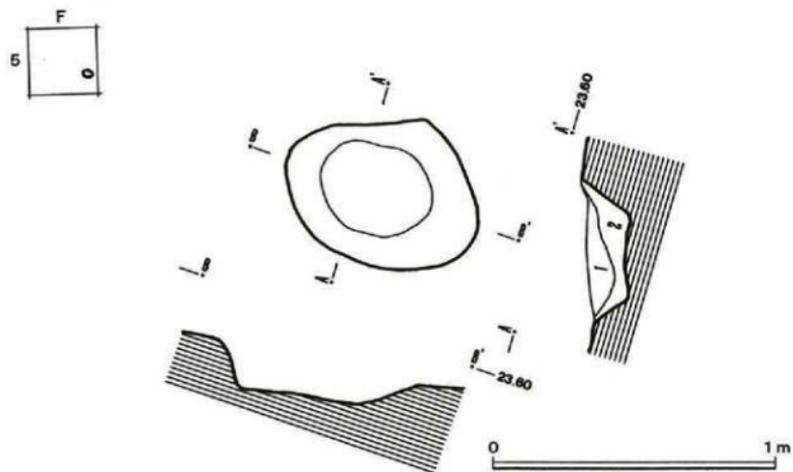
遺物は確認されなかった。

第49号土坑

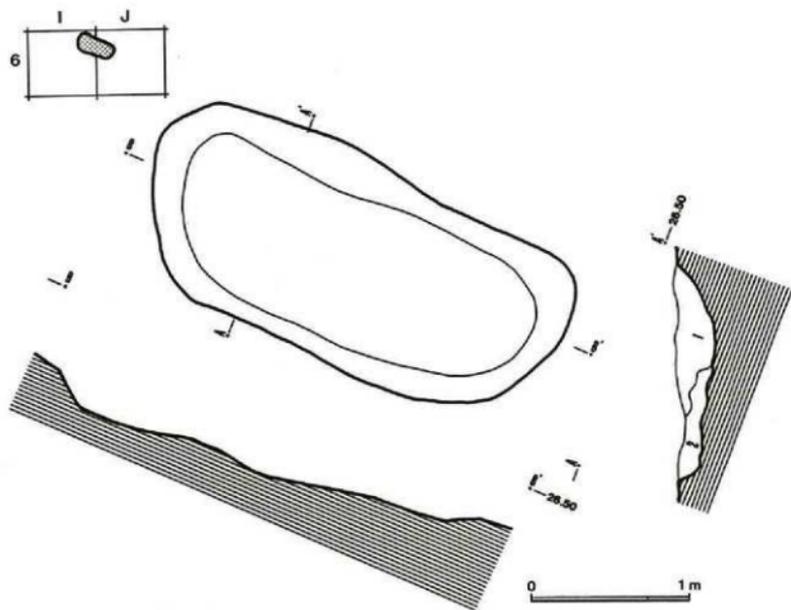
F-4～5グリッド内に位置し、北東部分が第27号溝(第2号方形周溝墓の東溝)の南西部を切っている。平面形状は不整形で、長さ130cm、最大幅97cm、深さは最深部が26cmあり、長軸の方向はN-48'-Eを指している。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径0.5～3cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-86 第50号土坑の平面および断面図



図IV-3-87 第51号土坑の平面および断面図

第50号土坑

F-5グリッド内に位置し、平面形状は不整形円形で、長さ72cm、最大幅57cm、深さは最深部が16cmと浅く、長軸の方向はN-70°-Wを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.3～2cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りも粘性も弱い。径0.3～3cm大の礫を少量含んでいる。

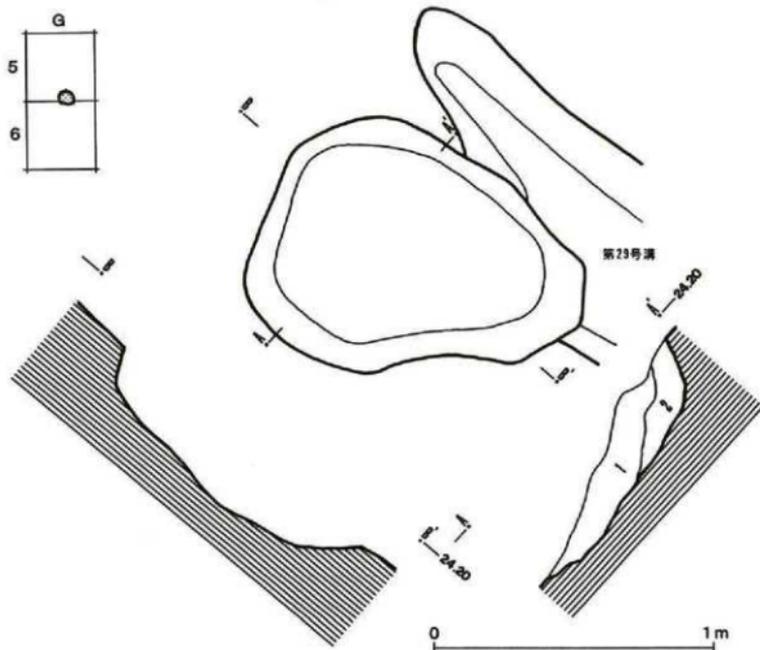
遺物は確認されなかった。

第51号土坑

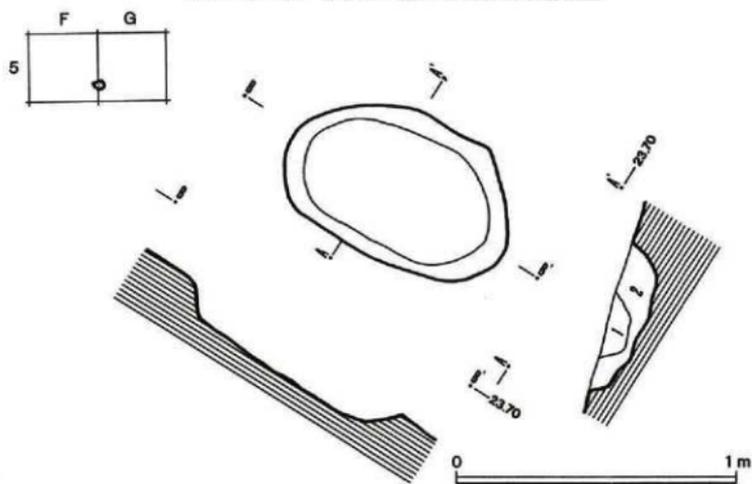
I～J-6グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ277cm、最大幅130cm、深さは最深部が27cmあり、長軸の方向はN-67°-Wを指している。断面形状は丸底状を呈しており、底面は南西側に緩やかに下がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性も弱く、径0.3～10cm大の礫を多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5～5cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-88 第52号土坑の平面および断面図



図IV-3-89 第53号土坑の平面および断面図

第52号土坑

G-5~6グリッド内に位置し、東側は第29号溝を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ119cm、最大幅90cm、深さは最深部が22cmあり、長軸の方向はN-67'-Wを指している。断面形状は丸底状を呈しているが、底面は南西側に緩やかに下がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性も弱く、径0.5~5cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~1cm大の礫をやや多く含んでいる。

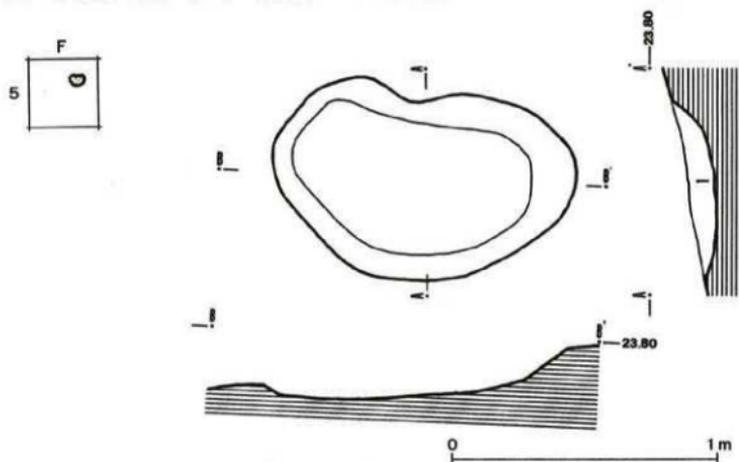
遺物は確認されなかった。

第53号土坑

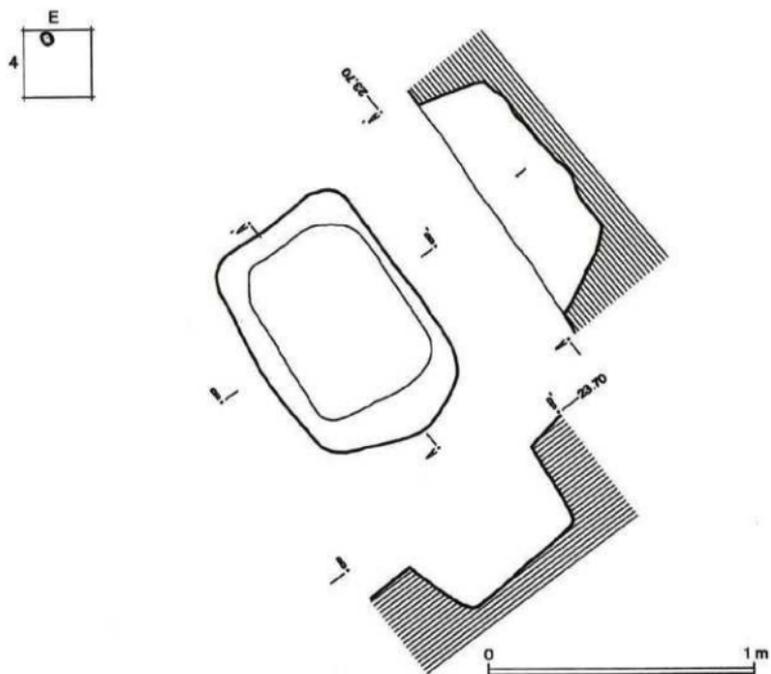
F-5~G-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ86cm、最大幅55cm、深さは最深部が14cmと浅く、長軸の方向はN-57'-Wを指している。断面形状は浅いためかでないが上に開くU字形を呈していると思われる。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~5cm大の礫と黄褐色土のブロックを少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~1cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-90 第54号土坑の平面および断面図



図IV-3-91 第55号土坑の平面および断面図

第54号土坑

F-5グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ115cm、最大幅72cm、深さは最深部が12cmと浅く、長軸の方向はほぼ東西に近いN-37'-Wを指している。断面形状は丸底状を呈している。

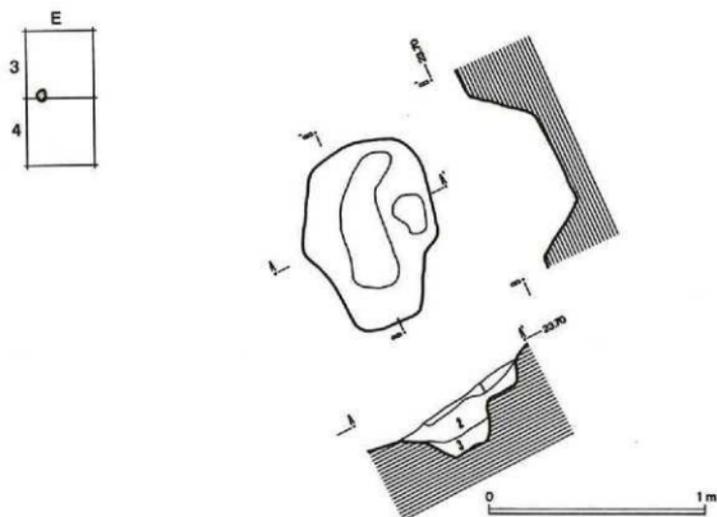
覆土は暗褐色土が1層で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.3～3cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は底面に近い覆土中から土器の細片が1点出土しているが、時代を確定できるものではなかった。

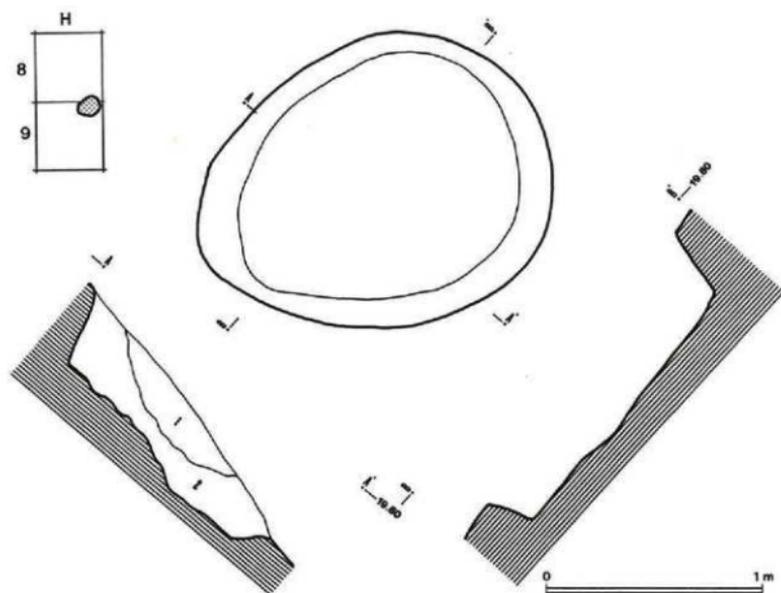
第55号土坑

E-4グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ96cm、最大幅65cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-36'-Wを指している。断面形状はU字形を呈している。

覆土は暗褐色土が1層で締りも粘性も弱く、径0.3～3cm大の礫をやや多く含んでいる。遺物は確認されなかった。



図IV-3-92 第56号土坑の平面および断面図



図IV-3-93 第57号土坑の平面および断面図

第56号土坑

E-3~4グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ87cm、最大幅63cm、深さは最深部が25cmあり、長軸の方向はN-5'-Wを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈し、東側には深さ10cmほどの小段がみられる。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りは弱く、粘性はやや強い。径0.5~1cm大の礫を少量含んでいる。第3層は暗褐色土で、締りも粘性も弱く、径0.5~2cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

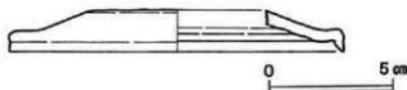
遺物は確認されなかった。

第57号土坑

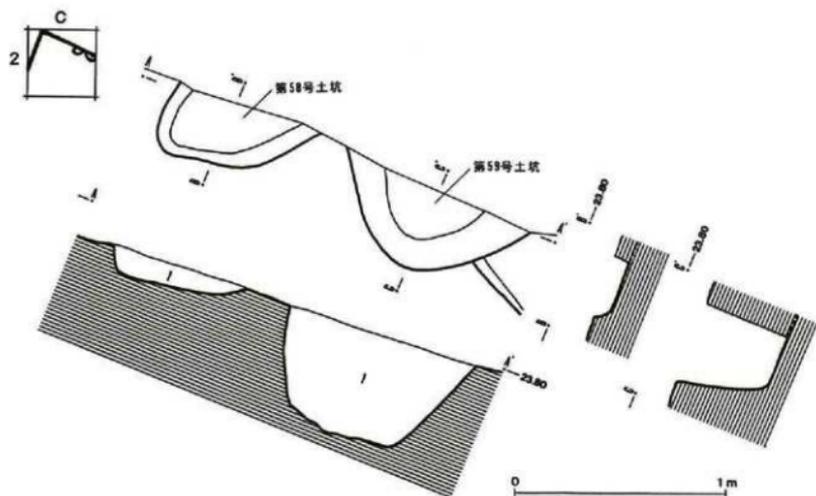
H-8~9グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ168cm、最大幅134cm、深さは最深部が33cmあり、長軸の方向はN-71'-Eを指している。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.3~4cm大の礫・炭化物・焼土粒を少量含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5~12cm大の礫をやや多く含んでいる。

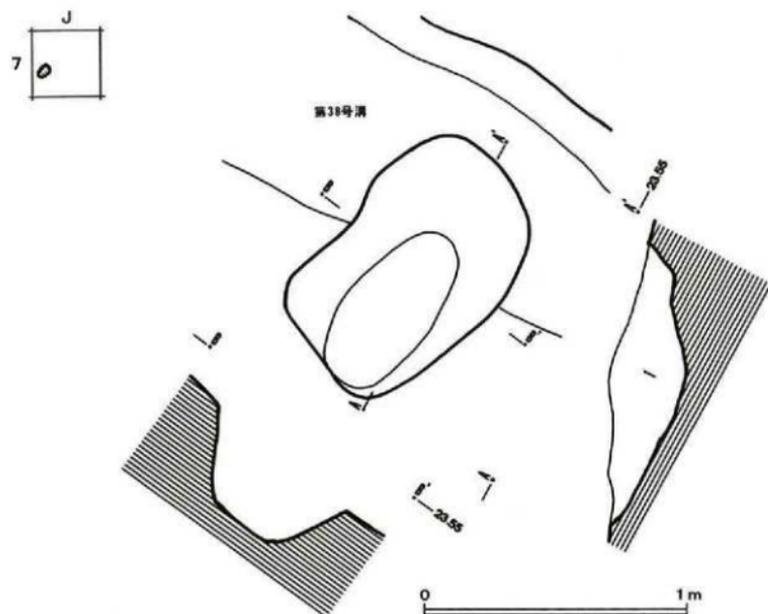
遺物は底面に近い覆土から陶質土器の蓋部の破片(遺物No.434)が出土している他、土師器の細片が3点出土した。



図IV-3-94 第57号土坑から出土した陶質土器の蓋部(遺物No.434)



図IV-3-95 第58・59号土坑の平面および断面図



図IV-3-96 第60号土坑の平面および断面図

第58号土坑

C-2グリッド内に位置し、北側が調査区外に拡がっているため規模および形状は明確ではないが、確認されている幅は67cm、深さは最深部が13cmあり、断面形状は丸底状を呈している。

覆土は黒色土が1層で、締りも粘性も弱く、径1~2cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックを含んでいる。

遺物は確認されなかった。

第59号土坑

C-2~D-2グリッド内に位置し、東側で第70号土坑を切っている。北側が調査区外に拡がっているため規模および形状は明確ではないが、確認されている幅は90cm、深さは最深部が34cmあり、断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は黒色土が1層で、締りも粘性も弱く、径1~8cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックを含んでいる。

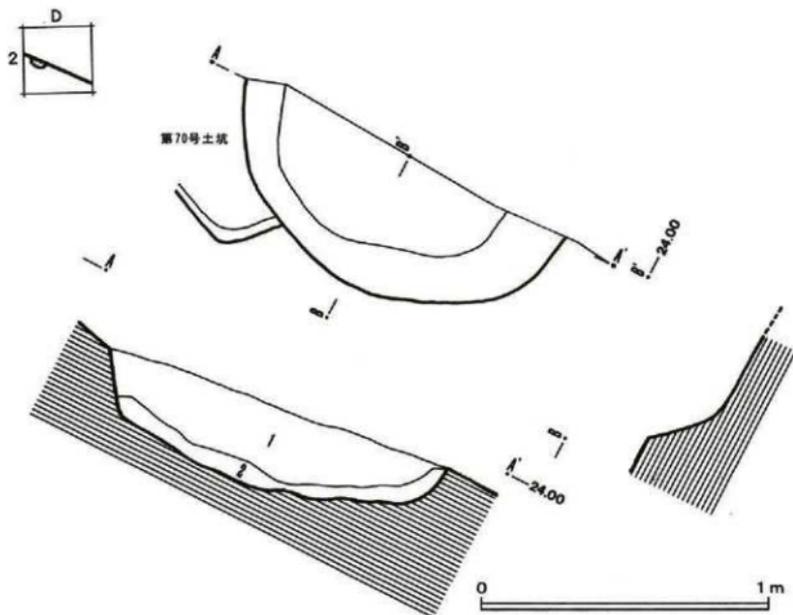
遺物は確認されなかった。

第60号土坑

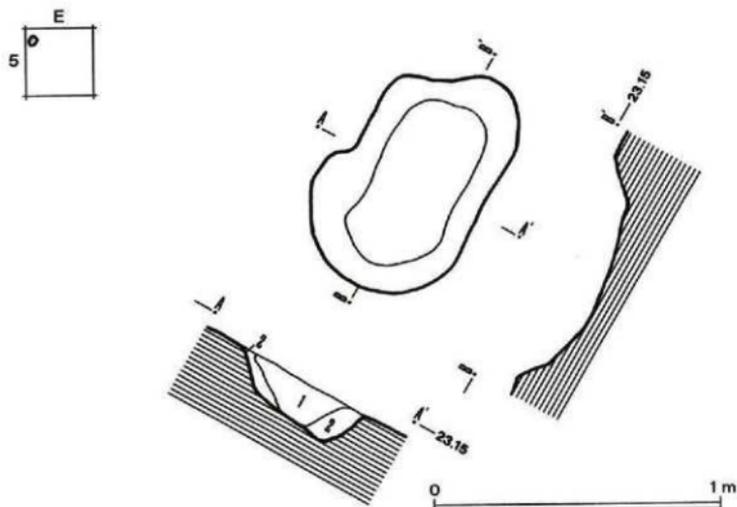
J-7グリッド内に位置し、斜面に沿って南西側を削平されており、北側が第28号溝の南部を切っている。平面形状は不整楕円形で、長さ101cm、最大幅67cm、深さは最深部が28cmあり、長軸の方向はN-40'-Eを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は暗黄褐色土が1層で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~4cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-97 第70号土坑の平面および断面図



図IV-3-98 第61号土坑の平面および断面図

第61号土坑

D-2グリッド内に位置し、西側は第70号土坑を切っている。北側が調査区外に広がっているため規模および形状は明確ではないが、平面形状は円形と思われる。確認された幅は125cm、深さは最深部が30cmあり、断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径1~10cm大の礫を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径1~4cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は確認されなかった。

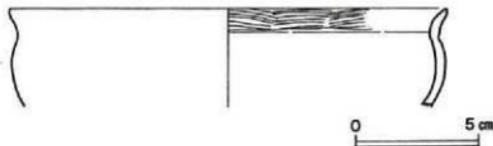
第62号土坑

E-5グリッド内に位置し、平面形状は不整楕円形で、長さ85cm、最大幅52cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸の方向はN-29°-Eを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

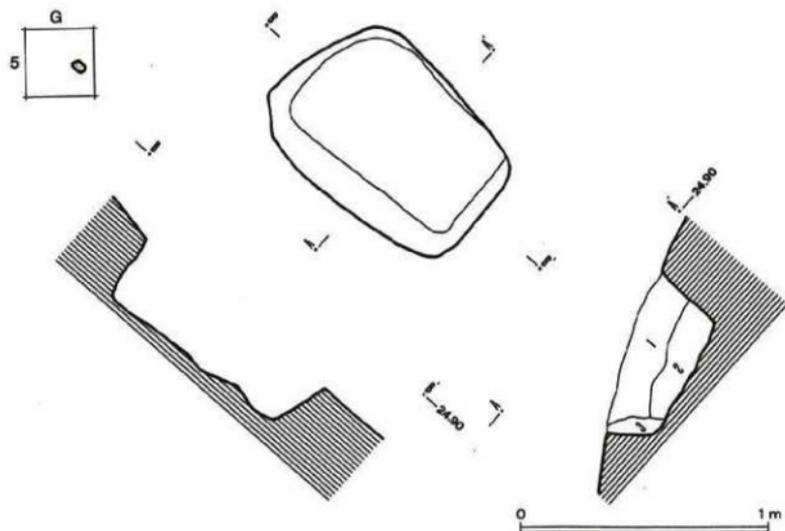
覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5~3cm大の礫を少量含み、炭化物・焼土粒を含んでいる。第2層は暗褐色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5~3cm大の礫を含み、炭化物・焼土粒を少量含んでいる。

遺物は覆土(第1層)下位から土師器の口縁部の破片(遺物No.462)が出土したほか、細片が8点出土している。

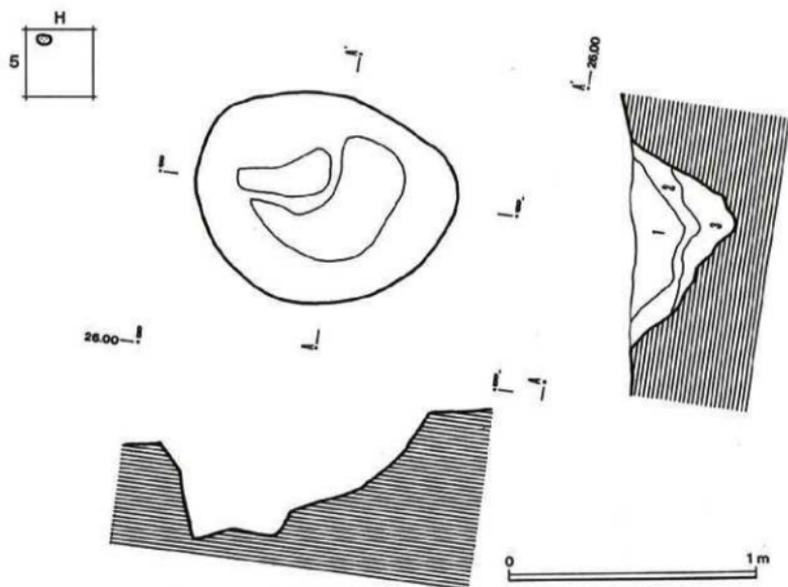
甕型土器の口縁部の破片(遺物No.462)は、頸部が屈曲しながら外反し、外面は横ナデ調整が、内面は刷毛目とナデ調整が施されている。推定口径は18.0cmを測る。



図IV-3-99 第62号土坑から出土した土師器の口縁部(遺物No.462)



図IV-3-100 第63号土坑の平面および断面図



図IV-3-101 第64号土坑の平面および断面図

第63号土坑

G-5グリッド内に位置し、平面形状は隅丸長方形で、長さ95cm、最大幅68cm、深さは最深部が32cmあり、長軸の方向はN-48°-Wを指している。断面形状は上に開くU字形を呈しており、底面は南西側に緩やかに傾斜している。

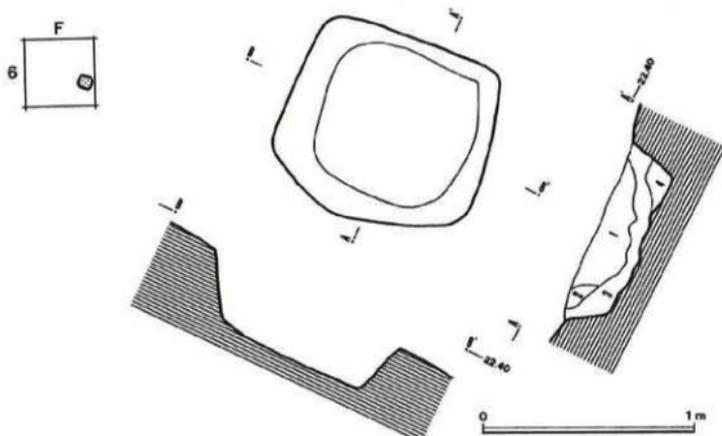
覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.3~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.3~2cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱い。遺物は確認されなかった。

第64号土坑

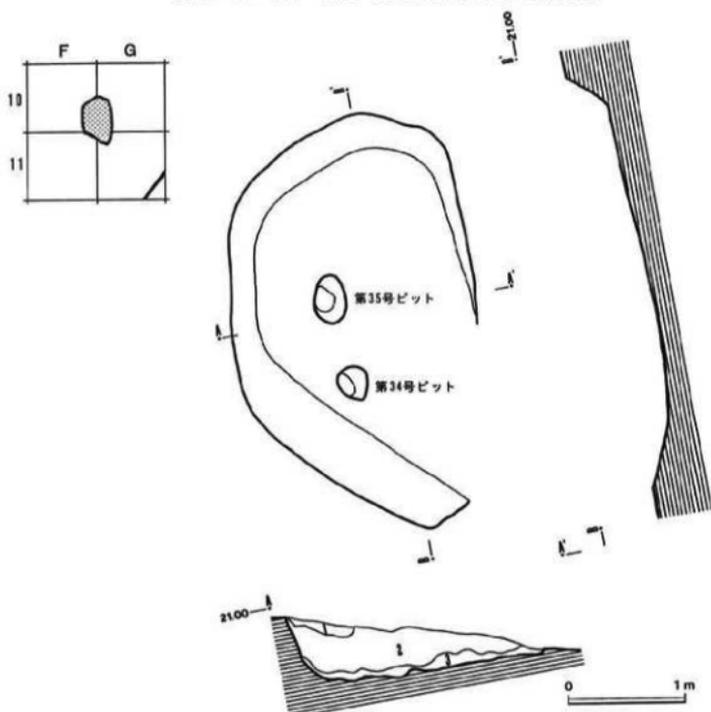
H-5グリッド内に位置し、平面形状は楕円形で、長さ106cm、最大幅86cm、深さは最深部が42cmと深く、長軸の方向はN-82°-Wを指している。断面形状はV字形を呈し、東側に深さ20cm程の段がみられる。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.3~4cm大の礫を多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.3~5cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-102 第65号土坑の平面および断面図



図IV-3-103 第66号土坑の平面および断面図

第65号土坑

F-6グリッド内に位置し、平面形状は隅丸正方形で、長さ98cm、最大幅90cm、深さは最深部が30cmあり、断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は4層に分けられ、第1層は黒褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.5~6cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5~6cm大の礫を多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~10cm大の礫を多く含んでいる。第4層も暗黄褐色土で、締りも粘性もやや弱く第3層と同じように見えるが、含んでいる礫の大きさが径0.5~2cm大で第3層と異なりを見せている。

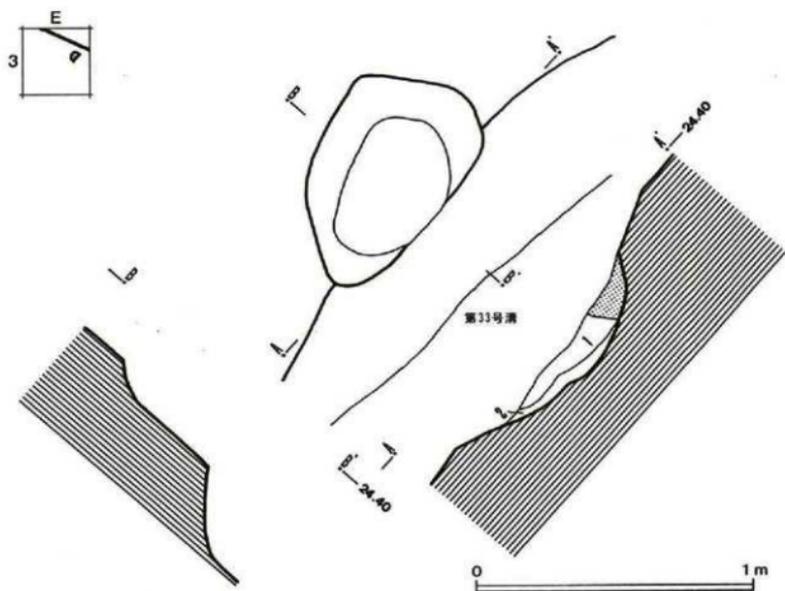
遺物は確認されなかった。

第66号土坑

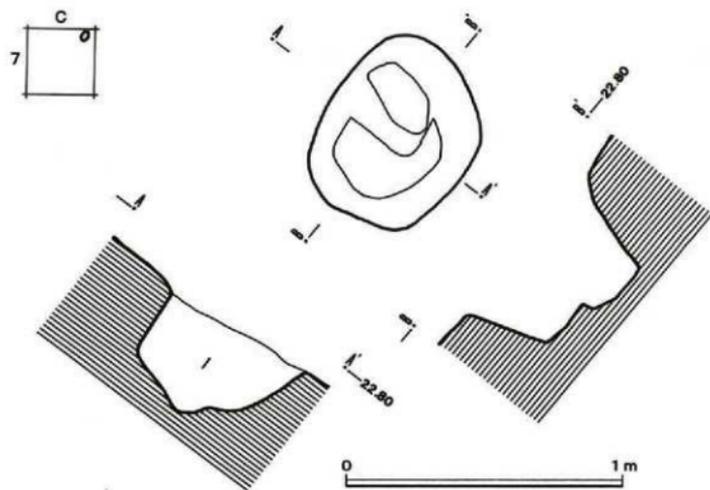
F-10~11~G-10~11グリッド内に位置し、東南側は斜面に沿って削平されている。また、中央部は第34・35号ピットにより切られている。平面形状は不整形円形と思われる、長さ368cm、最大幅214cm、深さは最深部が52cmあり、長軸の方向はN-70°-Wを指している。断面形状はおそらくU字形を呈していたと思われる。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.3~1cm大の礫を多く含んでいる。第2層は黒色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5~20cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5~15cm大の礫を含んでいる。

遺物は覆土の中位から土器の細片が3点出土したが、時代を確定できるものではなかった。



図IV-3-104 第67号土坑の平面および断面図



図IV-3-105 第68号土坑の平面および断面図

第67号土坑

E-3グリッド内に位置し、南東部は第33号溝により切られている。平面形状は不整形円形と思われ、長さは推定80cm、最大幅53cm、深さは最深部が13cmと浅い。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。第2層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

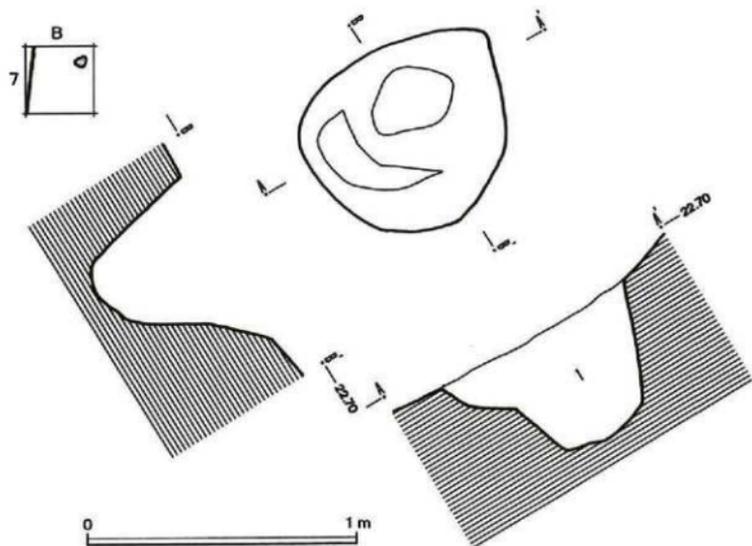
遺物は確認されなかった。

第68号土坑

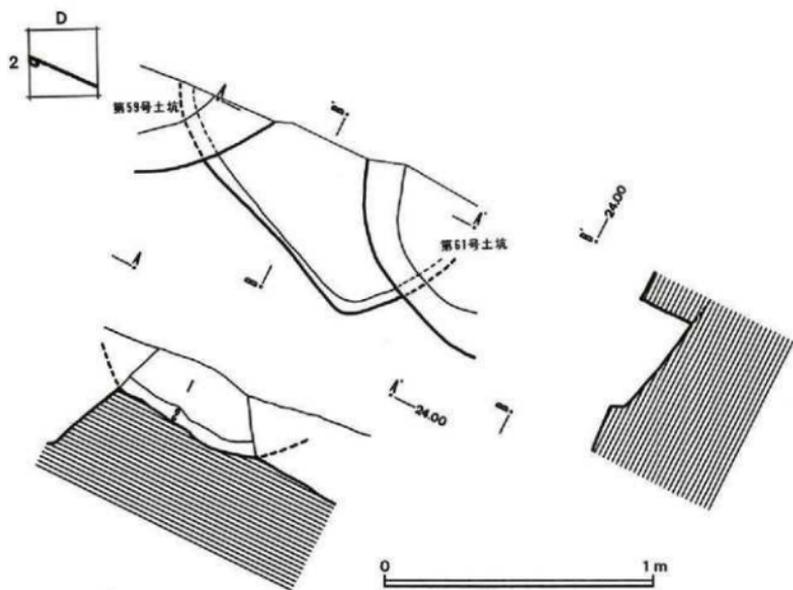
C-7グリッド内に位置し、平面形状は不整形円形で、長径68cm、短径55cm、深さは最深部が38cmあり、長軸の方向はN-37°-Eを指している。断面形状は上に開くU字形を呈しており、南側に深さ30cmの段がみられる。

覆土は暗褐色土が1層で締りは強く、粘性は弱い。径1～4cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-106 第59号土坑の平面および断面図



図IV-3-107 第70号土坑の平面および断面図

第69号土坑

B-7グリッド内に位置し、平面形状は不整円形で、長径83cm、短径72cm、深さは最深部が49cmあり、長軸の方向はN-39'-Eを指している。断面形状は上に開くU字形を呈しており、南西側に深さ10cmの段がみられる。

覆土は黒褐色土が1層で、締りも粘性も弱く、径1～5cm大の礫を少量含み、黄褐色土のブロックを多く含んでいる。

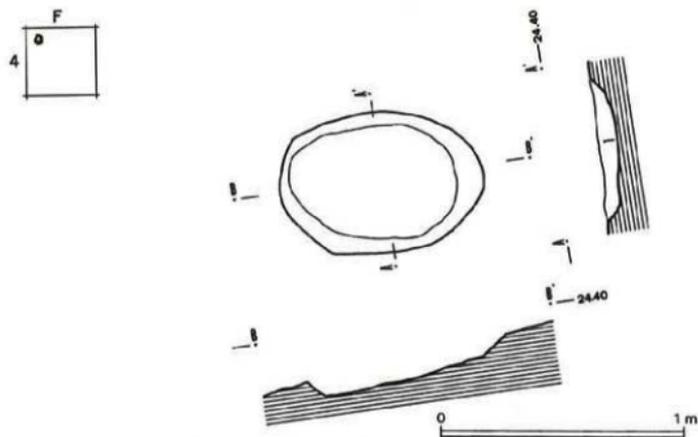
遺物は確認されなかった。

第70号土坑

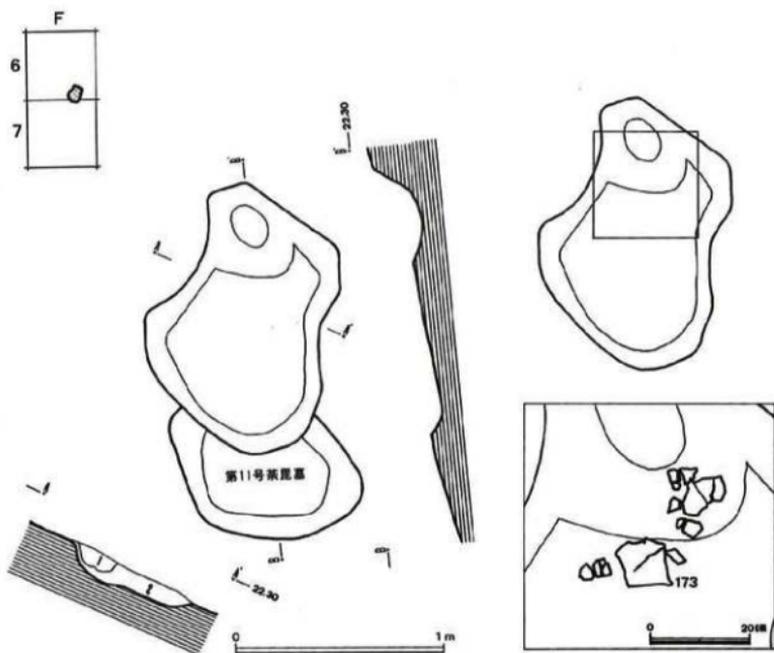
D-2グリッド内に位置し、北側が調査区外に抜がっており、西側は第59号土坑、東側は第61号土坑に切られているため規模および形状は明確ではないが、確認された深さは最深部が24cmある。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で、締りも粘性もやや強く、径0.5～3cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや強く、粘性は強い。黄褐色土の粒子を含んでいる。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-108 第71号土坑の平面および断面図



図IV-3-109 第72号土坑の平面および断面図

図IV-3-110 第72号土坑の遺物出土状況図

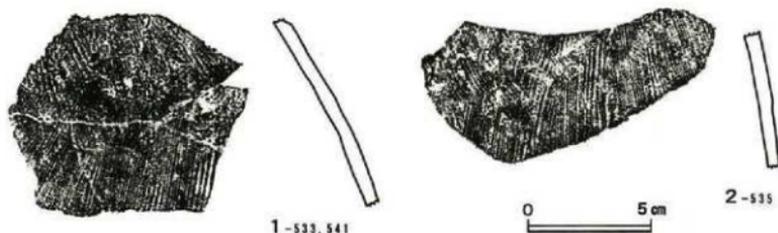
第71号土坑

F-4グリッド内で、第2号方形周溝墓の主体部の西側に隣接している。平面形状は楕円形で、長さ81cm、最大幅56cm、深さは最深部が9cmと浅く、長軸はN-84°-Eを指している。断面形状は浅いため定かではないがやや丸底状を呈している。

覆土は暗赤褐色土が1層で、締りも粘性もやや弱く、径1~2cm大の礫を少量含み、焼土のブロックと焼土粒を多く含んでいる。

遺物は覆土中に土師器の破片が散在して出土している。

1(遺物No.533, No.541)と2(遺物No.535)は土師器の胴部の破片で、体部の外面は斜位のハケメ調整が格子状に施されている。内面は横位のハケメ調整が目立っている。胎土には金雲母が含まれている。



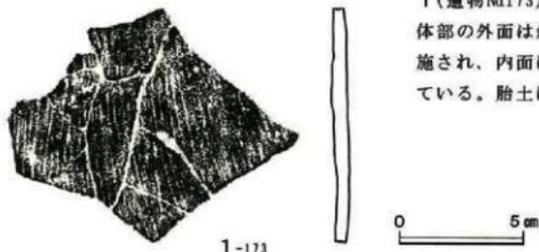
図IV-3-111 第71号土坑から出土した遺物

第72号土坑

第8号茶匙墓の東側約5mのF-6グリッド内に位置し、第11号茶匙墓を切っている。平面形状はの不整楕円形で、長さ130cm、最大幅93cm、深さは最深部が16cmと浅い。長軸はN-7°-Wとほぼ南北を指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈し、北側に凹みがある。

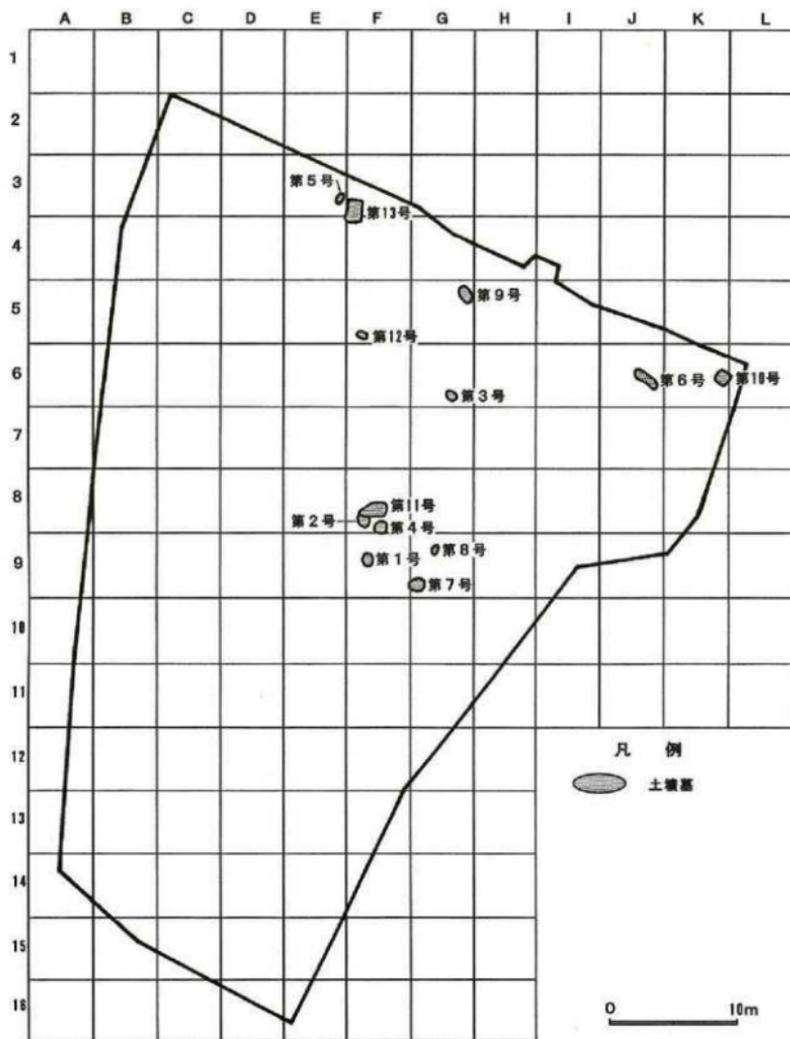
覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径1~3cm大の礫を少量含み、焼土粒をブロック状に含んでいる。第2層は暗赤褐色土で、締りも粘性も弱く、径1~2cm大の礫を少量含み、焼土粒を多く含んでいる。

遺物は覆土中に土師器の破片が散在して出土している。



1(遺物No.173)は土師器の胴部の破片で、体部の外面は斜位のハケメ調整が格子状に施され、内面は横位のハケメ調整が目立っている。胎土には金雲母が含まれている。

図IV-3-112 第72号土坑から出土した遺物



図IV-3-113 土壇基の分布図

3. 土壌墓と遺物

土壌墓の分布は黒ボク土が堆積している谷部を挟んで南側の斜面上位に位置する第1・2・4・7・8・11号土壌墓の6基と北側斜面に位置する第3・5・9・12・13号土壌墓の5基および同じく北側斜面の東端に位置する第6・10号土壌墓の2基の3グループに大別できる。また、これらの土壌墓はいずれも斜面に立地することが特徴の一つで、これは茶毘墓の多くが平坦部に立地することと対照的である。

土壌墓は13基が確認されたが、このうち、他の遺構と切り合い関係にあるのは第2・4・5号土壌墓で、いずれも土坑あるいは溝をそれぞれ切っている。

土壌墓の平面形状で区分すると円形・不整形円形が2基(約15%)、楕円形・不整形楕円形が9基(約70%)、隅丸長方形が2基(約15%)である。規模は長径が75~234cmで平均が約129cm、短径は55~139cmで平均が約89cm、深さは最深部が15~59cmで平均が約38cmを測る。長軸の方向はほぼ南北を指すものが3基あるが、全体として一定していない。

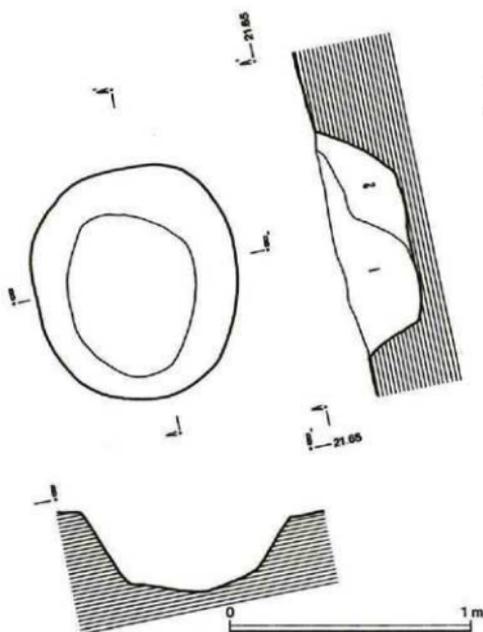
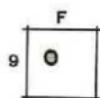
出土遺物は供献品としての土器が最も多く、ほかに銭貨・鉄釘・人骨片が出土している。

土器は第1・2・4・5・7・8・9・11・12・13号土壌墓で出土しており、なかでも「かわらけ」の数が最も多く、第2・4・5・7・8・9・12号土壌墓で出土している。「かわらけ」には「ロクロ成形」により作られた土器と「手捏ね成形」により作られた土器の2種類があり、原則として一つの遺構からはどちらかの1種類が出土するのが特徴である。また、第1号土壌墓より丸碗が、第11号土壌墓より絵付けの陶器が、第13号土壌墓より土師器片がそれぞれ出土している。

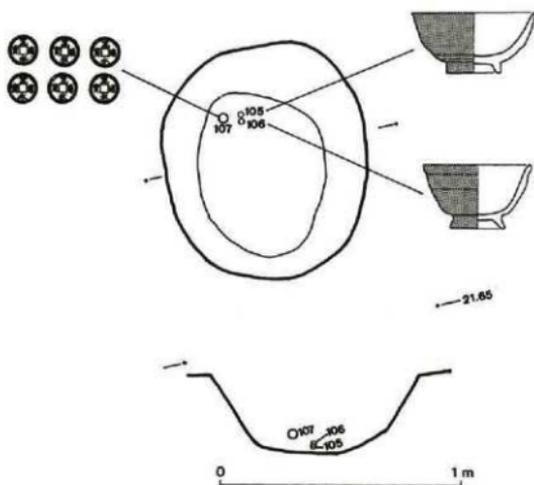
銭貨は第1・2・3・5・9号土壌墓より計22枚出土した。これらはいわゆる六道銭で、この六道銭の原則である6枚が揃って出土したのは第1・2・9号土壌墓である。銭貨の種類は「寛永通寶」が13枚と最も多く、このうち背面に「文」の文字がある新寛永通寶が7枚ある。「元豊通寶」は第2号土壌墓より2枚出土した。なお、種類の確認が出来ないものが7枚ある。

鉄製品は第4号土壌墓より釘が1点出土している。

人骨は第4・6・7・10号土壌墓より124点が出土したが、それらは原形をとどめるものがなく、骨片・骨粉の状態で出土している。このうち、第6号土壌墓からは頭蓋・下顎骨・歯・頸骨・肋骨・大腿骨などがまとまって出土している。



図IV-3-114 第1号土壌基の平面および断面図



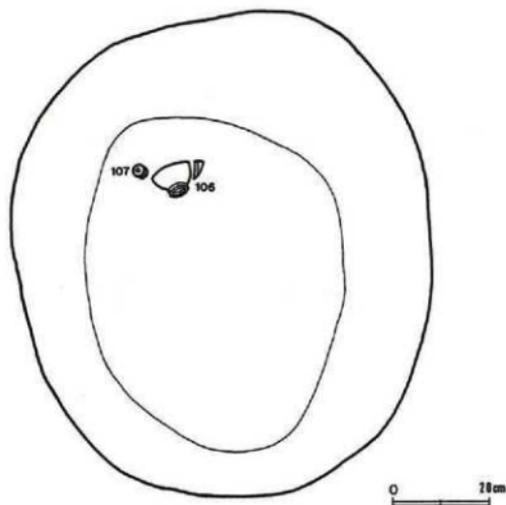
図IV-3-115 第1号土壌基の遺物分布図

第1号土壇墓

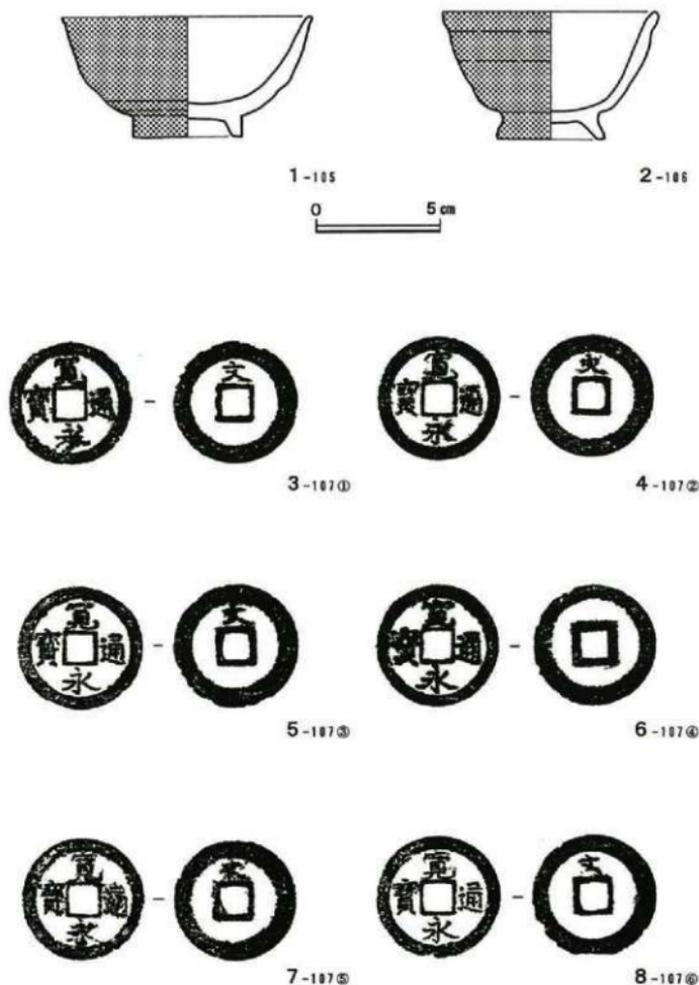
F-9グリッド内で黒ボク土が堆積する谷部に面した南側斜面に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径99cm、短径89cm、深さは最深部が32cmある。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.5~30cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りも粘性も弱く、径0.5~5cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は釉が施された陶質の丸碗が2点と6枚が重なった銭貨が、土壇の底面付近より並ぶように出土している。人骨は確認されなかった。



図IV-3-116 第1号土壇墓の遺物出土状況図



図IV-3-117 第1号土壌墓から出土した遺物

1～2：陶質の丸碗、3～8：銭貨「寛永通寶」

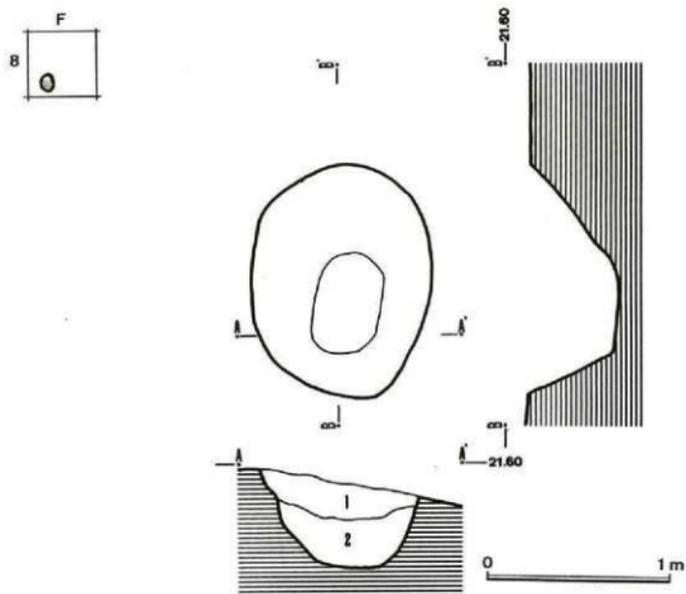
1(遺物No105)は釉が施された陶質の丸碗で、口径 8.8cm、底径 2.2cm、器高 5.2cmを測る。体部の外面の下半にヘラ削りが施され、暗茶褐色の素地の内・外面の上半に暗緑褐色の釉が施されている。

2(遺物No106)も釉が施された陶質の丸碗で、口径10.2cm、底径 4.4cm、器高 4.9cmを測る。体部の外面の下半はヘラ削り、内面は回転のナデ調整が施されている。素地は茶褐色で、内・外面に暗黄褐色の釉が施されている。

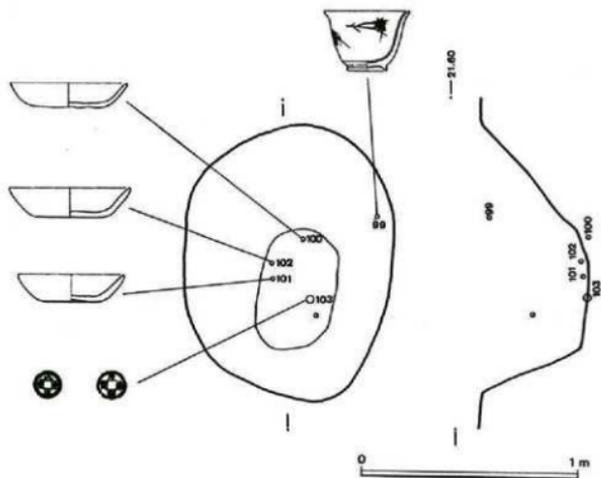
3～8(遺物No107-①～⑥)は銭貨「寛永通寶」で、その内5枚は背面に「文」の文字がある新寛永通寶である。これらの銭貨は、いわゆる六道銭と考えられ、6枚が重なって出土している。

銭貨の計測値

遺物No	種類	径(mm)	重量(g)	備考
107-①	寛永通寶	25.0	3.50	背面に「文」の文字がある
107-②	寛永通寶	25.2	2.67	背面に「文」の文字がある
107-③	寛永通寶	25.0	3.88	背面に「文」の文字がある
107-④	寛永通寶	24.7	3.35	
107-⑤	寛永通寶	25.0	3.14	背面に「文」の文字がある
107-⑥	寛永通寶	25.0	2.97	背面に「文」の文字がある



図IV-3-118 第2号土壌墓の平面および断面図



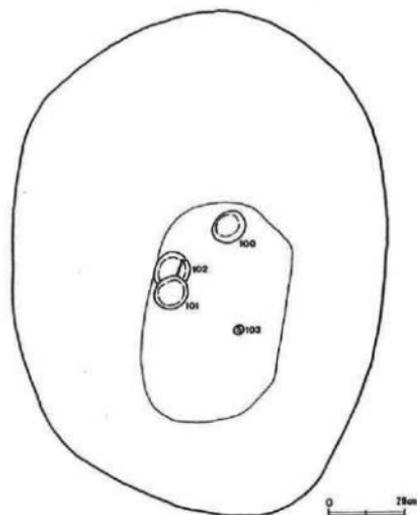
図IV-3-119 第2号土壌墓の遺物分布図

第2号土墳墓

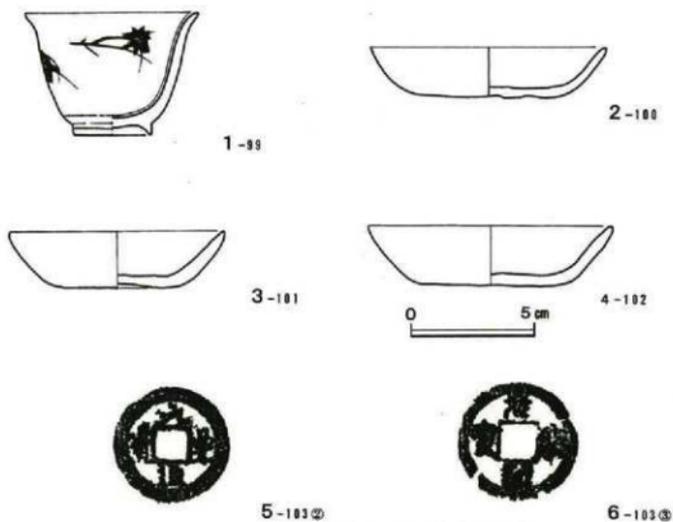
F-8グリッド内で、第1号土墳墓の北約3mに位置し、北側部分は第11号土墳墓を切っている。平面形状は楕円形で、長径126cm、短径97cm、深さは最深部が47cmとやや深く、長軸はN-9'-Eとほぼ北を指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈しており、南壁の立ち上がりは北壁と比べて急である。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.5~12cm大の礫をやや多く含むほかに、骨の細片を少量含んでいる。第2層は暗茶褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.5~20cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は覆土の上部から染付の猪口が、底面付近からは「かわらけ」が重なるように出土し、「かわらけ」と並ぶように銭貨が出土している。



図IV-3-120 第2号土壇墓の遺物出土状況図



図IV-3-121 第2号土壇墓から出土した遺物

1：染付、2～4：かわらけ、5・6：銭貨「元豊通寶」

1 (遺物No99)は染付の猪口で、口径7cm、器高5cm、底径3.1cmを測り、松葉に紅葉の絵が描かれている。

2 (遺物No100)は手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の内・外面に横ナデ調整が、底部は平底で外面はへら削り調整が施されている。

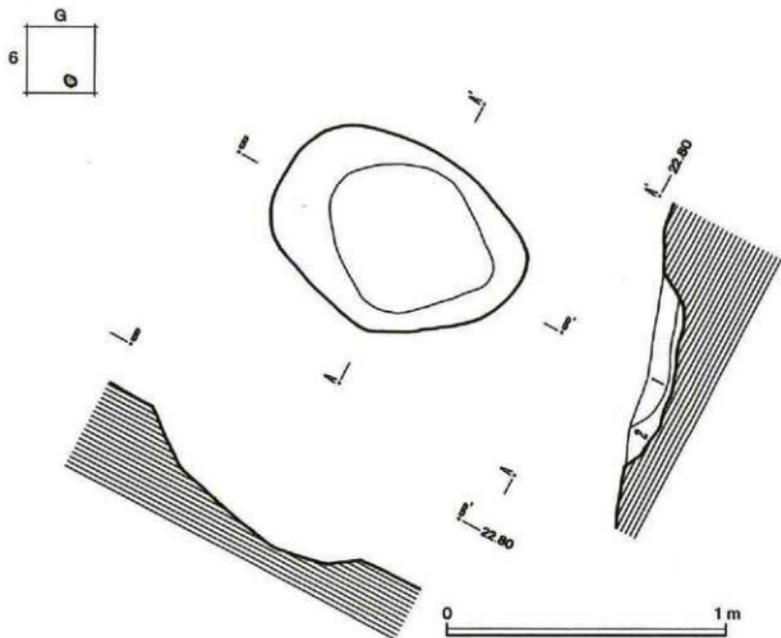
3 (遺物No101)も手捏ね成形の「かわらけ」で底部に僅かに凸面がみられ、体部の内・外面にナデ調整が、底部の外面にはやや粗いナデ調整が施されている。

4 (遺物No102)も手捏ね成形の「かわらけ」で、3(遺物No101)と同様の形態・調整がみられる。胎土に金雲母が含まれるのが特徴である。

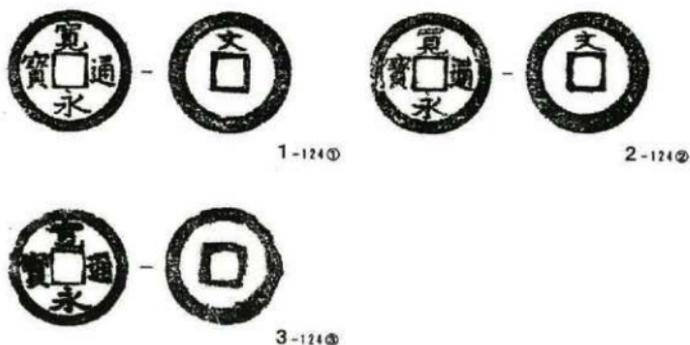
5・6(遺物No103)は銭貨「元豊通寶」で、6枚のうち3枚は熔着し、ほかの1枚も表面が腐食して文字を読み取ることができない状態である。

銭貨の計測値

遺物No	種類	径(mm)	重量(g)	備考
103-①	□□□□	23.2	2.67	表面が腐食
103-②	元豊通寶	24.3	2.67	
103-③	元□□寶	24.4	2.21	
103-④	□□□□	23.7	7.22	3枚が熔着、表面が腐食



図IV-3-122 第3号土壌基の平面および断面図



図IV-3-123 第3号土壌基から出土した遺物

1～3：銭貨

第3号土壌墓

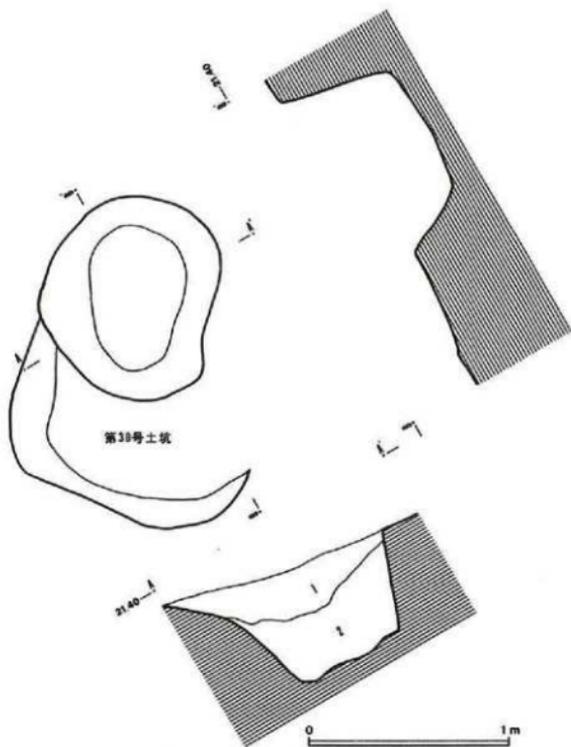
G-6グリッド内で、調査区北側の南向き斜面の中位に位置し、平面形状は楕円形で、長径94cm、短径70cm、深さは最深部が15cmと浅く、長軸はN-77'-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが底面は丸底状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.5～2cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5～1cm大の礫を少量含んでいる。

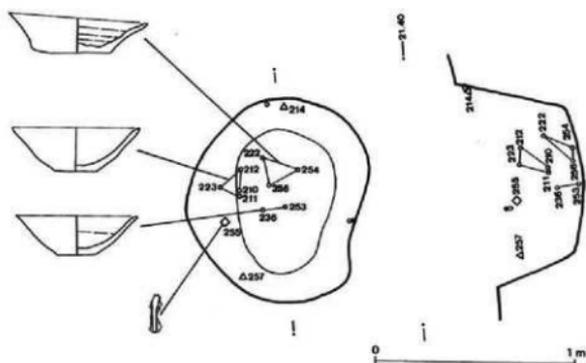
遺物は土壌内中央部の底面付近より銭貨「寛永通寶」(遺物No.124-①～③)が3枚重なるように出土している。この内の2枚は背面に「文」の字のある新寛永通寶である。

銭貨の計測値

遺物No.	種類	径(mm)	重量(g)	備考
124-①	寛永通寶	25.0	3.18	背面に「文」の文字がある
124-②	寛永通寶	25.0	3.24	背面に「文」の文字がある
124-③	寛永通寶	24.3	2.46	



図IV-3-124 第4号土墳墓の平面および断面図



図IV-3-125 第4号土墳墓の遺物分布図

第4号土墳墓

F-8グリッド内で、第2号土墳墓の東方約2mに位置し、第30号土坑の北側部分を切っている。平面形状は不整楕円形で、長径101cm、短径87cm、深さは最深部が59cmと深く、長軸はほぼ南北を指している。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒色土で締りはやや強く、粘性はやや弱い。径0.5~2cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗黄褐色土で、締りは強く、粘性はやや弱い。径0.5~2cm大の礫と黄色土の小さなブロックを少量含んでいる。

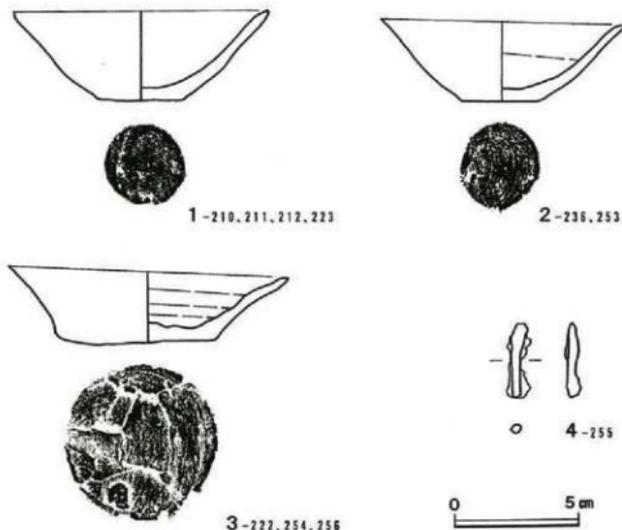
遺物は覆土の中位から底面にかけて「かわらけ」が3個体分、覆土の中位から鉄釘が1本、覆土の中位から上位にかけて頸骨(遺物No214)や腓骨(遺物No257)と思われる人骨片が出土している。

1(遺物No210、No211、No212、No223)はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

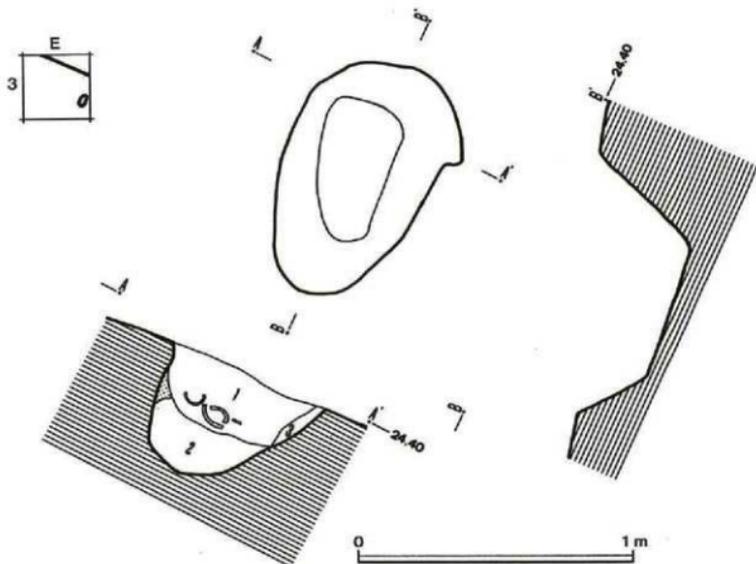
2(遺物No236、No253)もロクロ成形の「かわらけ」で形態・調整とも1と同一である。この2個体は土壌中央部の底面付近から出土している。

3(遺物No222、No254、No256)もロクロ成形の「かわらけ」で、1と2に比べて底径が大きい以外は、調整方法など同一である。

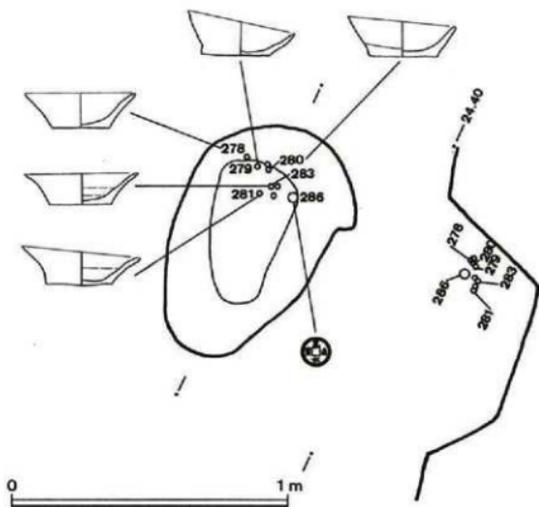
4(遺物No255)は鉄製の釘で、頭部と先端部が欠損した状態で出土している。



図IV-3-126 第4号土墳墓から出土した遺物
1~3:かわらけ、4:鉄釘



図IV-3-127 第5号土墳墓の平面および断面図



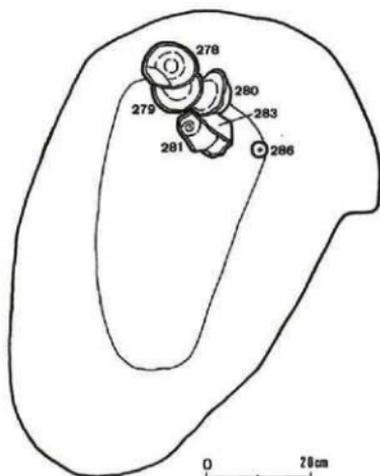
図IV-3-128 第5号土墳墓の遺物分布図

第5号土壇墓

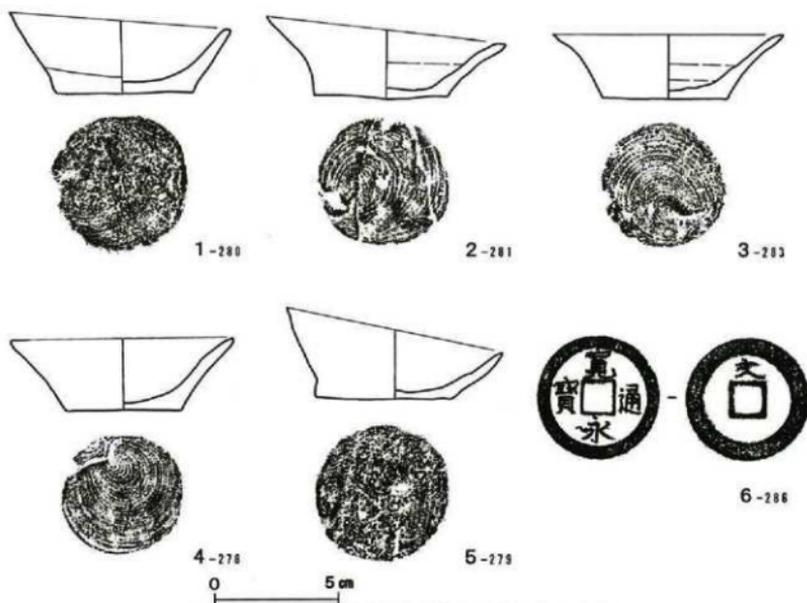
E-3グリッド内に位置し、第2号方形周溝墓の東溝(第33号溝)を切っている。平面形状は不整楕円形で、長径89cm、短径58cm、深さは最深部が44cmとやや深く、長軸はN-19'-Eを指している。断面形状は丸底で上に開くU字形を呈している。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りも粘性もやや弱く、径0.5~4cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りも粘性もやや強く、径0.5~2cm大の礫を少量含んでいる。第3層は暗黄褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5cm大の礫を少量含んでいる。

遺物は土壇の中央から北側にかけての覆土第1層の底面より、土器は重なるように、銭貨は土器に隣接して出土している。



図IV-3-129 第5号土壇基の遺物出土状況図



図IV-3-130 第5号土壇基から出土した遺物

1(遺物No.280)はロクロ成形の「かわらけ」で、底径が小さく、体部の外面はへら削り、内面は底部から体部にかけてへら削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

2(遺物No.281)と3(遺物No.283)もロクロ成形の「かわらけ」で形態・調整ともに1と同一である。

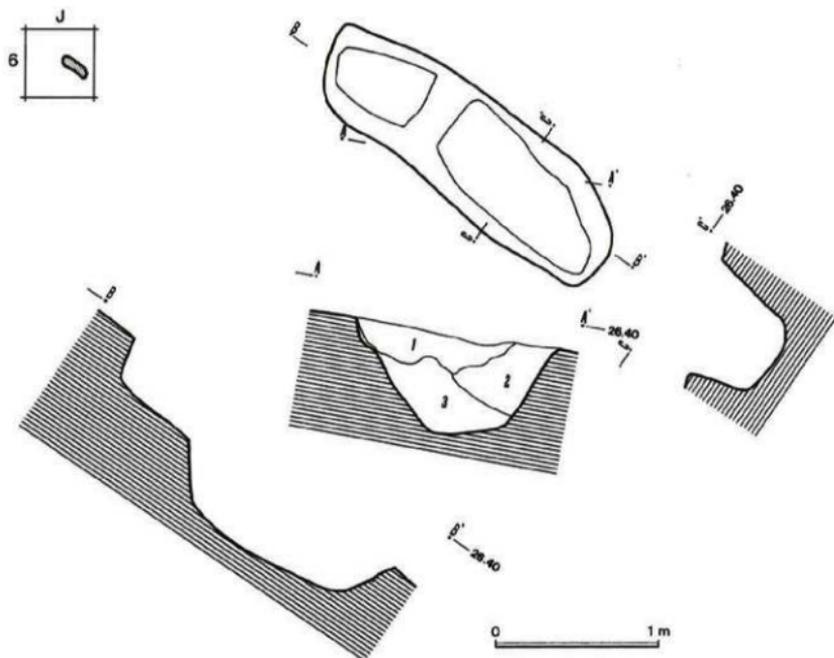
4(遺物No.278)もロクロ成形の「かわらけ」で、底径が小さい以外は他のかわらけと同一である。

5(遺物No.279)もロクロ成形の「かわらけ」であるが、口縁部にかけての立ち上がりに相違が見られる。底部は静止糸切りをした後にナデ調整を施したようである。

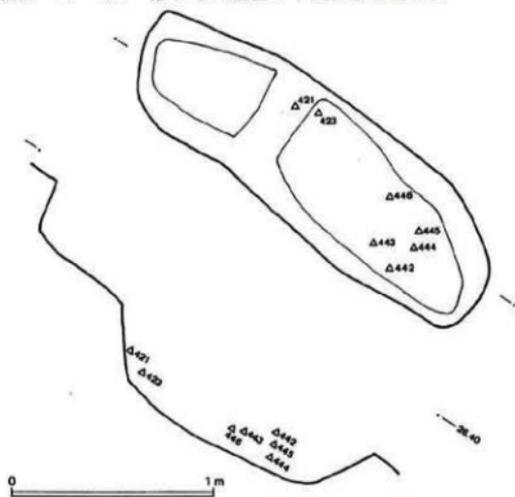
6(遺物No.286)は銭貨「寛永通寶」で、背面に「文」の文字がある新寛永通寶である。

銭貨の計測値

遺物No.	種類	径(mm)	重量(g)	備考
286	寛永通寶	25.3	3.02	背面に「文」の文字がある



図IV-3-131 第6号土墳墓の平面および断面図



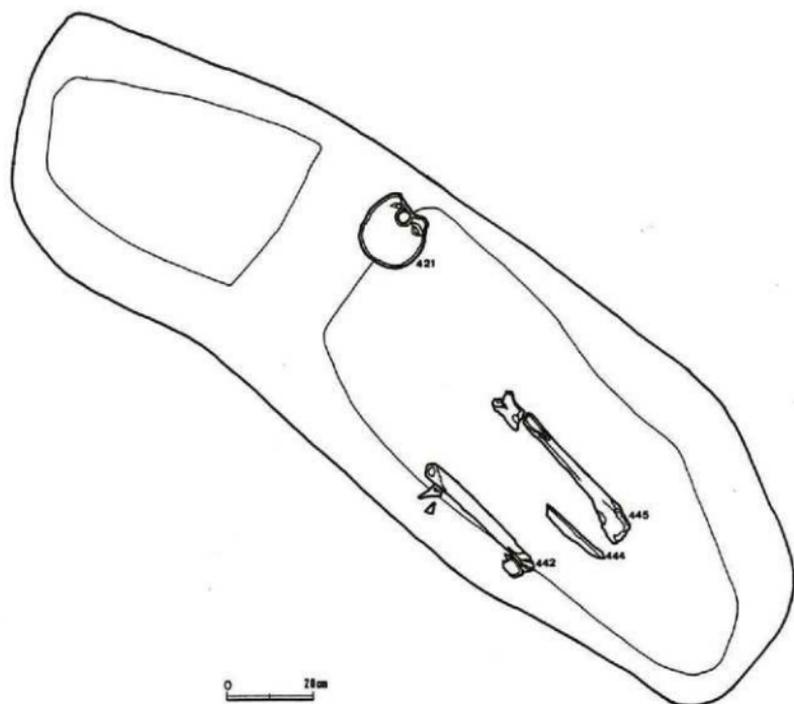
図IV-3-132 第6号土墳墓の遺物分布図

第6号土壌墓

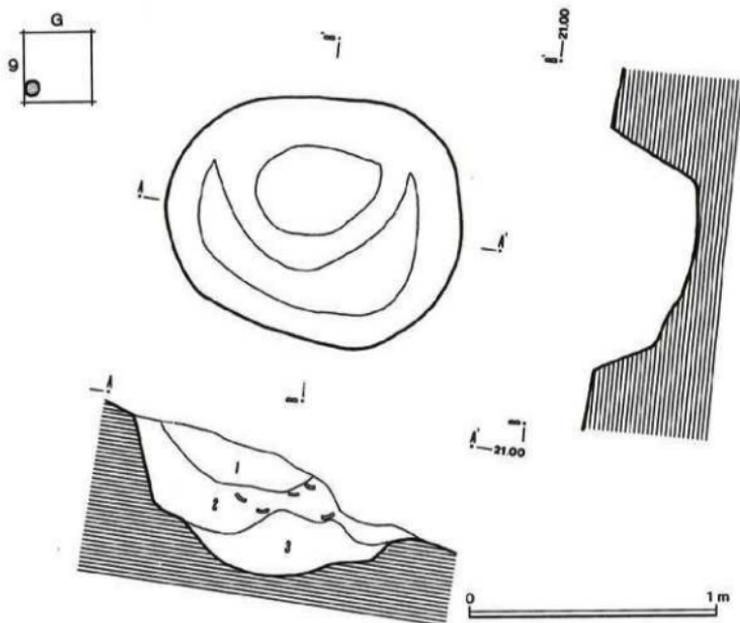
J-6グリッド内で北東の急斜面の上位に位置し、平面形状は細長い隅丸長方形で、長径210cm、短径66cm、深さは最深部が58cmとやや深く、長軸はN-52°-Wを指している。断面形状はU字形を呈しており、北西側に深さ24cmほどの段がある。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色で、締りも粘性も弱く、径0.3~7cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径0.3~10cm大の礫をやや多く含んでいる。第3層は暗黄褐色土で、締りは弱く、粘性はやや弱い。径0.3~8cm大の礫を多く含んでいる。

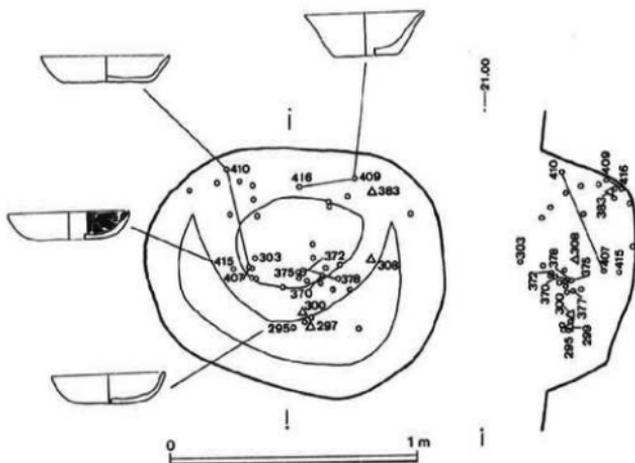
遺物は人骨片のみで、大臼歯3本、小臼歯1本、門歯1本を含む頭蓋骨(遺物No421)、頸椎、肋骨(遺物No423)、脛骨(遺物No443、No444)、大腿骨(遺物No442、No445)など108点が出土している。これらの人骨片は土壌の深い部分の北西側から頭蓋骨、頸椎、肋骨などが、中央から南東側にかけての底面付近のから脛骨、大腿骨などが出土している状況からみて、おそらく屈葬と思われる。



図IV-3-133 第6号土壌墓の遺物出土状況図



図IV-3-134 第7号土壇墓の平面および断面図



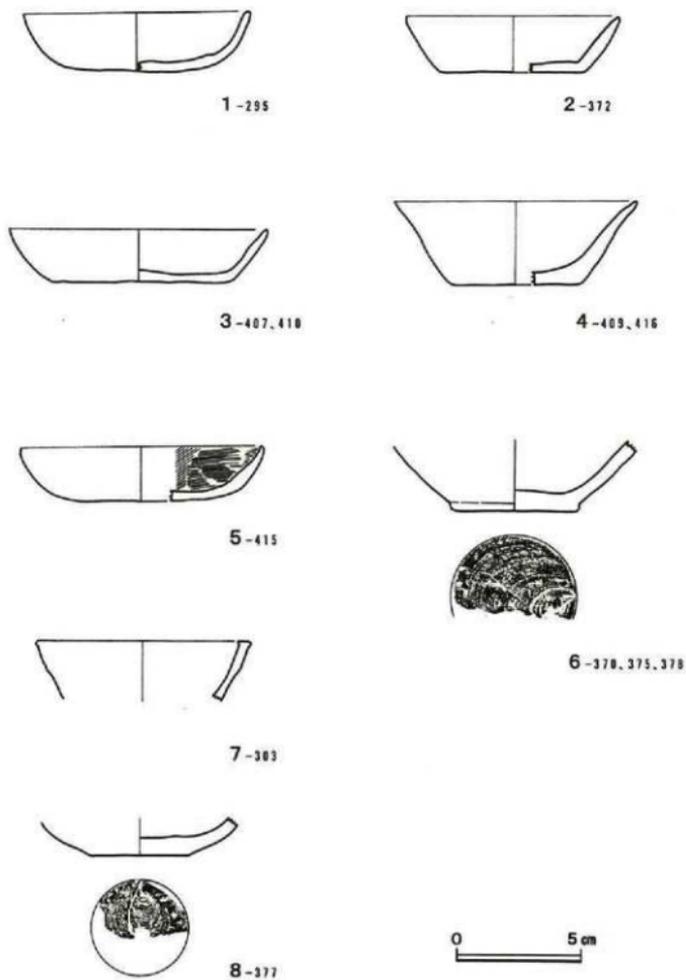
図IV-3-135 第7号土壇墓の遺物分布図

第7号土墳墓

G-9グリッド内で、第1号土墳墓の東南側約5mに位置し、平面形状は楕円形で、長径120cm、短径は101cm、深さは最深部が50cmとやや深く、長軸はN-82'-Wを指している。断面形状は丸底で上に開くU字形を呈しており、南側を巡るように小さな段がある。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は強い。径0.5~8cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で締りも粘性もやや弱く、径0.5~8cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。第3層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや強い。径0.5~15cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は北側壁面の底面に近い部分と中央部の中位から「かわらけ」をはじめ、施釉陶質土器が散在するように出土し、人骨片は頰骨・腓骨・肋骨(遺物No299、No300、No308、No383)など12点が出土している。



図IV-3-136 第7号土塚墓から出土した遺物
1～6：かわらけ、7～8：釉が施された陶質土器

1 (遺物No295) は手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面はヘラ削りの後に横ナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削りの後に横ナデ調整が施されている。底部は平底で粗いナデ調整が施されている。

2 (遺物No372) も手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面は磨滅のため詳細は不明であるが、内面は横ナデ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施されている。

3 (遺物No407、No410) も手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の外面はナデ調整が施され、内面はヘラ削りの後にナデ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施される。

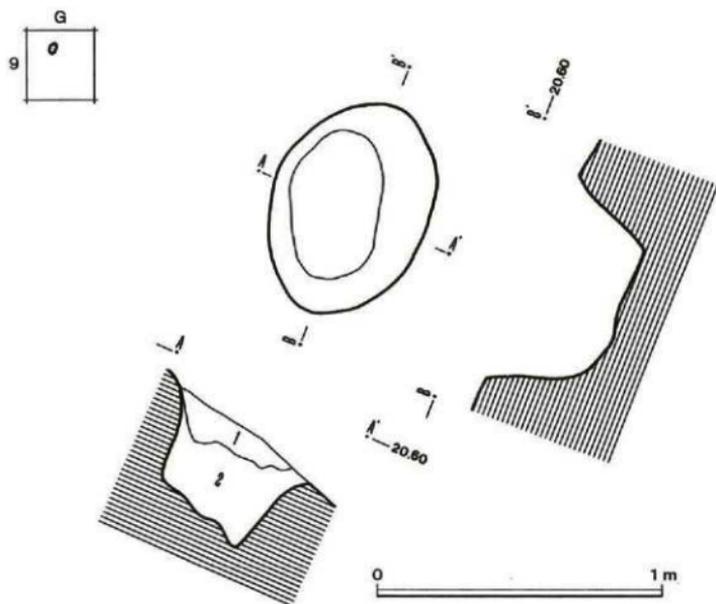
4 (遺物No409、No416) も手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面はハケメ調整が施され、内面はナデ調整が施されている。底部は平底でヘラ削りが施されている。

5 (遺物No415) も手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の外面は横ナデ調整が施され、内面はやや粗いハケメ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施されている。

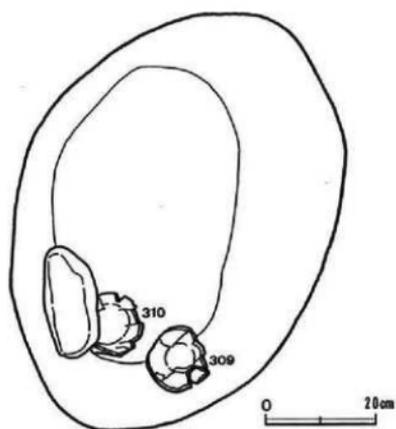
6 (遺物No370、No375、No378) ロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)した後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。胎土に金雲母が含まれている。

7 (遺物No303) は釉が施された陶質土器の口縁部で、口径が8.6cmを測り、僅かに内彎しながら立ち上がっている。口唇部の内外に稜を有し、内・外面ともにナデ調整をした後に茶褐色の釉が施されている。素地は暗橙褐色である。

8 (遺物No377) も釉が施された陶質土器の底部から体部にかけての破片で、体部の内・外面ともに回転のナデ調整をした後に乳白色の釉が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。素地は淡赤褐色である。



図IV-3-137 第8号土墳墓の平面および断面図



図IV-3-138 第8号土墳墓の遺物出土状況図

第8号土墳墓

G-9グリッド内で、第7号土墳墓の北側約3mに位置し、平面形状は楕円形で、長径78cm、短径55cm、深さは最深部が36cmあり、長軸はN-22°-Eを指している。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.5~3cm大の礫を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~5cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土墳の南側の第1層の底面付近から「かわらけ」が2点並んで出土している。

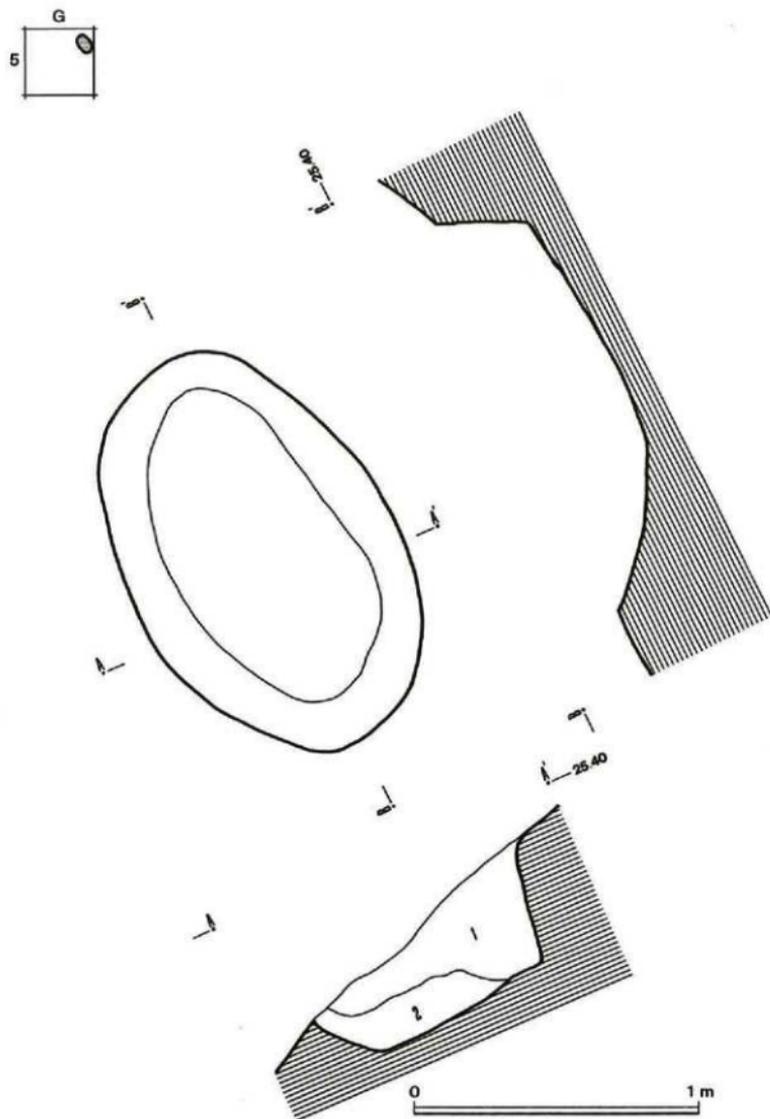
1(遺物No309)は手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の外面は横ナデ調整が施され、内面はやや粗いハケメ調整とナデ調整が施されている。底部は平底でナデ調整が施されている。胎土に金雲母が含まれている。

2(遺物No310)も手捏ね成形の「かわらけ」で、形態・調整・胎土とも1と同一である。



図IV-3-139 第8号土墳墓から出土した遺物

1・2：かわらけ



図IV-3-140 第9号土墳墓の平面および断面図

第9号土壌墓

G-5グリッド内で、第3号方形周溝墓内の南向き斜面に位置し、平面形状は楕円形で、長径150cm、短径96cm、深さは最深部が41cmあり、長軸はN-27°-Wを指している。断面形状は上に開くU字形を呈しており、南西側の壁面は北東側の壁面に比べて緩やかに立ち上がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~3cm大の礫をやや多く含むほかに、炭化物と黄褐色土の粒を少量含んでいる。第2層は暗黒褐色土で、締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5~2cm大の礫をやや多く含み、炭化物を少量含んでいる。

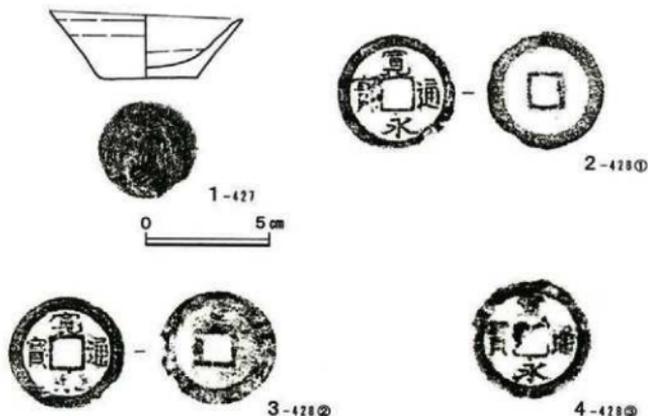
遺物は北側の壁に近い覆土から「かわらけ」が1点、中央部よりやや北側の土壌の底面に近いところから銭貨が6枚重なって出土している。

1(遺物No427)はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の外面はへら削りにナデ調整が施され、内面は回転のナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

2~4(遺物No428-①~③)は銭貨「寛永通寶」で、これ以外の3枚は熔着し表面が腐食しているため文字の判読は出来ない状態である。

銭貨の計測値

遺物No.	種類	径(mm)	重量(g)	備考
428-①	寛永通寶	24.3	2.53	
428-②	寛永通寶	23.5	1.38	
428-③	寛永通寶	25.0	3.11	
428-④	□□□□	26.8	9.72	3枚が熔着、表面が腐食



図IV-3-141 第9号土壌墓から出土した遺物

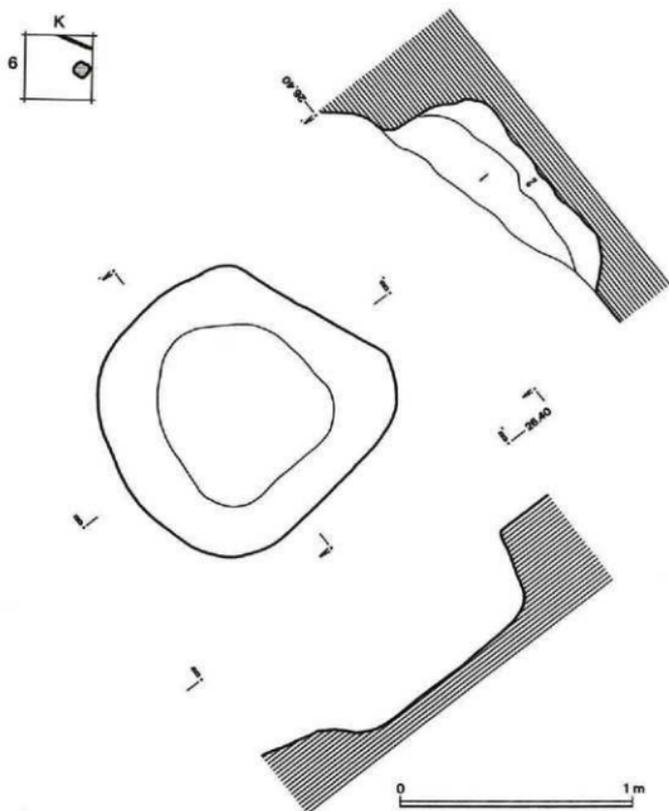
1:かわらけ、2~4:銭貨「寛永通寶」

第10号土墳墓

K-6グリッド内で、南向き斜面の上位にある第6号土墳墓から東へ約5mに位置し、平面形状は不整形円形で、長径129cm、短径126cm、深さは最深部が36cmあり、長軸は東西を指している。断面形状はU字形を呈しているが、南側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で、締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.3~10cm大の礫を多く含んでいる。第2層は暗茶褐色土で、締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.3~7cm大の礫を多く含み、骨粉をやや多く含んでいる。

遺物は粉状の骨(遺物№556)が土墳の中央部よりやや北側の底面から出土している。



図IV-3-142 第10号土墳墓の平面および断面図

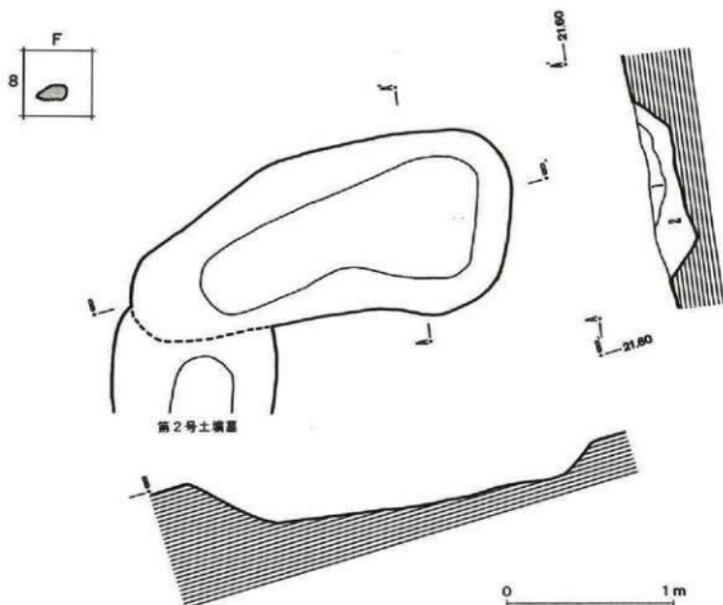
第11号土墳墓

F-8グリッド内で、第3号土墳墓の西約7mに位置し、西側を第2号土墳墓に切られている。平面形状は不整楕円形で、長径234cm、短径111cm、深さは最深部が28cmあり、長軸はN-73'-Eを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.5~6cm大の礫をやや多く含んでいる。第2層は暗茶褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径1~8cm大の礫をやや多く含んでいる。

遺物は土墳内の南壁付近より土器片が1点出土している。

1(遺物No.127)は陶質の皿形土器の口縁部の破片で、推定口径10.8cm、器高1.8cm、推定底径6.8cmを測り、内・外面ともに回転の丁寧なナデ調整が施されている。

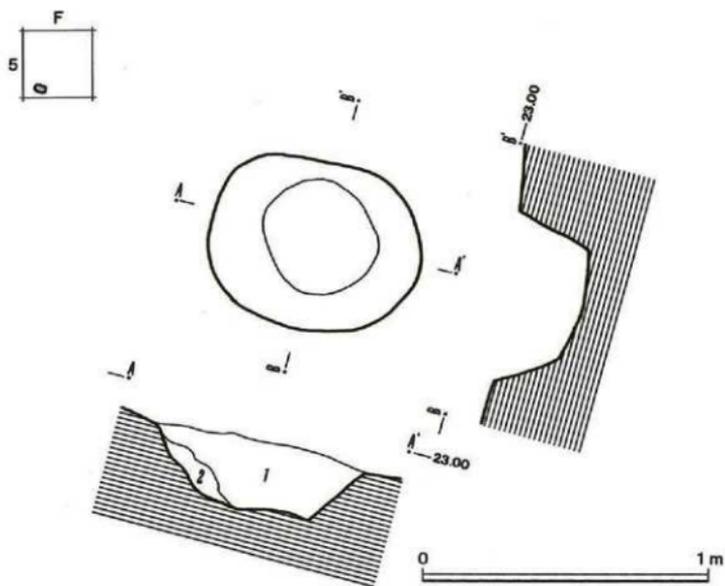


図IV-3-143 第11号土墳墓の平面および断面図

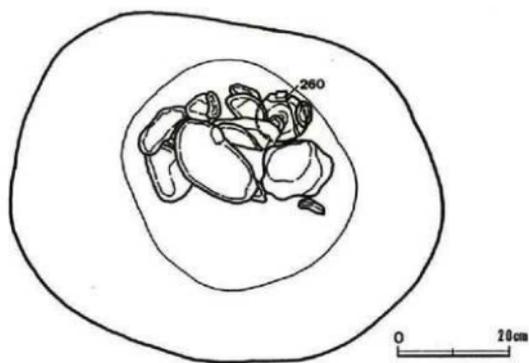


図IV-3-144 第11号土墳墓から出土した遺物

1：陶質の皿形土器



図IV-3-145 第12号土墳墓の平面および断面図



図IV-3-146 第12号土墳墓の遺物出土状況図

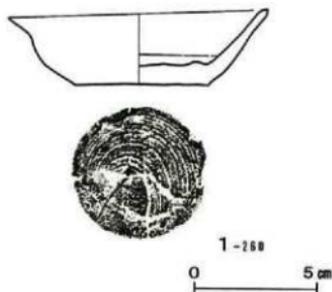
第12号土墳墓

F-5グリッド内で、第9号土墳墓の西約5mに位置し、平面形状は楕円形で、長径75cm、短径60cm、深さは最深部が25cmあり、長軸はN-77'-Wを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈しているが、北側の壁面は急に立ち上がっている。

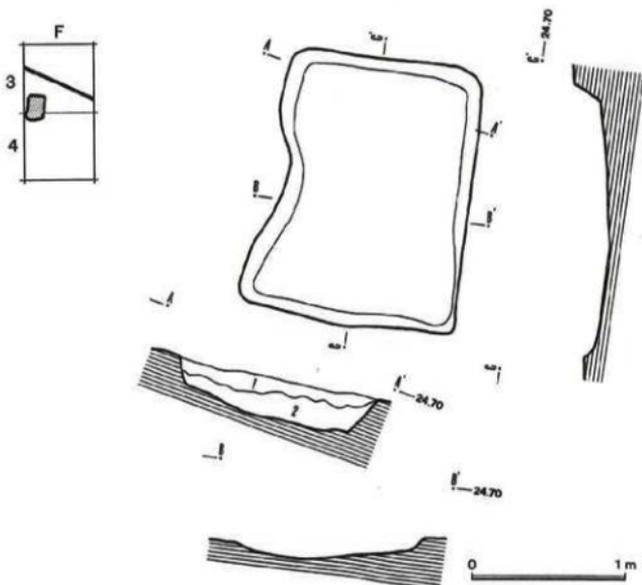
覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径0.5~20cm大の礫を多く含んでいる。第2層は暗黄褐色土で締りは強く、粘性はやや弱い。径0.5~4cm大の礫と黄褐色土のブロックをやや多く含んでいる。

土墳の北側の底面付近には、10~15cm大の礫が敷石状に並んでおり、これらの礫の下の土墳底面より「かわらけ」が1点出土している。

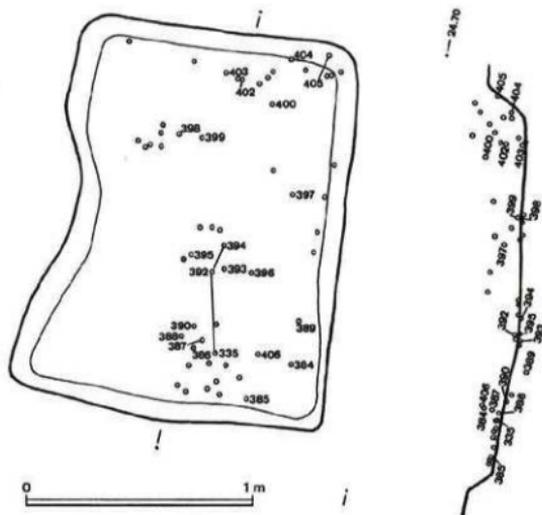
1(遺物No.260)はロクロ成形の「かわらけ」で、口径7.0cm、器高5.0cm、底径3.1cmを測り、平底で、立ち上がりが口縁部にかけて大きく外反するのが特徴である。底部には回転糸切りの痕が残っている。



図IV-3-147 第12号土墳墓から出土した遺物
1:かわらけ



図IV-3-148 第13号土壌墓の平面および断面図



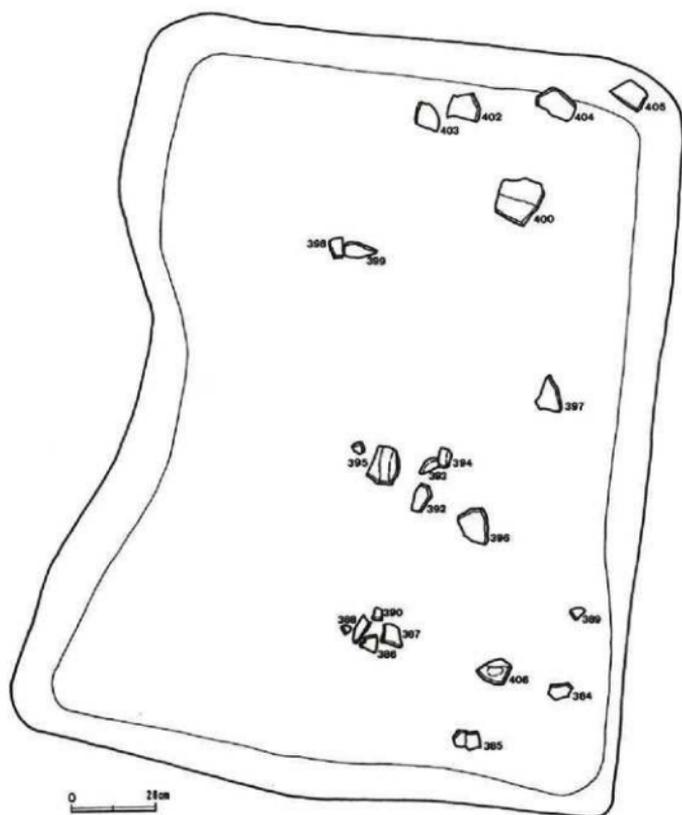
図IV-3-149 第13号土壌墓の遺物分布図

第13号土墳墓

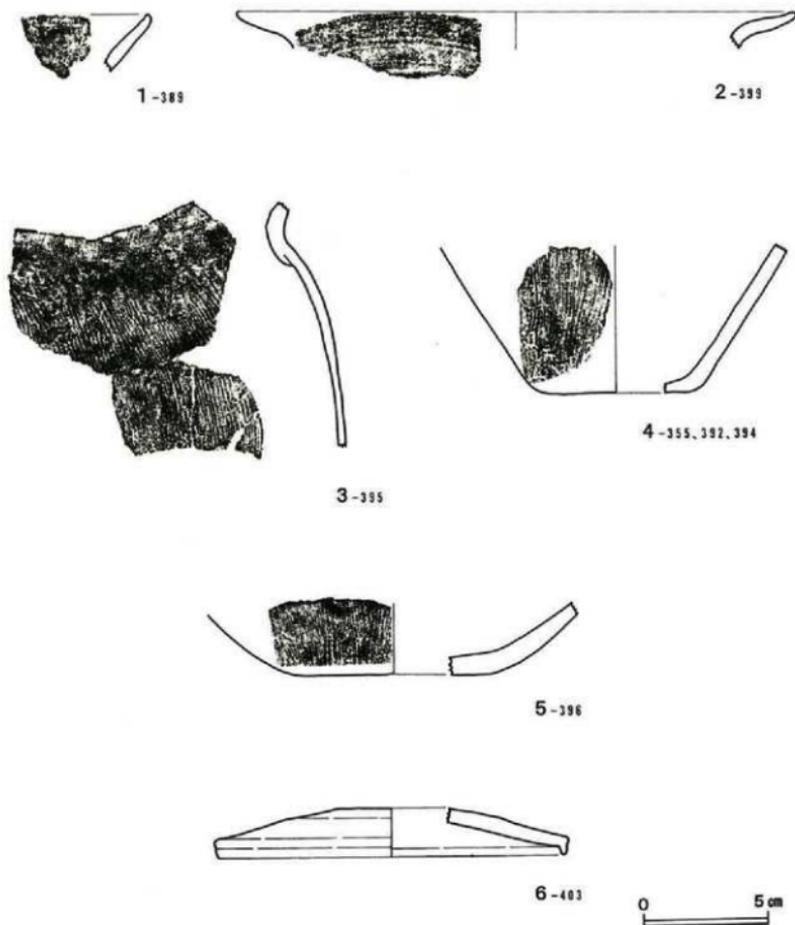
F-3~4グリッド内で、第2号方形周溝墓の東溝と第5号土墳墓の東隣に位置し、平面形状は西側の壁の中央部がやや内側に入り込んでいるが、ほぼ隅丸長方形で、長径 174 cm、短径 139 cm、深さは最深部で26 cmあり、長軸はN-8'-Eを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.3~4 cm大の礫を少量含んでいる。第2層は暗茶褐色土で、締りも粘性もやや強く、径 0.3~5 cm大の礫・焼土粒・木炭粒をやや多く含んでいる。

遺物は土墳の底面付近より点在するように、土師器と須恵器の破片が出土している。



図IV-3-150 第13号土墳墓の遺物出土状況図



図IV-3-151 第13号土壇墓から出土した遺物

1・2：土師器の口縁部、3：土師器の体部、4・5：土師器の底部、6：須恵器の蓋

土師器の破片は色調が茶褐色系が多くみられる。

1(遺物Na389)は口縁部の破片で、ほぼ直線的に開きながら立ち上がり、内・外面ともに丁寧な横ナデ調整が施されている。胎土に雲母を含んでいる。

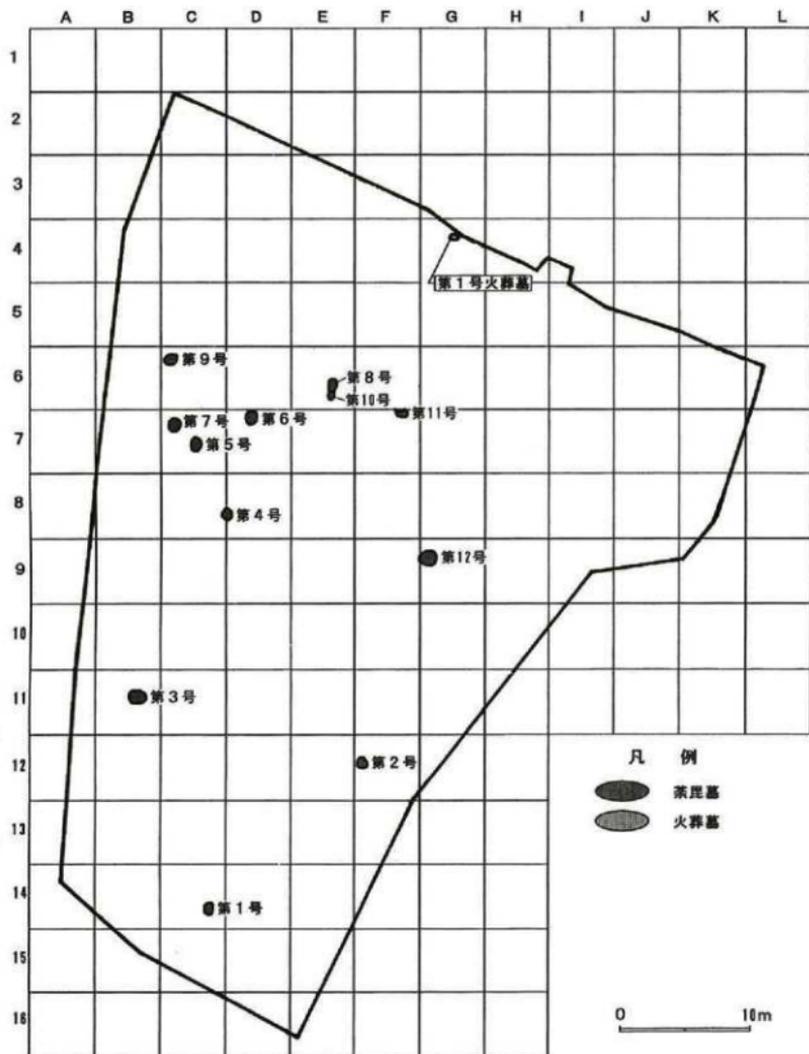
2(遺物Na399)は口縁部の破片で、屈曲部を有し、強く開きながら立ち上がり、外面はヘラ削りをした後にナデ調整を施し、内面は横ナデ調整が施されている。胎土に雲母を含んでいる。

3(遺物Na395)は胴部上半から頸部にかけての破片で、緩やかに内彎し、頸部に屈曲部を有して開きながら立ち上がっている。屈曲部の内面には段があり肥厚している。体部の外面は縦位から斜位のハケメ調整が施され、頸部には横ナデ調整が、また内面は横ナデ調整が施されている。胎土に金雲母を含んでいる。

4(遺物Na335, Na392, Na394)は底部から体部にかけての破片で、底部は平底を呈し、直線的に開きながら立ち上がっている。体部の外面は縦位のハケメ調整が全体に施され、内面はナデ調整が施されている。胎土に金雲母を含んでいる。

5(遺物Na396)は底部から体部にかけての破片で、底部は平底を呈し、強く開きながら立ち上がり、体部の外面は縦位のハケメ調整が施され、内面はナデ調整が施されている。胎土に雲母を含んでいる。

6(遺物Na403)は須恵器の蓋杯の蓋部の破片で、肩部に緩やかな稜を有し、端部が屈曲してから直下している。天井部の外面はヘラ削りが施され、肩部から口縁部にかけては回転のナデ調整が施されている。また、内面は回転のナデ調整が施されている。色調は暗青灰色である。



図IV-3-152 茶毘墓・火葬墓の分布図

4. 茶毘墓と遺物

茶毘墓の分布状況は調査区南側の平坦部に単独で分布する第1～3号の3基と中央部に分布する9基に分けられる。さらに中央部の9基は東側の第8・10～12号の4基と西側の第4～7・9号の5基にそれぞれ分布がまとまる。

茶毘墓が立地する地形は平坦面もしくは傾斜面との変換点が多く、なかでも東側の4基は黒ボク土の堆積する谷部の斜面と平坦部との変換点に位置している。

茶毘墓の規模は、長径が90～134cmで平均が約106cm、短径が45～122cmで平均が約80cm、深さが7～30cmで平均が約20cmある。平面形状は円形・不整円形が6基、楕円形・不整楕円形が6基と半々に分かれる。長軸の方向はほぼ南北を指すものが6基、ほぼ東西を指すものが3基ある。

茶毘墓の特徴として挙げられることは、焚焼処理の痕跡と思われる炭化材・木炭粒、焼土ブロック・焼土粒が覆土の中に含まれること。また、白色系の焼骨粉が含まれるものとそうでないものに分かれる。さらに、土壌の底面から壁面にかけては焼火痕が認められ、焼土化した状況が認められることである。

遺物は供献品としての土器が多いが、なかでも、ロクロ成形の「かわらけ」と手捏ね成形の「かわらけ」が最も多く出土し、次に銭貨で「寛永通寶」が多くを占めるが、「元豊通寶」もみられる。銭貨の中には熱による変形や数枚が培着した状態で出土するものもある。その他に鉄製の釘なども多く出土している。

人骨は覆土の中に骨粉として含まれる以外に、小さな骨片として出土しており、原型をとどめるものは数少ないが、頭頂骨・鎖骨・肋骨・大腿骨などが出土している。

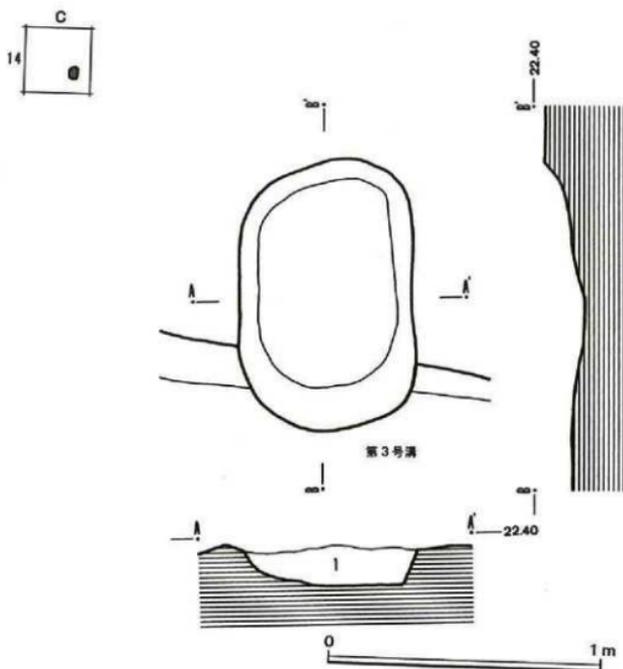
第1号茶昆墓

C-14グリッド内で、調査区の最南部に位置し、第3号溝を切っている。平面形状は楕円形で、長径100cm、短径65cm、深さは最深部で15cmとやや浅く、長軸は南北を指している。断面形状は丸底状を呈しているが東側の壁の立上りは急である。

覆土は暗褐色土の1層で、締りはやや強く、粘性は弱い。径0.5~2cm大の礫をやや多く含んでいる。

底面に近い覆土は木炭粒や焼土粒を多く含み、壁面に焼火痕が顕著に認められる。また、焼けた人骨の細粒が覆土の中に少量含まれている。

骨粉以外の遺物は出土していない。



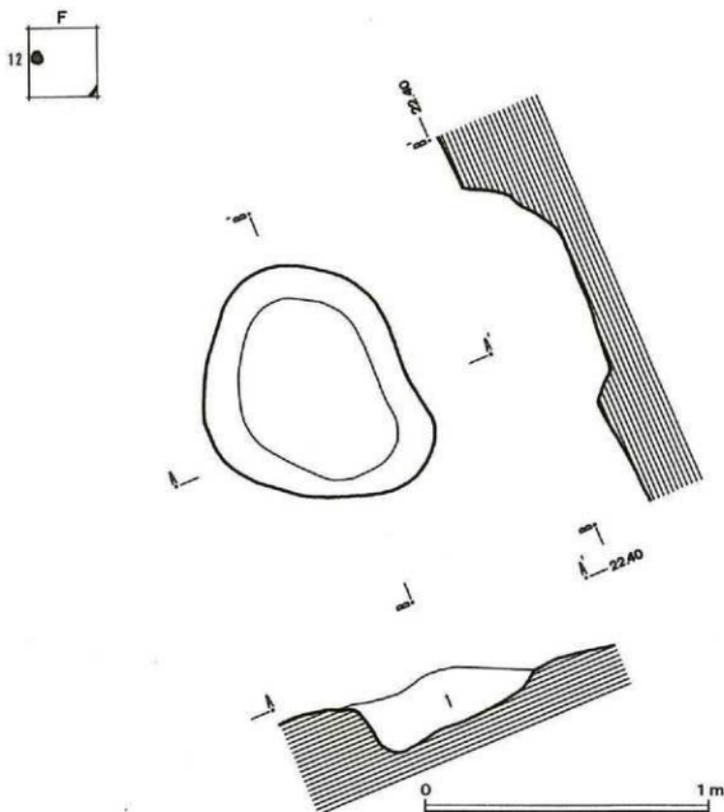
図IV-3-153 第1号茶昆墓の平面および断面図

第2号茶屋基

F-12グリッド内で、調査区南東側の第1号方形周溝基内に位置し、平面形状は不整形円で、長径91cm、短径76cm、深さは最深部で20cmあり、長軸の方向はN-41°-Wを指している。断面形状は北東側が削平されているため定かではないが、おそらくU字形を呈すると思われる。

覆土は暗褐色土が1層で、締りは強く、粘性は弱い。径0.5~14cm大の礫と炭化物や骨の細粒をやや多く含んでいる。

底面から西壁面にかけてははっきりとした焼火痕が認められる。底面付近には煤の付着した扁平の玉石(遺物№12)があり、棺座石として利用されたかとも思われる。



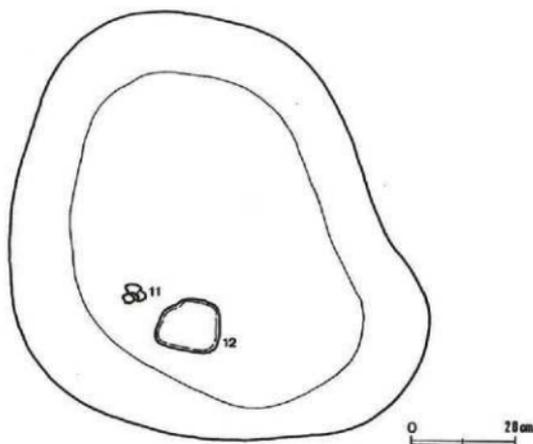
図IV-3-154 第2号茶屋基の平面および断面図

遺物は底面に近いところから銭貨が5枚ほぼ重なるように出土し、土壌の中央部の底面から、肋骨や尺骨？(遺物No10)などの人骨片が3点出土している。

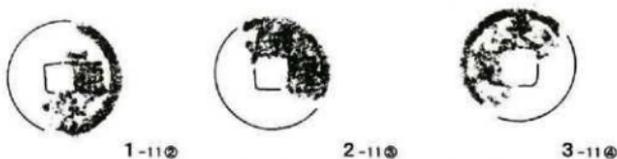
銭貨は破損や磨滅のために文字が判読できるのは3枚で、1(遺物No11-②)は「通」から「開元通寶」、2(遺物No11-③)は「開」と「通」の2文字から「開元通寶」、3(遺物No11-④)は「元」と「寶」の2文字から「元豊通寶」と思われる。

銭貨の計測値

遺物No	種類	径(mm)	重量(g)	備考
11-①	□□□□	24.4	1.84	一部欠損、表面腐食で不明
11-②	□通□□	24.0	1.00	一部欠損、「開元通寶」か
11-③	開通□□	測定不能	1.84	1/2欠損、「開元通寶」か
11-④	元□□寶	測定不能	1.06	1/2欠損、「元豊通寶」か
11-⑤	□□□□	測定不能	0.65	3/4欠損、表面腐食で不明



図IV-3-155 第2号茶屋墓の遺物出土状況図



図IV-3-156 第2号茶屋墓から出土した遺物

1～3：銭貨

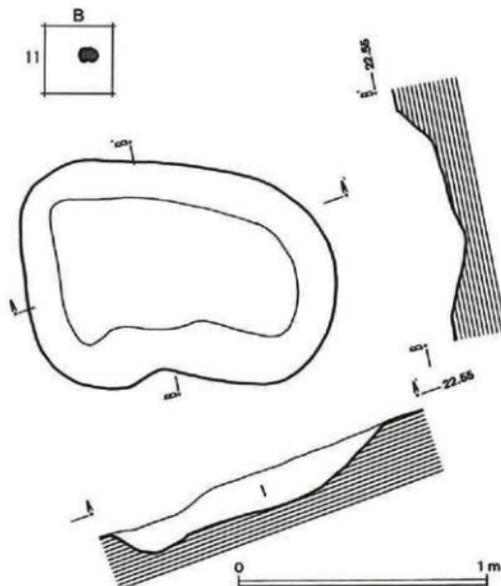
第3号茶毘墓

B-11グリッド内で、調査区の南西部に位置し、平面形状は不整楕円形で、長径126cm、短径91cm、深さは最深部で15cmと浅く、長軸の方向はN-86°-W とほぼ東西を指している。断面形状は浅いため定かではないが、上に広く開くU字形を呈していると思われる。

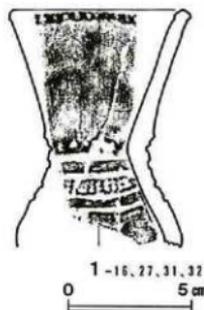
覆土は暗褐色土が1層で、締りも粘性も弱く、径0.5~7cm大の礫を多く含み、炭化物と骨粉を少量含んでいる。

遺物は土壌中央部の覆土の上位から土器片が4点(同一個体)出土しているが、茶毘墓に伴う遺物ではなく、外からの流入物と考えられる。

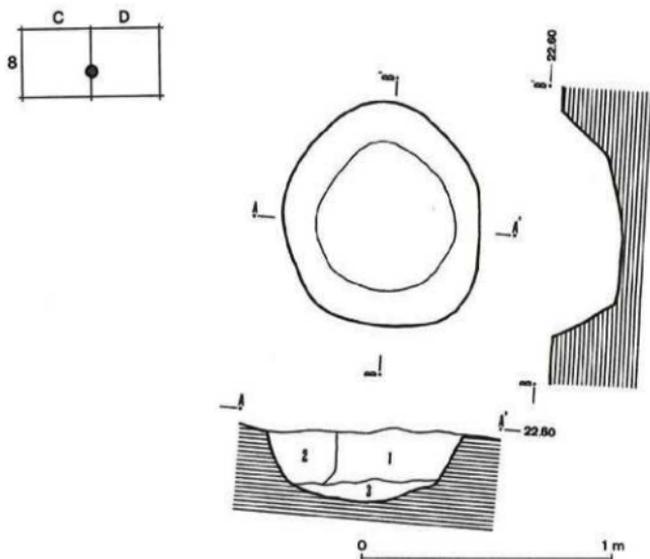
1(遺物Na16, Na27, Na31, Na32)は細長首の壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片で、頸部に緩やかな屈曲部を有し、直線的に開きながら立ち上がっている。口唇部に棒状の器具によるキザミがあり、頸部には7条の連続した刺突紋と沈線が交互に上位から下位にかけて施紋されている。体部の外面全体には磨き調整が施されている。弥生時代中期後半に属する土器と思われる。



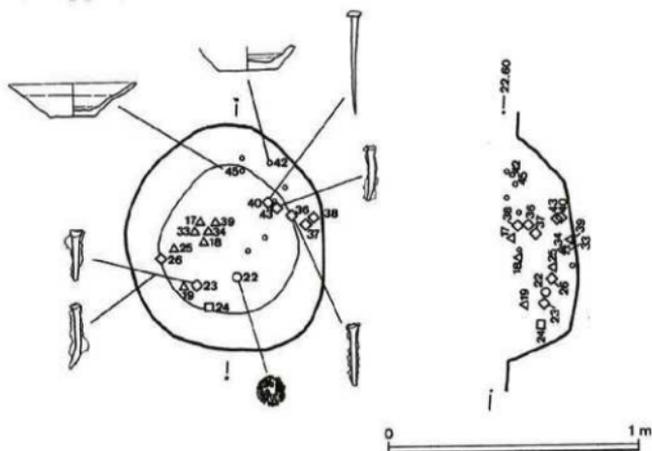
図IV-3-157 第3号茶毘墓の平面および断面図



図IV-3-158 第3号茶毘墓から出土した遺物
1: 壺形土器の口縁部



図IV-3-153 第4号茶毘墓の平面および断面図



図IV-3-150 第4号茶毘墓の遺物分布図

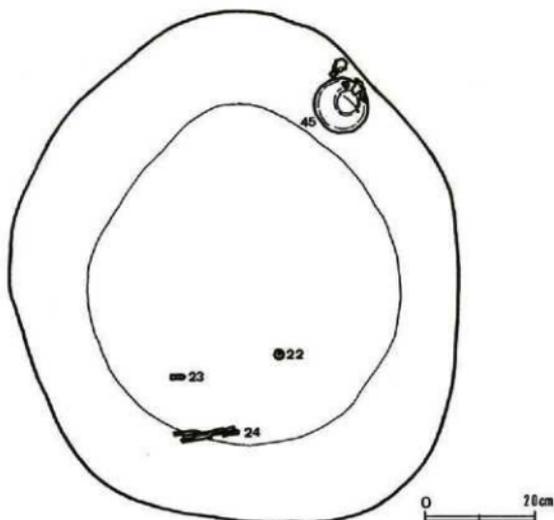
第4号茶毘墓

C～D-8グリッド内で、調査区中央部の茶毘墓が集中する南に位置している。平面形状はほぼ円形で、長径90cm、短径82cm、深さは最深部で29cmあり、長軸はN-3'-Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は3層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径1～5cm大の礫をやや多く含み、炭化物や骨の細粒を多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りも粘性もともにやや弱く、径1～20cm大の礫を多く含んでいる。第3層は赤茶褐色土で、締りも粘性も強く、焼土のブロックを多く含んでいる。土壌の北壁面に焼火痕が認められる。

遺物は土壌の北壁付近より土器が、中央部よりやや南側で銭貨が、東北側の壁付近と南東側の壁付近の2ヵ所に集中して鉄釘が、南壁付近より箆状に編まれた竹製品の一部（遺物No24）が、中央部より東側より人骨片がまとまって出土している。

なお、人骨片は大腿骨（遺物No17、No25、No39）・尺骨？（遺物No18）・肩胛骨（遺物No19）・鎖骨（遺物No33）・頭頂骨（遺物No34）など22点が出土している。



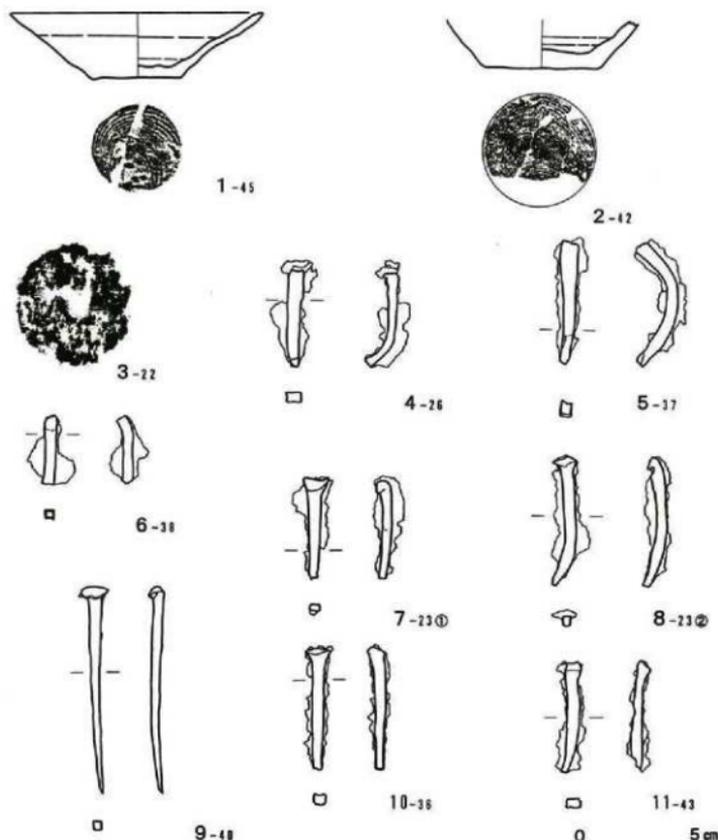
図IV-3-161 第4号茶毘墓の遺物出土状況図

1(遺物No45)はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底から体部にかけてヘラ削り(右回転)した後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

2(遺物No42)はロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、1と同様の調整が施されている。底部も同様に平底で回転糸切りの痕が残っている。

3(遺物No22)は銭貨で、6枚が培着し分離が不能であり、しかも表面が腐食しているため詳細は不明であるが、いわゆる六道銭である。径が22.4mm、重量が16.60gある。

4~11(遺物No23①②、No26、No36、No37、No38、No40、No43)は鉄釘で、10(遺物No40)が鋼鉄製である以外は7本とも先端部が欠損し錆が著しい。



図IV-3-162 第4号茶毘墓から出土した遺物

1・2：かわらけ、3：銭貨(実物大)、4~11：鉄釘

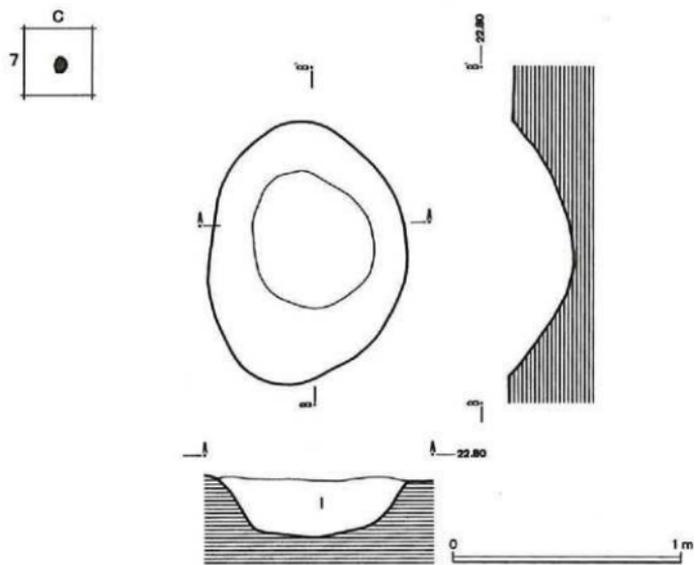
第5号茶毘墓

C-7グリッド内で、第4号茶毘墓の北約5mに位置する。平面形状は楕円形で、長径116cm、短径86cm、深さは最深部で27cmあり、長軸の方向はN-8'-Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

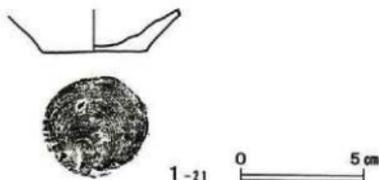
覆土は黒色土が1層で締りは強く、粘性はやや弱い。径7~10cm大の砂岩質の礫を多く含み、炭化物もやや多く含んでいる。土壌の壁面に焼火痕が明瞭に認められる。

遺物は覆土の上位から土器片が出土している。

1(遺物No21)はロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)した後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

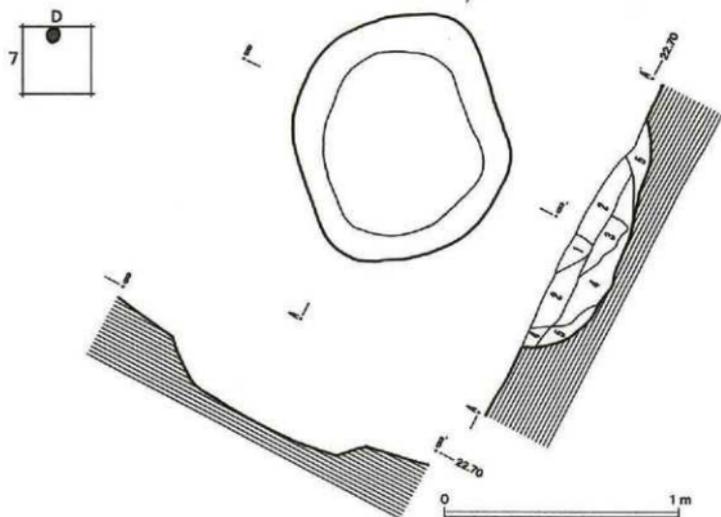


図IV-3-163 第5号茶毘墓の平面および断面図

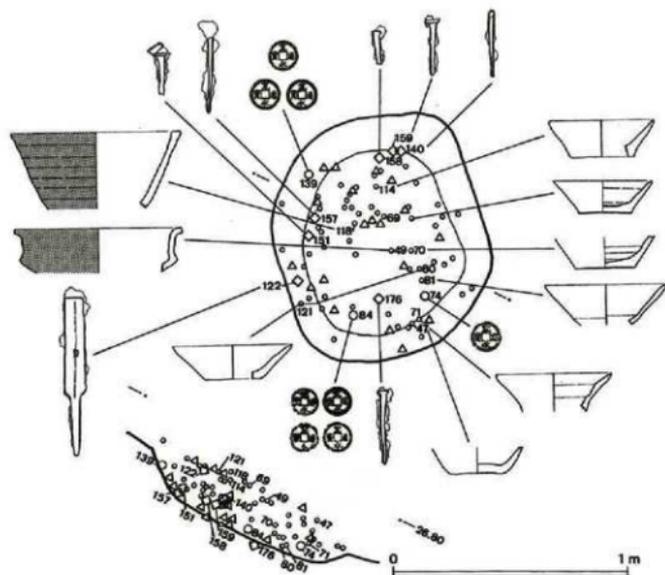


図IV-3-164 第5号茶毘墓から出土した遺物

1:かわらけ



図IV-3-165 第6号茶毘墓の平面および断面図



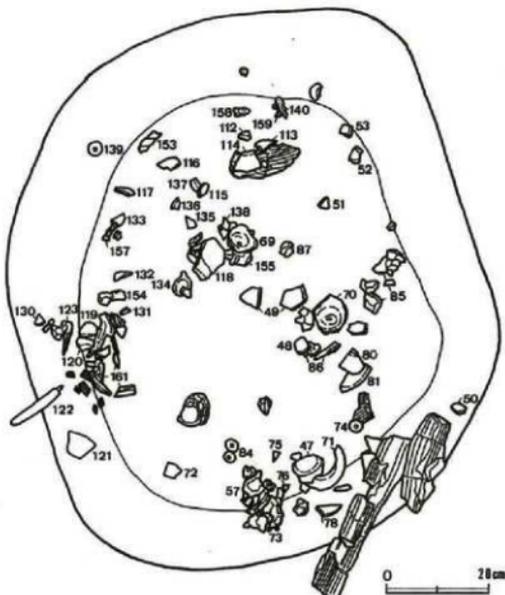
図IV-3-166 第6号茶毘墓の遺物分布図

第6号茶屋墓

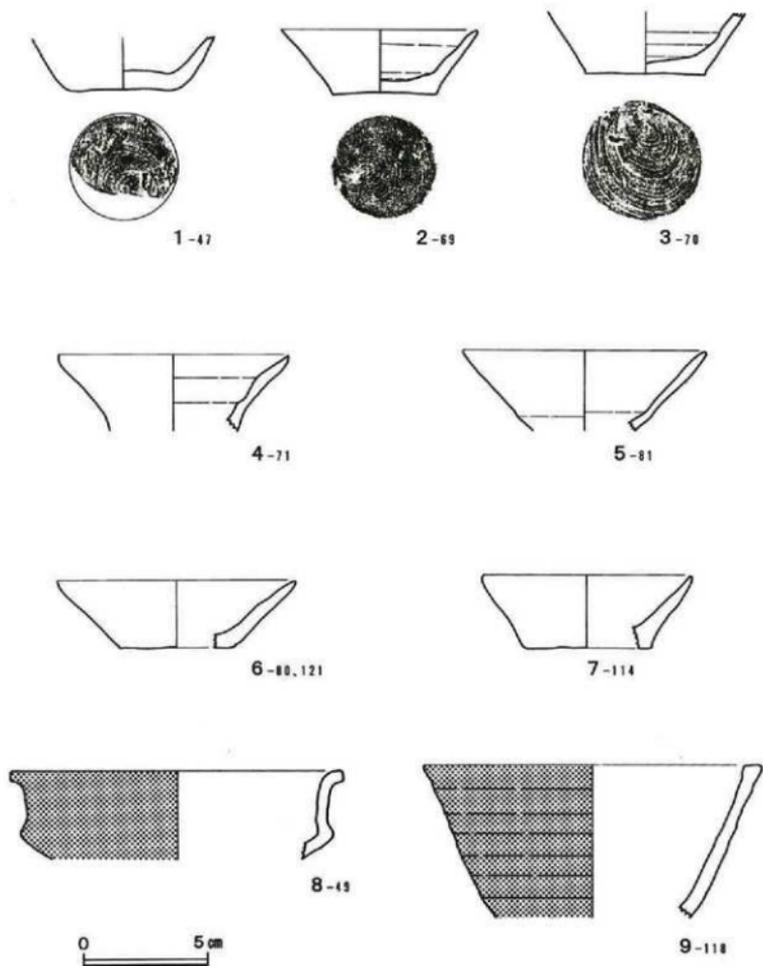
D-7グリッド内で、第5号土壌墓の北東約5mに位置する。平面形状は不整形で、長径111cm、短径95cm、深さは最深部で25cmあり、長軸の方向はN-29°-Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は5層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りは弱く、粘性は強い。径3~7cm大の礫を少量含んでいる。第2層は黒褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径0.5~7cm大の礫を少量含み、炭化物や骨の細粒をやや多く含んでいる。第3層は暗褐色土で、締りも粘性もやや弱く、径1~7cm大の礫を少量含み、炭化物・木炭粒・骨の細粒をやや多く含んでいる。第4層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径1cm大の礫を少量含んでいる。焼土粒・炭化物・木炭粒・骨の細粒をやや多く含んでいる。第5層は暗赤褐色土で締りはやや弱く、粘性は強い。径4cm大の礫を少量含むほか、焼土粒を多く含み、炭化物・木炭粒・骨の細粒をやや多含んでいる。また、炭化材が南壁と北壁付近の底面よりまよって出土している。

遺物は土壌の底面付近から3(遺物No70)と4(遺物No71)の「かわらけ」が出土し、その他の「かわらけ」は覆土中に点在して出土したほか、土壌中央部の覆土中より施釉陶質土器の香炉の破片が2点出土し、北から西にかけての壁面付近から鉄製品が、土壌内全体の底面付近から覆土中に点在するように人骨片が、底面付近から銭貨がそれぞれ出土している。人骨片は総点数で115点あり、頭頂骨・頸骨・鎖骨・肋骨・大腿骨が出土している。



図IV-3-167 第6号茶屋墓の遺物出土状況図



図IV-3-168 第6号茶屋基から出土した遺物(1)

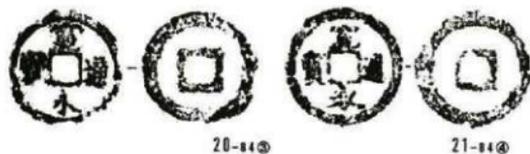
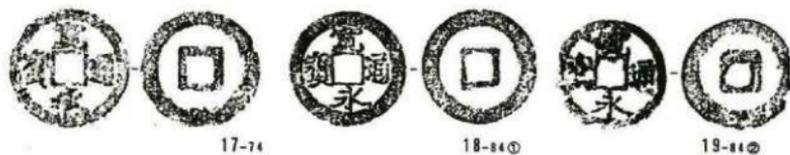
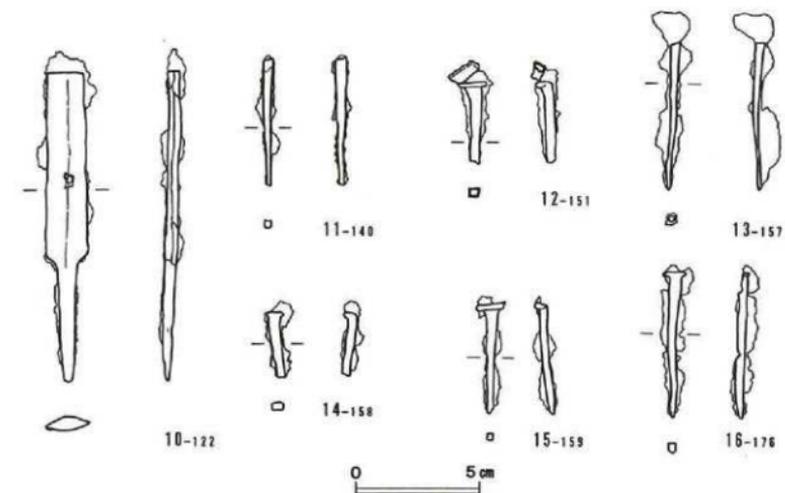
1~7:かわらけ、8・9:施軸陶器

1～5(遺物No.47、遺物No.69、遺物No.70、遺物No.71、遺物No.81)はロクロ成形の「かわらけ」の破片で、この内4(遺物No.71)と5(遺物No.81)の2点は底部を欠くが、ともに共通した特徴を持っている。底部は僅かに凸状がみられるものも含みほとんどが平底を呈し、体部の外面は回転ナデ調整を施し、内面はへら削り(右回転)した後にナデ調整が施されている。底部は回転糸切りの痕が残っている。

6(遺物No.80、No.121)と7(遺物No.114)はロクロ成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、体部の内・外面ともにナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

8(遺物No.49)は淡緑色の釉を施された香炉の口縁部から体部にかけての破片である。

9(遺物No.118)も淡緑色の釉を施された香炉の口縁部から体部にかけての破片である。



図IV-3-169 第6号茶屋基から出土した遺物(2)

10：鉄剣、11～16：鉄釘、17～24：銭貨「寛永通寶」

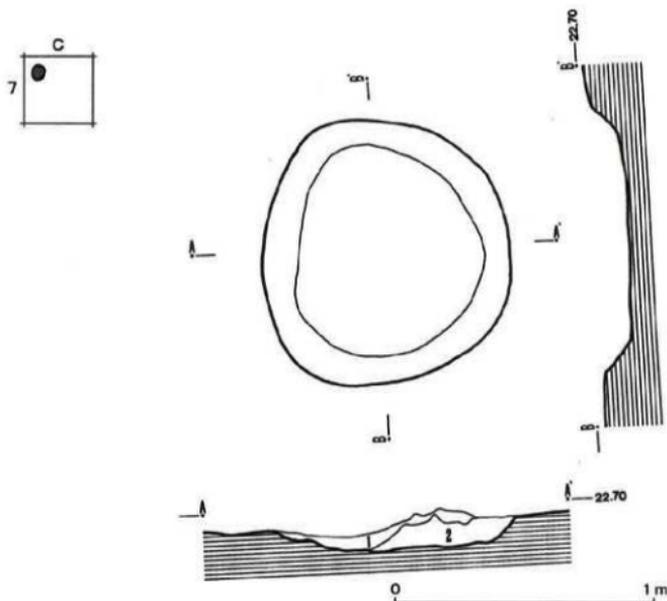
10(遺物No122)は先端部が欠損した小型の鉄剣と思われる。土壌の西壁付近より出土した。

11~16(遺物No140、遺物No151、遺物No157、遺物No158、遺物No159、遺物No176)は鉄釘で、13(遺物No157)と16(遺物No176)の2点がほぼ完形で出土した以外は先端部が欠損している。これらは北から西にかけての壁面付近から出土している。

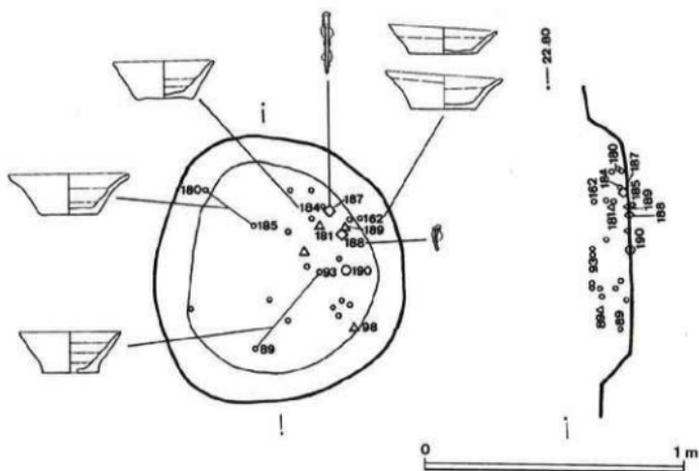
17~24(遺物No74、遺物No84-①~④、遺物No139-①~③)は銭貨「寛永通寶」で、8枚の内3枚は背面に「文」の文字がある新寛永通寶である。

銭貨の計測値

遺物No	種類	径(mm)	重量(g)	備考
74	寛永通寶	24.5	2.47	
84-①	寛永通寶	23.5	3.04	
84-②	寛永通寶	23.2	3.29	
84-③	寛永通寶	24.2	2.54	
84-④	寛永通寶	24.0	2.77	
139-①	寛永通寶	24.7	3.88	背面に「文」の文字がある
139-②	寛永通寶	25.0	2.82	背面に「文」の文字がある
139-③	寛永通寶	25.0	2.88	背面に「文」の文字がある



図IV-3-170 第7号茶毘墓の平面および断面図



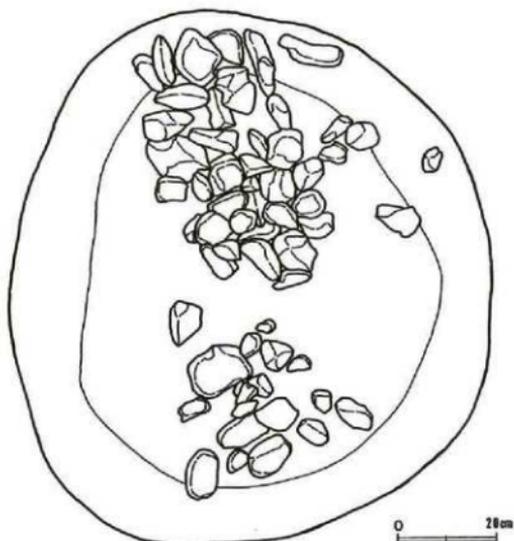
図IV-3-171 第7号茶毘墓の遺物分布図

第7号茶毘基

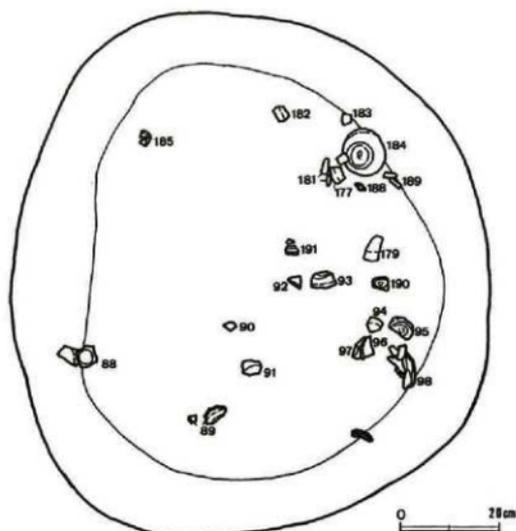
C-7グリッド内に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径103cm、短径95cm、深さは最深部で19cmあり、長軸の方向はN-23'-Wを指している。断面形状は浅いので定かではないが上に広く開くU字形を呈すると思われる。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で締りは弱く、粘性はやや強い。径0.3~2cmの礫をやや多く含み、炭化物もやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、締りも粘性もやや強く、径0.5~12cmの礫をやや多く含み、炭化物もやや多く含んでいる。底部全面に焼火痕が明瞭に認められる。底部には礫を敷石状に並べてあり、その表面が赤褐色化している。

遺物は「かわらけ」が5点、銭貨が1枚(遺物No190)、鉄釘が2本、人骨片が7点出土している。銭貨は破損し表面が腐食しているため文字の判読は困難である。人骨片は、鎖骨(遺物No98)・肋骨(遺物No181、No189)など7点が出土している。これらの遺物は土坑内の中央部より東側に集中して出土している。



図IV-3-172 第7号茶昆墓底部の礫の出土状況図



図IV-3-173 第7号茶昆墓の遺物出土状況図

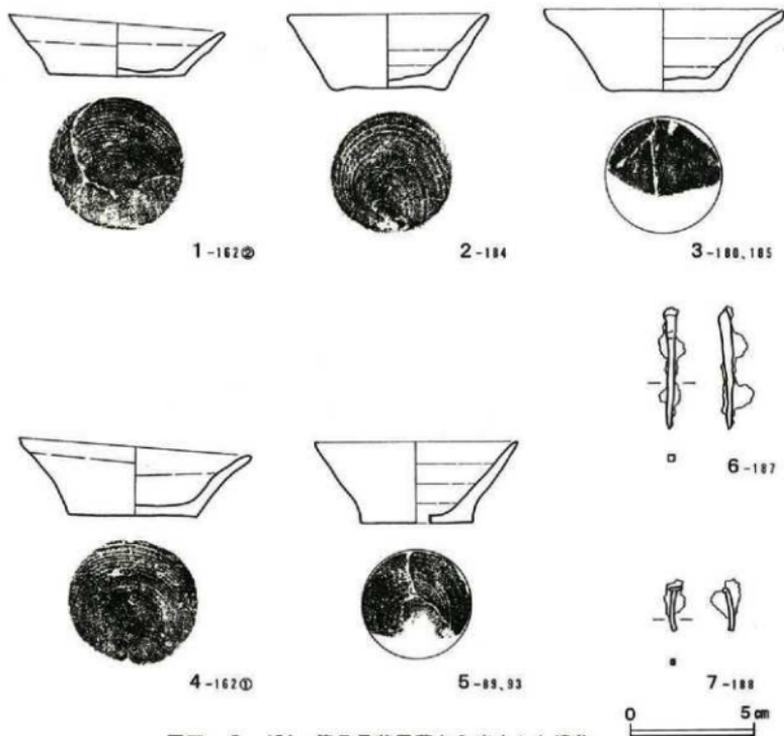
1(遺物No162②)はロクロ成形の「かわらけ」で、体部の内・外面はへら削り(右回転)をした後にナデ調整を施している。底部は僅かに凸状を呈する平底で、回転糸切りの痕が残っている。

2(遺物No184)と3(遺物No180, No185)もロクロ成形の「かわらけ」で、形態も調整方法もともに1(遺物No162②)とほぼ同一である。

4(遺物No162①)もロクロ成形の「かわらけ」であるが、底部からの立ち上がりが緩やかに外反しながら開く形態に、ほかの「かわらけ」との差が認められる。しかし、調整方法は1(遺物No162②)とほぼ同一である。

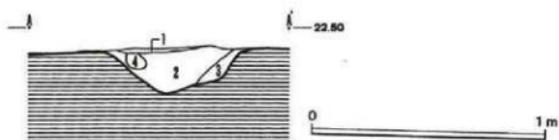
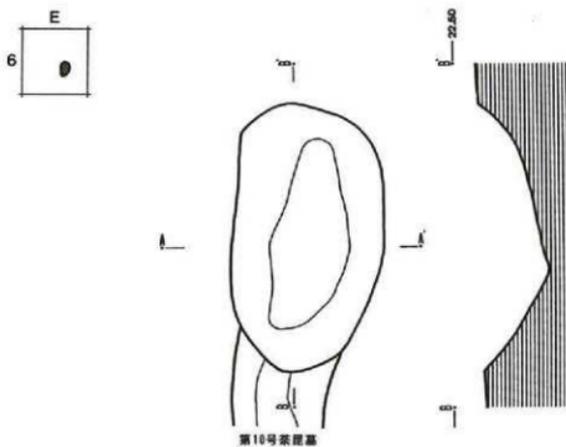
5(遺物No89, No93)はロクロ成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片であるが、形態も調整方法も4(遺物No162-1)とほぼ同一である。

6(遺物No187)は鉄釘でほぼ完形であるが、7(遺物No188)の鉄釘は先端部が破損している。

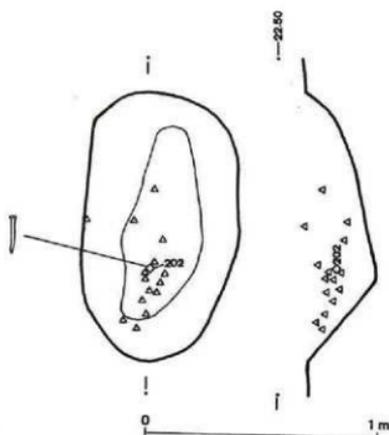


図IV-3-174 第7号茶屋墓から出土した遺物

1～5：かわらけ、6・7：鉄釘



図IV-3-175 第8号茶屋基の平面および断面図



図IV-3-176 第8号茶屋基の遺物分布図

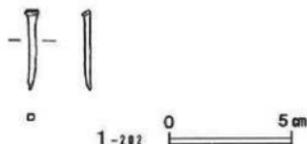
第8号茶毘墓

E-6グリッド内で、第6号茶毘墓の東約6mに位置し、南側の第10号茶毘墓を切っている。平面形状は不整楕円形で、長径113cm、短径65cm、深さは最深部で30cmあり、長軸の方向はほぼ南北のN-9-'Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は4層に分けられ、第1層は黒褐色土で、締りも粘性も弱い。第2層は暗赤褐色土で、締りも粘性も共に弱く、径0.5~6cm大の礫をやや多く含み、炭化物や赤色・黄橙色の焼土粒を多く含んでいる。第3層も暗赤褐色土であるが、第2層に比べ焼土粒の含有量が少ない。第4層も暗赤褐色土であるが、締りがやや強く、焼土のブロックをやや多く含んでいるところが第2・3層と異なる点である。

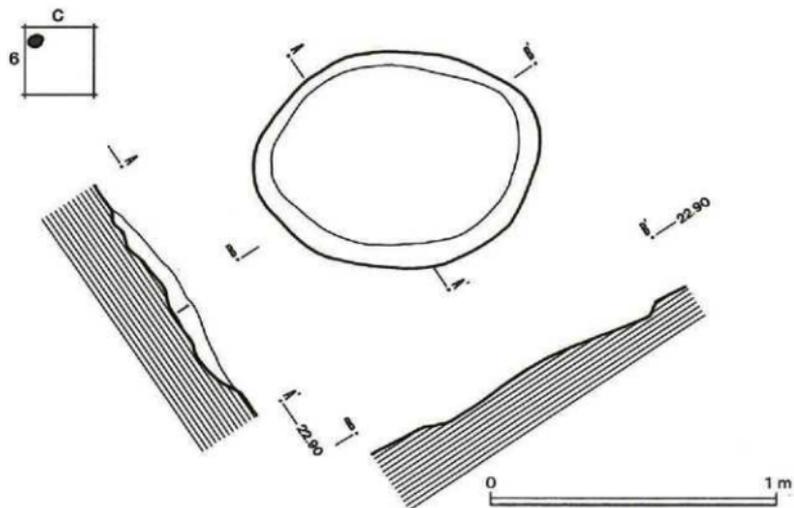
遺物は中央部より南側にかけての覆土から鉄釘が1本と、頭頂骨・鎖骨・尺骨・大腿骨などの人骨片が20点出土している。

1(遺物No202)は鋼鉄製の釘で、ほぼ完形である。

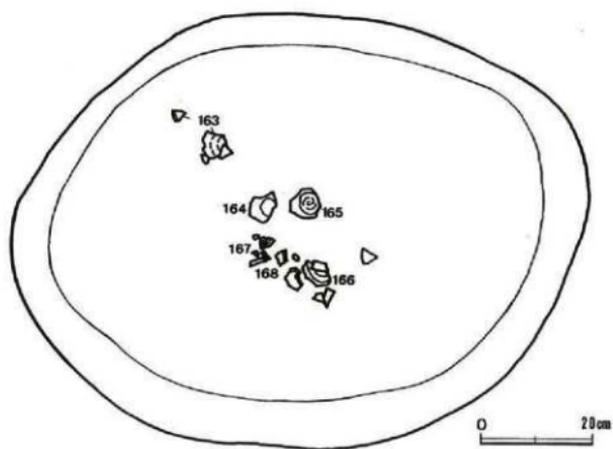


図IV-3-177 第8号茶毘墓から出土した遺物

1：鉄釘



図IV-3-178 第9号茶毘墓の平面および断面図



図IV-3-179 第9号茶毘墓の遺物出土状況図

第9号茶昆墓

C-6グリッド内で、第7号茶昆墓の北方約5mに位置し、平面形状は楕円形で、長径101cm、短径78cm、深さは最深部で7cmと浅く、長軸の方向はN-30°-Eを指している。断面形状は浅いため定かでない。

覆土は暗褐色土が1層で、締りは強く、粘性はやや弱い。径1~5cm大の礫を少量含んでいる。炭化物・焼土粒をやや多く含み、地山の中に堆積している礫を土壌の底面とし、僅かな掘込みを残す茶昆墓である。

遺物は土壌の中央部の覆土中から土器が点在して出土している。

1(遺物No.163)はロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけての破片で、底部の脇に張りをもつ。体部の内・外面にヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

2(遺物No.165)もロクロ成形の「かわらけ」の底部から体部にかけて破片で、形態は1と同様である。体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面は底部から体部にかけてヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。

3(遺物No.166)もロクロ成形の「かわらけ」の底部の破片で、調整方法は1・2と同様である。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。



図IV-3-180 第9号茶昆墓から出土した遺物

1~3:かわらけ

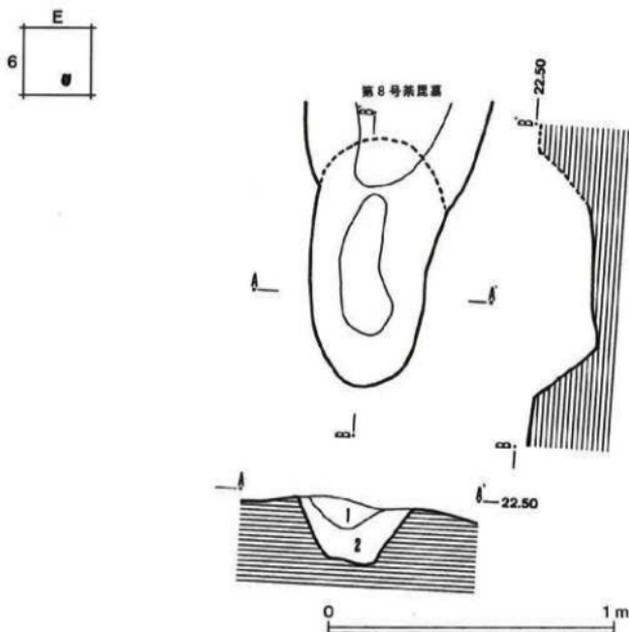
第10号茶毘墓

E-6グリッド内に位置し、北側は第8号茶毘墓によって切られている。平面形状は楕円形で、長径は推定で87cm、短径45cm、深さは最深部で22cmあり、長軸の方向はN-3'-Eとほぼ南北を指している。断面形状は上に開くU字形を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は黒褐色土で縮りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5~3cm大の礫をやや多く含み、炭化物・焼土粒を多く含んでいる。第2層は暗褐色土で、縮りは弱く、粘性はやや強い。径1~5cm大の礫をやや多く含み、焼土粒を少量含んでいる。

遺物は錆のひどい銭貨(鉄銭、遺物No.272)が1枚、南側の壁面近くから出土しているほかに、中央部の覆土の上位から人骨片(遺物No.276、No.277)が2点出土している。

鉄銭(遺物No.272)は径が25.0mm、重量が3.30gあるが、表面が錆ているため文字を判読することができない状態である。



図IV-3-181 第10号茶毘墓の平面および断面図

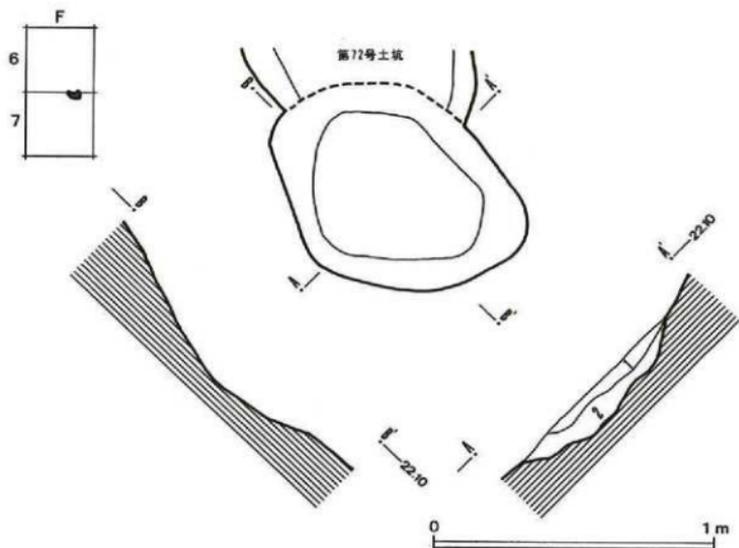
第11号茶昆墓

E-6~7グリッド内に位置する。第72号土坑によって北側を切られている。平面形状は不整形で、長径は推定で98cm、短径70cm、深さは12cmと浅く、長軸の方向はN-65°-Wを指している。断面形状は浅いため定かではないが、丸底状を呈している。

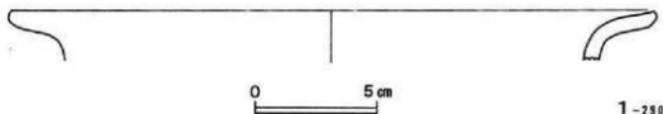
覆土は2層に分かれ、第1層は暗赤褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~4cm大の礫を含み、焼土粒をやや多く含んでいる。第2層は暗褐色土で締りは強く、粘性は弱い。径0.5~4cm大の礫を多く含んでいる。

遺物は東側の覆土の上位より土器片が3点と、覆土の中位より欠損した銭貨「開元通寶(遺物No292)」が1枚出土している。

1(遺物No290)は甕形土器の口縁部の破片で、くの字の屈曲部を有し、開きながら立ち上がっている。外から流入したものである。

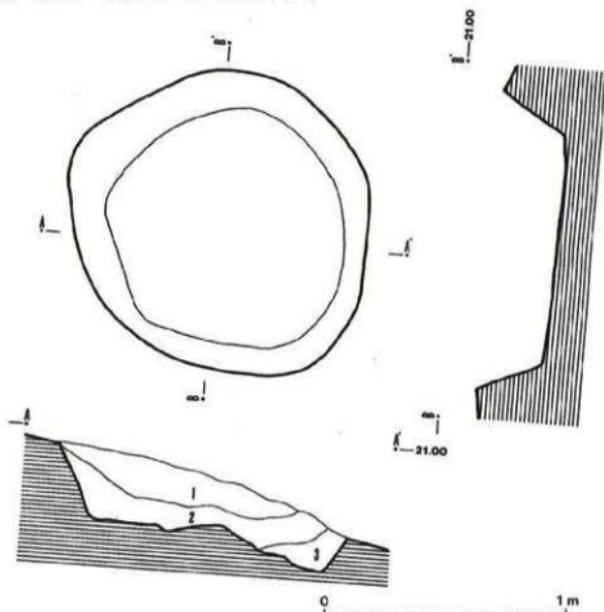


図IV-3-182 第11号茶昆墓の平面および断面図

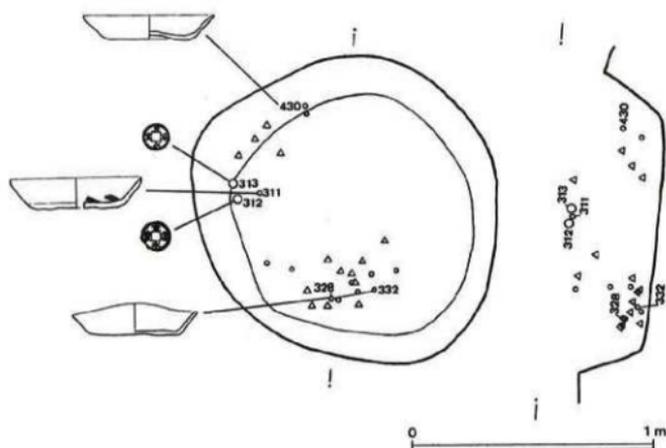


図IV-3-183 第11号茶昆墓から出土した遺物

1: 甕形土器の口縁部



図IV-3-184 第12号茶屋基の平面および断面図



図IV-3-185 第12号茶屋基の遺物分布図

第12号茶屋基

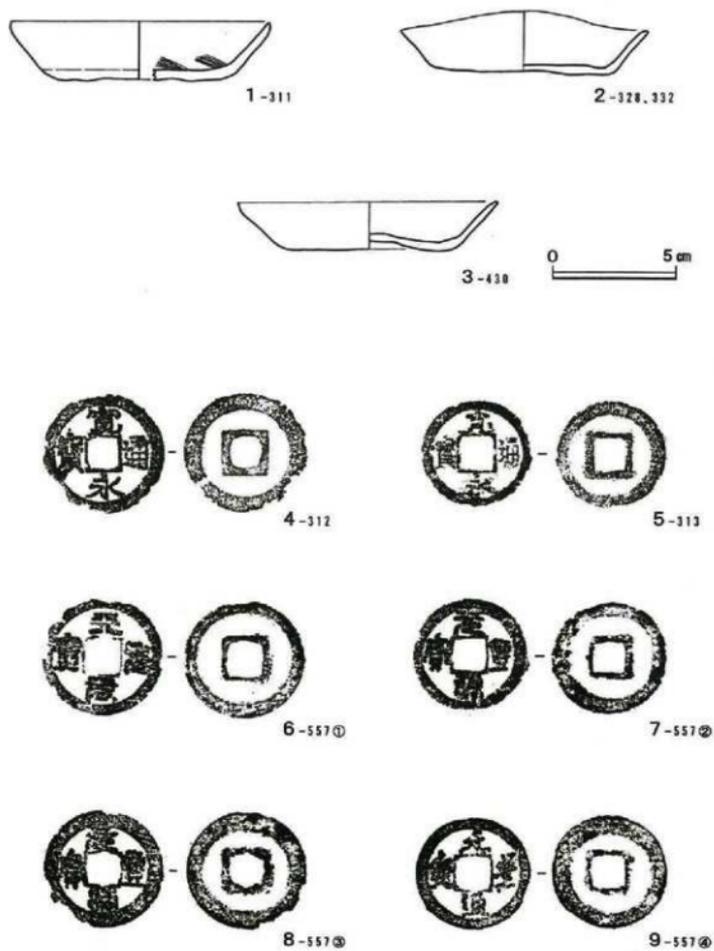
G-9グリッド内で、黒ボク土が堆積した谷部の斜面上位に位置し、平面形状はほぼ円形で、長径134cm、短径122cm、深さは最深部で30cmとやや深く、長軸の方向はN-58°-Wを指している。断面形状は底面に多少の凹凸がみられるが、上に開くU字形を呈している。

覆土は3層に分けられ、第1層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性は弱い。径0.5~6cm大の礫をやや多く含み、炭化物・焼土粒をやや多く含んでいる。第2層は明黒色土で締りも粘性も弱く、径2~4cm大の礫を少量含んでいる。第3層は暗褐色土で締りはやや弱く、粘性はやや強い。径0.5~3cm大の礫をやや多く含んでいる。底面より多くの炭化材が出土している。

遺物は西側の覆土上位と南側の底面に近いところから土器が、西壁に近い覆土の上位と南側に集中する炭化材の中から銭貨が、土境内の北西壁付近と南側の2カ所に集中して頭骨・鎖骨・尺骨・大腿骨などの人骨片41点が出土している。



図IV-3-186 第12号茶屋基の遺物出土状況図



図IV-3-187 第12号羨廬墓から出土した遺物

1～3：かわらけ、4・5：銭貨「寛永通寶」、6～9：銭貨「元豊通寶」

1(遺物No311)は手捏ね成形の「かわらけ」の口縁部から底部にかけての破片で、内・外面ともに横ナデ調整が施されている。底部は平底でヘラ削り調整が施されている。

2(遺物No328、No332)は手捏ね成形の「かわらけ」で、体部の外面は回転のナデ調整が施され、内面はヘラ削りをした後に回転ナデ調整が施されている。底部は平底である。

3(遺物No430)も手捏ね成形の「かわらけ」で、調整方法は2と同一である。底部は凸状をなしている。

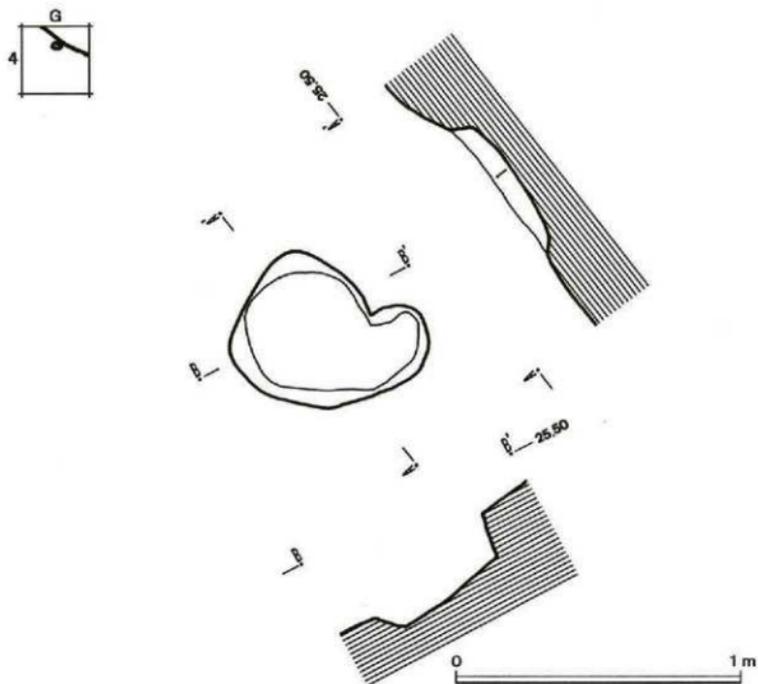
4(遺物No312)と5(遺物No313)は銭貨「寛永通寶」で西壁に近い覆土の上位より出土したものである。

6～9(遺物No557-①～④)は銭貨「元豊通寶」で、6枚出土した内の4枚である。

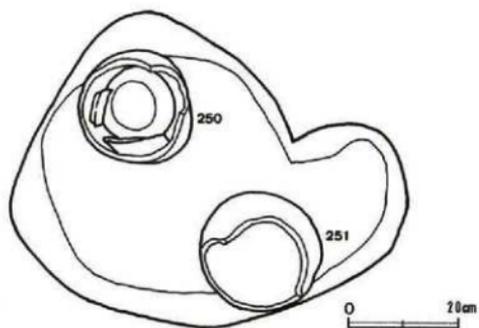
9(遺物No557-④)は2枚が熔着している。これらは南側の炭化材の中から挟まった状態で出土したものである。

銭貨の計測値

遺物No	種類	径(mm)	重量(g)	備考
312	寛永通寶	25.0	2.52	
313	寛永通寶	22.8	2.28	
557-①	元豊通寶	24.5	2.27	
557-②	元豊通寶	23.4	2.49	
557-③	元豊通寶	24.5	3.07	
557-④	元豊通寶	23.4	6.61	2枚熔着、裏面の径24.0mm
557-⑤	□□□□	22.7	1.45	表面が腐食で文字が不明



図IV-3-188 第1号火葬墓の平面および断面図



図IV-3-189 第1号火葬墓の遺物出土状況図

5. 火葬墓と遺物

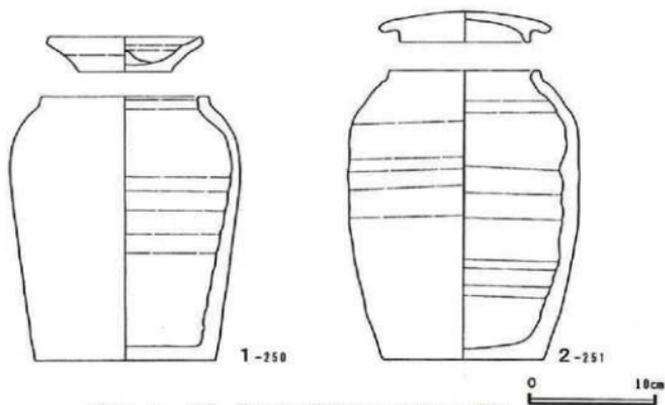
第1号火葬墓

G-4グリッド内で、調査区最北の南向き斜面の上位にある第2号方形周溝墓内に位置する。表土を除去している途中で、蔵骨器が露出した状態で確認された。地山に土壌が浅く残っており、確認された部分の長さ70cm、幅55cm、深さは最深部が15cmある。平面形状は不整形円形を呈している。

1(遺物No.250)は蓋付の壺形蔵骨器で、口径12.6cm、底径14.8cm、体部の最大径18.7cm、器高22.0cmを測る。蓋部は口径12.8cm、底径7.6cm、器高2.9cmを測り、共に素焼きである。蓋部の形態は皿状を呈しており、内側に粘土紐を張り付けたつまみがある。蔵骨器内には焼焼処理された焼骨片(総重量1,550g)が入った状態で出土している。

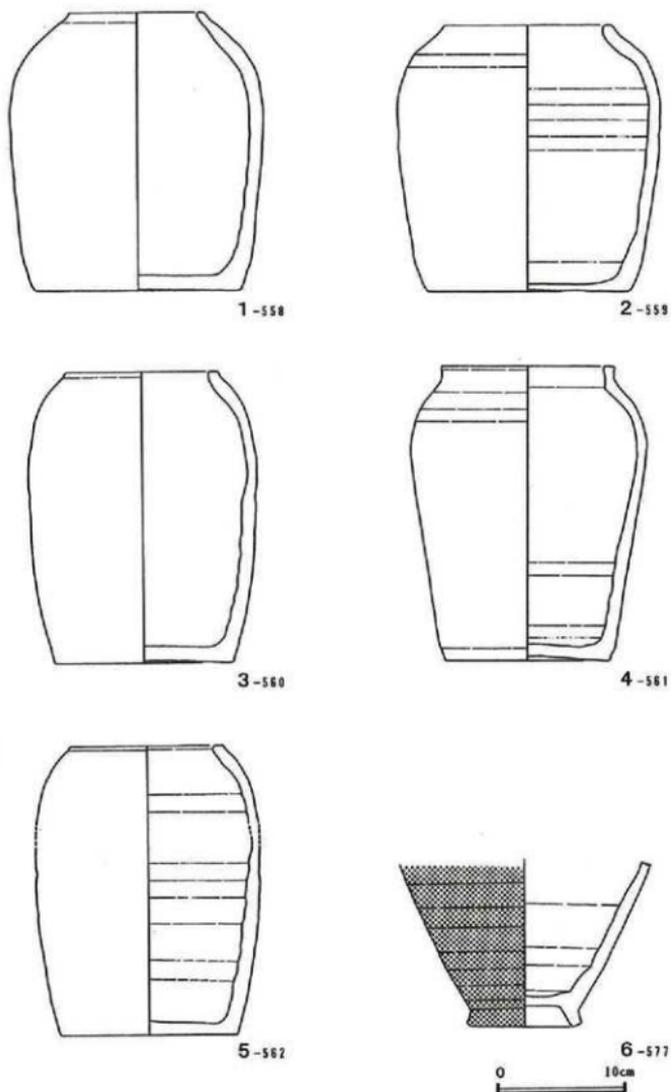
2(遺物No.251)は蓋付の壺形蔵骨器で、口径12.8cm、底径13.2cm、体部の最大径18.9cm、器高24.2cmを測る。蓋部は口径14.0cm、底径10.7cm、器高2.6cmを測り、共に素焼きである。蔵骨器内には焼焼処理された焼骨片(総重量1,350g)が入った状態で出土している。

これらの蔵骨器は形態が異なるが、土壌の底面を同じくし、隣接して出土していること、追葬の痕跡がないことから同時に埋葬されたと思われる。なお、土壌内からは供献品などは出土していない。



図IV-3-190 第1号火葬墓から出土した遺物

1・2：蔵骨器



図IV-4-1 表土層から出土した遺物(1)
1~6: 蔵骨器

第4節 表土層から出土した遺物

表土の除去作業時に採集された遺物として、素焼きの壺型蔵骨器が5点と陶質の蔵骨器片が1点、「かわらけ」が3点、組合せ五輪塔が1基と一石五輪塔が2基、銭貨が12枚あげられる。

1. 蔵骨器

1(遺物No558)は素焼きの壺型蔵骨器で、器高が22.3cm、口縁部の径が11.2cm、底部の径が16.7cm、最大径が20.4cmあり、底部から体部上半まで緩やかに開きながら、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。外面にはヘラ削りの痕が残っており、やや粗い器面調整がみられる。また、内面にも粗い器面調整がみられる。なお、底部の外面にナデ調整などはみられない。

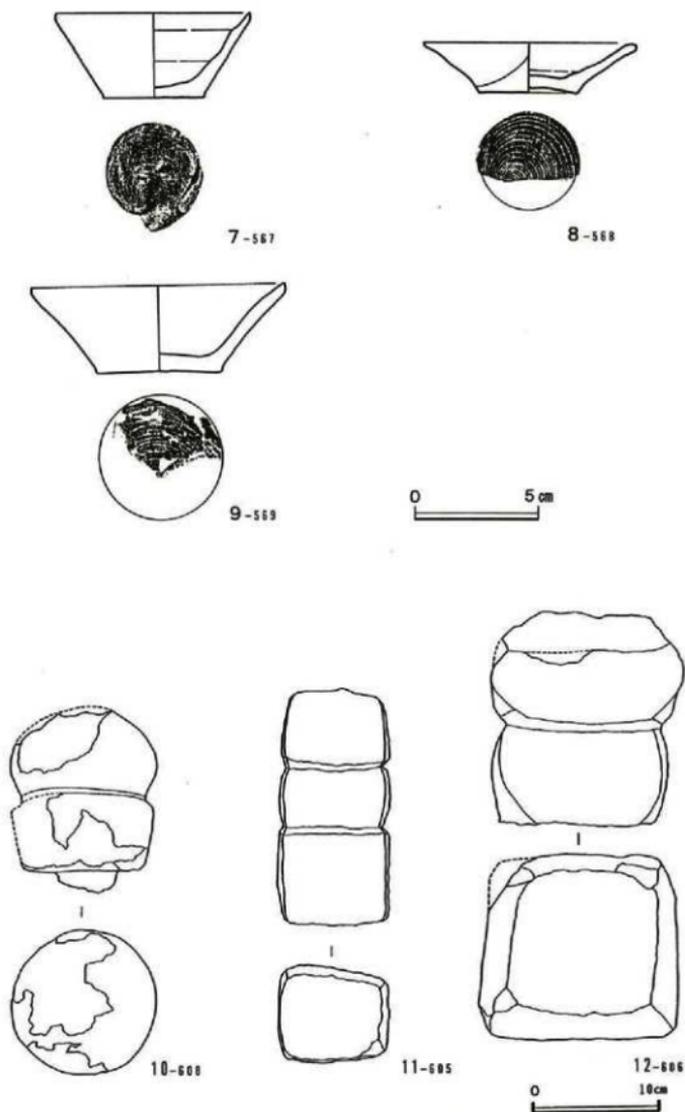
2(遺物No559)も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が21.3cm、口縁部の径は推定で13.5cm、底部の径が16.2cm、最大径は体部の上半で21.2cmあり、底部から体部上半まで緩やかに開きながら、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。外面にはヘラ削りの痕が残っており、やや粗い器面調整がみられる。また、内面にも粗い器面調整がみられる。なお、底部の外面にナデ調整などはみられない。

3(遺物No560)も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が推定で23.7cm、口縁部の径が12.4cm、底部径が14.4cm、最大径が体部上半で18.4cmあり、底部から体部上半の最大径部まで開きながら直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。底部にわずかなヘラ削りがみられ、十分な調整はなされていないが、外面はよく器面調整がされている。内面も上部の2/3までは良く調整されているが、下部の1/3は調整の粗さが残っている。底部の外面も器面調整が丁寧に施されている。

4(遺物No561)も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が24.0cm、口縁部の径が14.0cm、底部径が13.3cm、最大径が体部上半で19.0cmあり、底部から体部上半の最大径部まで開きながら直線的に立ち上がり、内湾しながら口縁部に達し、口縁部は垂直に立ち上がっている。底部から上1cmほどにヘラ削りがみられるが、十分な調整はされていない。外面はよく器面調整がされている。内面も上部の2/3までは良く調整されているが、下部の1/3は調整の粗さが残っている。底部の外面も器面調整が丁寧に施されている。

5(遺物No562)も素焼きの壺型蔵骨器で、器高が推定で23.4cm、口縁部の径が12.2cm、底部径が14.2cm、最大径が体部上半で17.9cmあり、底部から胴部上半の最大径部まで開きながら直線的に立ち上がり、口縁部に向かって内湾している。底部にわずかなヘラ削りがみられ、十分な調整がなされていないが、外面はよく器面調整がされている。内面も上部の2/3までは良く調整されているが、下部の1/3は調整の粗さが残っている。底部の外面も器面調整が丁寧に施されている。

6(遺物No577)は陶質の蔵骨器の底部から体部にかけての破片で、現存部の高さ13.5cm、このうち高台の高さ1.7cm、底部径が14.2cmあり、灰色の素地に淡黄色の釉が施されている。体部の外面と高台の内面はヘラ削りがみられ、体部の内面と底部の外表面はナデ調整が施されている。



図IV-4-2 表土層から出土した遺物(2)

7~9:かわらけ、10~12:五輪塔

2. かわらけ

7(遺物No567)はロクロ成形の「かわらけ」で、口径8.0cm、器高3.4cm、底径3.9cmあり、底部から直線的に開きながら立ち上がっている。体部の外面は回転ナデ調整が施され、内面はヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。焼成は良好で、色調は淡黄茶褐色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒を含んでいる。

8(遺物No568)もロクロ成形の「かわらけ」で、口径10.4cm、器高3.5cm、底径5.0cmあり、底部から僅かに外反し、開きながら立ち上がっている。体部の外面は回転ナデ調整が施され、内面はヘラ削り(右回転)をした後にナデ調整が施されている。底部は平底で回転糸切りの痕が残っている。焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒を含んでいる。また、底部から口縁部にかけての外面にススが付着している。

9(遺物No569)もロクロ成形の「かわらけ」の底部から口縁部にかけての破片で、推定口径8.7cm、器高1.9cm、底径4.1cmあり、13・14とは異なり口唇部がわずかに肥厚している。体部は直線的に開きながら立上り口縁部で外傾している。体部の内・外面ともにヘラ削りをした後にナデ調整が施されている。底部はややくぼんでいるが回転糸切りの痕が残っている。焼成は良好で、色調は淡橙灰褐色を呈し、胎土は精整され密である。

3. 五輪塔

10(遺物No608)は組合せ五輪塔の空輪と風輪が一石からなる部分で、風化による破損が甚だしく、無銘である。最大径は11.8cm、高さは14.4cmある。

11(遺物No605)は一石五輪塔の火・水・地輪の部分で、ほぼ方形の柱状を呈しているが、地輪の方形以外は明瞭な型どりは認められない。無銘である。水輪部の最大幅は9.0cm、残存部の高さは19.0cmある。

12(遺物No606)も一石五輪塔で、火輪と水輪の部分が残存しており、それぞれ円と方形を型どっていると思われるが、明瞭ではない。無銘である。最大幅は15.0cm、残存部の高さは17.2cmある。



13-595



14-596



15-597



16-598



17-599



18-600



19-603



20-604

図IV-4-2 表土層から出土した遺物(3)
13~20: 銭貨

4. 銭貨

銭貨は表土層から12枚が出土したが、いずれも表面が腐食したり、一部が欠損したりしているため、詳細の不明なものが多い。

銭貨の計測値

遺物No.	種類	出土地点	径(mm)	重量(g)	備考
593	□□□□	F 4 表土	29.1	4.99	鉄銭、錆で文字が不明
594	□□□□	F 4 表土	麩糠	11.65	鉄銭、錆で文字が不明
595	□樂通寶	F 8 表土	24.8	2.06	一部欠損、「永樂通寶」
596	元□通寶	F 8 表土	24.7	2.26	一部欠損、「元豊通寶」
597	元□通寶	F 8 表土	24.6	2.08	一部欠損、「元豊通寶」
598	寛永通寶	F 8 表土	23.6	1.43	一部欠損
599	□永通寶	F 8 表土	23.5	1.40	一部欠損、「寛永通寶」
600	熙□元寶	F 8 表土	24.6	1.72	一部欠損、「熙寧元寶」
601	□□□□	F 8 表土	22.5	1.63	一部欠損、腐食で文字が不明
602	□□□□	F 8 表土	麩糠	0.84	3/4欠損、腐食で文字が不明
603	寛永通寶	F 9 表土	20.2	1.02	一部欠損
604	寛永通寶	F 9 表土	24.6	3.65	

「寛永通寶」以外の「永樂通寶」「元豊通寶」「熙寧元寶」はいずれも渡来銭である。

第V章 調査の成果と課題

向山遺跡は岡津丘陵と呼ばれる低地性の段丘の南端部に位置するが、茶畑などに利用されていたため、遺跡の基盤となる砂礫層の上部はかなり削平されており、いわゆる包含層が存在しない遺跡である。

今回の調査の結果、溝状遺構が43条(方形周溝墓3基の溝9条を含む)、穴状遺構は柱穴状遺構が46基(このうち掘立柱建物跡の8基を含む)、土坑が72基、土壇墓が13基、茶見墓が12基、火葬墓が1基の計144基で、合計187基の遺構が確認された。

1. 溝状遺構の状況

① 方形周溝墓

溝状遺構のうち方形周溝墓として捉えることができるのは、調査区の南側中央部の中央に1基と北側中央部に隣接した2基の計3基である。

第1号方形周溝墓は北溝(第17号溝)、西溝(第16号溝)、南溝(第9号溝)からなり、東溝が削平されて存在せず、主体部も確認されなかった。遺物は西溝から土器の細片が覆土中から1点出土したが、時代を確定できるものではなかった。

第2号方形周溝墓は西溝(第33号溝)、南溝(第24号溝)、東溝(第27号溝)および主体部と考えられる土壇と封土の一部が確認された。なお、北溝は調査区外に位置すると推定される。西溝と東溝の覆土の上位から土器の細片が出土しているが、時代を確定できるものではなかった。また、主体部と考えられる土壇の遺物は覆土中に流入したと思われる土器の破片が1点出土しているだけで、主体部の年代を確定できる遺物ではない。

また、主体部と考えられる土壇から南西部にかけて、厚さ20～30cmほどの封土と思われる暗褐色～暗黄褐色土の盛土が分布しており、その中から弥生時代後期の土器片などが88点出土している。

第3号方形周溝墓は、西溝(第26号溝)、南溝(第25号溝)、東溝(第30号溝)が確認されているが、北溝は調査区外に位置すると推定される。主体部も封土も確認されなかったが、南溝の底面から弥生時代中期後半の土器が出土している。

以上のように方形周溝墓は、全体に開墾等で地層の上部がかなり削平されており、全体がどのような形状でどの程度の規模であったかを正確に捉えることは出来ず、しかも第1号と第3号方形周溝墓は主体部も確認されなかった。ただし、第3号方形周溝墓は南溝の底面から出土している土器から弥生時代中期後半の方形周溝墓と推定され、第2号方形周溝墓は封土の中から弥生時代後期の土器片が出土していることから、それよりやや後の時期の方形周溝墓と推定される。

② 溝状遺構

方形周溝墓を構成する溝以外の34条の溝状遺構は、調査区の南側の平坦部と北側斜面に分布しているが、平坦部に比較的多く分布している。平坦部に分布している溝は長軸方向が南北を指している溝が多くみられ、北側斜面に分布している溝は長軸方向が東西を指している溝が多くみられる。平面形状では隅丸長方形が多く、平均的な大きさは長さ314cm、最大幅81cm、深さは最深部で25cmある。しかし、溝内から遺物が確認されたのは第1・4・8・10・14・20・22・31・34・39号溝の10条で、そのうち、第1・4・8・10・14・20

・31号溝から出土した遺物はいずれも土器の細片で、時代を確定できるものではない。また、土壌墓に近い第22号溝の第1層からは欠損した銭貨「寛永通寶」が1点出土しているが、流入したもので溝の時代を確定するものではなかった。なお、方形周溝墓の近くに位置する第34号溝からは弥生土器の破片が、第39号溝からは土師器の破片がそれぞれ出土している。

以上のように、方形周溝墓の近くに位置する第34号溝と第39号溝以外の溝状遺構からはほとんど遺物が出土しておらず、時代や性格を確定するのは困難である。

2. 穴状遺構の状況

① 柱穴状遺構

平面形状がほぼ円形のいわゆる柱穴状(ピット)を呈する遺構で、調査区の南側平坦部と中央西側平坦部、北側斜面の中央部に分布しており、確認された46基の平均的な大きさは長径が50cm、短径は41cm、深さは21cmである。そのうち第1号ピットから第8号ピットは、ピットの配置などによって2間×2間の掘立柱建物跡が想定された。建物跡は南北360～370cm、東西380～390cmの方形のプランをなし、第1～6号ピットの6本が支柱、第7・8号ピットの2本が棟持柱と推定される。その他、直線的にならんで確認されたピット列が11例ある。しかし、柱穴状遺構からは遺物が確認されたのは、第2・6・11・20・28・29・32・34・35号ピットの僅か9基で、そのうち第2・6・11・20・28・34・35号ピットから出土した遺物はいずれも土器の細片で、時代を確定できるものではない。また、第29号ピットで出土した土師器の破片と第32号ピットで出土した土師器の破片はいずれも覆土の上位からの出土であり、ピットの時代や性格を確定できるものではない。

② 土坑

地山を掘り込んだ穴状遺構で、調査区内の全域に分布しており72基が確認された。平面形状でみると、楕円形・不整楕円形を呈するものが37基で約51%を占めているが、長軸の方向や規模などに統一性はみられない。円形・不整円形を呈するは15基で約21%を占めているが、規模や深さに統一性はみられない。遺物が確認された土坑は第4・12・27・36・37・39・41・46・54・57・62・66・71・72号土坑の14基あるが、このうち第4・12・36・39・54・66号土坑から出土した遺物はほとんどが土器の細片で、土坑が掘られた時代や性格を確定できるものではなかった。なお、第27・46・62・71・72号土坑からは土師器の破片が、第37号と第57号土坑からは陶質土器の破片が、第41号土坑からは品種・用途などが不明な石製品の破片がそれぞれ出土しているが、遺構の時代や性格を確定できるものではなかった。

第72号土坑の覆土から土師器の破片が出土しているが、この土坑は第2号方形周溝墓内に位置し、深さも最深部で16cmと浅く覆土も単純で、しかも銭貨「開元通寶」が出土している第11号茶匙墓を切っていることから、第72号土坑の覆土から出土している土師器の破片は土坑の年代を決定する遺物ではなく、外部から流入したものと解釈できる。これは第11号茶匙墓の覆土の上位に外から流入したと思われる壺形土器の口縁部の破片などが3点含まれていることから判断できる。

③ 土壌墓

穴状遺構のうち、覆土の中に炭化物を含み、供献物としてのいわゆる「かわらけ」や銭

貨などが出土するもので、第6号土墳墓のように供献物がなく人骨片だけが出土しているものもある。なお、第13号土墳墓は他の土墳墓とは異なり、供献物がなく出土した遺物も土師器片と須恵器片であることから土墳墓ではなく土坑として扱うべきかもしれないが、覆土の中に炭化物や焼土粒を含んでいたため、一応土墳墓として扱った。

土墳墓の分布は谷部を挟んで南側の斜面上位に位置する第1・2・4・7・8・11号土墳墓の6基と北側斜面に位置する第3・5・9・12・13号土墳墓の5基および同じく北側斜面の東端に位置する第6・10号土墳墓の2基の3グループに大別できる。また、これらの土墳墓はいずれも斜面に立地することが特徴の一つで、これは茶屋基の多くが平坦部に立地することとは対照的である。

土墳墓は13基が確認されている。平面形状で区分すると楕円形・不整楕円形が9基、円形・不整円形が2基、隅丸長方形が2基で楕円形・不整楕円形が多い。長軸の方向はほぼ南北を指すものが3基あるが、全体として一定していない。

表V-2-1 土墳墓一覽表

No	グッド	平面形状	長さ 長径	幅 短径	高さ	長軸の方向	出土遺物	備考
1	F 9	円形	99	89	32	N-18'-E	陶質丸碗2点、銭貨「寛永通寶」6枚	
2	F 8	楕円形	126	97	47	N-9'-E	染付猪口1点、手捏ね成形の「かわらけ」3点、銭貨「元豊通寶」6枚	11号土墳墓を切る
3	G 6	楕円形	94	70	15	N-77'-W	銭貨「寛永通寶」3枚	
4	F 8	不整楕円形	101	87	59	N S	ロクロ成形の「かわらけ」3点、鉄釘1本、人骨片2点	30号土坑を切る
5	E 3	不整楕円形	89	58	44	N-19'-E	ロクロ成形の「かわらけ」4点、銭貨「寛永通寶」1枚	
6	J 6	隅丸長方形	210	66	58	N-52'-W	人骨片のみ	
7	G 9	楕円形	120	101	50	N-82'-W	手捏ね成形の「かわらけ」5点とロクロ成形の「かわらけ」1点、施釉陶質土器片2点、人骨片12点	
8	G 9	楕円形	78	55	36	N-22'-E	手捏ね成形の「かわらけ」2点	
9	G 5	楕円形	150	96	41	N-27'-W	ロクロ成形の「かわらけ」1点、銭貨「寛永通寶」6枚	
10	K 6	不整円形	129	126	36	E W	粉状の骨のみ	
11	F 8	不整楕円形	234	111	28	N-73'-E	陶質皿形土器片1点	
12	F 5	楕円形	75	60	25	N-77'-W	ロクロ成形の「かわらけ」1点	
13	F3・4	隅丸長方形	174	139	26	N-8'-E	土師器片、須恵器片	

供献物としての「かわらけ」は第2・4・5・7・8・9・12号土壌墓で出土している。このうちロクロ成形による「かわらけ」が第4・5・7・9・12号土壌墓から、手捏ね成形による「かわらけ」が第2・7・8・12号土壌墓から出土している。第7号土壌墓を除き一つの遺構からロクロ成形か手捏ね成形のどちらかが出土するのが特徴である。これは茶毘墓でも同じである。また、「かわらけ」以外の供献物として第1号土壌墓より丸碗が、第2号土壌墓より染付土器の猪口が、第11号土壌墓より絵付けの陶器がそれぞれ出土している。

銭貨は第1・2・3・5・9号土壌墓より計22枚が出土した。これらはいわゆる六道銭で、この六道銭の原則である6枚が揃って出土したのは第1・2・9号土壌墓である。銭貨の種類は「寛永通寶」が13枚と最も多く、このうち背面に「文」の文字がある新寛永通寶が7枚ある。「元豊通寶」は第2号土壌墓より2枚出土した。なお、種類の確認が出来ないものが7枚ある。

「寛永通寶」は江戸時代の寛永3年(1626)から明治2年(1869)まで使用されていた銭貨で、背面に「文」の文字がある新寛永通寶は寛文8年(1668)以降に鑄造され使用された銭貨である。「元豊通寶」は中国からの渡来銭で、鑄造の始めは北宋時代の元豊元年(1078)である。寛文10年(1670)に渡来銭の使用禁止令が出るまで通貨として使用されていた銭貨である。

鉄釘は第4号土壌墓より1点出土したのみである。また、人骨片は第4・6・7・10号土壌墓より124点が出土したが、それらは原形をとどめるものがなく、骨片・骨粉の状態で出土している。

以上のように出土した遺物から推察して、第13号土壌墓以外は近世の庶民の土葬墓と考えられる。なお、第13号土壌墓は第2号方形周溝墓の封土を切っていることや土壌の底面から出土した遺物などから推察して、古墳時代の土壌墓と考えられる。

④ 茶毘墓

この報告書で「茶毘墓」と呼称した遺構は土壌内で遺骸を茶毘に付し、そのまま埋葬したと考えられる遺構で、その特徴として、焚烧処理の痕跡と思われる炭化材・木炭粒、焼土ブロック・焼土粒が覆土の中に含まれ、その多くは層を形成していること。また、白色系の焼骨粉が含まれること。さらに、土壌の底面から壁面にかけて焼火痕が認められ、焼土化した状況が認められることである。

茶毘墓は12基が確認され、調査区南側の平坦部に単独で分布する第1～3号の3基と調査区の中央部に9基が分布している。茶毘墓が立地する地形は平坦面もしくは傾斜面との変換点が多く、なかでも東側の4基は黒ボク土の堆積する谷部の斜面と平坦部との変換点に位置している。

茶毘墓の平均的な規模は、長径が約106cm、短径が約80cm、深さが約20cmである。平面形状は円形・不整形円形が6基、楕円形・不整形楕円形が6基と半々に分かれる。長軸の方向はほぼ南北を指すものが6基、ほぼ東西を指すものが3基ある。

供献物としての「かわらけ」は第4・5・6・7・9・12号茶毘墓で出土している。このうちロクロ成形による「かわらけ」が第4・5・6・7・9号茶毘墓から出土しており、手捏ね成形による「かわらけ」が出土したのは第12号茶毘墓だけである。

表V-2-2 茶毘墓一覧表

No.	グリップ	平面形状	長さ 長径	幅 短径	深さ	長軸の方向	出土遺物	備考
1	C14	楕円形	100	65	15	NS	粉状の骨のみ	
2	F12	不整円形	91	76	20	N-41'-W	煤の付着した扁平の玉石1点、銭貨「開元通寶」「元豊通寶」5枚、人骨片3点	
3	B11	不整楕円形	126	91	15	N-86'-W	細長首の壺形土器の破片4点(同一個体)	
4	C・D8	円形	90	82	29	N-3'-E	ロクロ成形の「かわらけ」2点、銭貨6枚、鉄釘8本、箆状に編まれた竹製品の一部、人骨片22点	
5	C7	楕円形	116	86	27	N-8'-E	ロクロ成形の「かわらけ」1点	
6	D7	不整円形	111	95	25	N-29'-E	ロクロ成形の「かわらけ」の破片6点、施軸香炉の破片2点、小型の鉄剣片1点、鉄釘6点、銭貨「寛永通寶」8枚、人骨片115点、	
7	C7	円形	103	95	19	N-23'-W	ロクロ成形の「かわらけ」5点、銭貨1枚、鉄釘2本、人骨片7点	
8	E6	不整楕円形	113	65	30	N-9'-E	鉄釘1本、人骨片20点	
9	C6	楕円形	101	78	7	N-80'-E	ロクロ成形の「かわらけ」の破片3点	
10	E6	楕円形	(87)	45	22	E-3'-E	銭貨1枚、人骨片2点	
11	F6・7	不整円形	98	70	12	N-65'-W	甍形土器の口縁部の破片3点、銭貨「開元通寶」1枚	
12	G9	円形	134	122	30	N-58'-W	手捏ね成形の「かわらけ」の破片3点、銭貨「寛永通寶」2枚と「元豊通寶」6枚、人骨片41点	

また、「かわらけ」以外の供献物として第6号茶毘墓より淡緑色の釉を施した香炉の破片が2点出土している。なお、第3号茶毘墓から出土した細長首の壺形土器の破片と第11号茶毘墓から出土した甍形土器の口縁部の破片は茶毘墓に伴う遺物ではなく外からの流入物と考えられる。

銭貨は第2・4・6・7・10・11・12号茶毘墓より計29枚が出土した。銭貨の中には熱により変形したり数枚が熔着した状態で出土するものもあり、茶毘墓より出土する銭貨の

特徴といえる。これらの銭貨は土壌墓から出土しているものと同じ六道銭で、銭貨の種類は「寛永通寶」が多くを占めるが、「元豊通寶」や「開元通寶」もみられる。「開元通寶」も中国からの渡来銭である。

鉄釘は第4・6・7・8号茶毘墓より出土しており、なかでも第4号茶毘墓からは8本出土している。

人骨片は第1・2・4・6・7・8・10・12号茶毘墓より出土しているが、それらは覆土の中に骨粉として含まれる以外に、小さな白色の細片として出土しており、原型をとどめるものは数少ないが、頭頂骨・鎖骨・肋骨・大腿骨など部分的に判明できるものもある。

また、特殊な遺物として第2号茶毘墓より煤の付着した扁平の玉石が1点、第4号茶毘墓より笊状に編まれた竹製品の一部、第6号茶毘墓より小型の鉄剣片が1点出土している。

以上のように出土した遺物から推察して、これらの茶毘墓は近世の庶民の墓と考えられる。なお、徳川八代将軍吉宗の治世当時、享保年間(1716~1736)に「人を葬る時、六道銭とて銭六文を棺中に入れてうづむ事を厳に停止せらる(享保正記、享保記)」(『有徳院殿御実紀附録巻四』)とあり、六道銭の副葬を禁止している。この制度が徹底して行われていたのであれば、六道銭が出土する墓は享保年間(1716~1736)より古い時期のものである可能性は高い。

⑤ 火葬墓

火葬墓とは遺骸を火葬してから蔵骨器に納め、その蔵骨器を土坑に埋葬した遺構で、表土の除去作業中に蔵骨器が露出した状態で1基確認された。表土層から地山層を少し掘り込んでおり、地山に土壌が浅く残っている。蔵骨器は素焼きで蓋付の壺形蔵骨器が2点で、器内には焚焼処理された白色の焼骨片が入った状態で出土している。

これらの蔵骨器は形態が異なるが、土壌の底面を同じくし、隣接して出土していること、追葬の痕跡がないことから同時に埋葬されたと思われる。なお、土壌内からは供獻品などが出土していないため、この遺構が構築された確かな時代を推定することは困難である。

3. 調査の成果と課題

今回の調査の結果、向山遺跡は弥生時代中期後半から古墳時代にかけてと近世の墳墓が混在する遺跡であることが判明した。また、表土の除去作業時に採集された遺物の中に、素焼きの壺型蔵骨器が5点と陶質の蔵骨器片が1点、供獻品と考えられるロクロ成形の「かわらけ」が3点、墓標・供養のために建立された組合せ五輪塔の空輪と風輪が一石からなる部分が1点と一石五輪塔の火・水・地輪の部分と火輪と水輪の部分の2点、六道銭と考えられる「寛永通寶」をはじめ「永樂通寶」「元豊通寶」「熙寧元寶」などの渡来銭が12枚あり、この遺跡が墳墓地として存在していたことを裏付けている。

特に、13基の土葬墓と12基の茶毘墓はこの遺跡を特徴付ける遺構で、出土した遺物により江戸時代の墓であることは確かであり、被葬者は供獻品(副葬品)の貧弱さから見て庶民であろうという想像はつくが、遺体を無処理のまま埋葬する土壌墓と焚焼処理をした後そのまま埋葬する茶毘墓との違いはなにに起因するものであるのか? また、埋葬された場所の違い(土壌墓はいずれも斜面に立地するが、茶毘墓の多くは平坦部に立地する)は何か? など種々の問題は今後の詳細な検討と事例調査によって解明すべき課題といえる。

付表 1 土器観察表

土器観察表には 番号 遺構 法量 器種・形態 調整方法 胎土 焼成 色調 備考の順に記載したが、その記載方法は以下の通りである。

・番号

番号は遺物番号で、発掘時に記録した順番に付してある。

・遺構

遺構は遺物が出土した遺構名または出土した位置を記載した。

・法量

口縁部の径(口径)、器高、底部の径(底径)についての計測値で、単位はcmである。ただし、推定値は()に、計測が不可能なものは「-」で示してある。

・器種・形態

器種は明確なものだけ記載し、形態は特徴的なものだけを記載した。

・調整方法

調整方法・施紋方法の特徴的なものを記載した。(R)は右回転、(L)は左回転を示す。

・胎土

砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒などが含まれているものについて記載した。なお、砂粒などを微・少量またはほとんど含まないものについては「精製」と記載した。

・焼成

「良好」「やや良好」の2段階で表現した。

・色調

「新版標準土色帖」を判断の参考とした。

・備考

接合情報や型式などを記載した。

土器観察表1

番号	通 稱	法 量 (cm)			器種・器形	製作技法	胎 土	焼 成	色 調	部 位	備 考
		口 径	器 高	底 径							
16	3号茶足瓶	7.4	—	—	壺形土器、 細長瓶	口唇部に刻み、胴部に連続刺突紋と沈線状ヘラ磨き	精製	良好	淡黄褐色	口縁・胴部	27・31・32と接合
21	5号茶足瓶	—	—	4.2	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄茶褐色	胴・底部	
42	4号茶足瓶	—	—	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	赤色粒	良好	淡黄褐色	胴・底部	黒斑状にススが付着
45	4号茶足瓶	10.3	2.8	3.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡灰褐色	完形	
47	6号茶足瓶	—	—	4.4	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	砂粒	やや良	淡茶褐色	胴・底部	
49	6号茶足瓶 -1	(13.6)	—	—	陶器香炉	底軸	精製	良好	緑・淡緑色	口縁部	
69	6号茶足瓶	(8.0)	2.6	4.2	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	口縁・底部	
70	6号茶足瓶	—	—	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡赤褐色	胴・底部	
71	6号茶足瓶	(9.4)	—	—	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄褐色	口縁・胴部	
80	6号茶足瓶	(9.8)	2.7	(4.6)	かわらけ	ロクロ成形 ナデ調整	精製	良好	淡赤褐色	口縁・底部	121と接合
81	6号茶足瓶	(10.0)	—	—	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄褐色	口縁・胴部	
89	7号茶足瓶	(8.4)	3.3	(4.4)	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	黄茶褐色	口縁・胴部	93と接合
99	2号土壺蓋	7.0	5.0	3.1	染付猪口	紅葉状の繪付	—	良好	乳白色	完形	
100	2号土壺蓋	9.6	2.0	6.4	かわらけ	手捏ね成形 ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	淡褐色	完形	
101	2号土壺蓋	8.8	2.2	5.2	かわらけ	手捏ね成形 ナデ調整 底部内面に指痕	砂粒 金雲母	良好	淡黄褐色	完形	
102	2号土壺蓋	10.0	2.4	3.5	かわらけ	手捏ね成形 ナデ調整 底部内面に指痕	砂粒 金雲母	良好	淡茶褐色	完形	
105	1号土壺蓋	8.8	5.2	2.2	陶器丸瓶	内面全体と外面上半部に底軸	砂粒 雲母	良好	緑・暗緑褐色	完形	
106	1号土壺蓋	10.2	4.9	4.4	陶器丸瓶	内外面に底軸	砂粒 黒色粒	良好	緑・淡黄褐色	完形	
108	39号溝	—	—	—	緩やかに外反	内面に竹管状の連続刺突紋	砂粒 赤色粒	良好	暗灰褐色	胴部	
109	39号溝	—	—	8.0	直線的に大きく開く	内外面にナデ調整	砂粒 雲母	良好	淡橙褐色	底部	
110	39号溝	—	—	—	緩やかに内彎	外面は粗いハケメ 内面はナデ調整	砂粒 雲母	良好	橙褐色	胴部	

付表1 土器観察表

土器観察表2

番号	遺 積	法 量 (cm)			器種・器形	製作技法	胎 土	焼 成	色 調	部 位	備 考
		口 径	器 高	底 径							
114	6号茶足草	(8.4)	3.0	(5.2)	かわらけ	ナゲ調整	精製	良好	暗黄茶褐色	口縁・底面	
118	6号茶足草	(13.8)	—	—	陶器香炉	外面の下部は無施釉	精製	良好	輪:淡緑色	口縁・底面	
127	11号土燗草	(10.8)	1.5	(6.8)	陶器杯	回転ナゲ調整	精製	良好	明赤茶褐色	口縁・底面	底縁前の剥地
162	7号茶足草 -1	9.5	4.1	5.2	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	褐色	完形	
162	7号茶足草 -2	8.8	3.0	5.5	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	褐色	完形	
163	9号茶足草	—	—	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	淡黄赤褐色	胴・底面	
165	9号茶足草	—	—	3.6	かわらけ	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	淡赤褐色	胴・底面	
166	9号茶足草	—	—	5.6	かわらけ	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	淡黄赤褐色	底面	
173	14号茶足草	—	—	—	直線的に立ち上がる	外面は粗いハケメ 内面はナゲ調整	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	胴部	
180	7号茶足草	(9.8)	3.3	(4.8)	かわらけ	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	淡黄褐色	口縁・底面	185と接合
184	7号茶足草	8.2	3.0	4.6	かわらけ	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	黒色粒 赤色粒	良好	淡黄褐色	完形	
210	4号土燗草	10.4	3.6	3.2	かわらけ	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	砂粒 赤色粒	良好	淡黄褐色	完形	211・212・223と接合
219	37号土坑	10.0	5.4	3.8	陶器丸瓶	絵付	—	良好	乳白色	完形	
222	4号土燗草	11.4	3.2	6.6	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	淡黄灰褐色	完形	254・256と接合
226	46号土坑	(39.0)	—	—	壺形土器 頸部は「く」 字に屈曲	頸部内面は接合により肥厚、内外面ともに横ナゲ調整	砂粒 金雲母	良好	茶褐色	口縁部	外面に黒炭状のススが付着
230	29号柱穴	(19.8)	—	—	口唇部内側に段	ナゲ調整	砂粒	良好	茶褐色	口縁部	
231	29号柱穴	—	—	—	僅かに内彎	外面はハケメ調整、内面はナゲ調整	砂粒 雲母	良好	暗茶褐色	胴部	
234	封土	—	—	—	直線的に立ち上がる	遠近斜突紋と沈線紋を斜位に施紋	砂粒 石英	良好	茶褐色	胴部	
236	4号土燗草	10.0	3.3	3.2	かわらけ	ロクロ成形 回転へう削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	淡橙灰褐色	完形	253と接合
250	1号火葬草	12.6	22.0	14.8	壺形甕器 最大径が肩部、蓋に備	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	褐色	ほぼ完形	
251	1号火葬草	12.8	24.2	13.2	壺形甕器 最大径が肩部	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	褐色	ほぼ完形	

土器観察表3

番号	通 稱	法 量 (cm)			器種・器形	製作技法	胎 土	焼 成	色 調	部 位	備 考
		口 径	器 高	底 径							
259	25号溝	(15.6)	(14.5)	5.5	高林、脚部 が受皿の 口縁に類似 11縁に類似	脚部に連続刺状紋 (凹孔)を3段横位 に施装	砂粒 石英	良好	橙色	縁部	
260	12号土壺	10.5	3.1	5.5	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	砂粒 赤色粒	良好	橙色	完形	
271	46号土坑	(17.2)	—	—	甕形土器、 屈曲部を有 し、僅かに 内彎	内外面にハケメと 横位のナデ調整	砂粒 雲母	良好	茶褐色	口縁部	
278	5号土壺	9.2	2.9	4.8	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	黒色粒	良好	淡黄褐色	完形	
279	5号土壺	(8.7)	(3.3)	5.5	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	ほぼ完形	
280	5号土壺	9.0	3.4	5.6	かわらけ やや歪み有 り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	橙色	完形	
281	5号土壺	(9.8)	(3.3)	5.4	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄灰色	完形	
283	5号土壺	9.4	2.7	5.1	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	精製	良好	淡黄灰色	完形	
288	31号柱穴	—	—	—	ほぼ直線的 に立ち上 がる	器面全体に縦位の ハケメ 内面はナデ調整	砂粒 石英 雲母	良好	暗黄褐色	胴部	
290	11号赤泥草	(26.8)	—	—	甕形土器、 「く」の字に 屈曲	横ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	口縁部	
295	7号土壺	(9.4)	2.5	(5.4)	かわらけ	手捏ね成形 底部外面は粗い横 ナデ調整	砂粒 黒色粒	良好	淡赤褐色	口縁・底部	
303	7号土壺	(8.6)	—	—	陶器、僅か に内彎気味	施装、ナデ調整	精製	良好	緑・赤茶褐 色	口縁部	
309	8号土壺	11.2	2.2	7.2	かわらけ	手捏ね成形 ナデ・ハケメ調整	砂粒 金雲母	良好	淡黄褐色	完形	
310	8号土壺	11.6	2.3	8.4	かわらけ	手捏ね成形 ナデ・ハケメ調整	砂粒 金雲母	良好	淡黄赤褐色	完形	
311	11号赤泥草	(10.6)	2.4	(7.6)	かわらけ	手捏ね成形 ナデ、ハケメ調整	黒色粒 赤色粒	良好	淡黄褐色	口縁・底部	
328	12号赤泥草	9.6	2.4	7.6	かわらけ	手捏ね成形 外面はナデ、内面 はヘラ削り後ナデ 調整	精製	良好	淡黄茶褐色	完形	全体にス スが付着 329・330・ 332と接合
335	13号土壺	—	—	6.6	直線的に開 く	ナデ・ハケメ調整	砂粒 雲母	良好	暗茶褐色	胴・底部	332・334と 接合
370	7号土壺	—	—	5.0	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナデ調整	砂粒 金雲母	良好	暗茶褐色	底部	黒垢状にス スが付着、 375・378と 接合

土器観察表4

番号	遺構	法量(cm)			器種・器形	製作技法	胎土	焼成	色調	部位	備考
		口径	器高	底径							
372	7号土壇墓	(8.6)	(2.3)	5.8	かわらけ	手捏ね成形 摩滅のため詳細不明	砂粒 赤色粒	良好	淡黄茶褐色	口縁・底部	
377	7号土壇墓	—	—	4.0	陶器、緩やかに内彎	施釉 回転ナゲ調整	精製	良好	釉:乳白色	底部	
388	13号土壇墓	—	—	—	直線的に開く	内外面に横ナゲ調整、丁寧な器面調整	砂粒 雲母	良好	茶褐色	口縁部	
395	13号土壇墓	—	—	—	土師器、屈曲部を有し、内面は肥厚	外面にハケメ調整、内に面ナゲ調整、指頭痕が有る	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	頸・胴部	外面にススが付着
396	13号土壇墓	—	—	(8.2)	緩やかに内彎し、強く開く	胴部外面に縦位のハケメ調整	砂粒 金雲母	良好	淡赤褐色	胴・底部	
399	13号土壇墓	(23.0)	—	—	甕形土器、屈曲部を有し、強く開く	外面はヘラ削り後横ナゲ、内面は横ナゲ調整	砂粒 金雲母	良好	暗茶褐色	口縁部	
403	13号土壇墓	—	—	(14.2)	須恵器坏蓋、端部が屈曲し直立	天井部の外面ヘラ削り 肩部ナゲ調整	精製	良好	暗灰褐色	蓋部	
407	7号土壇墓	10.5	2.1	7.5	かわらけ	手捏ね成形 ナゲ調整	赤色粒 黒色粒	良好	淡黄赤褐色	完形	410と接合
409	7号土壇墓	(9.8)	3.4	(4.8)	かわらけ	ロクロ成形 ナゲ・ハケメ調整	赤色粒	良好	淡橙褐色	口縁・底部	416と接合
415	7号土壇墓	(10.0)	2.2	(6.0)	かわらけ	手捏ね成形、ナゲ・ハケメ調整、指頭痕が有る	赤色粒	良好	暗褐色	口縁・底部	
422	34号溝	10.6	(24.3)	—	弥生土器、細長頸の甕形土器、最大径が胴部の下半	胴部に同縮紋2本と円形紋、胴部は練杉状の朱痕紋	砂粒 赤色粒	良好	淡橙褐色	頸・胴部	中期の須和田式土器と同型
427	9号土壇墓	7.9	2.8	4.0	かわらけ 歪み有り	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナゲ調整	精製	良好	褐色	完形	
430	12号茶屋基	10.0	2.4	6.6	かわらけ 凸状底部	手捏ね成形 底部は無調整	砂粒 石英	良好	褐色	完形	
434	57号土坑	(13.6)	1.7	(7.2)	須恵器坏蓋、端部が屈曲し直立	ヘラ削りとナゲ調整、僅かに自然釉	砂粒	良好	暗灰褐色	蓋部	
448	33号溝	—	—	—	僅かに外反気味に強く開く	突帯状紋を2段に施紋	砂粒 石英	良好	暗茶褐色	胴部	
450	34号柱穴	—	—	—	陶器、僅かに外反し開く	施釉、内面はナゲ調整、外面は回転ナゲ調整	黒色粒 石英	良好	乳白色 釉:緑色	口縁部	
451	34号柱穴	—	—	12.2	須恵器高台付坏、底部が高台より突出	底部外外面ヘラ削り、内面はヘラ削り後ナゲ調整	黒色粒	良好	暗青灰色	底部	
459	主体部	—	—	—	緩やかに内彎	摩滅のため不明	砂粒 長石	良好	暗茶褐色	胴部	

土器観察表5

番号	遺構	流量 (cm)			器種・器形	製作技法	胎土	焼成	色調	部位	備考
		口径	器高	底径							
462	62号土坑	(18.0)	-	-	甕形土器、 頸部が屈曲し外反	外面は横ナヅ調整、 内面はハケメとナヅ調整	砂粒 金雲母	良好	淡茶褐色	口縁部	
465	封土	-	-	-	僅かに外反 気味に立ち上がる	横位に2段の連続 刺突紋	砂粒 石英	良好	暗褐色	胴部	
513	封土	(11.8)	-	-	僅かに外反 気味に強く開く	内外面にナヅ調整、 指頭痕が有る	砂粒 石英	良好	赤茶褐色	口縁部	
522	封土	-	-	-	ほぼ直線的 に立ち上がる	横位に2段の連続 刺突紋	砂粒 雲母	良好	淡黄褐色	胴部	
530	封土	-	-	-	僅かな屈曲 部を有し、 直線的に開く	内外面に粗いヘラ 調整	砂粒 石英	良好	暗黄褐色	胴部	
533	13号茶泥草	-	-	-	ほぼ直線的 に内傾	外面はハケメ調整、 内面はハケメ後ナ ヅ調整	砂粒 金雲母	良好	橙褐色	胴部	541と接合
535	13号茶泥草	-	-	-	ほぼ直線的 に内傾	外面はハケメ調整、 内面はハケメ後ナ ヅ調整	砂粒 金雲母	良好	淡茶褐色	胴部	黒斑状にス スが付着
549	封土	-	-	-	内面に絞	押し引き気味の連 続刺突紋を羽状に 施す	砂粒	良好	黒褐色	胴部	
562	北側壁面	-	-	-	弥生土器、 壺形土器、 緩やかに内 傾	連続押し引きによ るキョウビラ紋	砂粒 赤色粒	良好	橙褐色	頸・胴部	弥生時代中 期の瀬田式 土器
563	封土	-	-	-	ほぼ直線的 に内傾	外面はハケメ後ナ ヅ調整、内面はヘ ラ調整とナヅ調整	砂粒 石英	やや良	暗褐色	胴部	
568	表土	11.2	22.3	16.7	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	赤色粒	良好	暗橙褐色	一胴体	
569	表土	(13.5)	21.3	16.3	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	暗橙褐色	一胴体	
560	表土	12.4	(23.7)	14.4	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	暗橙褐色	一胴体	
561	表土	14.0	24.0	13.3	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	赤色粒	良好	暗橙褐色	一胴体	
562	表土	12.2	23.4	14.2	壺形蔵骨器	素焼き 輪積み痕が顕著	砂粒	良好	暗橙褐色	一胴体	
567	表土	10.4	3.5	5.0	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナヅ調整	精製	良好	淡茶褐色	口縁・底部	ススが付着
568	表土	8.0	3.4	3.9	かわらけ	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナヅ調整	精製	良好	淡黄茶褐色	口縁・底部	
569	表土	(8.0)	3.4	3.9	かわらけ やや凸状の 底部	ロクロ成形 回転ヘラ削り(R) 後ナヅ調整	精製	良好	淡橙灰褐色	口縁・底部	
577	表土	-	-	9.2	陶器蔵骨器	蓋軸 ヘラ削り、ナヅ調 整	精製	良好	素地;灰色 釉;淡黄色	胴・底部	

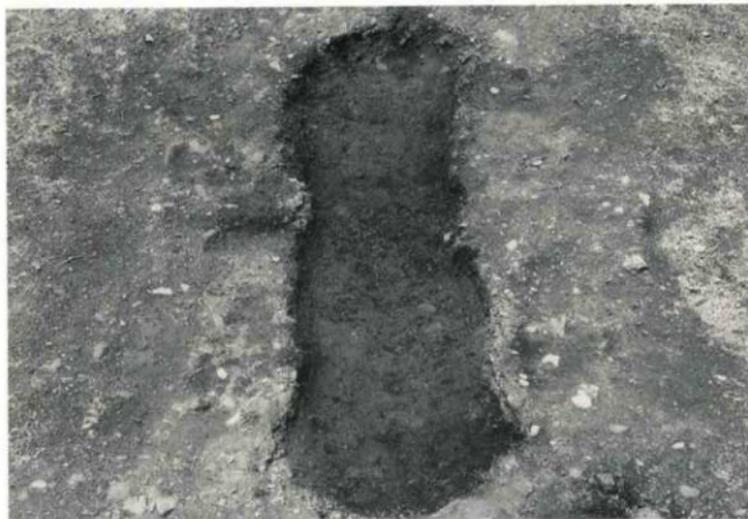
付表2 鉄釘計測表

遺物番号	出土遺構	法 量				備 考
		(cm)		(g)		
		長さ	幅	厚さ	重さ	
255	4号土壇墓	3.0	0.6	0.4	1.2	頭部および先端部欠損
23-①	4号茶毘墓	4.2	1.0	0.6	4.9	先端部欠損
23-②	4号茶毘墓	5.4	1.0	0.5	6.0	先端部欠損
26	4号茶毘墓	4.0	0.7	0.4	7.2	先端部欠損
36	4号茶毘墓	5.1	0.8	0.5	3.6	先端部欠損
37	4号茶毘墓	5.6	0.7	0.6	8.8	先端部欠損
38	4号茶毘墓	2.8	0.5	0.4	3.7	頭部および先端部欠損
40	4号茶毘墓	8.5	1.1	0.6	6.2	完形
43	4号茶毘墓	4.6	1.0	0.8	4.3	先端部欠損
140	6号茶毘墓	5.5	0.4	0.4	2.7	先端部欠損
151-①	6号茶毘墓	3.4	1.3	0.7	4.3	先端部欠損
151-②	6号茶毘墓	1.2	0.5	0.3	—	頭部および先端部欠損
157	6号茶毘墓	7.7	0.4	0.3	7.5	ほぼ完形
158	6号茶毘墓	2.7	0.7	0.5	2.4	先端部欠損
159	6号茶毘墓	4.7	1.2	0.4	2.7	先端部欠損
176	6号茶毘墓	6.2	0.9	0.4	4.9	ほぼ完形
187	7号茶毘墓	5.2	0.5	0.4	3.2	ほぼ完形
188	7号茶毘墓	1.4	0.3	0.2	1.2	先端部欠損
202	8号茶毘墓	3.3	0.6	0.3	1.2	完形

写 真 图 版



1. 遺跡の全景(南方上空から撮影)



2. 第8号溝完掘状況(東方から)



3. 第16号溝完掘状況(南方から)



4. 第36号溝完掘状況(西方から)



5. 第27号土坑完掘状況(南方から)



6. 第35号土坑完掘状況(西方から)



7. 第36・37号土坑完掘状況(南西方から)



8. 第1号方形周溝墓完掘状況(西方から)



9. 第2号方形周溝墓完掘状況(南方から)



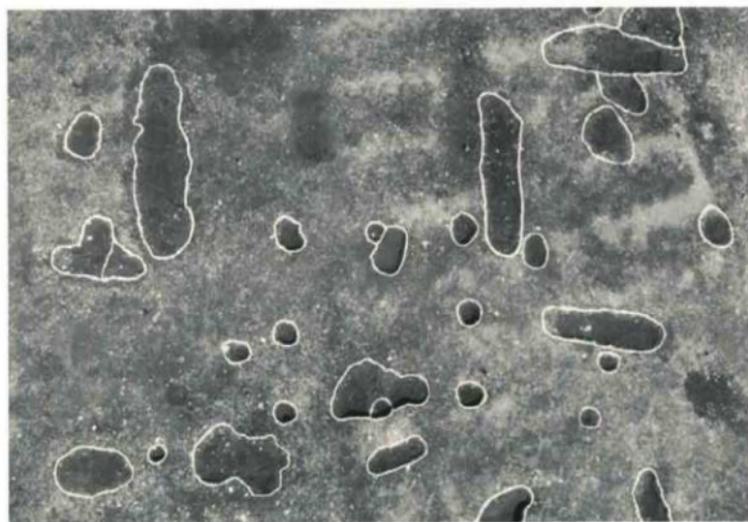
10. 第2号方形周溝墓主体部完掘状況(南方から)



11. 第3号方形周溝墓完掘状況(南方から)



12. 第3号方形周溝墓南溝遺物出土状況



13. 第1号掘立柱建物跡完掘状況(南方から)



14. 第2号土墳墓完掘状況(北方から)



15. 第2号土墳墓遺物出土状況



16. 第4号土墳墓完掘状況(南方から)



17. 第4号土墳墓遺物出土状況



18. 第5号土墳墓完掘状況(南方から)



19. 第5号土墳墓遺物出土状況



20. 第6号土墳墓完掘状況(東方から)



21. 第6号土墳墓遺物出土状況



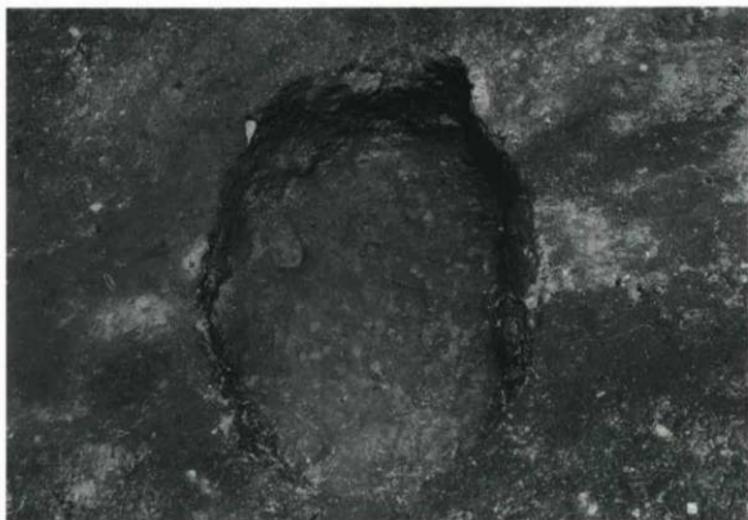
22. 第7号土墳墓完掘状況(西方から)



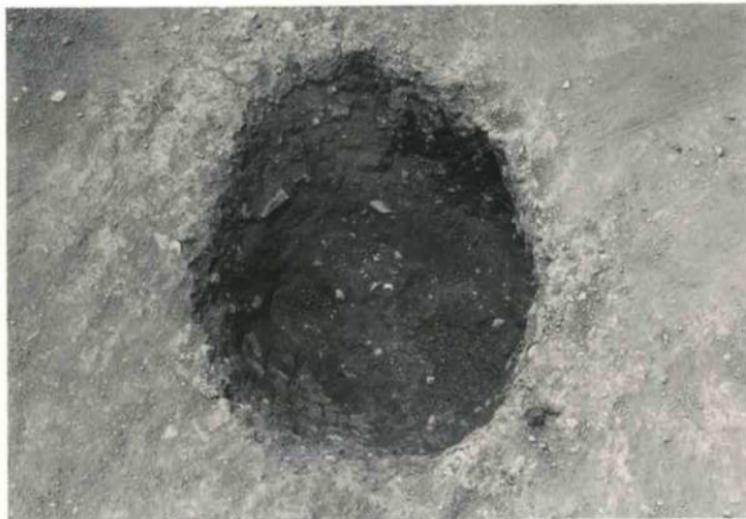
23. 第7号土墳墓遺物出土状況



24. 第8号土墳墓完掘状況(東方から)



25. 第9号土墳墓完掘状況(東方から)



26. 第12号土墳墓完掘状況(東方から)



27. 第12号土墳墓遺物出土状況



28. 第13号土墳墓完掘状況(南方から)



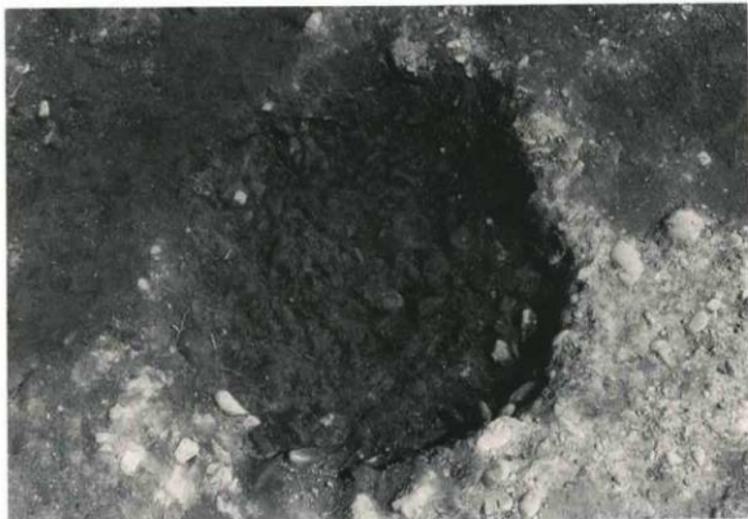
29. 第13号土墳墓遺物出土状況



30. 第2号茶毘墓完掘状況(東方から)



31. 第4号茶毘墓完掘状況(北方から)



32. 第6号茶毘墓完掘状況(南方から)



33. 第6号茶毘墓遺物出土状況



34. 第7号茶毘墓完掘状況(南方から)



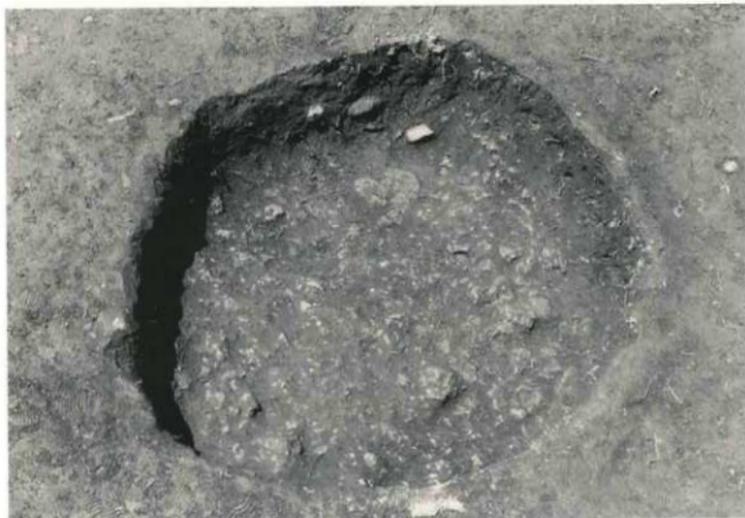
35. 第7号茶毘墓遺物出土状況



36. 第9号茶毘墓完掘状況(南方から)



37. 第9号茶毘墓遺物出土状況



38. 第12号茶毘墓完掘状況(東方から)



39. 第12号茶毘墓遺物出土状況



40. 第1号火葬墓完掘状況(東方から)



41. 第1号火葬墓の遺物出土状況



42. 第3号方形周溝墓出土遺物
1: 弥生土器



43. 第35号溝出土遺物
1: 弥生土器



44. 第37号土坑出土遺物
1: 染付土器

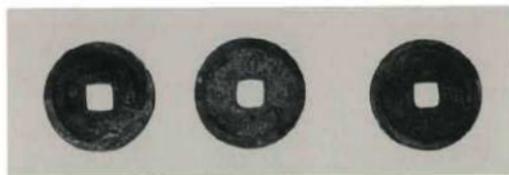


45. 第41号土坑出土遺物
1: 石製品



1-105

2-106



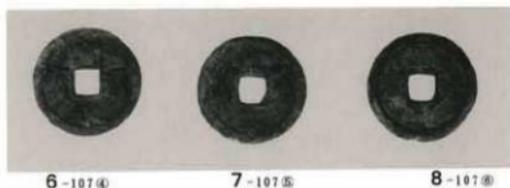
3-107㊦

4-107㊦

5-107㊦

46. 第1号土壙墓出土遺物(1)

1・2: 陶質の丸碗 3~5: 銭貨「寛永通寶」



6-107㉔

7-107㉔

8-107㉔

47. 第1号土壙墓出土遺物(2)

6~8: 銭貨「寛永通寶」



1-99



2-100

3-101



4-104

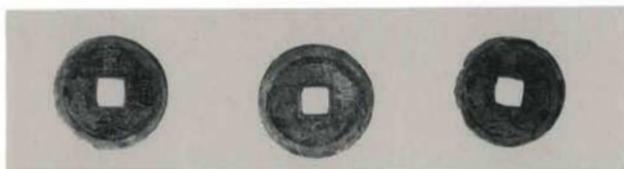


5-103㉔

6-103㉔

48. 第2号土壙墓出土遺物

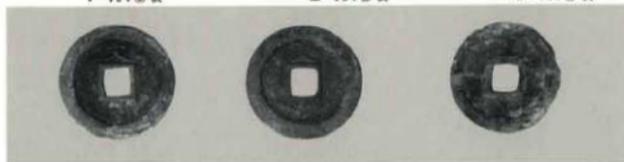
1: 染付土器 2~4: かわらけ 5・6: 銭貨「寛永通寶」



1-124㉔表

2-124㉔表

3-124㉔表



4-124㉔裏

5-124㉔裏

6-124㉔裏

49. 第3号土壙墓出土遺物

1~6: 銭貨「寛永通寶」



1-210 他

2-236 他

3-232 他

50. 第4号土壙墓出土遺物

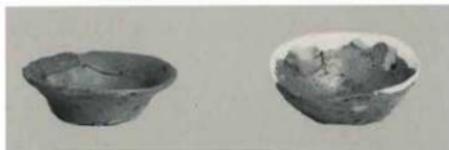
1~3:かわらけ



1-280

2-281

3-283



4-278

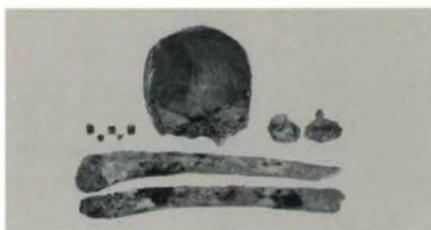
5-179



6-286

51. 第5号土壙墓出土遺物

1~5:かわらけ 6:銭貨「寛永通寶」



1-421 他



2



3



4



5



6

52. 第6号土壙墓出土遺物

1:頭蓋骨、大腿骨 2~6:歯



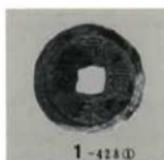
53. 第7号土壙墓出土遺物

1～3：かわらけ



54. 第8号土壙墓出土遺物

1・2：かわらけ



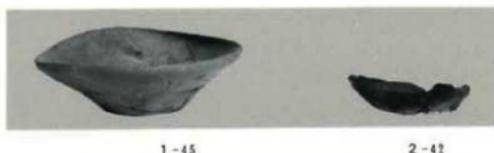
55. 第9号土壙墓出土遺物

1～3：銭貨「寛永通寶」



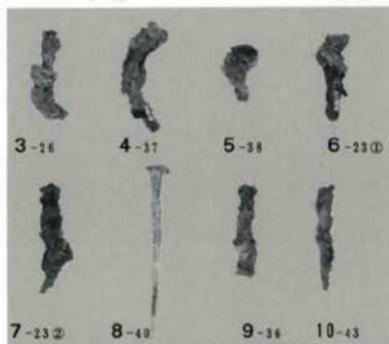
56. 第12号土壙墓出土遺物

1：かわらけ



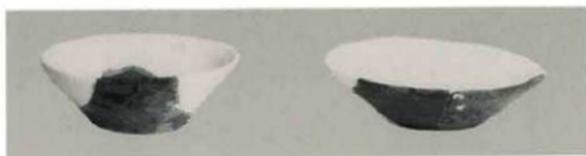
57. 第3号茶毘墓出土遺物

1：弥生土器



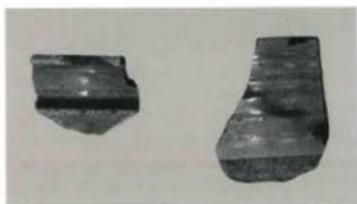
58. 第4号茶毘墓出土遺物

1・2：かわらけ 3～10：鉄釘



1-69

2-70



3-49

4-118



6-140

7-151

8-157



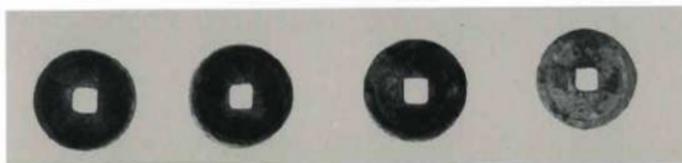
5-122



9-154

10-159

11-176



12-74

13-84①

14-84②

15-84③



16-84④

17-139①

18-139②

19-139③

59. 第6号茶毘墓出土遺物

1・2：かわらけ 3・4：施釉陶器 5：鉄剣

6～11：鉄釘 12～19：銭貨「寛永通寶」



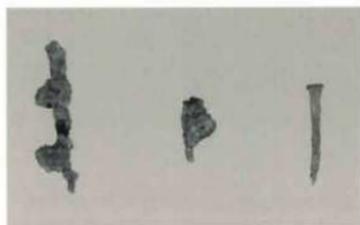
1-162㊦

2-184

3-180・185



4-162㊦



6-187

7-188

8-202



5-87・93

60. 第7号茶毘基出土遺物

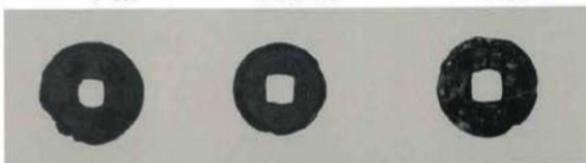
1～5：かわらけ 6～8：鉄剣



1-311

2-328・332

3-430



4-312

5-313

6-557㊦



7-557㊦

8-557㊦

9-557㊦

61. 第12号茶毘基出土遺物

1～3：かわらけ 4・5：錢貨「寛永通寶」 6～9：錢貨「元豊通寶」



62. 第1号火葬基出土遺物

1～2：藏骨器



1-558

2-559

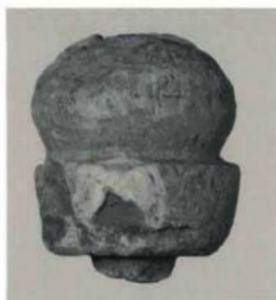


3-560

4-561

63. 表土層からの出土遺物(1)

1～4：藏骨器



64. 表土層からの出土遺物(2)

5～6：蔵骨器 7～9：かわらけ 10～12：五輪塔

平成6年3月31日 発行

静岡県掛川市

向山遺跡発掘調査の記録

編集：静岡人類史研究所

発行：掛川市教育委員会

株式会社川島デベロップ

静岡人類史研究所

印刷：有限会社文書サービス

